
DEVIL HEART ruined 第3幕

ジャンクラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEVIL HEART ruined 第3幕

【Nコード】

N2409W

【作者名】

ジャンクラ

【あらすじ】

DEVIL HEART ruined 第3幕です。またまた

長くなると思いますがお付き合いください。

1話「はぐれ者の話」

その光が本物だと信じていた。

差し伸べられた手を握り返すことに、疑問など持たなかった。

この薄汚れた牢獄から救い出してくれるという言葉を、疑いもしなかった。

今考えれば、何もかもが終わった後に思い返せば、その全てがひどい過ちだった。なぜこれほどまでに自分が簡単に騙されてしまったのか――自らの愚かさに吐き気さえこみ上げる。

全ては嘘だった。

光は幻だった。

差し伸べられた手などなかった。

牢獄の扉を開くための鍵は、自分たちを殺すための爆弾だった。

自分たちがその組織にとってはただの捨て駒であり、その命すら取るに足らないものであることに気付かされた時には、全てが手遅れだった。

絶望の先に、光などなかった。

カビの臭いのするエアコンと、小さな明り取りの窓の他に、その部屋には一脚の丸椅子とくたびれたベッドしか置かれていない。

茜色に染まった空は部屋の中に、版画を刷ったような彫りの深い影を落としている。

あたりはひどく静かだった。ささやかな鳥の声だけが絶えず聞こえてくる。部屋の前を車が横切った。盛りのついた猫のうなり声が響いて、空に爆ぜる。

黒城レイはベッド脇の丸椅子に腰掛け、漫画の単行本を読んでいた。父親の部屋から内緒で持ち出してきたもののうちの一冊だった。肩甲骨のあたりまで長く伸ばした金髪に時々指を通し、前髪を止めたヘアピンをいじりながら、レイは黙々と読書が続ける。足元に置いたデパートの紙袋の中にも漫画が積み重なっていた。

無類の漫画好きである父親や妹とは違い、レイはこれまで漫画というものをあまり読んだことはなかったのだが、なぜか今、急に手に取りたくなった。父親の、妹の、考えていることの一端に触れなくなっただのかもしれない。

どこか遠くで救急車のサイレンの音がした。命を運ぶ音が、夕闇に溶けていく。

漫画を読んでいる間は、胸を衝く憎悪や怒りや悲しみといった、負の感情から遠ざかることができるような気がした。ページの中に広がる世界は自分の立つ場所からひどく乖離していた。それがとても心地よい。現実逃避と言われればその通りだが、今のレイにはその時間が必要だった。

物音を耳に捉え、レイは漫画を閉じた。ベッドのほうに視線を移す。そこで眠っていた天村佑が目を開け、じっと天井を見つめていた。額には脂汗が浮いている。心なしか、呼吸も荒いようだ。

佑は視線だけを動かしてレイを見た。レイは身を屈め、読んでいた漫画を紙袋の中にしまう。代わりに青いハンドタオルを取り出した。それで優しく叩くようにして、佑の額に浮いた汗をふき取ってやった。

「明日の朝には、この場所を出ましょう」

レイの提案に驚くこともなく、佑はそっと目を伏せた。何かにひどく裏切られたかのような、悲しげな眼差しだった。レイは幼い子どもをあやすかのように、彼のくせつ毛を軽く撫でてやった。

「マスカレイダーズは私たちの敵でした。もう、あんな組織信じられません。だから今度は私たちの手で、悠を守らなくちゃいけないんです。お兄さんと、私の力で」

膝の上に置いたもう一方の拳がひどく震えた。それが怒りのせいなのか、それとも武者震いというものなのか、自分でも判別がつかない。

レイは決意をしていた。ここから先は茨の道だ。今までと変わらぬ覚悟では前に進むことすら困難を極めるだろう。だがそれでもレ

イは戦わなければいけなかった。光を手にするまで、親友の生きる世界を輝けるものとするまで、立ち止まるわけにはいかない。

窓の外に広がる暮れなずむ空を、レイは睨みつけた。ひときわ大きな声でカラスが鳴く。橙に染まる空の果てに、藍と黒の混ざりこんだ色がじわりと滲んで見えた。

タンポポの塔 1

8月の岩手山は、緑に燃えていた。

低地には広葉樹林、中腹には針葉樹林、高地には高山植物といった多種多様な山容をもつのがこの山の特徴である。点在する沼地や岩壁は其中で絶妙なコントラストを生み、多くの人々を魅了している。気圧は少しばかり高く、空気も少しばかり薄く、気温も平地よりは若干低くて過ごしやすい。

岩手山は壮大で美麗な外見とは裏腹に、傾斜はきつく、足元も頼りないため登るのには一筋縄ではいかず、上級者向けの山として知られている。最もポピュラーな登山口である馬返しから入山しても、往復8時間以上はかかるといわれ、同時に運動量も多く、屈強な山としての側面も持ち合わせている。

そんな岩手山の中腹辺り、木々に目を向けるのならば、広葉樹林帯から針葉樹林帯に移り変わろうとしている場所に、一軒の小屋があった。

人目を偲び、こっそりと建設されたにしてはその小屋はしつかりとした造りをしていた。三角の赤い屋根に、伐採してまもない木材を組み合わせたような、きめの細かい壁面。掘っ立て小屋ではなく、おざなりではあるが、きちんと礎石があり、建物は地面より一段高い位置にあった。地面から入り口のドアまでは段差の低い階段で繋がっている。急ごしらえという気配はなく、それなりの期間を要して建てられたということが窺い知れた。

その小屋を臨む位置に、古ぼけた塔が建っている。壁面に使われている素材の劣化により、褪せた色をしたその塔もまた土地の管理者に許可されたものではなかった。窓ガラスはそのほとんどが割れ、残りももれなくすんでいる。階数は外から見る限り20。その頂上は重なり合う木々に阻まれていて、下から見上げることは叶わない、

山道という場所の性質上、土壌が巨大な建設物を突き立てるのに適していないのか、塔は時の流れに晒され、大きく傾いでいた。よりかかる塔の重みでへし折られた木が、小屋の前にいくつも放置されている。塔はいつ倒れてもおかしくはなかったが、その一方で、そこに安定した角度を見出しているようでもあった。事実ここ数年、塔はこの角度のままこれ以上傾ぐこともなく、この状態を維持しているのだ。

塔の周囲は温かみのある黄で染まっている。それは咲き誇るタンポポだった。塔の周囲を嘗め尽くすように潤沢に広がるタンポポの園は、それだけみれば穏やかな景色であるが、どこか異様な雰囲気漂ってモイタ。

その塔の周囲にだけタンポポが寄せ詰まっているのも異常なら、その周囲10メートルを超えると、1つもタンポポの姿が見当たらないのもまた不気味だった。まるでその塔はタンポポによって周囲から隔絶されているようであり、実際、その通りだった。

空は葉で覆い隠されているものの、その間隙から薄日が差し込んでくる。天気は雲1つない晴天。気温も例年に比べてわずかに高い。それにも関わらず、塔と小屋を据える空間には濃い霧が立ち込めていた。

それもタンポポと同様、その一帯のみに限られている。地面より霧が噴出し、塔の存在が周囲に漏れることのないよう、巨大な見えざる手が囲い込んでいるかのようだった。

そのようにあらゆる意味で、この地は現実から剥離し、拒絶されていた。霧は周囲には鏡のように映り、その塔が人目に触れることの

ないよう、視覚を捻じ曲げる役割を果たしている。だからこの塔に近づくことはおろか、目撃することさえ、多くの人間には許されない。許可もなく、そしてその問題が露見することもなく、塔と小屋が存在し続けられるのもそのおかげだった。

この塔へ接触することが許される者はごく一握りだ。そしてそこに含まれる者はもれなく、人類を超越した異形のみだった。

その隔絶された地に、祈りが流れる。

声の主は少女だった。風でタンポポの花が揺れる。すでに白に変わったものからは細かな綿毛が飛び出し、羽のように宙を踊った。

風は少女の顔をも撫で付ける。その表情を隠している厚いフードがわずかにめくれあがり、少女の悲壮さの宿った眼差しが顕になった。

彼女は白装束を身に纏っていた。

巫女装束と西洋で神事に携わる者が羽織るローブを組み合わせたような服で、袖や襟口の縁には金の装飾が施されていた。またゆつたりとした袖には鳥の翼をイメージした模様が、同じく金色で大きく描かれている。厳粛で精錬された雰囲気を放つその服からは、他者を寄せ付けぬ威圧感がある。それはまさしく法衣であり、彼女は巫女に違いなかった。

少女は小屋の前の広場に片膝をつき、両手を組み合わせた姿勢で、その老朽した塔を見上げている。祈りはその塔に向かって捧げられていた。彼女の仕える神は、おそらくその内部に座しているのだろう。この塔は神聖なる建築物であると同時に、彼女にとっては信仰的であり、神の住まう場所だった。

少女の首筋を青色の髪の毛が滑り落ちる。その肌はわずかに汗ばみ、額から落ちた透明な水が襟を伝っていく。どこか具合でも悪いのか、それとも長時間この姿勢でいるのが身体に負担なのか、少女の表情には疲労が滲んでいた。目の下には黒い陰ができ、頬もこけているように見える。呼吸にも喘鳴が混じり始めているようだ。虹彩には光が薄く、まるで蠟の尽きかけた蠟燭の火のような弱弱しさのみ、そこには宿っている。

しかし彼女は祈ることをやめなかった。困憊して尚、その姿勢にはより力がこもったように思えた。一定のフリースを何度も何度も繰り返し口ずさみながら、押し迫った態度で、祈り、願い続けている。それは仲間の無事を祈願してのものだった。

この世には、失うのにはあまりに早い命がある。どうか、あとほんの少しだけでも、天に召されようとするその魂をこの地に結んでおいて欲しい。彼女が彼女自身の神に捧げているのは、そういう類の信仰だった。

風が、埃が、土が、容赦なく少女の体に畳み掛ける。だが彼女は動かない。その睫毛の長く、やつれても変わらずに澄んだ大きな瞳で、縋るように塔を見据えながら、両手に力をこめ、祈祷を続ける。

そんな健気な少女の背中を、小屋の前から不審げな表情で見つめる男の姿があった。

黄色いシャツに黒いパーカー、下にはスキニージーンズを履いている。髪の色は濃い茶だ。耳を隠し、首元に垂らしたパーカーに触れる程度に長い。顎が尖り、唇は薄く、色白な女顔だ。髪の長さも相まって首から上だけ見れば、その相貌はほとんど女性のものだった。「毎日毎日、神頼みか。よくやるよ」

男——真嶋は侮蔑のこもった眼差しで少女を睨んだ。それから腕を組み、背後に顔を向けた。

「まさか、貴様はそんなことをしていないだろうな？」

男の視線の先には、小屋の入り口から顔だけを覗かせる女性の姿があった。レンズの薄いメガネをかけた、いかにも穏やかなそうな女性で、おそらく年齢は30代半ばだと思われた。癖のある髪を後ろで1つに束ねている。女性は男からの追及に一瞬、怯えたような表情を見せた後で、取り繕うように言った。

「私はこれでも医者よー？ 患者さんに対してそんな職務放棄をするつもりはないわよー。神様に頼むのは、最後の最後だけよ。それまでは自分の、人の力を精一杯こめるつもりだわ」

「最後の最後まで神任せにしてもらっちゃ困る。僕はオカルトを信じてないのさ」

真嶋が殊更強く鋭い眼光を飛ばすと、女性は必死になって頷いた。真嶋は自分の爪に歯を立て、神に希求する少女を恨みがましく見やる。

「シーラカンスもケフェクスもいなくなった今、父さんを救えるのはこの僕だけだ」

真嶋は呟き、男はまた女性に目をやる。視線を移すと同時に、今度は右足を小屋のほうに踏み込んだ。その手には、いつの間にか、そしてどこから取り出したのか、陽光を映して反射させる、鋭利な高枝鋏が握られている。その切っ先は、女性の首筋にぴったりと突きつけられていた。

「だが、残念なことに僕に医学の知識はない。貴様に父さんの命を預けなければならぬことは屈辱だがな。いいか？ もし駄目だったら、貴様を八つ裂きにしてやるからな。せいぜい、人の力というやつを奮うがいいさ」

首を僅かでも動かせば、鋏は女性の動脈を食い破る。だから彼女は瞬きをするようにして、目で服従を示した。真嶋はそれを読み取ったのか、鼻息を鳴らすと彼女から離れ、鋏を再びどこかに消し去った。

逃げるように小屋の中に引っ込んでいく女性を、悶々とした思いで見送っていると、塔の方から男の声が飛んできた。真嶋はそちらに視線をやり、口の中で小さく舌を打った。

「随分と血気盛んのようなな、キャンサーよ」

片手をあげ、足を引きずりながら不恰好に真嶋に近づいてくるのは、金髪の男性だった。肌は浅黒く、濃い顔立ちをしている。ノースリーブのシャツから伸びた二の腕はまるで岩のようだ。真嶋は男のほうに向き直ると、彼に詰め寄った。

「こんなところに詰め込まれれば、ストレスの1つや2つ溜まる。これから僕たちはどうするんだ。いつまでこんな山奥に隠れていれ

「ばいいんだ」

「その様子だと、傷の具合はいいらしいな」

軽やかに笑う男に、真嶋は眉根を寄せた。男の言葉には嘲りの色が見えた。

真嶋が苛立ちを吐き出そうとすると、それを制するように、男は手を前に突き出した。怒りが収まらぬままに男の掌に視線を移し、しかし真嶋は息を呑んだ。男は突き出した手に四角い金属板を握っていた。そこには『4』の数字が刻まれている。それは真嶋にとって何よりも大切なものであり、この手に再び戻ってくるのを待ち望んでいたものだった。

「これは、ファルス……ついに修理が終わったということか」

「ああ。ついさっき、な。大体お前のこまけえ要望には答えたつもりだ。カラーリングもあんなペンキじゃなく、ちゃんとした塗料で塗りなおしておいた。感謝しろよ」

「まさにスーパーを越えたファルス。言うなればハイパーファルスというところか！」

「いや、傷を埋めて色を変えただけの、ただのファルスだ」

「いいだろう。ハイパーファルス、この手に受け取った。僕にふさわしい兵器になっていればいいがな」

「まず話を聞け」

男の指摘も一切耳に入らぬ様子で、真嶋は男からプレートをふんだくると、太陽に透かしたり、自分の掌の上に載せたり、久々に自分のもとに帰ってきたそれに心を踊らせている。自分の所有する兵器が、改修されて戻ってきたことが嬉しくてたまらないらしい。

男は苦笑を浮かべつつ、肩をすくめた。

「お前、ここから出たいって言ってたな」

男の言葉に真嶋は動きを止め、首をよじらせた。男が口元に笑みを宿し、言葉が続ける。

「そんなお前にとっては朗報だ。任務がある……あいつからのな」

男は顎をしゃくり、塔の前に跪く少女を示した。真嶋は白装束を

身に纏い、祈りを謳う少女を振り返る。

「任務だと？ この僕に？」

「あの戦いから、つまり俺たちがこの岩手に来てからすでに一週間以上が経過している。だが、マスカレイダーズは尻尾を全く出さねえ。怪人の奴らも姿を潜めているときた。事態は確実に逼迫している」

「そうか……」

真嶋は涼やかな空を見つめた。あの戦い、ホテルの前で演じられたあの死闘からすでに一週間もの月日が経過していることに改めて驚いた。傷を癒すため体を休めている時こそ退屈に感じたが、過ぎてみればあつという間を感じた。

「状況は日に日にやばくなっていくばかりだ。その中でも一番まずいのは、奴らが人質を抱えている可能性があるということだ」

「人質？」

「ああ。あいつの親友だ」

男は声を途端に潜め、ちらと少女を見やった。その目元に憂いを過ぎらせる。

「同じ年の女の子なんだが、行方が分かっていない。マスカレイダーズの手に残っているのかもしれないが……もし、奴らの手の内に落ちているとしたら、不当な交渉を持ちかけられることは間違いない。そうなったらかなりまずい。俺たちに逆転のチャンスはなくなるだろう」

真嶋は頷いた。メンバー個々の人間関係をあまり理解していない真嶋にも、男の顰めた声などから、組織が置かれている現状の危うさは察することができた。

男はデニムの尻ポケットから一枚の写真を取り出した。そこには鮮やかな青髪をポニーテールに結っている少女と、黒髪をロングにしている小柄な少女が手を繋ぎ、こちらに向かってピースサインをしている姿が写し出されていた。どちらも制服姿だ。青髪のほうは今、真嶋の背後で祈祷を捧げている少女に違いなかった。

それはどこかの店先で撮られたものらしかった。真嶋は何となく、この場所に見覚えがあるような気がした。そして黒髪の少女の顔をじっと見つめるうち、真嶋は自分の記憶が正しいことを確信した。

「この娘は……」

「知り合いか？　ならちようどいい。今、俺たちが探しているのはこの娘だ。この娘の存在が、俺たちの命運を左右するといっても過言じゃない。重大な、鍵だ」

「なに？」

「一応、鳥のお面の彼らにこの一週間、捜させたんだがな。一向に見つからない。だが、必ずこつちに連れてこなくちゃならん。すでにマスカレイドーズに囚われているのなら、奪い返さなくちゃいけない。奴らに主導権を握らせたら、あとは滅びの道をたどるだけだ」

男は表情を強張らせ、一息に告げた。真嶋は男から写真を受け取ると、もう1度それに目を落とす。それから顔をあげ、自分よりも少し背丈のある男の目を見た。

「なるほど。つまり僕が東京に行き、この娘を見つけていちゃいちゃすればいいわけだな」

「お前の性癖は分かっている。理解はできねえがな。だが、その娘に変ないたずらはするなよ。あいつの恐ろしさは、俺の比じゃねえからな」

男は顔を歪めるようにして笑んだ。真嶋は曖昧に笑って返した。

「ま、了解した。ちようど、体も鈍っていたところさ。それに、ちつちやい女の子と戯れることができると思えば、悪くない」

「あまり騒ぎは起こすじゃねえぞ。一応、報告用に、そいつは付けたままにしておくからな。動きは慎重に、だ」

男の先回りしたような言動に、真嶋は舌を打った。するとその足元から紫色の光球が浮かんでくる。それはシャボン玉のような質感を備えていたが、サッカーボール大のサイズがあり、また風に触れると不規則な変動をみせた。

くるくると回転しながら宙を舞うそれには、人間の眼球のような

ものが1つのみ備えられている。瞼がないためにそれは開眼したまま閉じず、球体は真嶋の顔の高さまで浮き上がると、その瞳でじつと、真嶋を熱烈的な視線で見つめてきた。

この奇怪な物体が、“ヤドカリ”という名を持っているということは、数日前に説明を受けていた。真嶋を監視し、また、情報を送受信する携帯電話のような役割をもっている。ここに来てすぐ真嶋は今、目の前に立つこの金髪の男にこれを付与された。

真嶋は怪人だ。この金髪の男や、青髪の少女のように体に石版を埋め込まれた超人ではない。そして石版を所持する者でなければ、塔や小屋のある一帯を覆い隠す霧の中に立ち入ることはできないらしい。

そのため、真嶋や父親の二条、先ほどの女医などが塔の付近に立ち入るためには、このヤドカリを付けることで、いわば仮初の同胞の証を手に入れなければならない。

彼らの庇護を受けるため、しぶしぶ真嶋はこの生物に憑かれることを承諾したが、東京に行つてまで付いて回られるとは思っていなかったので、げんなりする。

「携帯電話は危険だし、いちいち、鳥のお面のやつらに頼るわけにもいかねえだろう。監視と報告。その役目は、こいつが持っている。まあ、別に危害を加えるわけでも、邪魔をするわけでもねえ。ま、気楽にしてりゃあいいんじゃないかな」

「ふん、気楽にね」

真嶋はその目の前をふわふわと漂う不気味な生物に不快を催し、拳で殴りつける。だがその球体は陥没さえしたものの、すぐに衝撃を吸収し、何事もなかったかのように再び漂いだす。まるでゴムボールを相手にしたような感触に、真嶋の気は少しも晴れない。

男は真嶋にパスケースを投げ渡してきた。真嶋はそれを受け取った。どうやら電車で東京まで行けということらしい。もつと効率のいい移動手段はないのかと苛立ちを押し隠しながら尋ねたが、お前の場合はそれが一番いい、と返されれば押し黙るほかない。

「お前には、あいつも期待しているんだ。俺たちの知らない情報を持っているんじゃないかってな。多分、ケフェクスが言い残していなかったことも、たくさんあるんだろ？ それをお前が知っているんじゃないかって、話が持ちきりだぜ？」

男の探るような言動に、真嶋は心中で舌を打った。真嶋ことキャンサーの弟であるケフェクスは1週間前に戦死した。彼は己の持っている情報の全てを提供することを条件に、黄金の鳥の集団に取り入ったのだが、この男が指摘した通り、ケフェクスはある重要な情報を開示することなく墓場の中に持ち込んでいた。

真嶋だけがそれを知っている。だが易々と男たちにその情報を提供する気はなかった。おそらくケフェクスも同じ気持ちであったに違いない。切り札は最後まで自分の中に秘めておくものなのだ。

「ま、それは想像にお任せするさ」

男の顔を見つめ返し、真嶋は鼻を鳴らした。男は唇の片端だけを上げて笑う。

「ま、俺たちはここから動くわけにはいかねえからな。頼んだぜ。向こうにいる仲間にもお前のことは伝えてある。連携しろよ」

「ま、黙って見ておけ。僕の自慢の嗅覚を、みせてやる」

真嶋は不敵に呟くと、プレートを放り投げ、それをキャッチし、男に背を向けた。

「おい、待て」

3歩ほど歩みを進めた早々に呼び止められ、真嶋は興の削がれる思いで振り返った。

「なんだ。いまから気合い十分に歩み出そうとしていたところだったのに。出鼻を挫きやがって」

「そいつは悪かったな。こいつもついでに連れて行ってくれ。力になるはずだ」

男の隣にはいつの間にか、1人の長い黒髪をもつ少女が立っていた。中分けにした前髪からは細い眉がはっきりと見える。鼻筋の通った顔立ちをしていた。

その瞳は鋭く、猛禽のような印象を与える。服装はチェックのスカートに薄い黒のパーカーだ。この年頃の女性にしては背が高い。それに見合うように、胸元をみればそこには豊かな膨らみがあった。真嶋はその怪しげな少女を睨んだ。対する少女は感情を悟らせぬ態度で、無言のまま、じつと真嶋を見つめ返す。その目は澄んでいたが、そこには波立つ気配すらなく、感情の大事な部分が欠落してしまっているような、不安定な感触を見るものに抱かせる。

真嶋は少女を指差し、唾を飛ばした。

「なんだこの小さくない女は！ 僕の力が信じられないということか？」

真嶋の罵倒にも、少女は顔色1つ変えない。白い肌も相まってその立ち姿はまるで亡霊のようだった。男は軽く笑いながら、胸の前で手を振った。

「そういうわけでもない。ただ、仲間がいなりはマシだと思っとな。お前の力には過信も心配もしていない。それにこの娘もまた怪人だ。名前はナインというらしい。仲良くしてやれよ」

真嶋は少女を見やった。ナインというのはキャンサーと同様、おそらく怪人としての名前なのだろう。全身から醸し出す雰囲気は確かに少女なのだが、その顔立ちや立ち姿は随分と大人っぽかった。少女は相変わらず口を開くことはなかった。その表情は彼女の心情を何も映し出してはいない。それが真嶋には気に入らない。

その人形のような表情を睨み据えるようにしているうち、長い髪と顔の陰に隠れて見逃していたが、少女の首、喉元にタトゥーが彫つてあることに今更ながら気付いた。それが人間の目を象ったデザインだったので、真嶋は鼻白んだ。鳥のお面を被った人間たちにもそれと同じものがある。あの人間たちの正体も謎だったが、この少女の詳細もまたボールに包まれている。怪人、と説明されても納得し難かった。

「ふん、僕は僕でやるだけさ。他の奴の力なんて借りるものか」
だがこの少女が何者であれ、おそらく自分との相性は最悪だろう。

真嶋は無言の少女と睨み合いながら確信する。

真嶋は憤懣やるかたなしに、前に向き直り、足を踏み出した。その後を、がさがたと足音がつけてくる。真嶋は足を止めることも、振り返ることもなく、手の中のプレートの感触を確かめながら、青々と茂る山道を足早に進んでいった。

2010年 8月17日

魔物の話 40

野鳥が朝の訪れを告げる。陽光が窓に射し込み、畳に陰影を落としている。空は晴れ、沸き上がる雲は、さながら子どもがちぎった紙粘土のようだ。

どこからか蝉の音が聞こえてくる。夏の初めと比べればその音量こそ確実に小さくなってはいるものの、いまだ町は生命の息吹で耳障りなまでに溢れていた。

午前8時過ぎ。黒城レイは寝汗に塗れながら目を覚ました。寝巻代わりのTシャツが肌に吸いついて気持ちが悪い。上半身を起こし、襟口を片手で広げ、体に風を通す。だが温い空気が循環するだけのようないきがして、すぐに止めた。

ここまで汗だくになって目覚めたのは、タオルケットにくるまれて眠るのがなんだか無防備に思え、真夏にも関わらず厚手の布団を頭からかぶって寝たからに他ならなかった。

家の中は静寂がひしめいている。まったく無音ではないのにそう感じるのは、これまでであったものがすっぱりと抜け、大きな空洞がこの家に生まれてしまったためだろう。

普段よりも1時間寝坊してしまった。学校があるうがあるまいが7時過ぎには目を覚ますのが自分の日課であったのに、少しずつ、体

内時計がずれていつているのかもしれないと感じた。隣をふと見やるが、そこにレイ以外の別の人の気配はない。

「……おはよう」

小さく呟いてみる。しかし当然のことながら返ってくる声はない。レイはため息を吐いてから身を起こすと、洗面所に向かった。

顔を洗うと服を脱ぎ、汗を落とすためにシャワーを浴びた。熱めのお湯を浴びるとようやく意識がはつきりとしてきた。数分間お湯に打たれてから、簡単に体を洗い、風呂場から出る。水気をふき取り、着替えを終え、長い髪をバスタオルで丁寧に拭きながらリビングに向かった。

立ち入ったリビングはそれが当然のことのようにカーテンが閉め切られ、電気も消えたままだった。朝起きてこの部屋に立つと、この家には自分しかないのだと事実、抗いようもなく対面することとなる。惘然とした表情の父も、やかましいライの声もレイを迎え入れてはくれない。この瞬間が、今のレイには一番辛かった。思わずドアの前で呆然と立ち尽くす。夢なら覚めてほしいと思うが、シャワーのせいで意識ははつきりとしていた。

ここ最近が目覚めることが怖かった。布団に揉まれている間は、夜の静寂に何もかも委ねることができるが、朝日はそんな付け焼刃の妄想を白々と剥がし取ってしまう。しかし夜は夜で寢床につくと、様々なことが頭を過り、あまり深い眠りにつくことは許されなかった。レイは大きなあくびをしながらカーテンを剥がし、陽光を部屋の中に採り入れると、扇風機のスイッチを入れた。風を吐き出し、かぶりを振る扇風機の姿を見つめていると、ライがこの家を飛び出す寸前にみせた、涙を浮かべた表情が脳裏に過ぎった。

——なんで私だけいつも仲間外れにするんだよ！ お前なんか絶交だ！ もうこんな家にいたくない！

「絶交、か……」

ぼんやりと宙に言葉を浮かべ、思わず苦笑を漏らす。本当に自分は愚かしいな、とレイは自虐的に思う。寂しさは滲むが、その発端

は自分の所為なのだからどうしようもなかった。ライの怒声が、擦り切れるような叫びが、訴えが、いまでも耳を打ち、その度に胸が震える。しかし後悔はなかった。レイの気持ちとしてはやはり、ライは影に満ちた世界のことなど知らず、日の当たるこの場所で生きていて欲しかった。この世には知らなくてもいい現実というものが、少なからずあるのだから。

レイは扇風機の前から離れると、キッチンに向かった。炊き上がっているご飯をよそい、味噌汁を椀に移し、鮭を二切れグリルで焼く。2人分の食事を用意し、それをリビングのテーブルの上に載せてから、床に這う自分の影を鳥の形に変貌させた。こうすることでレイは怪人としての本領を発揮できるようになる。その影の中から、水面に浮かび上がるような様子で、丸い顔が這い出てきた。それは頭にベレー帽を載せた、3、4歳くらいの幼い女の子だった。

「おっはよー、お母ちゃん！ 今日暑いなー」

「うん。おはよう。ご飯できてるよ」

影の内より元気いっぱいに姿を現したその幼女の名前は、ベルゼバビーといった。

その名からも分かるようにこの幼女は人ではなく、人の死体から生まれた化け物——レイと同様に、“怪人”と呼称される生物だった。彼女は人の姿とは別にその本性である化け物じみた姿もまた持っている。胸に蠅の絵を掲げた、ひどく小柄な怪人だ。

一時期はレイと敵対し、襲い掛かってきたこともあったが、今では彼女はレイを母と呼んで慕っている。それはレイが“最高の怪人”としての力を行使して幼女の心を掌握した結果であり、正に主従関係と置き換えられるべきなのであるが、レイはこの自分の力を少し肯定的に捉えていた。

何よりも、今、この家の中に自分以外の誰かがいてくれるという状況にレイは大いに助けられている。

テーブルの上にはご飯とみそ汁、昨日茹でたほうれん草、そして鮭の切り身が載っている。レイとベルゼバビーは向かい合って席に着

いた。箸をとり、顔の前で手を合わせて「いただきます」と声を揃える。

リモコンでテレビを点け、それから味噌汁で箸の先を湿らせた。薄味が好きなレイは、味噌汁に色が仄かにつく程度にしか味噌を入れない。レイとは逆にとにかく濃い味の好きなライは、いつもレイが料理を作る度、年寄りの食べ物だ、病人食だなんだと文句を言っていたことを思い出す。

ちらりと向かいに座る幼女を窺うと、一体どこから取り出したのか、チューブの豆板醤を味噌汁の中に流し込んでいたのでレイは鼻白んだ。それほどまでに薄いのかと悔しく思うが、残されるよりはいいので無言のままベルゼバビーから視線を逸らす。

「野菜もちゃんと食べなさい」

ほうれん草の入った小鉢をベルゼバビーの方に押しやる。幼女はスプーンで味噌汁をかき回しながら口を尖らせた。

「ぶんぶーん。だって味がしないんだもん」

「素材の味が一番いいんだよ。それに豆板醤はつかじゃ体に悪いって。せめて味付けは、醤油にしたほうがいいよ」

「しょうゆー？」

「うん。醤油。テーブルの上にあるでしょ。それにしなさい」

「うーん、分かったー。おかあちゃんがそう言うならそうするー。ばいばいとうばんじゃん」

幼女は素直に頷くと、豆板醤のチューブを投げ捨て、代わりにテーブルの上にある醤油の入った小瓶に手を伸ばした。レイは何も調味料のかかっていないほうれん草を口に運びながら、その様子を眺める。

咀嚼し、頬杖をつきながら、式原明、という男の名前を頭に浮かべた。それはベルゼバビーが口にした、彼女を作り出した元父親の名前だった。同時にその男は現在、世間を震撼させている連続猟奇殺人事件の犯人でもある。彼は自ら手を下した女性の死体を切り取り、そこから次々と怪人を生みだし、またさらに多くの人間を殺害

して回っていた。

ここ最近は全く動きをみせていないが、ここで終わったとは到底思うことはできない。あの男にとって今は雌伏の時なのだ、と考える方が自然だった。異常な性癖をもつあの男が何を企んでいるのか、その目論見を窺い知るのは非常に難しい。ベルゼバビーはその所在を知らないと答えていた。彼女いわく、式原の居場所を知る怪人はほんの一握りらしく、その一握りの怪人の居場所さえ公にはされていないらしかった。姉妹兄弟といった関係を持っている割には、式原の一味は随分と閉鎖的な集団だったらしい。

式原明は社会的には4年前に死亡している。式原は医者という身分を使つて医療行為を装い多くの人間を死に至らしめていた、まさに未曾有の殺人犯だった。

しかし4年前、佐伯稔充の1人娘、零を車でひき殺したことを警察に自首し、独房に入れられた直後、自ら命を絶った。それが当時のニュースが報じた全てだ。

だがレイは式原明が死んでなどいないことを知っている。そう断言できるのはつい数週間前、式原本人との遭遇を果たしたためだった。爬虫類じみた目つき。乾いた果物のような肌。身に纏った気味の悪い瘴気。思い出すだけで吐き気が込み上げてくるようだ。

インターネットから引つ張り出した式原明の画像は、レイの会った男の相貌とぴたり一致していた。なぜあの男が生きているのか不思議ではあるが、それを考えること自体が無謀である気がしてしまふ。あの男の素性は底知れない暗闇に閉ざされているかのようなからだ。

レイは連れ去られた山奥の小屋の中で、自分が怪人、しかも最高の位をもつ存在であることを式原によって知らされた。さらに愛する息子であるディッキーを髑り殺され、危うく自分も殺されかけた。耳をちぎられたあの姿を思い出すだけで、レイは今でも胸が張り裂けそうになる。今でもディッキーの事を夢に見て、涙を流しながら朝を迎えることも少なくはなかった。

式原の起こした連続猟奇殺人事件による被害者の遺族の姿が、昨日のニュースで報道されていたことを思い出す。彼らは正体不明の敵を恐れ、怒り、自分の身に起きた不条理な出来事に困惑し、悲しんでいた。

人々のやつれ、悲壮感の滲んだ、あまりに痛ましい姿を見る度、レイは齒がゆい気持ちになる。レイは事件の犯人を知っている。顔を合わせたこともある。だが、あなたの家族を殺したのは怪人です、と言ったところで、遺族はおそらく信じようとはしないだろう。

人間であつて欲しい。形があり、法で裁くことのできるような存在であつてほしい。口には出さないだろうが、心の中ではそう思っているし、それが常識であると信じているに違いなかった。

しかし現実には人々の想像をはるかに逸している。世間が都市伝説だと思いこんでいる怪人は実際におり、世間が死んだと確信している人間がその怪人を生み出している。だがきつと、その真相を声高に明かしても、荒唐無稽で不謹慎な話だと突き返されるだけだというのは目に見えていた。だからこそレイのような力のある知る者たちが、知らぬ者たちに代わって奮闘しなければならない。

式原明。

その男こそがレイにとって、必ず追いつめ、倒さなければならない最大の敵だった。あの男は多くの悲しみを生み、多くの悪意を伝染させる根源だ。たくさんの命を髑り、壊し、人を殺させるためだけに怪人を生みだす。怪人であるレイにとって、それはとても空虚で、ひどく悲しいことだった。

マスカレイダーズにはもう頼れない。自分自身の力で、何としてでもあの男を止めるしかない。それが“最高の怪人”の称号をもつ自分に与えられた使命なのであると、レイは認識し、覚悟をしていた。「お母ちゃん。どうしたのー？」

ベルゼバビーが首を傾げてレイの顔を覗きこんできた。レイは意識を思考の闇より現実に戻し、軽く微笑むと、彼女の丸い頬に付いたご飯粒を指先で掬ってやった。

「うっん。ちよつとね。ご飯食べた？」

「あとちよつとだよ、ぶんぶーん。お母ちゃんのほうが全然食べてないじゃんー。人の事いえないよー」

ベルゼバビーに指摘され、レイはハツとなつて自分のお椀に視線を向けた。確かにあまり減っていない。鮭も味噌汁もまだ8割型残されていた。少しテレビに集中し過ぎたらしい。本当だね、と返しながら、レイは茶碗を手に取る。ベルゼバビーも微笑み、味噌汁を一気に飲み干す。

その姿を微笑ましく眺め、ゆっくり食べて大丈夫だからね、と伝えながらレイはふとディッキーのことを思い出している。もしディッキーが生きていたならば、今と似たような会話を交わしていたのだろうか。あの子もかなり忙しい性格ではあったから、この幼女と同じようにご飯を必死で掻きこみ、それから美味しい美味しいと大袈裟なくらいに感激したに違いない。ディッキーはそんな子どもだった。本当に優しくて純粹で、いい子だった。

息子のことを思い出すとベルゼバビーに対する愛しさは一段と増した。一瞬まるでディッキーがレイの元に戻って来てくれたかのような、そんな錯覚にさえ陥る。

ベルゼバビーは口の周りを汁でべとべとにしたまま、お椀から顔をあげて、につこりと

微笑んだ。レイは寂しさと一粒の幸せを鮭の切り身とともにゆっくりと呑み込みながら、朝の光に目を細め、それから彼女の口元をティッシュで拭ってやった。

鎧の話 31

脇に挟んだ体温計が検査終了の音を鳴らす。取り出して確認すると、その長方形の薄暗い画面には、『37.2』と記されていた。

「……よし、下がったな」

坂井直也は自室のベッドで横になりながら体温計を眺め、安堵の息を漏らした。気だるい体をゆつくりと起こしてみる。数日間、ベッドに入りっぱなしだったためか少し動いただけでも体中が軋むようだった。まるでゲル状のプールに肩まで浸かっているような、重苦しい感じが気持ちをも鈍らせている。

頭には霧がかかったようで、胃も重たい。まだ体調は戻りきっていないが、それでも昨日よりは大分快調に向かっているようだった。市販の風邪薬を飲んで、食事を胃に流し込み、一日中寝ているだけでも違うものだと、直也はまだ瞭然とは程遠い頭で感心する。微熱を孕んだため息を吐くと、何となく壁のカレンダーに目をやった。

一体今日は何月何日なのだろう、とカレンダーの数字を辿りながら考える。ここ数日は夢と現実の間を彷徨っていたために、全く見当がつかなかった。あの元鉦橋家で怪人の創造主に出会い、フェンリルと戦った時のことがはるか昔の出来事のように感じられる。確かあれは8月の10日付近の出来事だったはずだ、と記憶を探るが、それさえもどこか曖昧な形に歪んでいく。

完全に時間の感覚が消失していた。壁の時計に視線を移すと、長い針は3、短い針は9を指している。窓の外が明るいことから、今が午前9時15分過ぎということはすぐに判断がついた。窓は網戸が敷かれ、床では扇風機がしきりに首を振っていたが室内は蒸し暑かった。

直也は自分の汗ばんだ掌に目を落とし、ため息を零す。自分の実体を久方ぶりに取り戻した感覚が心を落ち着かせた。

時間感覚は狂っていても、40度を超える熱が何日も続いたことはよく覚えていた。直也はふわふわと漂う、おぼろげな意識の中で臨界を見た。田舎に残してきた両親や、ここしばらく会っていない学生時代の友達、咲や太田の姿、寂しげにこちらを見やるあきらや憂い顔を浮かべる拓也など、様々な人やそれに追隨する出来事が走馬灯のように、意識の中に流れた。

比喩ではなく、本当に死を覚悟した。実際、三途の川に片足を突っ込んでいたと思う。それでも何とかこうしてまた目覚めることができたのは、昔拓也から受け取った、けがが早く治癒されるという黒い布と、今、台所の方で何やら物音をたてている人物による献身的な看病があったからに他ならなかった。

直也は軽い耳鳴りの響く聴覚で、その音を遠く捉えている。やがてフローリングを足音が叩き、こちらに近づいてくる気配があった。そして直也の寝ている部屋のドアが開かれ、そこから少女の顔が覗きこんだ。

「あ、おっさんが生きてやがる！」

部屋に入って来た黒城ライは、開口一番、ベッド上で上半身を起こしている直也を見て、そう叫んだ。直也は慌てた風の彼女を見て苦笑する。

「なんだよ。生きてて悪いような言い方じゃねえか」

「うそうそ。そんなことはないって、心配しまくったんだから。熱は？ 下がったの？」

ツータールに束ねた髪を弾ませながら、ライは直也に駆け寄ってくる。本当に慌ただしいやつだ、と思いながら、直也は自分の表情が緩んでいくのを自覚していく。

「3 くらいになるまで、寝てなきゃダメだからな。私が絶対起きることを許さない！」

「俺は真冬の空気か」

なら俺は一生ベッドから起きることを許されねえよ。そう続けようとしたが、直也が言葉を発するよりも、ライの動きのほう素早かった。

ライは片膝をベッドの端に乗せると、前のめりになり、直也の手から体温計を掠め取った。呆気にとられる暇さえ与えない、それは見事な手捌きだった。

「あ、お前」

「お、37度。結構下がったじゃん。真夏並みの体温だ」

「まあ、今は真夏に違いないからな」

8月の中旬。言ってから、真夏でもないかと思ひ直す。秋の気配はまだ感じないが、夏が終わりを迎えようとしている哀愁のようなものは確かに空に漂っている気がする。

「そういえば、今日は何月何日だ？」

体温計を上げしげと眺めたあと、専用のケースにそれをしまうライに直也は問いかける。彼女は片膝をいまだベッドに乘せているため、彼女のいる方にクッションが傾いてしまっており、そのため直也の尻はわずかにずっこけてしまう。直也は両腕について、自分の体の位置を戻した。

ライは背後のカレンダーを振り返った。

「17日だよ。17日の火曜日。ジェイグロツサムがくる日だ」

「誰だ！ ジエイソンのことなら、奴は13日の金曜日だろうが！ 何も掠つてねえし。なんでお前の情報はことごとく精彩を欠くんだよ」

「ジェイグロツサムは英語の先生だよ。17日の火曜日になると、いちごジャムを頬張りながら他の先生の授業に乱入してくることで恐れられているんだ」

「知らねえよ！ 誰だ、そんなのを教師にしたやつは！ とつと追い出せ！」

まったく、と肩を落とし、それからライの口から伝えられた日付を、もう1度胸の内でも繰り返してみる。

8月17日。

気づけば8月も半ばを過ぎ、送り盆も終わってしまった。そして倒れてからおよそ1週間経ったのだな、と直也は感慨深く思う。それまでが実に密度の濃い日々だっただけに、殊更、寝込んでいただけで終わったこの1週間は空虚に感じた。

再会と離別。身を裂かれるような悲しみ。胸のつかえがとれるような快楽や。頭が中心が麻痺するほどの怒り。そして――憎悪。

そんな日々を激流と喻えるならば、先週は滝のような日々だった。

落下に身を委ねて、気付けば、すでに1週間が経過していた。そんな感覚に近かった。

「ま、元気になったならよかったよ。ずっと付き添っていた甲斐があった」

ライはベッドからようやく足を退けると、手を両腰に据え、満足げに笑った。

「病院に行きたくないっておっさんが言い出したときは、どうしようかと思ったけど、割となんとかなるもんだな。もしかしたらこれも私の才能かも。将来、スーパー看護師になろうかな」

「そんな胡散臭い看護師の世話になりたくねえ。というか俺がそんなこと言ったのか？ 本当に？ 病院に行きたくないって？」

「本当だよ。覚えてないの？ なんかごちゃごちゃ言ってたじゃないか。だから私が付きつきりで手厚いスーパー看病をしてあげてたんじゃん。まったく、勝手だよな。もう忘れたのかよ」

眉を曲げるライの言葉を、直也は目を丸くして聞いている。まったくそんなことをライに頼んだ記憶がなかった。おそらく怪人と戦った末に傷を負った、というあまりに荒唐無稽な事実を外部に漏らしてはいけないと本能が囁いたのだろう。今となっては全ては夢の中に紛れ込んでしまっている。医者への介入を拒否したことで、一歩間違えれば本当に死んでいたかもしれないと考えるとゾツとした。直也は自分の体が快調に向かってくれたことに、改めて心の底から安堵する。

「俺を看病してくれたことには、本当に感謝するよ。ありがとうな」
素直に礼を告げると、ライは一瞬瞠目したあとで、相手を崩した。「別にいいって。私が勝手にやったことだし。当たり前っていうか……まあ、そんなに改まらないでくれよ」

「いや、俺がいま生きているのはお前のおかげだよ。本当にありがとうなんて言葉じゃ伝えきれないくらい感謝してる。お前と会えて本当に良かった」

「止めるって！ あんまり褒められるのに慣れてないんだから、そ

んなこといわれたら照れるじゃん……」

その言葉通り、ライは頬を薄く染め、わずかに俯いている。しゅんと縮こまり、居心地悪そうにしきりに自分の指を絡ませるそんな彼女の仕草を、直也はひどく愛らしく感じた。

「ずいぶん世話をかけた。でもほら、俺はもうこの通り元気になったからさ。家に帰れよ。親父も心配してると思うぜ？」

直也はライの父親、黒城和弥と顔見知りだ。彼は直也の勤めている職場の所長だった。傲岸な振る舞いをする男で、いつも謎の自信に満ちあふれている。しかしその一方で漫画を読み漁るなど子どもっぽいところもあり、どこか憎めない人物だった。

父親の名前を出すと、ライは顔をあげ、それからばつが悪そうに目を伏せた。頬を掻き、それから上目遣いで直也を見やる。

「それが実はさ、私、家出してきたんだよね」

「家出？」

直也は怪訝を声にする。ライは浅く顎を引いた。

「うん。まあ、ちょっと喧嘩しちゃってさ。帰りづらなんだよ」

苦笑いを浮かべるライの顔を見つめながら、直也はその喧嘩の原因に目星をつける。おそらくそれはディッキーのことではないのかと予想した。彼女のペットのネズミが何者かによって殺され、まだその犯人が捕まっていない件のことだ。彼女の父と姉はその犯人について何かを知っている風らしいが、ライにはそれを隠しているらしい。それがライには許せないとのことで、直也に接触した理由も元を正せばその事が発端だった。

約束をした以上、犯人のことも調べてあげなくちゃな、と改めて考えていると、ライは顔をあげ、それから拝むように顔の前で掌を合わせた。

「だから頼むよ。もう少しだけ、おっさんのところにいさせてくれよ。お願い。この通り！ 1週間……いや、3日でいいからさ。な？」

懇願する彼女の様子に、直也は目を細める。女子中学生を、しか

も上司の娘を、1人暮らしの男の家に住まわせることはあまりよろしくないことは分かっていたが、彼女の看病を受けてしまった以上ライからの頼みを無碍にすることは憚られた。少し考えたあとで直也は結局、彼女の申し出に了解した。

「……しょうがねえなあ。3日だけだぞ。3日過ぎたらちゃんと家に帰れよ。それで親父と仲直りするんだぞ。いいか？」

「分かった分かった。じゃあ、そういうことで、しばらくよろしく！」

喜びを顔中に広げ、ライはもう1度力強く直也を拝んだ。その時、台所のほうでなにやら甲高い音が鳴り響いた。

「あ、できたかな！」

ライは台所の方に顔を向けると、慌ただしく部屋を駆けて出て行った。何とも忙しないいなと呆れつつ、直也は布団の中から這い出ると、やつとのものでベッドの脇に腰掛け、息をつく。1週間という時間は、どうやら直也から根こそぎ体力を奪ってしまったらしい。

直也は体を乗り出すと、普段使っている仕事机の上からメッセンジャーバッグを手に取った。ジッパーを開け、中から手帳を取り出すと、そこに挟んである1枚の写真を指で摘む。それは咲を写した写真だった。事件の聞きこみ調査のため、いつも持ち歩いているものだ。そのため写真の端は折れ曲がり、わずかにその色もくすんでしまっていたが、そこで微笑む咲の可憐な印象はまったく変わらな

い。

——だってこれ、私の母さんなんだよ。

「母さん、か……」

直也がこの写真を見せた時、ライは確かにそんなことを口にしてた。始めこそ聞き間違いだと思いこもうとし、意識から弾きだそうとしたこともあったが、鉦橋家での会話を経た今では、彼女の話が正しいことはもはや瞭然としていた。

直也はバッグの中からさらに、小さなビニールケースを取り出す。

その中には金色の毛髪が入っていた。鏡の内より装甲を展開したオウガの指に絡まっていたものだ。その正体について今では見当がついている。この毛髪に遺された、咲からのメッセージを直也は受け取ることができた。

ライは黒い鳥の力を介し、咲の手によって作られた怪人なのだろう。しかし、だからどうしたと直也は本心から思う。ライが人間であろうとなかろうと、彼女が咲の娘であるということのほうが直也にとっては重要だった。それにライは慌ただしく、年上に対する口のきき方も知らない不躰な少女であるものの悪い奴ではない。人を殺し、その死体を集める怪人たちとは異なる存在であることは明白だった。

写真と毛髪とを見比べるようにしていると、しばらくして、ライが湯気に包まれながら帰ってきた。手には鍋つかみを装着し、小さな鍋を両手で掴んでいる。直也はビニールケースだけをバッグの中に入め、眉をひそめた。

「……なんだ、それ？」

目眩のしそうな熱気と香ばしい匂いが一瞬で部屋中を席卷する。蒸気があたりに立ち込め、確実に室内の気温は上昇する。水分を大いに入れた湯気に巻かれているだけで、意識が遠くなるような気がした。

ライはベッドのすぐ脇に置かれた、折り畳み式の小さなテーブルに鍋を下ろした。鍋を覗きこむ直也の前で、ライはじゃじゃーんと口で盛大な効果音を付けながら、その蓋を開いた。中から白い湯気が我先にと噴き出してくる。ようやくそれが晴れていくと、その向こうに切り刻まれた野菜と卵の入った粥が現れた。

「じゃん！ おっさんの大好きなおかゆチャーハンだ！」

得意満面に言い放つライを前に、直也は数秒、啞然とした。

「いや、これは雑炊だろ」

指摘するが、ライはそれを受け入れない。唇をへの字に曲げ、頑なに首を振る。

「違う！ チャーハンおかゆだ！」

「さつきと順番が違うぞ。つかおい、早く蓋を逆さにしろよ！ 雫が床に垂れてるじゃねえか！」

「仕方ないだろ、これ熱いんだもん」

ライは蓋を持ち、雫を転々と床に零しながら、再びキッチンに戻った。ああもう、と頭を掻きながら、直也はベッドの下に置いてあったフェイスタオルを掴み、重たい体に抗うようにして、体を伸ばし、床の滴を素早く拭き取る。掃除を終え、やれやれと元の席に戻ったところで、ライが鼻歌交じりに帰ってきた。片手にレンゲ、もう一方の手にお椀が2つある。ぐったりとした風の直也を見てだろう。ライは首を傾げた。

「どうしたおっさん、何か疲れてる？」

「あー、疲れているとも。人の忠告を無視した奴がいたおかげでな」
「そうか。悪い奴もいたもんだな。病み上がりなんだから、ゆつくり休めよなー」

直也の向かいに座ると、ライはおたまを鍋の中に落とした。お椀とレンゲは自分と直也の前に1つずつ置く。それからおたまで鍋の中を軽く掻きまわし始めた。

「おっさんは、1日に1回はチャーハンを補給しないと死ぬって聞いたからさ。私、頑張って作ってみたんだよ。それもスーパ―看護師の勤めだからな」

「死なねえよ。なんだその人間。なんだその情報。そんな生物、真っ先に自然界から淘汰されるわ」

「おっさんの体の80パーセントはチャーハンでできてるらしいじやん。だから、外から取り入れないと、体を保つことができないんだ」

「できないんだ、じゃねえよ。どこにそのマニュアル本売ってるんだよ。ここに持ってこいよ。というか残りの20パーセントはなんだよ」

「エロ画像」

「それはもはや生物じゃねえ！ ただの卑猥なチャーハンだ！」

「まあ、なんでもいいからとりあえず食べようよ。私、お腹空いちやったよ」

ライはあくまでもマイペースに、実にあっけらかんとした口調で話を打ち切ると、膝立ちになり、まず直也の腕に中のものをよそった。ご飯の色合いといい、匂いといい、どこからどう見ても、それは雑炊だった。ご飯の間が覗く汁の味は黒に近い。舌に乗せずとも味がひどく濃厚であることはそれだけで明らかだった。直也は礼を言つと、その温かい腕を受け取った。

「さあ、私のこのおかゆチャーハンをいっぱい食べて、とつとと熱下げようぜ。目指せマイナス300度！」

「絶対零度超えてる！ 逆に死ぬわ！」

ライは自分のものにも雑炊をよそり終わると、箸を手に取り、顔の前で手を合わせて「いただきます」と呟いた。直也もため息をついてから箸を手に取り、「いただきます」と唱える。どんな指摘も反論の言葉も、彼女にとってはのれんに腕押しらしい。ならば彼女のペースに乗る以外に選択の余地があるわけもない。

だがそんな傍若無人な彼女の態度にも、不思議と嫌な気持ちはしなかった。それはやはり直也が大人になり、愛するものとの死や離別を経験し、その過程で置き去りにしてしまった何かをライが持つていたからであるし、さらに彼女からは時折、咲と同じ匂いを感じるからかもしれない。

そうした一瞬一瞬で、直也は実感する。やはりライから魂を分け与えられた存在なのだ。

直也は床に置いていた咲の写真を手に取った、「ちょっと確認したいことがあるんだけど」と前置きして、それを鍋の上でライに見せるようにする。

「なに？」

ライはレンゲで雑炊を掬いあげ、それにふうふうと息を吹きかけながら、こちらを見た。写真に視線をやると、レンゲをお碗の中に

戻し、目を丸くする。

「これ、母さんの……」

「やっぱりか。ずっと、お前の言ってたことが気になってたんだ」

直也は写真を半回転させ、ライの方に向けた。ライはお腕をテーブルに置くと、それを直也の手から受け取った。

「その人は、お前の母親で間違いないんだな？」

「うん、間違えるはずはないよ。母さんだ。私の母さん。私もおっさんが起きたら聞こうと思ってたんだよ」

ライは顔をあげた。湯気越しに見える彼女の瞳は、わずかに潤んでいるようだった。

「なあ、母さんは今、どこにいるんだよ。突然いなくなっちゃったんだ。一体、どうしちゃったんだよ。私、会いたいよ」

「……俺にも、分からない」

自分でも驚くほど、直也の口からは滑らかに嘘が出た。直也は知っている。彼女がもうこの世にいないことを。フェンリルを纏った謎の少年に3年前、殺されたということを。

1週間前、直也はその少年との邂逅を果たした。その正体が誰なのかは見当もつかないが、彼は自分が咲を手にかけたのだと告白していた。

あの少年の正体さえ分かれれば、事件はもはや解決したも同然である。だがその真実を嘘偽りなく話した時、ライがどんな表情を浮かべるかと考えると、それだけで背筋に震えが走るようだった。

ディッキーを殺した犯人を絶対に許さないと、憎悪を剥き出しにしていたライを思い出す。光を捨て、闇に染まったあの瞳が直也の胸を絞めつける。事実を話せば、ライはあのフェンリルの少年に怒りと憎しみの矛先を向けるに違いない。あんなライの姿を、直也は二度と見たくなかった。だから直也は、反射的に嘘をついた。母親が誰かに殺されたという真実など、ライはまだ知らなくてもいい。話すのは、事件の全てが解明されてからでも遅くはない。中途半端な今の状態で真実を口にしても、状況がややこしくなるだけのような

気がした。

「俺も咲さんを探してるんだ。だからこの写真をいつも持って、情報を集めてる。お前の家族に尋ねたのも、そういうことだ」

「……もしかしておっさんは、母さんの恋人、なの？」

ライは写真と直也とを見比べながら尋ねた。直也は自分の左手首をちらりと見た。

「元、だけどな」

直也は両腕を床につき、天井を見上げた。写真を見ずとも、咲の姿は3年経過した今でも、はつきりと思い浮かべることができる。その声も匂いも体温も、感覚で覚えている。咲に再び会うことは叶わない。だから直也にできることは、彼女の想いを継ぐことだけだ。「だからどうしても見つけたいんだ。お前と同じだ。俺も、咲さんに会いたい。だからこうして真相を追っている」

直也の視線の先にあるものを追うかのように、ライもまた天井を仰いだ。その姿勢のまま、「そっか」と彼女は短く応じる。その口元には笑みが浮かんでいた。

「じゃあ、なんか私に協力できることがあれば、どんどん言ってくれよ。お母さんの居場所、一緒に探そうよ。2人なら、1人よりもなんとかなるって」

ライの力強い言葉に直也は勇気づけられる。直也は複雑な心中のままに微笑みを返した。

「ああ、そうだな。少しずつ聞いていくかもしれないから、その時はよろしく頼む」

「……でもなんか、嬉しいよ。母さんを知ってる人に会えたなんて」「こっちこそ。まさか、お前が咲さんの娘だったなんて、驚きだ」

直也は本心を告げる。まさか上司の娘と咲に関係があつたなど、昔の自分なら想像すらしなかったに違いない。

突然、ライが「あっ」と声をあげた。彼女のほうを見ると、ライは膝立ちになり、顔の前で手を叩き合わせていた。「忘れてた」と目を見開く。

「そういえば、おっさんが寝ている間にお客さんが来たんだよ」

「客？」

「それがなんと、おまわりだよ、おまわり。そこに名刺置いたんだけど。ない？」

ライが目で示した先を追うと、彼女の言うとおり、机の上に名刺が置かれていた。

直也は腰を浮かし、体を半分擦じって手を伸ばし、名刺を指で摘んだ。まだ重苦しい体を動かし、元の姿勢に戻しながら、名刺に書かれている名前を見て、ああ、と声を漏らす。

「知り合い？」

気付けば、ライが隣に来て名刺を横から覗きこんでいた。目を輝かせ、その様子はどこか浮ついている。いつの間に、という言葉ですんでのところで呑み込み、名刺の中心を指の腹で小突いた。

「ああ、柳川さんっていう、知り合いの刑事だよ。結構事件のことでお世話になってるんだ。で、いつ来たんだ？」

「昨日だよ昨日。おっさんはやばすぎてもう死んでるから、また来てくれって言ったんだ。そしたらまた電話してくれて。なるべく早めがいいとか言ってたけど」

「……そっか」

名刺には携帯の電話番号も記載されていた。さっそく電話をかけようとして室内に視線をさまよわせ、それから今は携帯電話を所持していないことを思い出した。公園でフェンリルに襲われ、その際に破壊されたままだった。機械自体はまた買い直せば良かったが、これまで蓄積してきたアドレス帳や画像ファイルなどのデータが全てお釈迦になってしまったのは痛手だった。落した程度ならば復旧も可能だろうが、直也の物は微塵に踏み砕かれているし、その破片も公園に放置したままとなっている。どれほど優秀な技術者の手を持ってしても、あそこからデータを引き出すのは不可能だろう。

「おい、ちよっとお前のケータイ貸してくれ。自分のが壊れたままだったの思いだした」

「もしかして母さんのことかな？　なんだよ、グッドタイミングじゃない！」

「……ああ、そうかもな。とりあえず、連絡してみれば分かることだろ」

おそらくそうだろう、と直也は予測する。柳川からの要件など、3年前の事件に関すること以外に思い至らない。

掌を上にして差しだすと、ライはワンピースのポケットから嬉々とした様子で携帯電話を取り出した。色は水色で、表面にはシールが貼ってある。複数下がったストラップの先には小さなぬいぐるみが繋がっていた。思ったよりも女の子らしい姿をもったその携帯電話を、直也は意外な思いで受け取る。眉間に皺を寄せるライの顔と携帯電話とを見比べた後で礼を言い、名刺に記された番号を手早く打ち込んだ。

「はい、もしもし？」

それほど待たされることもなく、柳川は電話に出た。かかってきた電話番号に見当がつかないからだろう。その声には警戒心が滲んでいる。

「俺です。坂井直也です。しばらく連絡できなくてすみませんでした」

名乗ると、一転して柳川は安堵の籠った声をあげた。

「ああ、君か。番号が違うから、分からなかった」

「実は電話が壊れちゃって。今は、知り合いのものを使ってるんですよ」

「ああ、連絡が急になくなったのはそういうわけか」

柳川は得心のいった風に息を零した。そういえば、柳川と会話をかわすのも、携帯電話を破壊されて以来であったことを思い出した。それから一切連絡をとっていなかったことに、直也は今更ながら申し訳なさを感じる。

「それで、体調は良くなったのかい？　あの女の子が、死にそうだったか言っていたが」

「まあ、電話できる程度には。それで、どうしたんです？　急な用事って聞きましたけど」

挨拶もほどほどに直也は本題を切り出す。何やら電話の向こうが騒がしい。直也との通話から離れ、柳川が誰かに指示を出す声も聞こえてくる。おそらく仕事中のだろう。慌しい様子が、電話越しでも伝わってくる。

柳川は受話口に戻ってくると、「封筒の中身は見たかい？」と言った。意味が分からず、直也は眉間に皺を寄せ、「封筒？」と尋ね返す。

「名刺と一緒に、女の子に渡しておいたんだけど。受け取ってない？」

直也は携帯電話を耳に当てたまま、ライを振り返った。ライはきょとんとした顔で直也の視線を受け止めると、慌しく腰を上げ、傍らにある円柱形のゴミ箱を漁りだした。信じられない思いで直也が見つめるその先で、ライはゴミ箱から顔をあげると、どこか誇らしげにも見える表情で片手にくしゃくしゃの茶封筒を掲げる。それは明らかについ数秒前までゴミ箱の奥底に眠っていたものに違いなく、直也はがつくりとうなだれた。

「あー……すみません、ありました。まだ中身は見えてないですけど」
直也の報告に対する返答はなかった。柳川はまたしても携帯電話から離れ、誰かと真剣な声音で話している。会話内容さえ聞き取れないものの、単なる世間話という風でもなさそうだった。

「あの、取り込み中なら、また電話しなおしましょうか？」

直也との会話を再開するなり、まず謝罪の言葉を口にする柳川に向けてそう提案すると、彼は申し訳なさそうに声を低くした。

「催促したのはこっちの方なのに。すまない。ちょっとこここのころ立て込んでね。まともに家にも帰れてない有様だよ」

「また事件ですか？」

「ま、そんなところだね。どうだい？　体が許すなら一緒に昼でも1時過ぎなら少しだけ時間が空くと思うんだけど」

直也は窓の外に目をやり、少し考えたあとで軽く顎を引いた。

「いいですよ、分かりました。場所はどうします？」

「前と同じ喫茶店でいいかな。もし体調が悪くて来られなくなったら、また連絡してくれ。じゃあすまないけど、電話を切るよ。1時半に待ち合わせてことで」

「はい。楽しみにしています」

直也がボタンを押すよりも一歩早く、受話口の向こうからぶつりと通話の切れる音が聞こえた。直也は携帯電話を閉じると、疲労の籠った息を吐き出した。体はまだまだ快調には程遠く、外に出るのは億劫ではあったが、以前通話の途中で携帯を破壊されたということもあり、なるべく直接顔を合わせて会話をしたい気持ちが強く働いていた。それが重要なものなら尚更だ。

結局、柳川が一体何の用事でこの家に来たのかは分からずじまいだった。おそらくその答えは彼がライに渡したという封筒の中にあるに違いない。直也はライに携帯電話を返しながら、ライの手にある封筒に視線を移した。一度、掌で握って丸めたものを広げ、手で皺を伸ばした様子が、そのみすばらしい姿からは窺い知れた。

「ごめん、おっさん。これ、ゴミと紛れ込んだみたいなんだ。頑張って伸ばしてここまででは戻ったんだけど」

「お前なあ……ま、今日のところは看病してくれたことに免じて許してやるよ」

「それで、どうなんだよ。やっぱりさっきのは、母さんのことだったの？」

「それが向こうも忙しいみたいで、それをまともに聞けなかった。午後になったら昼飯がてらでかけることになったよ」

差し出された封筒を受け取ると、直也はその封の口を開いた。中には折りたたまれた1枚の紙が挿入されている。カラーの片面印刷で素材もしっかりとしており、何かのリーフレットのようなだった。

「今日は休めよー。まだ体ふらふらなんだろ？ またすぐに熱上がつちゃうよ？」

「急用って言うてたんだろ？ ま、別に激しい運動するわけでもないし。バイクでちょっと行って帰ってくるだけだよ」

「なら私も連れてけよ」

直也は封の中に指を2本突き入れたまま、ライを振り返り、それから顔をしかめた。

「ダメに決まってるんだろ。咲さんに関わることかもしれないとはいえ、これは仕事なんだ。お前は留守番してろよ」

「嫌だよ。そんなの。連れていってくれよ」

断固として追いつがるライの態度に、直也は反論の余地さえ失う。彼女は身を乗り出し、直也を下から覗きこむようにした。

「おっさん病み上がりだろ？ 途中で具合が悪く鳴いたらどうすんだよ。私はおっさんのスーパー看護師だからな。私を留守番にするなら、そっちも留守番だ。この家から一步も外に出させるもんか」

そうして意固地に振る舞うライの真剣な表情を見つめ返しながら、仕事だから連れて行かない、というのは苦しい言い訳だなと直也は自虐的に思う。休職中の身にある直也が個人的に警察とやり取りをすることのどこに仕事の要素があるのかと自分を詰りたくもなる。

彼女を同伴させたくない理由は、“咲は行方不明になっている”いう嘘のメッキが剥がされることを恐れているからに他ならなかった。直也は胸に鈍い痛みを覚える。それは自分を救ってくれた恩人であるライに平然と嘘を吐いているという罪悪感からだった。だが今は、真実を塗り潰すより方法がない。

しかし、ライは直也以上の頑固者だ。一度こうと決められたら、説得することは難を極める。まだ彼女と付き合いの浅い直也でも、そんな彼女の性格は承知していた。

直也はライの力強い瞳を見つめ返し、それから深くため息をついた。頭を掻き、目を細める。こうなっては仕方がなかった。あまり口やかましく言っても、それはそれで直也に対する疑惑を深めさせるだけだと判断する。

「分かったよ。仕方ねえな……その代り、同席はするなよ。どっか

別の店とかで待っていること。いいか？」

「分かってるって。プライバシーってやつでしょ？ 大丈夫大丈夫。私はプライバシーを守るプロだから、大人しく待ってるよ」

任せるとばかりに自分の胸を叩くライを傍目に、直也は封筒の中からようやく紙を引き抜いた。リーフレットはひどく折れ曲がり、そのせいで封筒の出口に引っ掛かってしまつて、そのせいで中から引き出しづらくなつていたのだった。ライは直也に近づくと、横からその手元を覗きこんだ。

「そうそう。その中身、変な広告みたいなのが1枚はいつてただけだつたんだよ」

「だからって捨てるなよ。ってか、人の手紙勝手に見るんじゃないよ。社会、っていうか人間としてのマナーだぜ？」

「手紙を勝手に見たのは謝るけど、捨てたのはわざとじゃないよ。本当に他のものと混ぜっちゃつたんだって」

ライのあまりに隙の多い弁解を切つて返そうとして、しかし直也は絶句した。リーフレットを広げた瞬間、それは頭で理解するよりも先に、目を通じて意識下に直接飛び込んできた。

直也は目を見開き、息を呑み、頬を強張らせる。頭から血の気が引き、胸の奥から熱いものが込み上げてくるようだった。リーフレットを持つ手が震えた。

リーフレットの中央を陣取るように描かれていたのは、翼を広げた鳥だった。世の何もかもを憎むかのような鋭い眼光。禍々しく伸びた2本の足。星のない夜空に似た漆黒の体。

それは見間違えるはずもない。咲の首筋に刻まれていたあの痣、元鉦橋家で変貌を目の当たりにしたライの影の形と同様のものだった。

“黒い鳥”——それは怪人の存在を匂わせるシンボルマークだ。その鳥のマークの上にはゴシック体で英文字、そして『8/21』という日付らしき数字が記されている。

さらに英文字と日付の間にはか細い文字で『我々が、あなたに光を

与えます』という一文が記されていた。

それ以外にリーフレットの表面は白地で、紙面の構成自体は非常にあっさりとしている。それだけにこの広告に秘められた強い意志のようなものが、伝わってくるような気がした。

「L・I・LY・B・O・N・E」

記されたアルファベットの羅列を一文ずつ読み上げる。それから直也は唾を呑み込み、眉根を強く寄せた。

「リリイ、ボーン」

それは全く聞き馴染みのない単語だった。しかし黒い鳥の側に淡々と掲げられたその文字は疑惑以上に、直也の心に喻えようのない不気味な感触を抱かせた。

2話「この世界の生贄」

魔物の話 41

父親の入院している病室で2時間を過ごしたレイは、病院の前に立つと、日課であるパトロールに行動を移した。

パトロールといえば聞こえはいいが、その実は単なるそぞろ歩きである。うろつろと歩き、目の先の道が分かたれていれば、昨日とは別の道に足を踏み出す。そういった選択を繋げながら、陽炎の立ち昇る道を進むだけである。

この活動はベルゼバビーにも協力を仰いでいる。ただしレイに同行という形ではなく、彼女を解き放ち、好き勝手に動いてもらい、何か気になるものがあればレイに連絡をしてくれるように頼む、というような体制をとっていた。ベルゼバビーは怪人の姿になれば飛ぶことも可能であり、その小柄さも相まって人に見つかりにくい。その特性は、こういった索敵行動には最適だった。

彼女を単独行動させることに不安はあったし、寂しくもあったが、可愛い子には旅をさせるの精神でレイはベルゼバビーに昼の弁当を持たせると、無事と収穫を祈り、一時の別れを告げたのだった。

パトロールの目的は式原の所在に関する情報収集と、怪人の索敵それからライの搜索だった。父親は彼女の居場所を知っている風な態度で放っておけと言うものの、レイはやはり妹のことが心配ではあった。しかし父親にあいつを信じると言われ、さらにレイ自身もいまだに彼女と和解する手段が見つけられない以上、それほど表立って探すことはできず、ベルゼバビーにこっそりと、事のついでのような形で頼むに至っている。

心配するな、あいつなら大丈夫だろう、と言う父親の言葉を今は支えにするしかなかった。荒唐無稽なことを言いはするが、これまで裏切られたことのない父の判断を信じるしかない。

幸い、昨日送ったメールは返ってきている。怒りを表す絵文字付き

の、短い文章だった。まだレイに対する怒りは冷めやらぬらしいが、とりあえず今のところ無事である現状に安堵する。

スカートのポケットから携帯電話を取り出し、電話・メールともに着信がないことを確認しながら、レイは国道沿いを歩いていく。毛虫に対してはいまだ本能的な恐怖が先立つものの、トラックへの恐怖心は当初に比べ、大分薄まっていた。これまでは意図的に避けていた交通量の多い表通りも、今では何の躊躇もなく通ることができる。

時折、人のいない場所を選んで立ち止まり、ふと瞼を閉じてみる。五感を鋭敏にし、体全体を目に変えるような気分で、深呼吸と共に己の心をも風の中に解放する。

そうしながら、湿気を帯びた空気の裏側に虎視眈眈と詰める、有象無象の気配を探ってみる。喧噪の中に紛れ込んだ悪意を検分する。排気ガス混じりの濁った臭いに乗じる不穏を嗅ぎ取るうと試みる。

しかし、その気配は一向にレイの感覚に引つ掛かることはなかった。この1週間、ずっとそうだ。あの頭の奥の方から押し迫ってくるような、強烈な光と、鋭い痛みがすでに懐かしく感じるほどだった。

少なくとも東京周辺ではここ最近、怪人の姿は全く見られていない。式原も行方知らずのままだった。

怪人だけではなく華永あきら率いる黄金の鳥の集団や、マスカレイダーズもまたここしばらく姿を見せないでいる。『ホテル クラークン』前で起きたあの戦いで双方ともに力を消耗してしまったため、今は身を隠し、傷を癒しているのかもしれない。

感覚を研ぎ澄ましながら炎天下を歩いていると、すぐに昼時になった。レイは通りがかりのパン屋で簡単な食事を済ませると、携帯電話で時間を確かめた後で、今度は着実な足取りで道をたどった。

絶えずこめかみのあたりから滑り落ちてくる汗を、ハンドタオルで拭いながらしばらく歩くと、白い外装をもった洋風の一軒家の前にたどり着いた。固く閉め切られた門の脇にインターホンが備えられている。レイはそれを鳴らした。少しの時間、炎天下に放置され、

しばらくしてから焦りを帯びた少女の声が返ってきた。

レイが自分の名前を伝えると今度はそれほど待たされることもなく、目の前で自動的に門がスライドしていった。門が完全に開ききったところで、レイはその家の敷地内に足を踏み入れる。人工芝を踏みしめ、道に点々と配置されたレンガ色のタイルをたどり、家の前にたどり着く。ちょうどそのタイミングで玄関のドアが内側から開かれた。

「ごめんねレイちゃん、時間がかっちゃった」

家の中から慌てふためいた様子でレイの親友、天村悠が姿を現した。彼女は花柄のワンピースを着ていた。量の多かった髪の毛は少し短くなっている。以前は髪の毛の茂りの中に、両側で結った髪の毛の縛り目が見えていたのだが、今は緑色のゴムがはつきりと見える。縛り目の位置は髪量を減らす前とは違い、耳の下で小さく纏めてあった。

「いいよ、気にしないで。悠、髪切ったんだ。凄く似あってる。可愛いよ」

「えへへ……ありがとう。暑かったから昨日切ってきちゃった。中は涼しくなってるよ。あがってあがって」

悠は表情をパツと明るくし、くるりと踵を返した。悠の嬉しそうな顔色を見ると、自分の心も自然と明るくなるから不思議だった。だからレイは親友の笑顔が何よりも大好きだ。レイも笑みを浮かべ、それから「お邪魔します」と今更ながらに頭を下げた。

玄関に足を踏み入れ、靴を脱ぎ、悠の後を追う。家の中は彼女の言う通り、冷房で冷やされていた。肌の上を心地よい空気が滑る。体から熱気が失せ、細胞の1つ1つまで冷やされていくかのような感触を覚えた。

廊下を小走りで駆ける悠の痩せた背中を、レイは首筋の汗を指で拭いながら感慨深い思いで見つめる。こんなにも早く、親友と病室以外の場所で顔を合わせることができるとは想像だになかった。

悠が入院したのは今年の初めのことだ。それまでも調子を崩して

は入退院を繰り返していたのだが、今回はその中でも長かった。3年生になってから1日だけ許可が降り、学校に登校したことがあるのだが、その翌日には高い熱を出してしまい、それ以来外にすら出られない生活が続いていた。どうやらひどく難しい病気らしく、いつ死んでもおかしくないという状況だったらしい。病気によってベッドに縛られ、学校生活はおろか、15歳の少女らしい生活を送ることのできない親友を見るたび、レイは哀しい気持ちになったものだった。そして親友の強さに励まされたこともあった。

だが、1週間前に悠は退院し、自宅に帰ってきた。

こうして向かい合い、顔色を見る限りでは、その後の経過も順調らしい。幼い頃に発症し、完治は非常に難しいと宣告されていた病気だけに、医者も驚いていた。しかもなぜ急激に良くなったのか原因が全く分からないらしい。画期的な治療法を実践したわけでもなく、特別な措置を施したわけでもない。しかし現に、なぜか、悠は治ってしまった。完治とまではいかないが、入院を強いられなくなるまでに体調が良くなったのは、紛れもない事実だった。

悠は元気になったのだ。また一緒に学校にも行くこともできるし、色々な場所で遊ぶことだってできる。これは、今までずっと頑張ってきた悠に神様が与えてくれた奇跡なのではないか――レイは浮かれた気分に乗っ取られるがままに、そんなあまりに荒唐無稽な結論を見出していた。それほどまでに今、悠と彼女の自宅で会えるこの状況が、嘘でも夢でもないことが、たまらなく嬉しかった。

まるで西洋の美術館を思わせる絢爛な廊下を通り、広々としたリビングに通される。そこはレイの住んでいる安アパートとは、まるで世界が違っていた。天井が高く、見回すだけでも一般的な家庭にはまずないであろう物がちらちらと見える。部屋の隅に置かれた、ガラスケースの中に入れられた鹿のはく製がその最たるものだろう。

天井から吊り下がった豪華なシャンデリアを見上げていると、悠が手近の椅子を勧めてきた。それもまた清廉な輝きを放っている。椅子自体の材質やクッションの素材からみて、おそらくこれも高級

品に違いない。レイは室内を改めて見渡しながら、思わずため息を零した。

「相変わらず悠の家は凄いな。こんな家に住めるなんて、うらやましい」

「私はレイちゃんの家みたいな方がうらやましいなあ。なんか、みんなの家って感じがするもん。それに今は私とたあくんしかいないからこの家も広すぎるよ。お掃除だって大変だし……」

レイは勧められた席に腰を下ろした。悠もテーブルの向かいに座る。テーブルの上には籠の中にオレンジが積み上がっていた。レイはテーブルを指の先でこんこんと叩き、その音の響き具合を楽しんでから悠を見た。

「なにそのくらい。私の家なんか、歩くだけで床がぎしぎし鳴るからね。ぎしぎし。いつ底が抜けるのか、いつも恐る恐る歩いてるよ。死と隣り合わせの毎日だよ」

「レイちゃんは体細いし、体重も軽いから、大丈夫だよ」

「それに私も1人部屋が欲しいよ。ライは寝相悪いし。寝てても起きててもうるさいし」

「あ、そういえばライちゃんは元気？ 今度、久しぶりに会いたいなあ」

胸の前で手を組み合わせ、にこりと微笑む悠を前にレイは曖昧に笑った。悠にはライが家出をしたことは話していない。いらぬ心配をかけなくなかったからだ。病気の枷から外れ、悠はようやく新しい生活に踏み出そうとしている。そんな彼女の足を引っ張るようなことはしたくなかった。

「まあ、そのうちね」

レイは言葉を濁すと、籠の中のオレンジを1つ手に取った。親指の爪を立て、固い皮に突き立てる。1週間前、ホテルの階段で華永あきらに踏み割られた爪は、とうの昔に完治していた。それだけでなく、レイの体には戦いの傷跡は今や何も残されていない。それはレイが人間ではなく、人の形をした怪物であることを示す、もつと

も顕著な部分だった。

「私もね、今度、レイちゃんに会わせたい人がいるの」

悠はテーブルに両肘を付き、組み合わせた手の上に顎を置きながら言った。そののんびりとした様子は夏の暑さにうだる小犬を彷彿とさせる。こうして正面からその姿を眺めているだけで、心がなごんだ。

「ん。誰？」

「えへへ……あのね、お父さんと、お母さん」

レイはオレンジの皮を剥いていた手を止め、悠の顔をまじまじと見つめた。悠は手の上に頬を預け、首を傾げるようにしながら、照れくさそうに笑っている。そうすると今度は溶けかけたアイスのように見えた。

「悠のお父さんとお母さん、帰ってくるの？」

「うん。昨日、電話があつたの。今度の金曜日に帰ってくるんだって」

レイは悠の背後の壁にかかったカレンダーを、反射的に見た。何もかもが優雅に彩られたこの部屋の中で、そのカレンダーだけは銀行等で無料でもらえるような至極一般的なもので、レイはその見慣れた景色に少しだけ安心する。

今度の金曜日は8月の20日だった。割合と日にちは近い。レイは悠の父親である天村氏とならば会ったことはあつたが、彼女の母親と面識はなかった。悠や佑からも、父親以上にあまり日本にはいない人、以上の話はこれまで聞いたことがない。

「悠のお母さんって、どういう人なの？」

「えっとね、すごくかっこいいよ。デザイナーで世界中を飛び回ってるんだけど。あんまり他に女の人がいなくて、とにかく凄いんだって！」

「へえ」

「私も久しぶりに会っただけだね。最後に見たときは、背中にベース背負ってたの。こう、忍者みたいに」

「へえ、野球でもするの？」

「そつちじゃないよ！ 楽器の方だよ！」

「ああ、そつち」

考えてみれば、たとえ野球を嗜む人でもホームベースを持ち歩くことはしないだろう。レイはベースという楽器を間近で見たことはなかったが、それでも何となく頭の中で形を思い描くことはできた。縦に長い形をした4つの弦がある弦楽器だ。テレビの音楽番組が何かでその楽器を演奏している人の姿を目にしたことがあった。髪を真っ赤に染めた、ビジュアル系ロックバンドのメンバーだった。もしかしたら佑のギターも母親から影響を受けたのかもしれないな、とぼんやりと思う。

「それはかつこよさそうだね。でも、デザイナーなのになんで楽器？」

「たあくんと同じで、お母さんもバンド仲間がいるんだって。上手らしいんだけど、私は聞いたことないんだよね」

そう言って舌を出し、苦笑を浮かべる悠は、とても嬉しそうだった。本当に両親と会えることが楽しみで仕方がないのだろう。悠が喜んでいる姿を目にすると、こちらまで気持ちが弾んでくる。

「悠、本当にお母さんとお父さんのこと、好きなんだね」

レイもまた口元に笑みを携えながら言うと、悠は躊躇いもなく笑顔で頷いた。

「うん、大好き。あんまり帰ってきてくれないのはちょっと寂しいけど、仕事が大変なのも分かってるから。そうやって頑張ってるお母さんもお父さんも、すごく偉いと思う」

「悠は両親思いなんだね」

「私がこうやって今元気になったのも、お父さんたちがいい病院に入れてくれたおかげだから。だから、今度会った時にありがとう、ってそう言いたい」

「うん。元気になった悠を見たら、きっと喜んでくれると思うよ」
赤の他人である自分でさえ、悠が元気になったことがこれ程まで

に嬉しいのだから、両親であれば尚更に違いない。悠と彼女の両親が顔を合わせ、楽しげに会話を交わす姿を想像すると、それだけで心に温かい風が吹き込むようだった。

その時、部屋の奥にあるドアが音を立てて開いた。悠がそちらを振り返り、レイもドアの方に視線を移す。すると開かれたドアの先から、Ｔシャツにハーフパンツ姿の天村佑が姿を現した。彼の左腕には、手首から肘まで固く包帯が巻かれている。レイはその腕に視線を向けぬよう注意を払いながら、表情を綻ばせ、佑に向けて軽く手をあげた。

「お兄さん、お邪魔してます」

「誰か来たと思ったら、やっぱりレイちゃんだったんだ。ようこそ」
佑は小さく笑むと、レイの隣の椅子に腰を下ろした。彼の髪からふわりと整髪料の甘い香りが漂ってくる。レイはしばらく呆然と佑の顔を見つめたあとで口元を緩めた。

「体調、よさそうですね。安心しました」

「レイちゃんと悠のおかげだよ。２人とも病み上がりなのに世話かけちゃって。本当に感謝してるよ……ありがとう」

包帯のしてある左手の指で、佑は頬を掻く。レイは佑から視線を逸らし、そして正面の悠と笑みを交わした。

「レイちゃんが毎日来てくれるおかげで、色々助かってるよ。俺、ぶきつちよだからさ。あんまり家事うまくできないし」

「気にしないでください。勝手に入り込んでるだけですから。悠があまりに可愛すぎるから、気付くと毎日来ちゃいます」

「レ、レイちゃん！」

レイが真顔で言う、悠は顔を耳まで赤くして照れた。佑はレイと悠を交互に見つめ、それから顔をくしゃりとしかめるようにして笑う。

「そっかー、まあ、悠は世界一可愛いからそれも仕方ないな」

「たあくんまで！ 恥ずかしいよ……」

畳みかけるような絶賛の嵐に、悠はすっかり照れて顔を俯かせて

いる。レイは得意げに頷く佑の顔に目をやり、不敵に言い放った。
「まあ、私の方が悠のことを好きですけどね」

レイの放った言葉に、佑は一瞬虚を衝かれたような様子を見せ、その後ですぐさま反論した。

「いいや、俺の方が好きだな。こればかりはレイちゃんにも譲れない。俺が世界一、悠の事が大好きなんだ」

「あー。じゃあ、あれやりましょうよ。悠の体を2人で両方から引っ張って、先に千切った方が勝ちっていう」

「嫌だ！ 体千切れたら死んじゃう！」

「というか悠、こんなにゆっくりしていいのかよ。まさかレッスン、初回から遅刻する気か？」

「あっ！」

佑が指摘すると、悠は弾かれるように椅子から立ち上がり、勢い余って椅子ごと床に転げ落ちた。広いリビングに椅子の倒れる、けたたましい音が反響する。

レイは慌てて、同じく血相を変えた佑と一緒に悠を抱き起こした。悠は恥ずかしそうに笑いながら、ごめんね、と尻をさすっている。

「大丈夫、悠？」

「悠、痛くないか！ 俺が悪かったよ、焦らせちゃって。大丈夫、安心しろ！ 今から準備すれば余裕で間に合うよ。間に合わなくてもその時は、俺がチャリで時速60キロで送ってやるから！」

「お兄さん、それは逆に危険です」

冗談ならばまだしも、そのセリフを真顔で、本気で言っている風なのが佑の厄介なところだ。心配をするレイと佑の視線を受けながら、悠は笑顔をみせた。

「うん、全然大丈夫、痛くない痛くない！ レイちゃんせつかく来てくれたのにごめんね。今日からレッスンだから、準備してくる」

まだお尻に手を触れながら、悠はぴよこぴよことリビングを歩いて横切り、廊下に出ていった。

レイは佑と顔を見合わせ、苦笑いを浮かべてから先ほどと同じ椅

子に腰を下ろした。

「そっか。今日からバイオリンでしたっけ。すっかり明日だと勘違いしてました」

「ああ。うん、そう。さっきまで、あいつでかける準備してたんだけど。レイちゃんに来て、頭から吹っ飛んじやったのかも。うっかりものだしな。今みたいなことなんてしょっちゅうだから、目を離せないよ」

「でもそういうところが可愛いんですけどね」

「まあね」

佑はレイの正面に座った。先ほどまで悠のいた場所だった。それから籠の中のオレンジを手に取り、皮を剥き始める。レイもまた皮向きが途中であったことを思い出し、テーブルの上に転がったオレンジを掴み上げた。

「でもまさか悠がバイオリンを始めたいだなんて言い出すなんて、びっくりですね」

包帯の巻かれた左手を添え、右手で器用に皮を剥く佑の手元を見つめながらレイは尋ねる。まるで紙を千切るように、彼の手に皮がさらわれ、オレンジの身が少しずつ顕わになっていく。佑は顔をあげると、同感という風に軽く顎を引いた。

「本当だよ。あいつそんなこと、今まで一度も言い出したことなかったのに。いつから考えてたんだろうな」

悠がバイオリンをやりたいと突然言い出した時、レイは己の耳を疑った。これまでレイは、そして佑でさえも、悠が楽器に興味を持っているという話を聞いた覚えがなかった。

さらに入院中にレイや佑に相談もなく、レッスン・スクールに話を取りつけていたということも、さらに驚愕を後押しさせた。聞く話によると、そのスクールにはお試し期間というものが存在するらしく、2週間は無料でレッスンを受けられるらしい。楽器や本も貸してもらえることや、家からそれほど離れていない立地条件にも引かれ、悠はとりあえずそこに通ってみることに決めたらしかった。

正直レイは、悠がそれほどまでに積極的な性格だとは思わなかった。どこか甘えん坊で、臆病とも慎重ともいえるその性質こそが、悠の本分だと思い込んでいた。

しかしその一方で、悠の気持ちも理解できる。これまで悠は病気のせいで好きなことを自由にやらせてもらえなかった。しかし病気が波を引くように快調に向かったことであらゆる制約からようやく解き放たれ、悠はこれから新たに始まる人生を精一杯に謳歌しようとしているのだろう。その気持ちはこれから生きる上で大切なことであるし、尊重してあげるべきことだろう。そして親友として応援してあげたいと素直に思った。そしてそれは、佑も同様に違いない。

「ま、俺は悠が楽しく毎日を過ごしてくれればそれでいいよ。ちょっと寂しいけど。あいつも、前に進むんだよな。俺の知らない友達作って、知らない生活送って、そうやって成長していくんだよな」

裸のオレンジを手の中で転がしながらそう言葉を浮かべる佑は、寂寥感と喜びを同席させた——実に複雑な表情をしていた。レイもまた同じ気持ちを抱えている。悠が新しい生活を歩むことを歓迎する反面、彼女が手の届かない場所に行ってしまうかのようで、少しだけ寂しかった。だが、この痛みを受け入れなくてはならないのだと思う。人は、前に進むべきなのだ。

「はい……そうですね」

レイは頷いた。佑が微笑む。前に進むとする悠の邪魔をする権利は誰にもない。自分たちができることは、悠を守り、その未来を切り開くことだ。レイは佑と視線を交わし、自分たちの役目を言葉に出さぬままに認め合った。

「そういえば両親が金曜日に帰ってくるそうじゃないですか。悠が嬉しそうに話してましたよ」

悠との会話を思い出しながらレイが何気なく言うと、佑は表情を途端に曇らせた。そんな彼の顔を見て、レイはハツとなる。佑と天村氏との折り合いがひどく悪いことを不意に思い出し、口を噤むが、

もはや後の祭りだった。

佑はオレンジを片手に席を立った。ぶらぶらとリビングの中央あたりまで移動し、それからレイを背後に、大きな窓の外を見つめる。「悠はあいつらと会えること、喜んでるから、俺あまり言えないんだけどさ」

レイの場所からでは彼の表情を窺うことはできない。だがその語調には確かな怒りが滲んでいた。

「今更なんなんだよ、とは思うよ。母さんなんかしばらく連絡もよこさなかったくせに。親父も悠が危ないってときに来てくれなかったくせに。今更になって、来るんだなんて。遅えよって感じだよ」

病気の妹を残して仕事に明け暮れる両親を、佑は許せないのだから。彼が悠を溺愛するのも、妹を守るのは自分しかいないと考えているからに違いない。彼は両親を信頼していない。天村氏を悪い人だとは到底思えなかっただけに、レイは佑とその両親のすれ違いに悲しさを覚えるが、こればかりはどうにもならなかった。家族の問題は家族の中で決着を付けるべきだ。少なくとも部外者が軽々しく口を出していい問題とは思えなかった。

「俺はあいつらを許さない。今頃母親、父親面するなってんだ。悠は俺が守る。俺が……」

空を睨みながら、佑はうわごとのように呟く。だがレイの存在を思い出したのか、びくりと1度肩を震わせ、それから振り返り、弱い笑みを浮かべた。その彼の表情に、レイは少しだけ安心する。「……ごめん、レイちゃん。ちょっと自分の世界に入り込んでしまった」

「いえ。まあ、お兄さんの言うことも分からないでもないですから」「まあ、何にせよ。悠が喜んでくれるのはいいことだよ。……そうだ、レイちゃんも悠と一緒に送っていく？」

佑からの提案に、レイはオレンジを剥きながら目を丸くした。

「いいんですか？」

「大歓迎だよ。レイちゃんがいたほうが、心強いし。それに……」

言って、佑は僅かに目を細めた。レイは彼の表情にぐつと濃い影が射したのを目の当たりにして、思わず閉口する。目が爛々とぎらついた光を帯び、その声音に憎悪が混じる。

「……怪人だつて、出るかもしれないからな」

レイは息を詰ませた。

自分を見つめる佑の黒々と濁った瞳の奥には、悠の病室に忍び込み、悠の傍らに立つ怪人の姿が映し出されているに違いない。

その視線から逃れたくて、レイはつい、彼の左腕に視線を移した。まるで雁字搦めに結んだ鎖のように彼の腕を封じた包帯は、あまりにも痛々しくレイの目には映った

結局、佑はライブに参加しなかった。人間をはるかに超越した回復能力を備え、1日たらずで全快したレイとは異なり、装甲服を纏っても結局は人間にしか過ぎない佑は、この1週間ともに動くことすらままならなかった。

病院で治療を受け、家に戻ってからはレイと悠の2人で看病をし、2、3日前に何とか日常生活を送れるまでに回復はしたものの、左手の傷は深く、舞台に立ち、ギターを掻き鳴らすことは現実的に不可能だった。

レイは悠の笑顔と同じくらい、佑の笑顔が好きだった。彼の表情から底抜けに明るい色が消えて久しい。特に最近の佑は、腕のけがを負ったこともあるだろうが、目に見えて元気がない。装甲服を纏い、茨の道に足を踏み出して以降、佑に纏わりつく影は色濃さを増すばかりだった。

佑は“オウガ”と戦いに行った先々であつたことに対し、一向に口を閉ざし続けている。なぜ、どこで、どうやって彼は怪我を負ったのか。戦いの最中に何を聞き、何を見て、何が彼の身に降りかかったのか。その全てが謎に包まれていた。

彼が沈黙を守り続ける理由は、そこにわだかまりがあるからだ。佑の心が沈んでいるのは、ギターが弾けないということ以上に、口を噤んだその場所にこそ本当の原因があるのではないかとレイは睨ん

でいた。

窓の外に視線を戻す佑の後姿を見つめながら、レイは切ない思いに駆られる。佑が少しでも元気になるように、その影を少しでも払うために、自分は何ができるだろうか。いくら思い悩もうとも、いいアイデアはまったく浮かんではこない。

ため息を零し、ようやく皮を剥き終えたオレンジを口に運んだ。一口サイズに切り取ったそれを奥歯ですり潰す。果肉が口の中で弾け、酸っぱい味が舌の上に広がった。

鎧の話 32

ノートパソコンを起動し、寝ている間に起こったニュースを確認したが、7月の初めより世間を騒がせている連続女性猟奇殺人事件の捜査は、あれから進展していないようだった。

冷凍保存された11の死体を拓也と共に発見したあの洋館は、いまだ警察の手が入っている。S I N エージェンシーの事件の時でも実感したが、警察はこういった非現実的な要素の介在する事件にはどうも弱いような気がしている。

捜査の進展はなかったが、同時に怪人が新たな行動を起こした様子もなかった。マスカレイダーズやあきらたちが戦ったらしき跡もない。そのことに安堵する一方でなぜここにきてぴたりと非現実の猛威が止んだのか、不穏なものも感じた。

1週間前、直也は怪人たちの創造主であり、殺人事件の犯人でもある男と遭遇したが、あの男は自分の欲望を簡単に曲げるような人物には見えなかった。今が台風の前の静けさなのだと考えると、それだけでゾッとする。あの男が一体何を企んでいるのか、直也には予想さえつかない。

だからこそ、柳川から送られてきた広告が直也の興味と期待を誘った。あの鳥のマークは間違いなく、怪人と通じているだろうと思

う。咲のこととは少し遠ざかるかもしれないが、S I N エージェンシーの事件と同じくらい、あの男が起こしている殺人事件にも直也は大きなウェイトを置いていたので、柳川の話に収穫はあるだろうと判断した。

柳川と待ち合わせをした喫茶店は当然のことながら、以前に訪れた時とまったく同じ佇まいで直也を迎えてくれた。茶色を基調としたシックな装いの外観で、こぢんまりとしているがなかなかおしゃれな店だった。チェーン店ではなく、知る人ぞ知るといふ類の個人経営店で、密談を交わすにはもってこいの場所だった。

直也は店のドアの脇にバイクを停めると、ヘルメットを取り去り、脇に抱えた。ライもまた座席から降りて、頭をヘルメットから抜く。その頬はわずかに紅潮しており、額に髪がびつたりと張り付いていた。

「それにしても、あつちいなー。汗びつしよりだよ。髪ぼさぼさ！」
「もう8月も終わるんだから、もう少し涼しくなるといいんだけどな。ま、明日から雨だっていうし、少しは楽になるだろ」

「でもすげえよなあ。喫茶店でおまわりと待ち合わせだなんて。おっさんまるで探偵みたいだな」

「みたいじゃなくて、これでも一応本職だ」

「おいおい、おっさん。ニートは職業じゃないだろ」

「誰が無職だって言った！俺は探偵だって言ってるんだよ！」

声を荒らげ、それからふうと深く息を吐きだしながら、直也は手を庇がわりにして空を見上げた。抜けるような青空の中で、太陽が猛威を振るっている。もう少し手加減してくれと、額に浮いた汗を拭いながら悪態を吐く。病み上がりの体にこの暑さは響いた。

柳川が何の意図をもってあのリーフレットを直也に託したのかは検討がつかなかった。一体どこで手に入れたものなのだろうとメッセンジャーバッグの中に入れた封筒に意識を向けながら、不思議に思う。あの紙面に描かれていたのは間違いなく、怪人を生み出す権化、黒い鳥と呼ばれる物体の姿だった。

柳川は3年前の事件に関することで連絡をしてきたのだろうと半ば確信に近い思いで考えていたが、あのリーフレットを見た後では、その確信も揺らいでいる。もしかや柳川は一連の“怪人”絡みの事件について、情報を手に入れた可能性もあった。

病み上がりのせいかあまり頭が働かない。直也はため息をついた。どうせ柳川にあつて話せば疑問は氷解するのだ。強い陽射しを浴びながらこんなところで突っ立っていても、何の得もないことに気が付き、直也は顔をあげ、喫茶店に向けてよろよろと足を進めた。

「おい、おっさん早く来いよ！ 中は涼しいよ！」

茹で蛸になった気分でアスファルトに立ち昇る陽炎と一緒によるめいていると、ライが喫茶店のドアを少し開けて直也に呼びかけているのが見えた。直也はぼんやりと返事をし、ふらふらと喫茶店に近づいて行つたが、店の前まで来たところで違和感を覚えた。ハツとし、腕を伸ばしてライの手首を力強く掴む。

「いや、待て。なに普通にくつろぐうとしてんだ。お前は外にいろよ。そういう約束だろうが。プライバシーのプロはどこにいった」「だってあっちいじゃん。暑さの前ではプロも休業だよ。大丈夫。少しエアコン浴びたら出ていくからさ。ちょっとだけ、な？」

ライは肩をすくめ、親指と人差し指でコの字を作り、「ちよつと」を表現する。暑さと体調不良のせいで声を荒らげる気力も沸かず、直也は落胆した。

「分かったよ。だけど話が始まつたら出て行けよ。すぐ近くに本屋があるから、涼むならそこでやつてろ」

「さっすが、母さんの元彼氏！ 話が分かるなあ。じゃあさっさと中入ろうぜ！」

用件のある直也よりも先に、ライはドアの間に体を滑り込ませ、店内に入っていく。納得のいかないものを覚えながら、直也も後を続いた。

前回来た時と同様に、店内は薄暗く、そして閑散としていた。ライの言う通り、クーラーで程良く冷やされた店内は居心地がいい。

扇風機のモーター音が低く鳴っている。聴覚が捉えるのは店内に流れる軽やかなジャズだ。店の壁は戸棚と一体化しており、そこに外国の酒瓶が整然と並べられていた。

直也は入口の近くで立ち止まり、ざっと狭い店内を見渡す。しかしそこに柳川の姿はなかった。直也は左腕に目を落とし、それからそこに腕時計をはめていなかったことに気付く。あきらとお揃いで買い、ついこの間まで左手首に巻いていたそれは、今や自宅の机の奥深くに沈んでいた。

「おい、ライ。今何時だよ」

「え？ うーんと、1時35分だけど」

「約束の時間は過ぎてる、よな……」

怪訝に思い、直也は改めて店内に視線を巡らす。白々しく店内を過る音楽。温度を失ったコーヒーの香り。淡々と冷えた空気。直也たちの入店を知らせるベルの音が、虚しく空気の上を滑っていく。カウンターの方を見やる。しかしそこにあの無愛想な店主の姿はなかった。柳川ばかりでなく、店内には誰1人として客がいない。店内は無人だった。

「おい、いらっしやいませーとかないのかよ。礼儀の知らない店だなー。おっさん怒ってくれよ」

「店もお前にだけは言われたくないだろうな」

ライは騒がしく店内を奥へ奥へと進んでいく。直也は入口付近に立ち、内装を素早く観察した。

元よりあまり繁盛しておらず、常連客だけで持っているような店だった。今はあまり客の来る時間帯ではなく、だから店主は奥に引っ込んでこっそりと私用を済ませているのかもしれない。そこにちょうど直也たちが来店した。そう考えるのが、おそらく妥当だろう。

だが、直也の探偵としての嗅覚はどこかこの状況に不穏なものを捉えていた。どこか平穏な考えに帰結させるのには違和感がある。店内を進み、そしてテーブルの上に目を向けたとき、直也はその違和感の正体を知った。

テーブルの上に置かれたコーヒークップから湯気が立ち昇っていた。それも1つではない。隣のテーブルに1つ。背後のテーブルに2つ。湯気の濃さや入っている飲み物の量や種類こそ異なるものの、そのどれもが明らかに飲みかけであり、そこには人の体温の残滓のようなものが残されているようだった。

何かがおかしい、と思った。

1つならトイレのために席を立ったのだろうかと考える事ができるが、その数が複数となると、異様な状況としか思えなかった。この店で何かが起きている。尋常ではない何かが。暗く、重く、深沈とした、何か。それはこの昼下がりの住宅街で、けしてあつてはならぬことのような気がした。

「おっさん！」

ライが上擦った声をあげた。直也を振り返るその表情は、先ほどの明朗としたものから一転して、恐怖に歪んでいるように見える。彼女の様子にただならぬものを感じ、直也は店の奥に立つライのものと駆け付けた。

「どうした！」

直也の発したその声は、宙に弾けて溶けた。手から力が抜け、指をすり抜けたヘルメットが音を立てて床に落ちる。

直也は瞠目し、そして、目の前の光景をまず疑った。そして徐々にその意識が、視線が、床に横たわる大柄な男の存在に引き寄せられていく。

それは改めて確認するまでもなく、直也が待ち合わせをしていた相手、柳川の変わり果てた姿だった。

「柳川さん！」

柳川は手足を投げだした状態で、仰向けに倒れていた。目は見開かれたまま、口もぽかんと空洞を形作っており、唇の端から涎が垂れている。直也は屈みこむと、名前を呼び掛けながらその頬を叩いた。だが、柳川から反応が返ってくることはなかった。そのただひたすらに空虚な目は、じっと天井を見つめていた。直也は手の中が

店に入る前とは別の種類の汗で湿っていくのを感じた。

直也は柳川の鼻と口を手で覆った。掌はじつとりとした汗に塗れている。そこに風の当たる感触がない事を確認すると、直也の背中に寒気が走った。

「息をしてない……」

小声で呟くと、縋るように柳川の手首を掴んだ。親指で脈の場所を探り当てようとするが、意に反して、その指先に鼓動が跳ね返ってくることはなかった。さらに柳川の胸元をはだけさせ、そこに耳を当ててみることもしたが、結果は変わらなかった。

頭から一斉に血が引いていく。頬がひやりと冷たくなる。直也は信じられない思いで、柳川の顔を見た。彼は死んでいた。先ほどと比べると、彼の頬から弾力が失せ、冷たく凝っていつているような気がする。

柳川の体を簡単に検めたが、胸に青い痣がある以外に目立った外傷は見受けられなかった。

直也は彼の傍らに屈みこんだまま、しばらく動けなかった。ただ、あらゆる疑問が際限なく、頭の中で渦巻いていた。

ふと、直也は柳川の履くスラックスのポケットに目をやった。そこがひどく乱れているのが気になった。まるで何かを慌ててポケットの中から引つ張り出したかのように、裏返っている。中の白い布が飛び出していた。

だが、一体何を取り出したのだろうと考え、そして柳川の強く握られた右の拳に目が行き着いた。まだ死後硬直が発生するまで時間が経っていないようだったのが幸いだった。直也は心の中で柳川に謝りながら、2本の指で彼の拳を無理やり押し開いた。

緩んだ拳のすき間から、くしゃくしゃに丸まった小さな紙が転がり出てきた。直也は眉根を寄せ、それを拾い上げる。

「お、おっさん……」

震え、今にも砕けてなくなってしまうそうなほどにか細い声が届いた。直也は慌ててその紙を自分のポケットに入れると、それから

振り返った。

直也の背後でライが立ち尽くし、その身を震わせていた。直也を見る目も弱弱しく、その瞳は救済を請うような切迫さに満ちている。

「お前……」

「おっさん、一体、どうなってるんだよ。その人、まさか」

その普段は勝気な少女がふとみせた、恐怖に塗れた顔を直也はしばし見つめてから立ち上がると、彼女の肩を正面から掴んだ。早くこの場からライを逃がさなければ、と本能が命じている。この店内には、よくないものが蔓延している。いつまでもこんなところにいるなら、直也はライまで魂を引かれてしまう。そんな発想が頭を過った。

「ライ、落ち着け。とりあえずここから出る。それで、警察に電話するんだ。そのへんの人に助けを求めてもいい。いいか、分かったか？」

「この人、死んでるのか？ だって、おまわりじゃないの？ この町の、平和を、守ってくれてるんだろ？」

「落ち着け！ いいか、この場ではお前だけが頼りなんだ。早く行け！」

声を荒らげる直也の前で、ライの目が再び見開かれた。直也は振り返り、自分の背後に注がれたライの視線の先を追う。そして息を止めた。首をよじった姿勢のまま、硬直する。

直也の背中側には4人掛けのテーブルが据えてある。その陰から人間の足が伸びていた。それも2人分。1人はスカート、もう1人はジーンズを履いている。

直也は慌てて踵を返すと、身を乗り出してカウンターの内側を覗き込んだ。すると直也の予想通り、そこにはこの店のマスターが仰向けで倒れていた。確認をとるまでもなく、死んでいることが分かった。直也は朦朧としながら、カウンターから後ずさる。

まるで死体の巣窟だ、と直也は呆然と店内を眺め、思う。今、自分の身に起きている事態を頭の中で整理しようとすると、目眩がし

た。先ほどまで自分は確かに日常の中にいたはずなのに、いつから悪夢に足を踏み入れてしまったのか。いくら悩みを重ねようとも答えは出なかった。

直也はこの凄惨たる光景に戸惑い、動揺に支配されていたが、それでもライをここから逃さなくてはという気持ちだけは先ほどよりもさらに強く働いていた。闇は光によって剥がされるが、その逆もまたあり得る。光が闇によって塗りつぶされてしまうほうが、むしろ、容易であるような気がした。

自分を深い暗がりから救ってくれたこの光を失ってはなるものか。怯え、なかなか店から出る踏み切りのつかぬ様子のライの背中を、直也はドアに向けて強く押した。ライに乱暴だと罵られ、力尽くだと叱られようと、彼女を失うよりははるかにマシだった。早く行け、と叫ぶ直也を、ライはゆるゆると振り返る。次の瞬間、彼女は大声をあげた。

「おっさん！」

全身でぶつかられ、ライによって直也の体は横に押しやられる。風に傾ぐ細木のようによるめき、椅子に腰をぶつける直也の肩にちりつと熱が過ぎり、その部分のシャツが引き裂かれた。焦げを伴って宙に枯葉のように散る衣類の残骸を目にしながら、直也は咄嗟に背後を窺う。そこに半袖で黒のパーカーを着た小柄な少女が立っており、直也を見つめていた。

一体いつからそこにいたのか、直也には判断がつかなかった。つい数秒前までは人の気配など微塵も感じられなかった。その少女は何の前触れもなく、あまりに突然に、当たり前のように、直也たちの背後に出現していた。

少女の顔は深く被ったフードによって隠され、その顔立ちを窺い知ることができない。ただ、薄い唇と白皙の頬だけが外気に晒されている。少女が首から提げた茶色の紐には、白い百合の花が通しており、それが胸元で小さく揺れている。

直也は少女と対峙したその瞬間、この少女に対してデジャブのよう

なものを感じた。この人物に会ったことがないのは確かなはずなのに、どこか記憶の奥底で見覚えがある。自分の中に過ぎるその影は、直也の記憶に精細を施してはくれない。

「まったく、運のない奴らですー」

少女はその覇気のない唇に笑みを宿した。それは対峙する者の精神を炙るような、悪意で形作られた笑みだった。その瞬間、直也はこの少女が人間でないことを察した。

直也が言葉を発し、または何らかの行動を起こす、その前に少女の姿は変容を始めた。少女の人間としての輪郭がうつすらと空気に溶けていき、代わりに、その内側からおどろおどろしいシルエツトが浮き出てくる。頭の前からつまさきまで、撫でまわすような速度で少女の体を食らい尽くしたその影は両足を床に着け、椅子の背もたれに寄りかかり、確かな実体をもってこの世界に顕現した。

胸部にペンギンの絵が装飾された怪人だ。顔には深紅の単眼が光り、黄金色をした金属がまるで包帯のように巻き付いている。

「怪人……」

直也は目の前の異形を強く睨む。

体の右半身は肉食の獣のような、左半身は牙を持ち、血を啜る魚類のようなイメージをそれぞれ顕著に表している。どちらも鋭角的なデザインが下地にあり、そのため、ひどく凶暴な印象を全体像としていた。直也はこのタイプの怪人と何度か遭遇したことがある。人の姿を持ち、死体となる前の生前の記憶を色濃く宿す、あらゆる意味で厄介な怪人だ。直也はこれまでナインとグリフィンという2体の怪人に会ったことがあった。

怪人は左手で手近のテーブルに触れた。異変はすぐに視認できる形で現れた。もうもうと白煙が沸き起こり、水滴が次第に浮き始めると、次第にテーブルは軋むような音をあげながら凍結されていった。凍る。あらゆる物質がその動きを止め、沈黙を強制されていく。

怪人の左手から広がった凍結の波はテーブルを侵し終わると、さらにテーブルの足から床に下り、徐々に板張りの床を浸食していった。

それは徐々に直也の元にも近づいてくる。目視できる速度で、まるでドミノ倒しのように目の前のあらゆる物が凍り付いていく様は、現実から明らかに浮いていて、どこか愉快でもあった。

氷点下を易々と下回る温度が、店内に漂う熱気を舐め尽くしていく。直也は歯を鳴らして凍えた。白い煙が怪人の体より生み出され、店の天井や電灯をも有無をいわず凍りつかせていった。

直也は足先に迫ってくる氷結の波を認め、後ろに下がった。だが視界の端に青白い光が灯るのに気づき、すぐさま顔をあげる。すると青白い閃光に包まれた怪人の右の掌が、直也を迎えていた。

空気が破裂した。怪人の手から閃光が放たれ、直也と怪人との間にある空間を稲妻が切り裂いた。直也は反射的に横に転がり、その攻撃を回避する。ライフル銃が発砲されたかのような爆音が宙を轟き、続いて爆発が床を破片とともに打ち抜いた。

つい数刻前まで自分のいた場所に巨大な焦げ穴が空き、そこから黒い煙が絶えず吐き出されている様を見やると、直也は自分の身を案じるよりも先にライの姿を探した。

ライは床に倒れ、呻いていた。

先ほどの衝撃で吹き飛ばされたのか、横たわったまま苦悶に顔を歪めている。その膝は擦りむけ、血が滴り落ちている。再び怪人の掌に青白い光が灯った。直也は頭に血が昇るのを感じ、気づけば姿勢を正すのもおざなりに、ライのもとに飛び込んでいた。

「ライ！」

直也の悲痛の叫びをかき消すように、無情な爆音が空気を劈いた。直也はライの体をかき抱き、しかし、そのまま爆風に吞まれて壁に背中を叩きつけられた。肺が押し潰され、直也は血を吐くような痛みを覚える。

あまりの衝撃に直也の手からライは離れ、彼女自身もまた椅子を巻き込んで床を跳ねた。朦朧とする意識の中で、それでも直也は必死にライの姿を目で追う。無意識のうちに腕を伸ばし、彼女のもとに這って行こうとしている。

ここで彼女の存在を取り零したら、もう二度とその体温が還って
ることはないだろうという気がした。3年という月日を越えてよう
やく、咲の魂を知る人に出会うことができたのだ。こんなところで
彼女を失うわけにはいかなかった。

だが、満身創痍の体は昂ぶる意識に反して言うことを聞いてはくれ
ず、空回るばかりで、そうしてもがいているうちに直也の体に異形
の影が重なった。

「まずは、お前のほうから始末してやるですー」

怪人は左手を直也に向けて突き出した。その掌から冷気が白い霞
となって噴出される。直也は重たい体を揺さぶるように、咄嗟に身
を起こすと、前方に飛び込むようにして冷気をかわした。凍える空
気は床や壁を一瞬で凍結させ、さらに執拗に直也の足に絡みついて
きた。履いているスニーカーの踵に霞が触れ、それは足首に、また
はつまさきに向けてさらに浸食しようとしてくる。

直也は遮二無二足を動かし、スニーカーを力任せに脱ぎ捨てた。
体まで凍結が及ぶことはなかったが、切り捨てられ、宙を舞うスニ
ーカーは床に着地をした時には、まるで冷凍庫に保存した野菜のよ
うに凍りついていた。

「このっ……！」

直也は立ち上がろうとするが、背中に強い衝撃を受け、そのまま
腹を強く床に押し付けられた。胃を圧迫され、酸っぱいものが喉元
まで昇ってくる。

首を振るまでもなく、怪人に背を踏みつけられたのだと分かった。
すかさずポケットの中のプレートに手を伸ばそうとするが間に合わ
ず、その手首ももう一方の足で踏みにじられる。骨をへし折られた
かのような激痛が走り、直也はたまらず絶叫した。

「凍え死ぬのと、焼け死ぬのと、どちらがいいですかー？」

その行為自体を愉しむかのように直也の背中につま先を埋め込み
ながら、怪人は両手をかざし、おどけた。右手は電撃を帯びて青白
く輝き、左手は噴きだした冷気で白く包まれていた。どちらにせよ、

まともに浴びれば命はない。しかし、体の自由が利かず、そして逃れるための手段を持たぬ直也は、仰向けの姿勢のまま顔を引き攣らせて、楽しそうに両手を近づけたり、遠ざけたりしている怪人を視界の端に捉えるほかない。

そのうち、怪人は攻撃を焦らすのにも飽きたらしく、直也の背中に殊更体重をかけると、一気に両腕で掴みかかりに迫った。

「両方お見舞いしてやるですー」

「止める！」

乱雑と転がった椅子や机を跳ね飛ばしてライは駆けると、そのまま床を踏み切り、怪人の体にドロップキックを喰らわした。

だが怪人といえども、外見上はただの人間の少女と変わらないライの蹴りが通じるはずもなく、ペンギンの怪人の足が直也の体から外れることさえなかった。怪人は首を振ると、ライをじっと見つめた。

「この野郎！ おっさんからどきやがれ！」

威勢よく怒鳴り散らし、ライはさらに怪人を殴りつける。くぐもった音が静寂の室内に反響するが、怪人は体に這う蟻でも払うかのような様子で、殴りつけられた箇所を掌で撫でるだけだった

さらに拳を振り上げるライを怪人は手の甲を用いて軽くはね飛ばすと、直也の体を踏みつけていた足をどけ、体を完全にライの方に向けた。

その殺意の権化とも呼ぶべき荒々しい体躯をもつ怪人に見つめられ、ライは慄く。

直也は視界に飛び込んできたその光景にまず、目を見開いた。心臓が凍り、ざわめきが血流に乗って全身の肌をむらなく粟立たせる。

その直也を傷つけた右腕を胸の高さまで持ち上げ、その掌をライ目にかけてゆらりと突き出そうとする。

「ライ！」

床に爪を立て、焦燥感に乗っ取られるがままに直也は上半身を起こす。自分にこの後起こるであろう事態を予測してか、ライは怯え

た目で怪人を見つめている。直也の体はこの窮地にも関わらず、思い通りに動いてはくれなかった。立ち上がるうとも足がもつれ、内臓が軋むように痛み、それ以上の動きを封じてくる。

だが、結果的には怪人の掌から電撃が迸ることも、その手がライの首をねじ切ることもなかった。

代わりに怪人は「なるほどー」と素っ頓狂な声をあげた。「妹たちには聞いていましたが、こんなところで会うなんて、驚きですー」とさらに感嘆の声をあげる。それから構えを解き、それから食い入るようにその単眼でライの全身を嘗め回すように見つめた。

呆氣にとられる直也とライの前で怪人の体は萎み始めた。先ほど少女の姿から変質したのと全く逆の工程をたどって、そのシルエツトは人間のものに成り代わっていく。

そうして少女の姿に戻った怪人は、表情を隠していたフードを片手で取り去った。そうして少女自身が自ら明かしたその顔形を前に、直也は息を止める。ライが後ずさりながらひつ、と声を漏らした。

怪人から変貌を果たした少女の相好は、1つの狂いもなく、だが狂っていないければおかしいほどに正確だった。

少女は——ライと、まったく同じ顔をしていた。

目も鼻も口も同じ形で、その全容はまるで鏡映しのようにそっくりだった。異なる点といえばライの髪が燃えるような金であるのに対し、少女は艶のある黒髪であることくらいだった。そして意識して聴いてみれば、その声も声質から声調から、全てがライと一致した。この少女と出会った時に感じていたデジャブはこれだったのかと、直也は今更ながらに気付いた。

「馬鹿な……」

驚愕に声が裏返る。体を硬直させたまま、ライと少女とを思わず見比べてしまう。

2人の姿は何度見ても、まったくの写し身だった。見れば見るほど違いがない。直也はこのあまりに現実離れた光景を前に、熱に浮かされていた時と同じように、自分の実体が遠ざかっていくような

感覚にとりこまれていた。

サクリファイス 1

橋の欄干にもたれかかり、彼女は虚ろな目で恋人のいない世界を眺めていた。

彼女がこの場所に座り込んでから、すでに3日が経過していた。初日こそ下心をぶらさげながら声をかけてくる浮ついた男たちや、同情をあげ広げて近づいてくる人々の姿があつたが、今ではそれもない。通りがかかる人々は死んだように俯く彼女のことを奇異の目で見つめた。

肌は荒れ、髪は乱れ、目は隈で窪み、唇は割れ、全身から鼻を突くような臭いを生んでいたが、彼女は全く気に掛けなかった。炎天下の中、水一滴さえも口に含んでいない。飢えも渴きもあつたが、心の軋みの前ではその苦痛も微々たるものだった。

以前、自分で手首を切り、いまはようやくかさぶたになった跡が無性に痒かった。気がつけば傷口を爪で搔つており、いまやかさぶたは完全に剥がれ、彼女の手首からは血が滴り落ちている。止まってもすぐに自分で搔つてしまったため、この3日間、流血が絶えなかった。

およそ1週間前、彼女の恋人はいつも通りの快活な笑顔を残し、彼女の前から去っていった。お気に入りのバンドナを頭に巻き、彼女に挨拶を言い放って、後ろ手にドアを閉める。実は彼女はその朝から、嫌な予感を覚えてはいた。今日離れたら、もう二度とその姿を見ることは叶わないような、そんな気はしていた。

だが、彼を引きとめることはできなかった。一緒に連れて行つて欲しいとも言つたが、「大事な仲間とのパーティーなんだ」と柔らかかに断られた。

そして彼女の予感は的中した。彼は帰ってこなかった。きっと、ひ

よつこりと帰ってくるに違いない、と彼の家で待っていたが、日に日に絶望は積もるばかりだった。

4日経ち、彼女は恋人が死んだことを確信した。彼はもうこの世にいない。あの笑顔をもう二度と見ることはできない、あの大きな手で頭を撫でてもらうこともできないのだと理解すると、そこで初めて涙が出た。そして彼の痕跡の残る家に行かせることが居たたまれなくなり、また彼をみすみす危険な場所に行かせてしまった自分が許せず、彼女は家を飛び出した。

彼女には家族がいなかった。家を宛てにできるような友人もない。恋人は彼女の全てだった。彼女の存在を一切の見返りなく、認めてくれたたった1人の存在だった。だから彼のいないこの世界に彼女の居場所があるはずはなく、彼女は自分の落ちゆく場所も見失った。いつしか彼女の中で昼夜は混ざり、そのうち時間の概念すらも消失した。ひたすらに泣き叫び、気を失うようにして眠り、夢と区別のつかないおぼつかめ意識を時に委ねる。彼女は確実に、ゆつくりと死に近づいていた。そして彼女自身、それを望んでいた。この世に彼女のいていい場所など、少しもなかった。

もう少しで、彼の待つ世界にいくことができる。困憊した意識の中でそれを考えると、彼女は幸福だとさえ思った。あとは時に身を任せればいい。そうなればこの痛みからも、悲しみからも解放され、自由になれる。

濁った彼女の視界を、近づいてくる足音が明瞭に灯した。沈んだ意識を現実に取り戻され、彼女は弾かれるように顔をあげた。なぜかその足音が恋人のもののように聞こえた。彼女は恋人を愛するがあまり、その全てを知っていると自負していた。理屈ではなく、本能的に体が彼の気配に反応してしまう。そんな自分を、彼女は好きでたまらない。彼女は彼がいなければ生きていけない自分に酔い、彼に支配されていることに快感を見出していた。

だから、彼に違いない、と顔をあげるまでの間、彼女は信じてやまなかった。彼が帰ってきたのだ、と淡い期待に取りつかれた。

「……秋護！」

安堵が滲み、彼女は恋人の名前を懇願に近い気持ちで叫ぶ。しかし仰いだ視線の先に恋人の姿があるはずもなく、そこには彼女の見知らぬ男性が立っていた。頭を白一色に染め、睫毛の長い、鼻筋の通った顔立ちの男だった。

その髪の色と真逆の色をした喪服を着こみ、背広の胸ポケットからは百合の造花が覗いている。首からはロケットを2つぶら下げている。陽光を背にした男はやつれた彼女の表情をじっと見下ろし、それから人の良い笑みを浮かべた。

「こんなところで、どうしたんです？　悲しい目をしている。美しい顔が台無しだ」

彼女は男の言葉を、表情を凍らせたまま、空虚な気分で聞いている。無念さが胸にこびりつくようで、まだ甘い期待を寄せていた自分自身に絶望し、そのせいで彼女の心はなおさら深く抉られていく。一層自分が憐れに思え、彼女は口をぽかんと開けたまま涙を流した。「突然申し訳ない。私の名前は後藤田といいます。あなたは春見、ゆきのさん、でよろしいですね？」

男の背後には青い縁の眼鏡をかけた女性が立っていた。彼女はアタシエケースを両手で持っていた。その頭にも、百合の造花が花飾りにされている。

ゆきのはまるでお湯に溶かれた氷のように、じわじわと表情を変化させる。今だ輪郭のはつきりしない頭の隅で、なぜこの男が自分の名前を知っているのかと不審に思った。やはりどこかで会ったことがあるのだろうか？と男の顔を凝視するが、やはり思い至らない。

首を傾げるゆきのの前で、後藤田は快活に笑った。

「安心していい、初体面です。しかしあなたの顔を見れば、どれだけ恋人のことを愛していたのか、よく分かります。心情お察しいたします。本当に辛かったでしょう。突然抛り所を失ってしまつて、いま、あなたは絶望の淵に立たされているのかと思うと、まことに不憫だ」

後藤田はゆきのの前に屈みこんだ。その体からは線香の匂いがした。彼はゆきのに顔を寄せ、内緒話をするかのように声を潜めた。

「……どうです、また彼に会いたくは、ありませんか？」

ゆきのは茫然と、この男のひどく整った顔立ちを眺めていた。会いたいに決まっている、と胸の中で叫んだ。もはや口は息を吸い、吐くだけの器官に落ちぶれていたので、声は出なかった。それでもゆきのは、現実感の伴わぬ頭で強く思った。また秋護と会いたい。そのためだったら、どんな罪でも犯すし、どんな罰でも受ける覚悟だった。秋護を救うことは、彼女にとって世界の秩序を取り戻すことと同義だった。

だが、それがありえないことなのは承知している。

ゆきのの心中に滾るものを読みとったのか、後藤田は心の底から嬉しそうな——しかし、ひどく歪んだ笑顔をみせた。

「ありえますよ。ありえないことなど、この世にはない」

後藤田の酷く落ち着いた声に、ゆきのは少しだけ、自分が動揺するのを感じた。しかしずっと疼いていた手首の痒みが、男の言葉で急に止んだのは妙だった。ゆきのは男の優しげな笑みに引きこまれた。

「奇跡は起こります。願いは叶います。そのために、我々はあなたのもとに参りました。あなたを、この地獄のような世界から救うために」

後藤田の両目の虹彩が金に変わる。驚くための気力さえないゆきのは、その男の変貌を当然のように見つめている。元より夢心地だった。ああ、こういうこともあるんだなと、それだけを思った。

「リリー・ボーン」にようこそ」

後藤田が掌をゆきのの顔にかざす。そこからまるで間近でカメラのフラッシュを焚かれたかのような、強烈な光が発せられた。そしてゆきのは白々と照る光を目に捉えながら、落ちていくような目眩の中で気を失っていった。

3話「残された光」

魔物の話 42

悠が今日から通い始めるといふバイオリン教室は、駅近くの雑居ビルの3階にあった。

1階は不動産を経営しており、2階は携帯電話ショップになっている。3階の窓にはポップ調の文字で、『バイオリン教室 生徒受付中』との貼り紙があった。その真上の階は空室になっているようだ。窓にはテナント募集と書かれた貼り紙が見える。

「悠、本当にここまで大丈夫？」

ビルを昇るためのエスカレーターの前でレイは尋ねた。悠はエレベーターの扉を背後に振り返ると、にっこりと微笑んだ。

「うん。大丈夫。いつまでもレイちゃんやたあくんに頼ってられないもん。ここから先は、1人で行きたい。行ってみたいの。私だつてもう、15歳だもん。自分だけでこの一步は踏み出したいの」階数表示を知らせるボタンから光が失せ、エレベーターの扉が開かれる。レイは頬を緩め、そんな親友の言葉を頼もしく思った。

「悠がそうしたいなら……それが、一番いいよ」

レイの言葉に悠は可愛らしく頷いた。それからレイの隣に立つ佑とも視線を交わす。「悠、本当に大丈夫か？」と憂い顔を浮かべる兄の手を、悠は握りしめた。

「たあくん。今までありがとう。私、頑張ってくるね。今よりも強くなつて、帰ってくるから心配しないで」

今にも泣き出しそうな様子の佑を慰める悠に、レイはこれではどちらが年上なのか分からないな、と苦笑を漏らす。佑は唇をへの字に曲げて力強く頷いた。「頑張つてこいよ」と告げる声は、僅かに震えを孕んでいた。悠はうん、と明朗快活に体を揺らすと、佑から離れ、レイを見て恥ずかしそうに笑んだ。

「じゃあ、レイちゃん、たあくん。頑張ってくるからね！」

悠は並んで立つレイと佑に手を振ると、そのまま後ろ向きにエレベーターに乗り込んだ。その顔は最後まで満面の笑みに彩られていた。レイも笑って手を振る。まるで旅立つ者を見送るような気分だった。悠はここから新しい生活に踏み出していくのだ。寂しさは残るが、未来に向けて進んでいこうとする彼女の船出を今は心の底から祝おうと思った。

それから数秒と経たぬうちに、レイと佑の前でエレベーターは閉じた。しばらくその赤茶色の扉を見つめ、そこに感慨深さを覚えながらレイは佑のほうに顔を向けた。

「行っちゃいましたね。教室の雰囲気は合えばいいですけど……」

レイは途中で言葉を切った。見開いた目の先に、不安を全身に滲ませる佑の姿を認めたからだだった。彼は固く閉じたエレベーターの扉を見つめたまま、何やらぶつくさと呟いている。

「大丈夫かな悠。先生に怒られないかな。いい友達ができるのかな。いじめられたりしないかな。うまく演奏できるのかな。ちゃんとお話できるのかな。トイレに行きたいって自分から言えるのかな。ちゃんとトイレできるのかな。お腹空かせてやしないかな。心配だなあ、心配だなあ」

「とりあえず黙ってもらっていいですか。これ以上喋ったらはったおしますよ」

「だって心配じゃないか！　悠が一人でこんなところにくるなんて始めての経験なんだし」

「じゃあ、授業参観でもすればいいじゃないですか」

「しようと思ったさ。でもあそこ生徒が女性だらしくてさ、それ言い出したとき、すごい白い目で見られた。悠にも止めてって言われた」

「当たり前です。お兄さんはアホなんですか」

「でもさ、悠は長い間、病院で過ごしてたし、あんまり学校にも行けてないからさ、こういうたくさんの人と一緒にいる機会っていうのが普通の人より格段に少ないんだよ。社会の荒波に揉まれ慣れて

ないっていうかさ。ちょっと厳しくされただけで泣いちゃったり、落ち込んだりしたりするかもしれないじゃん。あの教室の中だってさ、どんな奴がいるか分からないわけだし。もしかしたら悠をいじめる奴がいるかもしれない。陰湿ないじめとか、暴力とか受けるかもしれない。そういうことを考えるとさ、俺はやっぱ心配なんだよ」

「えー」

おどおどと何だか忙しない佑を前に、レイはため息を零した。佑は妹のこととなると我を忘れてしまう。いつもは大らかな佇まいをみせる彼だが、そこに悠が関わると、過度の心配性へと変貌してしまふ。それは、悠の事を大切に思っていて、悠の事がそれほどまでに愛しているという何よりの証拠であり、微笑ましい光景ではあるのだけれど、レイはそんな佑のことが時々心配になる。

佑は必死になっている。妹を奪われやしないか、どこかに行ってしまうわないか、ひどく過敏になっている。それが動揺となつて表に出してしまう。不安を抱えた佑の表情は、とても真剣で、だからこそレイの胸を打つ。心に届いてしまう。このまま放つてはおけないという気にさせられてしまう。

悠は一度、病室で怪人に襲われたことがある。さらにその数年前には二条裕美によって、誘拐されそうになったこともあったらしい。そんなことが立て続けに起これば、警戒心が働くのも当然といえば当然だった。佑の不安を否定することはレイにはできない。だが、脅えているだけではどうにもならない。様々な恐怖を体に刻み込まれ、しかしそれでも屈することなく、乗り越えることができた今のレイだからこそ、彼を元気づけてやりたいと心から思った。

佑はエレベーターの前から動き出せない。その不安に震える横顔を見つめながら、レイは顎に手をやり、考えに考えを重ねる。

必死にどうするべきかを熟考し、様々な想像を膨らませ、最良の選択を求めたその末に。

レイは佑の脛を、つま先で蹴りあげた。

「せいやつ！」

「痛っ！」

何の前触れもなく打ちこまれた急所への一撃に、佑は屈みこんで静かに悶える。ゆっくりと顔を起こし、レイを見上げるその目には動揺と脅えがまざまざと滲んでいた。

レイは腕組をすると、佑が何か言葉を発するより前に口を開いた。「顔が固くなってますよ。いま悠が帰ってきて、お兄さんの顔をみたらどう思います？ きつと何があったんだって、不安になりますよ。お兄さんが怪我をして帰ってきたときだって、あんなにうるたえていたんですから。あんまり、悠を心配させちゃダメです」

佑は顔をしかめながら立ち上がった。レイの蹴った箇所が痛むのか、片足立ちでけんけんをしている。一体何が起こったのか分からない、というような面持ちの佑を正面に捉え、レイは微笑みを表情に宿した。

「不安を出さないで、っていうのは無理かもしれないですけど、やっぱりお兄さんがそういう顔を見ると、悠も困っちゃいますから。だから、笑って迎えましょうよ、ね？」

佑は目を見開いた。だがすぐにまた顔を俯かせる。その表情にうつすらと影が射す。レイが言っていることの意味は理解しているのだろう。しかし心まではそう簡単には伴わないらしい。

レイはまた佑の脛を蹴った。先ほどと逆の足を選んだのはせめてもの情けだ。佑は呻き声をあげて、再び地面に崩れ落ちた。

「次にそういう顔をしたら、また蹴りますから。お兄さんが笑うまで蹴ります。足の皮がはがれても、血飛沫があがろうとも、骨が折れようとも、止めませんから」

腰に手を据え、仁王立ちのポーズで佑を眼下に置く。佑は唇の片端を引き攣らせるようにしながら、レイを見上げる。やがてその口から笑みが漏れた。

「レイちゃんは、やっぱり恐ろしいな……敵わないよ」

「私のお父さんを誰だと思ってるんですか。悠なら大丈夫ですよ。」

ああ見えてしっかりしてるんですから。私たちがしなくちゃいけないのは悠が前に進めるように、未来に進めるように、それを邪魔する脅威から悠を守ることです」

レイは3階の窓越しに見た、あの背の高い女性の姿を思い出す。おそらくあの女性が先生なのだろうとレイは直感で判断した。大らかで、優しそうな人だった。あの人ならば悠が歩もうとする第一歩を祝福してくれるだろうと思った。

「先生も良い人そうだったんでしょう？ だからお兄さんも悠がこの教室に行くことを許したんじゃないですか？ だったらあとはどう転ぶかは悠の頑張り次第ですよ。私たちはそれを信じて待ちましようよ」

佑は立ち上がり、それから決然とした様子で顔をあげた。晴れ晴れと、まではいかないものの、その表情からは翳りが少し薄れていることに気付き、レイは心底安堵した。思わず頬が緩む。佑はレイを見て、1つ頷いた。

「……そうだな。うん。そうかも。一番悠を不安にさせてたのは、俺だったのかもな」

「蹴ったことは謝ります。でも、そんなに気負わないでください。お兄さんは1人じゃないですから。さつきも言ったでしょう？ 悠を好きな気持ちなら、私はお兄さんにも負けません。私がいいます。私も全力で悠を守りますから」

レイが自分の胸を叩き、力強く言い放つと、そこでようやく佑は破顔した。憑き物が落ちたような、それは清々しい、まさにレイが待っていた表情だった。

「ありがとう、レイちゃん。なんか、すげえ楽になった。そう言ってもらえて、助かったよ」

「感謝なんて別に。私はお兄さんを蹴飛ばしただけです。悠が頑張ってるんです。私たちも、頑張りましょう」

そうだな、と佑は脛をさすりながら言った。言って、エレベーターの固く閉ざされた扉を見つめた。エレベーターを乗り降りする人

の姿はいなかった。その扉はまるで自分は壁だとも言い張るかのよう沈黙を守り続けている。

レイはひんやりと冷たい壁によりかかり、陽に照らされた表通りの方を見やった。

目の前ではスクランブル交差点を渡ろうと、多くの人たちがこの暑さの中、信号待ちをしていた。太陽は高く、町中をむらなく焼いている。陽光に照らされた建物や人々の足元からは影が伸び、冷やかな空間を地面に切り出している。向かいにあるビルの窓が、光を浴びてきらきら輝いている。

斜向かいの信号機の上に、カラスが止まっている。辺りを窺うように首を巡らせ、足の下を間断なく通り過ぎる車の群れを、不思議そうに眺めている。

蒼穹に黒い羽をひらりと落とし、やがてカラスは飛び立っていった。まるでそのタイミングを計ったかのように、佑が口を開く。

「そういえば、レイちゃん」

「はい？」

レイは佑を見た。彼の拳動にはもはや狼狽の色は少しも見つからなかった。その頬を軽やかな風が撫でる。佑はレイの隣に立つと、同じように壁に寄りかかった。

「マスカレイダースからの連絡は、まだないの？」

レイの耳元に少しだけ近寄り、佑は小さな声で言った。レイは耳に伝わる佑の温かい呼吸に少しだけどきりとしながらも、冷静さを保って答えた。

「……私の耳には入ってこないですね」

マスカレイダースの名称は以前ならばこれほど頼りに感じるものはなかったが、今ではその名を聞くだけで嫌悪が先立った。佑もまた表情を曇らせている。

「お父さんのもとにもないって……そういうこと、だよな」

「まあ、そういうことですね」

「そっかー……いや、戻りたいとは思わないけどさ。いないと実際、

かなり難しいよな。戦力でも、情報っていう面でも」

「そうですね……」

マスカレイドーズに戻る気持ちは微塵もなかったが、それでも組織の後ろ盾を失ったことはレイたちにとってかなりの痛手だった。悠を守るうと一口に言っても1週間前に比べ、できることはかなり制限されている。それに状況はかなり逼迫してもいた。

「あれからマスカレイドーズが動いた話は俺も聞かない。怪人もな、だけどこれで終わったとは思えない。多分……あいつらはこれから、何かを仕掛けてくる」

「それは……同感です」

むしろレイは今の状況を不気味に感じていた。この束の間の平和が、どうしても台風の前静けさとしか思えない。レイの最高の怪人としての直感は嵐の時を明晰に捉えている。

「そういえばレイちゃん、前に言ってたよな」

風が届けてくれる悪意の匂いを嗅ぎ取ろうと、周囲に気配を張り巡らせていたレイに佑は言った。レイは視線だけを彼の方に移す。

佑は眩しいものでも前にしたかのようにわずかに目を細めた。

「怪人の気配を感じ取れる、生まれつきの力があるって」

「……ああ」

レイは動揺を無表情の内側に隠しながら、彼の心中を推し量ろうとする。

「言いましたけど」

マスカレイドーズ内での自分の立場を説明するために、レイは自分の力のことを曖昧に説明した。自分が怪人であるということを告白するだけの勇氣はなかったが、怪人の気配を嗅ぎとれるという点については白状しないことには事が進まなかった。少なくとも、生まれつき持っている力、という部分に嘘はない。

レイが明らかにした荒唐無稽な話を、佑は疑うわけでもなく、怪人との繋がりを予測して敵意を剥き出しにしてくるわけでもなく、額面通りに受け取ってくれた。それ以上の追及もなく、話をしてか

ら5日余りがたつものの、話題に昇ることすらこれまでなかった。

だから佑がその話を口にした時、ついに来たか、と思った。「怪人の気配を生まれつき感じ取れる人間」など、そんな都合のいい存在があるわけはない。少し考えれば分かることだ。

怪人の気配を——同族の匂いを嗅ぎとれる怪人、の存在のほうがまだ実在することに信憑性がある。次に佑のその薄い唇からどんな言葉が続くのか、レイは唾を呑みこみ、髪の手先を指先でいじりながら待った。気が気ではなく、自然に表情が強張ってしまう。

佑は自分の左手にはまった、いかにも安そうなプラスチック製の腕時計に目をやった。そしてぼつりと呟いた。

「2時間だ」

「はい？」

レイは首を傾げた。佑はレイの方を向くと、真剣な顔で続けた。

「悠のレッスンは終わるまでの時間だよ。ここは駅前で、今は昼間で、しかも教室にはたくさん生徒がいる。あの夜の病院とはわけが違うんだ」

「……何が言いたいんですか？」

佑の言葉の真意が見えず、レイは眉根を寄せる。佑は壁に対して斜めに立った。

「俺、ずっと考えてたんだよ。悠を狙って近づいてくる怪人を叩くことももちろん大事だけど、それだけじゃ足りないんじゃないかって。俺たちも、攻めなきゃいけないんじゃないかって」

「まあ、確かにそうですね」

レイは頷く。そこでようやく彼の言わんとすることに見当がついてきた。壁に寄りかかって会話を交わすレイと佑の前を、背広姿の男が通り過ぎていく。男は壁のボタンを押して扉の前に立ち、エレベーターが来るとそれに乗りこんでいった。その扉が完全に閉じるのを見届けてから、佑は口を開いた。

「やっぱり悠の側を離れるわけにはいかないからさ。今まではレイちゃんにそういうこと任せてばっかで、俺はできなかった。だけど

今なら、それができる。2時間だけなら俺も動くことができる」

佑の目は覚悟を決めた者のそれだった。たった2時間。だが2時間妹の側から離れるということが、彼にとってどれだけ心細く、恐ろしいことなのか、レイはその気持ちを酌んであげたかった。レイは佑のその強い眼差しに引き込まれる。しばらく見つめあったあとでレイは喉を鳴らし、こくと頷いた。

「レイちゃん、一緒に来て欲しいところがあるんだ。付き合ってくれない？」

レイは軽く首を傾げた。長い金髪が肩から滑り落ち、空を撫でた。佑は神妙な顔をしている。周囲には雑踏が広がっているのに、レイは彼と向き合うこの瞬間、まるで世界に2人だけ取り残されたような錯覚に陥った。

鎧の話 33

そのライとまったく同じ容姿をもった少女は一步前に足を踏み出すと、口元を柔和に緩めた。

「びつくりですー。本当に私と同じ顔をしていますー。まさに偶然の一致ですー」

さらに半歩、足を進め、ライとの距離を詰める。2人の間にはもはや2メートル弱のスペースしかない。同じ顔をした人間同士がこうして向かい合っているのを見ると、それだけで目眩がしそうだった。足元が崩れていくような錯覚を覚える。直也はしばらく虚脱しながら、そのあまりに現実離れた光景に目も意識も奪われていた。

「お前は、一体誰ですかー？」

首を僅かに傾げ、ライの顔で、ライが絶対に浮かべることはないであろう妖艶な笑みを浮かべて、少女は疑問を口にする。

「おかしいですー、それは鉈橋そらのものであるはずですー」

鉦橋そら。

少女の口から発せられたその人名は、直也の意識をこの場に取り戻させた。瞬間的に1週間前、旧鉦橋邸で入手した写真のことが脳裏を過ぎる。その家族写真に写っていた鉦橋そらという少女の顔は、ライとまったくの瓜二つだった。それを目にした時、直也は今感じているのと同じような深い動揺と恐怖を覚えたものだ。

なぜ今、この怪人がその少女の名前を口にするのか、直也には一瞬分からなかった。だが不意に旧鉦橋邸で会った怪人の創造主たる白衣の男の言葉を思い出し、すぐに得心に至る。

——あの人間は、グリフィンの生前の姿だ。生前の記憶も持っている。最近作り出したんだがね。どうだ、面白いだろう？

麦わら帽子を被った少女から姿を変容させた鷲型の怪人、グリフィンを指してあの男はそう講釈を垂れていた。怪人は人間の死体から生み出される。そして、この今目の前に立つ、怪人から変化した、ライそっくりの少女もまたその方式に則ってこの世に生を授けられたのだろう。

そこまで理解すれば、この少女の正体に対する結論を出すのはあまりに簡単なことだった。

「まさか、お前は……」

男の声を頭の中に反響させながら、少女の姿を見つめ、直也は身震いした。

ライは先ほどから、怯えた目で自分と同じ顔の造形をもつ少女を見つめている。少女はライに手を伸ばすと、その頬に優しく触れた。ライは首筋に氷でも押し当てられたかのように、びくりと体を震わせる。

その一方で少女は苦しげに顔を歪めた。痛みを訴えるように胸を押さえ、慌ててライの体を突き放す。後ろに転げ、尻餅をついたライの顔色も心なしに青い。少女は何か恐ろしいものを見るような目つきで、怯えるライを見下ろすと、それから取り成すように嗤った。

「ふふん。まあこの際、どうでもいいことですー」

唇を鋭く歪ませて、冷酷に、嗜虐的に、ライを見て微笑む。その瞳に薄く金色の光が灯るのを、直也は見逃さなかった。

「この場所に足を踏み込んだ、自分たちの不運を呪うですー」

「ライ！」

直也は腕の痛みを堪えながら、ポケットに手を突き入れ、中からプレートを取り出した。周囲を探るまでもなく、パツと目についた反射物——カウンター脇にかけられたアンティーク調の鏡に跳び付くと、その鏡面をプレートを持った腕で殴りつけた。

肩から振り落とすようにして固いプレートを打ち放ったので、鏡には甲高い呻きと共にヒビが入ったが、それを気にする余裕もない。

そして直也が認識するよりも早く、その亀裂の走った鏡より、複数の装甲片が飛びだしてきた。

怪人に向けて跳びかかる直也の後を、パーツたちも負けじと追いつがつてくる。それは数秒も経たぬうちに直也を追い越し、そして挟みうちをする形で、駆ける直也の体に次々と取りついていった。

やがて直也の体はあますことなく装甲によって包まれた。表情を鉄仮面で隠し、装甲で身を固め、関節や首もとを黒いスーツ状の素材で覆う。

そうして装甲服の戦士、オウガとなった直也は空中で刀身の折れた刀を腰だめより引き抜き、ライの前で中腰になっている不気味な少女へと躍りかかった。

「……ははぁ、これは驚きですー」

少女はオウガを認めると、再び怪人に姿を変えた。ペンギンの意匠を胸に掲げたその怪人はオウガの攻撃を横に跳んでかわすと、右手をかざし、その掌中より青白い電撃をオウガ目がけて撃ち放った。着地したオウガは振り向きざまに折れた刀を一降りし、電撃を空中で捉え、弾き飛ばした。爆ぜた電撃が細かな火花となり、空中に飛散する。続けざまに放たれた電撃も、さらに刀で振り払う。直也の手には痺れるような痛みが残った。

全快にほど遠い体はまるで鉛の鎧でも引きつれているかのようだ

つたが、感覚の方はかえって健康な時より研ぎ澄まされているように感じた。熱が余計な考えや感情をシャットダウンさせ、そのために本能が浮き彫りになっているせいかもしれない。

「まったく、マスカレイドーズが出てくるとは……面倒くさいことになったですー」

怪人は首を傾げて悪態を吐くと、今度は左手を前方にかざし、そこから冷気を放出した。オウガは横に転がって直撃を避けると、身を起こしながら前方に飛び込み、力任せに怪人に切りかかった。

だが、その少々勢い込み過ぎたオウガの攻撃は不発に終わった。怪人はオウガの太刀筋を片手でいとも容易く受け止めると、逆の手でオウガの首を掴み、そのまま頭上高く持ちあげた。

「このまま、絞め殺してやるですー」

人知を超越した指圧で動脈を圧迫され、呼吸が詰まる。怪人の手からの解放を求め、直也は必死にもがいた。しかし足をばたつかせ、怪人を蹴りやるも、その体はびくともしない。

そうしているうちに、オウガの首を絞める怪人の左手から冷気が放出され始めた。それは直也の息の根を止めるためのため押しに思えた。急激な冷却が血液の循環を阻害し、脳の動きを緩やかに凝らせていく。冷たさを感じるよりも前に、感覚が麻痺した。装甲を超えて冷気が素肌に浸透してくる。徐々に体が言うことを聞かなくなり、脱力感が神経を侵す。

それでもこの眠気に取り込まれるわけにはいかなかった。

直也は右手をがむしゃらに振るうと、その手に握る刀の柄で怪人の腹を二度三度と突いた。全身の神経を右手一本に集中させ、力任せに腕を突き出す。その遮二無二放った一撃が偶然急所を決ったのか、怪人は呼吸を詰まらせ、たまらずオウガから手を離れた。

直也は床に転がり、激しく咳き込んだあとで、大きく息を吸い込み、酸素を全身に行き渡らせる。首元の装甲が凍り付いてはいたものの、直接体に影響は残らなかったのが幸이었다。足をもつれさせながら何とか平衡感覚を探り、立ち上がる。顔をあげると、すで

に怪人は振り上げた右手の掌に青白い光を宿していた。

「か弱い少女の腹を殴るなんて、信じられないですー。ダメ男ですー。訴えてやるですー」

「うるせえよ。お前なんだろう？ 柳川さんたちを、マスターを、客を殺したのは。一体、何でこんなことを！」

「ごちゃごちゃうるせえですー。ただの1つとして、お前なんかに答える義理はねえですー」

直也が質問を終えるのを待つこともなく、怪人はその手に満ちた雷の奔流を放出した。

直也は舌を打つと再び感覚を研ぎ澄まし、反射的に刀で電撃を防ごうとする。だが青白い光は刀身に触れた瞬間、爆発的に膨れ上がり、直也の腕に食らいついた。

何度も攻撃を受け止めた手首はすでに限界を迎えていた。それこそ骨を割られたのではと思うほどの衝撃が腕一本に爆ぜ、握る力を失ったオウガの手から刀が抜けた。オウガの体も散り散りに舞う火花とともに吹き飛ばされ、入口のドア付近の壁に頭から突っ込んだ。

直也は黒い煙の立ち昇る腕の装甲を見やり、そこに疼く強い痛みに、仮面の下で顔をしかめる。

視線を彷徨わせるが、手の届く範囲に刀を見つけることはできなかった。おそらく宙を舞い、直也の手の届かないところに飛ばされていつてしまったのだろう。直也は唯一の武器を失ってしまったことに深い絶望を感じながらも、それでも左腕を床に付き、よろよると身を起こす。目前に怪人の異形が立ちはだかっていた。

「私の攻撃からは、逃げられないですー」

冷酷に言い放つ怪人の両手には青白い輝きと、白銀の煙霧がそれぞれ纏われている。オウガは弱々しく構えた。怪人は両手を振りかざし、襲いかかってくる。襲いくる怪人の攻撃を止めたのは、またしてもライの発した大声だった。

がつん、と鈍い音が宙に響き、続けて怪人の体が横によるめいた。その足元に何かが落下し、耳を覆うほどの巨大な音を発する。床に

ヒビを作り、影の上をごろりと転がったその円柱状の物体は改めて確認するまでもなく、どう見ても消火器だった。

「おっさん！」

驚き、竦む直也の下に、ぜえぜえと喉を震わせたライが駆け寄ってくる。怪人はカウンターによりかかり、頭を押さえて呻いていた。その悶絶する姿と、己は無関係とばかりに床に寝そべる消火器を交互に見やり、直也は遅れて事態に気付く。あれだけの重量のあるものをぶつけられたら、怪人であろうとひとたまりもないだろう。そしてそれをこの場でぶつけるような人間は直也のほかに、1人しかない。直也は自分の手に縋ってくる金髪の少女を見下ろし、オウガのマスクの下で苦笑いを浮かべた。

「ライ。この場合は、逃げるぞ！」

直也はライの手を強く握り、慌てて踵を返す。刀を失い、体調も万全ではない今の状況はあまりにも不利だった。直也1人ならばがむしやらに勝利の道を探ることもできるが、今はライがいる。あまり無謀な選択はできない。柳川らの死体を置き去りにし、怪人をこの町の中に放っておくことに躊躇いはあったが、それ以上にライを失いたくなかった。それにここでもし自分が死んだら誰がこの惨状を伝えるのか、という気持ちもあった。

「ふざけたことを、しやがって、です」

直也の言葉を聞きつけたのか、怪人はよろめきながら振り返り、顔をあげ、電撃を指先から放出してくる。しかし頭部に受けた衝撃のために狙いを定める余裕もないのか、その青白い光は不安定な軌道を宙に描く。直也は腹に据えたプレートを引き抜くと、自分の体からオウガの装甲を分離させた。

直也の体を大きく迂回した装甲のパーツたちは宙を舞うようにして移動し、電撃を遮ると、怪人の背後のアンティーク調の鏡に次々と飛び込み、去っていった。直也は防御を装甲たちに委ねるとライの手を引き、手を伸ばしてドアを押し開く。その向こうには陽光の下で煌めく、元通りの日常を抱えた世界があった。背後で迸る閃光

を置き去りにして直也は、矩形に切り取られたその景色へと駆け足で飛び込んでいった。

魔物の話 43

電車で揺られ、駅で降りて歩くこと15分。佑に連れて行かれるままにレイがたどり着いたその白い家は、住宅街の隅にひっそりと存在していた。

地理的にみれば、この家の所在は埼玉県にあたる。だが感覚としては東京の端っこという印象が強い。実際、ここから幾ばくか離れた場所に引かれている線路を超えればすぐに東京だった。レイの隣に立つ佑は携帯電話を開き、時間を確認している。2人で行動することが許された制限時間は、たったの2時間だ。考えながら行動する必要があった。

赤い屋根に白い外装。庭には天然の芝生が敷かれている。かつては色とりどりの花が咲き乱れていたのだろうが、今、それらの多くは汚れ、褪せ、枯れて黒ずんでいた。

レイは薄気味悪く濁っていこうとしている庭園を眺め、顔をしかめる。やがてこの暑さにやられ、そう時間を要しないうちに草花たちは全て枯れて腐っていつてしまうのだろう。その景色を思い浮かべるだけで、うんざりした。この世にあるのは流れ、褪せていくものばかりだ。父親が入院してからというもの、レイはそんなことをよく考えるようになった。

家の敷地内には入らず、佑は門の前でその家をじっと見上げていた。その横顔は寂しそうでもあり、また懐かしそうでもあった。レイは陽光に照らされ、頬に汗を浮かべる彼をしばらく眺めてから、家の方に視線を移した。

「この場所で……オウガと出会ったんですか」
道中で交わした佑との会話を思い出しながら、レイは隣に立つ佑

に尋ねた。1週間前、佑はゴンザレスに命じられ、この家に向かった。オウガの装甲服を奪うため、マスカレイダーズの一員として認められるため、装甲服の力で悠を守るため、佑は人間同士で戦いたくないと訴えつつも、オウガの所有者に戦いを挑みにいった。

病院で小指同士を絡め、約束を交わした日のことがレイの脳裏に蘇る。その後、佑は左手に大けがを負い、体中に傷を作って帰ってきた。

レイと別れたあと、佑の身に一体何が起きたのかレイは知りたかった。そうすれば佑の心に今よりもずっと近づけるような、そんな気がした。レイは彼の心に触れたかった。

佑はうん、とだけ返事をした。それは空返事に近かった。レイは前を向いたままさらに尋ねる。

「オウガって、どんな人だったんですか？」

「……分からない」

ぼんやりと目を眇めて彼は言う。その後で、だけど、と続けながらようやくレイに視線を転じた。正面から見る佑の顔色は、まるで白けた空の色のように心許なかった。

「だけど、悪い人じゃ、なさそうだったよ」

佑は哀しげに目を細める。なぜ佑がそんな顔をするのか、レイには何となく理解ができた。もしオウガの持ち主が極悪非道の人間だったならば、佑もここまで心を痛めることはなかったに違いない。悪い人ではないことがわずか数分足らずの出会いでも分かってしまったから、だから佑は罪悪感に捉われているのだろう。

「でも、俺が負けたのが今では幸いかな。俺も死ななかったし、相手も死ななかった。それだけは、良かったと思ってるよ」

そう吐露する佑の言葉はおそらく本心で、レイもそれを聞いて胸をなで下ろした。心のどこかでは心配していた。もしや彼は、オウガの装着者を殺してしまったのではないかと。彼の信念に反して人間相手に力を行使し、その末に、彼自身が誰よりも恐れていた事態に至ってしまったのではないかと。

だがその不安も彼自身の口から否定された。それを聞けただけで、ずいぶんと心が軽くなったような気さえした。彼は人殺しにならなかったのだ。それは彼にとっても、そしてレイにとっても、とても大きなことだった。

「でも、この家にいたのはオウガだけじゃなかった。ここで怪人と……それから、あの男にも会った」

「あの男？」

まさか、とレイは勘を働かせる。胸に期待とおぞましい予感が一緒に沸いた。頭の中にしなびた果実のような顔をしたあの男の姿が現れる。

「式原明さ」

レイが男の名前を口に出す前に、佑がその正体を明かした。

「3年前、悠をさらおうとした一味だ」と語気を荒らげる彼の目に、不気味な光が宿る。

知っていたのか、とレイは声をあげかけた。その言葉を発するのを止めたのは、口を開いた直後に強烈な気配が頭の中に直接飛び込んできたからだった。

レイは顔を歪めた。

その気配は目の前に立つ、この白い家より発せられているようだった。それは怪人を察知した際に、脳内に現れるものとはまた別の感覚だった。それとは比較できないほどの大きな情報力がレイの脳を瞬間的に揺さぶる。視界が一瞬、白くぼやけた。その瞬間、なぜ佑が自分をこの場所に連れてきたのかレイは理解した。レイの“怪人の気配を知ることができる”という能力に期待を寄せ、式原のいたこの家に何か痕跡がないか、調べるつもりなのだろう。

ほどなくして意識が元の次元に帰ってくるのを待つことなく、体を擦じられ、すり潰されるような不快感がレイの肌に沁みて伝わってきた。指の1本すら動かすことさえ許されぬ重圧がレイを押し潰そうと、なりふり構わず殺到してくる。それは殺意を伴った、刺々しく、どす黒い瘴気だった。

それに必死に耐えようと身を凝らせ、両足に力を注ぐ。気づけば息があがっていた。体温が凍てつく瘴気によって、根こそぎ奪われていくようだった。顔面からスツと血の気が引いていく。

怖い、と心の底から震えた。目の前に聳えるこの家に立ち入らなければならぬことは分かっている。しかし勇む心は慄きへと変貌し、踏み出そうとする足は考えるよりも先に後ずさっていく。体と心がこの家にこれ以上、近づく事を拒絶しているのは明らかだった。その時、恐怖に絡め取られ、瞳を震わせるレイの体に温もりが射した。

顔をあげ、自分の手を見やると、そこに佑の手が重ねられていた。「怖い？」

佑の問いかけに、レイは首を縦に振る。いつものように強がることはできなかった。気を少しでも緩めれば心が挫けそうだ。おそらく瞳もひどく潤んでいることだろう。体の芯まで凍えるようだった。そんなレイの手を、佑はさらに強く握った。

「こんなところに連れてきちゃって、ごめん。だけど大丈夫。俺がいるから。レイちゃんは、1人じゃないから」

レイは目を見開いた。佑は照れくさそうに口元を緩めた。

「俺さつき、レイちゃんにそう言われて、本当に嬉しかったから。だから、怖くなんかはないよ。レイちゃんが俺を助けてくれるように、俺もレイちゃんを助けるから。だから、安心していいよ」

レイはしばらく呆然と佑の顔を見つめ返し、それから我に返って、小さく顎を引いた。

彼から届く温もりが、脈の鼓動が、レイの身にとりついた恐怖心の澱を溶かしていつてくれるような気がした。

気づけば白い家から発散されていた瘴気は大分薄まり、体にかかっていた重圧は消失している。佑はレイからそつと手を離れた。レイは無言でそれに応じる。たとえば彼の体に触れていなくとも、レイは佑の体温を感じる事ができた。レイと佑はしばらく何かを通じ合わせるかのように見つめ合ったあと、2人して顔を背けて照れた。

もう、恐れるものは何もない。佑が隣にいてくれる限り、どんな
暗い未来でも足を踏み外さずに進んでいけるような気がした。

「行こう」

家を見上げ、決然と佑は言い放つ。

「はい……行きましょう」

レイは頷くと、彼の背中に続いた。先ほどまであれほど怯えていたのが嘘のようだった。足取りは自分の体重を置き去りにしてしまったのではと疑うほどに軽やかだ。体中に熱が宿る。胸の奥がくすぐたく、それがまたレイの気持ちを昂ぶらせていた。

枯れた庭を横切り、玄関に近づく。佑がドアノブを掴み、軽く引くと、ドアに小さな隙間が生まれる。鍵は閉まっていない。レイと佑は視線を交わした。佑は頷くとそのドアを一息に開いた。開かれた世界を前にして、レイはまず、眉を顰める。

家の中にも庭と同様、荒廃の色が忍び寄っていた。一見華やかで整理されているように見えるが、よく見れば廊下の隅には埃がたまり、虫の死骸がところどころに転がっている。その中には毛虫も含まれていた。レイは唇を引き攣らせた。電灯の点いていない室内は薄暗く、黒々としたわだかまりがいたるところに住みついているかのようだ。ただ、長く空けた部屋に久しぶりに入った時に感じるような、空気の淀みがほとんどないのは意外だった。どこかの窓が開け放しにされているせいで、換気はされていたのかもしれない。しかし人が住んでいないだろうということは一目瞭然だった。

佑は無言で靴を脱ぐと、家の中にあがりこんだ。レイもまた彼の背を追う。一応「おじゃまします」と小声で断るが、人の気配が現れることはなかった。

色の褪せた廊下には不穏な気配が色濃く漂っていた。誰かから見られているような、誰かに話を聞かれているような、そんな気がする。視界に収まる範囲でもいくつかドアを認めることができるが、いずれのドアの向こうにも何かが潜み、耳をそばだてている気がしてならない。足を進めていくごとに、掌の汗はその量を増していつ

た。前を歩く佑の横顔もひどく険しい。その呼気が震えている。動きもどこか固かった。

「感じる？」

前方に注意を向けたまま、佑はレイを気遣うように尋ねてくる。

レイは周囲をきよるきよると見回しながら唇を舐めた。

「はい。怪人の、気配がします」

「やつぱり……レイちゃんを連れてきて、正解だったよ」

足元で床の軋む音が鳴る。どこかでしきりに何かの家財が風で揺すられるような物音がする。しかしそれが人の出している音でないのは明白だった。おそらくどこかの窓が開いたままなのだろう。周囲が静かなので、些細なそれらの音もはっきりと耳に届く。それは、左手側にある、玄関から一番近いドアの向こうから聞こえてきた。

レイが視線をやったそのドアに、佑が手をかけた。自分の判断が正しいのか確かめるかのようにこちらを振り返る彼に、レイは緊張しながら頷く。

佑の判断は正しい。心臓をぐいと掴まれるような、この巨大なプレッシャーの根源がこのドアの向こう側にあるのは確かだった。おそらくこの気配を発している何かは、部屋に入ってこようとする憐れな獲物を待ち、室内に鎮座している。その気配が痛いほど、手に取るように伝わってくる。

佑はドアノブに手を添え、もう一度レイを振り返り、頷いた。レイは緊張の面持ちで頷く。事態に備え、全身の感覚を研ぎ澄せる。

佑はドアを押し開いた。レイは彼に続く。

部屋に入って、まず視界に飛び込んできたのは、ひどく荒らされたリビングだった。テーブルは割れ、キャビネットは碎け、カーペットは切り裂かれている。ガラス戸は破壊され、その破片は室内に飛散している。補修した形跡もなく、部屋の中は吹きさらしの状態だった。

室内には破壊の跡が色濃く刻まれ、そしてそれらは明らかに戦闘の痕跡があった。ドアの近くで立ち尽くし、日常をあますことなく

奪われた部屋を見回すレイをよそに、佑はどんな部屋を奥へと進んでいく。ひどく鋭利な刃物で一息に両断されたかのような、非常に整った断面を晒すテーブルを佑は懐かしそうな表情で見つめている。

「もしかして、ここで……」

「ああ、オウガと戦った」

やはり、とレイは改めて室内を見回す。ここで佑とオウガは出会ったのだ。そして戦った。おそらくその争いは、仕掛けた佑にとっても、仕掛けられたオウガにとっても不本意なものであっただろうと思った。ただ、傷つきはしても互いに命を落とさぬ結果に終わったことだけが救いだらう。

そんな思いを抱きながら室内を観察していたレイは、乱雑に散らかった床の上のあるものにふと目を止めた。それは絵本だった。表紙にかたつむりの絵が描かれている。題名は『いとまきまきかたつむり』と書かれていた。

4年前に黒い鳥から生まれ、幼少時代というものを持たないレイは絵本に触れたことがこれまでなかった。レイはそれを拾い上げると、その表紙をまじまじと見つめたあとで、裏に返した。そこには油性マジックの幼い文字で『なたはしそら』という名前が書かれていた。おそらくこの絵本の持ち主の名前だろう。この家に住んでいたのかもしれない。絵本はひどく汚れていて、ページのほとんどは抜け落ちているようだった。中身も酷く痛んでいて、とてもではないが読むことはできない。

レイは絵本を割れたキャビネットの上に置くと、部屋の奥にいる佑を目で追った。レイたちが今立っている床はフローリングであったが、奥の方は畳みに変わっていた。その境界付近に穴のあいた襖が倒れている。どうやらもともとこの部屋は、襖で2つに区切られていたらしい。

その畳の空間を見つめる佑の表情がさらに陰しいものへと変わる。レイは彼の表情が気にかかり、ようやく部屋の内部にまで歩を進め

た。

佑のすぐ背後に立ち、彼の視界の先に広がる空間を覗きこむ。途端に、激しい腐臭が鼻を突いた。その臭いの鋭さに思わず顔をしかめ、それから絶句した。

「これって……」

その部屋が畳敷きの和室であることが分かるのは、フローリングとの境界付近だけだった。部屋の奥は畳の生地など全く見えず、その床は真っ黒な鳥の羽で、一色に塗り潰されていた。

おぞましさを感ずるほどの、凄まじい量だった。背筋にぞくりと寒気が走る。脂で照り、薄気味悪く滲んだ光を放つ生き物の羽がこれほどまでに密集している光景は、ただひたすらに不気味でしかなかった。

それは鳥の羽根などではけしてない。レイには分かった。それは黒い鳥の羽。怪人を生み、人間の命を吸う。漆黒の羽毛に体を包んだ、恐ろしい怪鳥のものに違いなかった。

佑が見せたかったのはこれだったのか、とようやくレイは彼が自分をここに連れてきた理由に気付いた。これはどう見ても鳥から偶然抜け落ちた、という規模ではなかった。誰かが意図的に鳥から羽を引きちぎり、部屋に撒いたのだ。そしてそんなことが可能な人物は、レイの知る限りで1人しかいなかった。

「式原……」

その男の名前を呟いたその時、レイは脳に鋭いものを刺し込まれるような痛みを覚えた。たまらず目元を掌で覆い、苦痛に顔を歪める。大量の映像と音声が入の頭に直接なだれこんできて、巨大な螺旋模様を描く。それは間違いなく、怪人の接近を知らせるサインだった。

来る。すぐ近くだ。佑にその事を伝えるよりも早く、窓際に置かれたソファァーが宙を舞った。ソファァーは壁に激突し、衝撃音とともに埃が一斉に舞い上がる。続けてフローリングを引っ掻く音が室内を疾駆し、それから異形のシルエツトが白ばけた景色の中から現れ

た。

それは顔面から折れた扇風機を生やした、奇妙な姿の怪人だった。体中に傷を作り、右腕などあらゆる方向に完全に曲がっている。全身には血管じみた黒色のラインがあますことなく引かれていた。獣の咆哮のような唸り声を響かせながら、それは2人の前に立ちはだかる。身の丈は2メートルを超え、そのほっそりとした姿も相まって大蛇に鎌首をもたげられたかのような迫力がある。

「怪人……」

怪人を前にし、レイと佑、2人の言葉は重なった。レイは身構えた。それから自分の影を鳥の形にそつと変化させようとする。しかし実際に影の形が人のものから離れる前に、礼を庇うように、佑が一步、足を踏み出した。

「お兄さ……」

「怪人」

レイの言葉を遮り、佑は目の前の怪人を睨みつける。その表情は険しく、その瞳は爛々と輝いているように見えた。そのあまりに冷たい横顔に、レイは背筋に怖気が走るのを感じた。彼の目の色が明らかに違っている。その表情に深く淀んだ影が射す。

「怪人！」

歯を軋ませ、憎悪を瞳に宿し、佑は手に握っていたフェンリルのメイルプレートとを、床に転がっていたキャビネットのガラス戸に叩きつけた。あまりに強くプレートで殴りつけたのでガラス戸は割れ、金具がもとから外れて、戸自体が窓際の方に吹き飛んでいった。

怪人は甲高い唸り声をあげると、顔に刺さった扇風機をがちゃがちゃいわせながら、佑に向けて飛びかかった。テーブルを踏み碎き、床を引っ掻き、立ち塞がる障害を力尽くでなぎ倒しながら突き進む。その場から一步も動こうとはせず、ただひたすらに怪人を睨み続ける佑に、怪人の右腕の先から伸びた鋭い爪が迫る。

その爪が佑の体を貫く寸前、キャビネットの割れたガラス戸の内より銀色の装甲片が次々と飛び出し、佑の体を順々に包み込んでい

った。

装甲片によつて攻撃を弾かれ、怪人は後ろにのけぞる。全身を揺らすようにしてバランスをとり、再び腕を振り下ろすが、それもまた飛来する銀色のパーツが阻んだ。そうしているうちに佑の体はむらなく装甲片によつて覆われ、『5』の数字を刻んだ戦士、“フェンリル”がそこに顕現した。

フェンリルの内より放たれたその声は、ほとんど怒号だった。憎悪によつて彩られたその叫びに、レイは身を凍らせる。自分の前に立つこの銀色の戦士が佑だとは到底思うことができない。俺がいるから大丈夫だよとレイの手を握り、恐怖に震える体を宥めてくれたあの優しい笑顔を浮かべる彼はどこにいつてしまったのかと当惑する。継るようにフェンリルの手に視線を移すが、そこにあるのはいかにも冷たそうな、金属製の装甲だけだった。

「お兄さん！」

急激な不安が胸に殺到し、たまらず佑の事を呼んだ。だがフェンリルにその声は届かないようだ。彼は何事かを唸るように叫ぶと、その足首から三日月型の刃を発生させ、三度迫りくる怪人目がけて回し蹴りで応戦した。

蹴りの辿った軌跡に添って、空を刃が裂く。フェンリルの右踵で刃は高速回転し、それは怪人の爪がフェンリルを貫くよりも早く、その肩を確実に抉った。床に腕を突き刺し、金切り声をあげる怪人を前にフェンリルは、その肩に食い込ませたままの刃ごと足を水平に動かし、まるでカッターでデコレーション・ケーキを切るように怪人の肉を裂いていき、そのままその片腕を何の躊躇いもなく切り落とした。

その瞬間、怪人の口からこの世のものとは思えぬ、おぞましい悲鳴があがった。鼓膜が否応なしに震え、全身の肌が粟立つようだった。フェンリルは踵でとん、とんと床を叩き、刃にこびりついた桃色の肉片を振り落とす。それから今度は背中より、先端のみ黄色に着色された装飾付きの剣を引き抜いた。

怪人は残った腕で体を支えながら、苦悶の声を吐き出す。フェンリルは右手首からも足と同様の三日月型の刃を出現させた。刃はその場で縦方向に、まるでスイッチを入れたドリルのように高速回転を始める。回転から生じた螺旋状のエネルギーは手首を這い、指を伝って、その手に握った剣を柄の方から浸食していった。

「死ね」

その佑とは思えぬ装甲服の戦士は、しかし確かに佑の声で怪人にそう吐き捨てた。怪人が身を起こしたそのタイミングに合わせて、フェンリルは螺旋状のエネルギーを十分に纏ったその剣を片手で一閃した。

フェンリルが剣を完全に振り抜いた、その後で、今度は怪人の右足が宙を舞った。

半身を失った怪人は今度こそ、よろめくようにして前のめりに倒れた。壊れたラジオの音声のような雑音混じりの声で喚き散らしながら、床をのたうち回る。フェンリルは剣を片手に掴み、その先端を床に引きずるようにしながら怪人に歩み寄る。顔面から生えた扇風機の隙間から覗く怪人の2つの目が、助けを請うようにレイの方を見た。

レイは息を呑み、後ずさりながら、体を震わせた。怪人の赤く爛々と輝く瞳は憎々しげに、疎ましげにレイを睨んでいた。

お前も同じ怪人なのに、なぜ自分だけがこれほどまでに無惨な仕打ちを受けなければならないのか——怪人の目はそうレイに糾弾を投げかけている。それを分かっているながら、レイは一步もその場から動く事ができなかった。

怪人に迫るフェンリルの背姿を、恐る恐る見やる。まるで対峙するものに恐怖を与えることを目的とするかのように剣と床とが擦れ合う音と連れ合って歩きながら、フェンリルは一步一步、着実に怪人の精神を追い詰めていく。その脂で光る剣を、怪人の肩を抉った、回転する刃を見つめていると、レイは目眩を覚えた。その武器が自分の体を裂き、貫く瞬間をイメージすると、頬が冷たくなり、震え

が止まらなくなった。

「お前らなんか、この世にいないんだ。怪人なんか、みんな消えればいいんだ」

暗く、低く、佑が漏らしたその言葉にレイは心臓を驚つかみにされたかのような気持ちになった。口の中が急撃に乾く。頭の中が真っ白になった。そのセリフはレイに向けられたものではないと分かっているが、それでも、レイはまるで自分の生そのものを否定されたかのような気分になり、胸の鼓動が高く跳ね上がった。

フェンリルは怪人の頭を踏みつけた。くぐもった悲鳴をあげ、床に顔面を押しつけられる怪人の喉元に剣先を突き立てる。レイは顔を背けた。次の瞬間、肉を抉る鈍い音と重なって、怪人の絶叫が室内にこだました。

レイは目を閉じ、耳を塞ぎ、目の前の光景から逃げた。

それでも指の隙間から聞こえてくる肉を裂く音、骨を潰す音、この世の苦痛を全て引き受けたかのような悲鳴。閉じた瞼の端から見える、体から肉片が抉りとられる光景。細かな破片になって宙を舞う怪人の体。悲鳴。絶叫。手足が削がれ、爪をへし折られ、眼球を床に垂れ流す。悲鳴、悲鳴、悲鳴。

それがようやく鳴りやんだ時、レイは吐き気を堪えるので必死だった。生きた心地がしないまま、何かに操られるようにして目を開き、耳を押さえていた両手をだらりと脇に垂らした。呆然と目の前の景色に視界の焦点を合わせる。そこにはすでにフェンリルの装甲を解除した佑が、レイを振り返り、微笑みを浮かべていた。

「レイちゃん、終わったよ」

そこにはもう怪人の姿はなかった。ただ、つい数刻前まで怪人であっただろうと何とか判別できる、肉の残骸があった。レイは虚ろな意識のまま、顔の半分を切り取られた怪人の生首に目をやり、それからよろよると背後の壁に寄りかかった。現実感がまるでなく、意識は夢の中にあるようだった。足下がふわふわして、まともに立つことができない。

佑はフローリングに撒かれた桃色の肉片を足で払うようにしながら、もう1度、まるで自分に言い聞かせるかのように言った。
「終わったんだよ。もう大丈夫だ。怪人は、俺が殺したから。だからもう安心していいよ」

呪文のように呟き、怪人の残骸を背後に、佑は口元を綻ばす。レイは彼の方を一瞥し、その表情を視界に収めた瞬間、背筋にうそ寒いものを感じて、すぐに視線を床に転じた。

佑に笑って欲しいとあれほど望んでいたはずなのに、その表情が好きだったはずなのに、レイは今の彼を直視することができなかった。彼の浮かべたその笑顔に魅力的なものを感じることはできず、ただ胸の内にはうす気味の悪い感触が渦巻くばかりだった。

鎧の話 34

公園に生え並んだ灌木の影に、直也とライは身を潜めていた。

猫の額ほどの小さな公園だ。遊具も錆びたブランコと、土を被ったシーソー以外にない。見上げた空に、飛行機雲が横切っていく。蝉の声も気付けば大分小さくなった。夏も終わりに向かっているのだ、という空気が、何とも寂寥感を誘う。

直也は顔を掌で拭うようにし、それから一度、目を強く閉じて開いた。先ほどから眩暈が止まらない。病み上がりであればほど激しい立ち回りをしてしまったがために、熱がまた上がってしまったのかも知れない。今、あの怪人に見つかれば今度こそ逃げ切れる保証はなかった。

直也は靴を片方しか履いていない自分の足を見やり、嘆息した。怪人の攻撃から逃れるため、仕方がなく脱ぎ捨ててしまった。乗ってきたバイクも店の外に置いたままだ。大学時代から乗っていた愛車であったし、この状況で足を失うのは痛手ではあったが、取りに戻るのにはあまりにリスクが高かった。柳川たちの死体を放ったままで

あることも、どうにも気に懸かるが、今は致し方なかった。直也だけなら迷うが、ライと一緒にいる以上、道義に反しても彼女を守る
ことが優先だ。

「あいつ、撒けたかな」

ぜえぜえと呼吸をしながらライがあたりを見回す。直也もまた灌木に指を入れ、視界の限りを探った。

「さあ、どうだろうな。気配はないみたいだけど」

日陰に覆われた、乾いた地面に並んで座りながら、2人そろって肩で息をする。周囲に意識を傾けるが、あの怪人が近づいてくるような気配はなかった。油断こそできないが、今はしばらくここで息を潜めているのが最良の選択だろう。

「どうするんだよ、おっさん。110番するならケータイ貸すけどさ」

直也の耳に口を寄せ、息を切らしながら途切れ途切れにライが囁いてくる。彼女の表情にもやはり疲労が色濃く浮き出ているようだった。直也はライの方を見やると、体調不良のせいで重苦しいため息を吐きだした。

「警察に連絡してもどうにもならないだろ。これ以上、事を大きくしても被害者が増えるだけだ。相手は人間じゃない、怪人なんだ」
「そっか……」

蚊に刺されたのか、腕をぼりぼりと音をたてて掻きながら、ライは顔を伏せる。そのうつすらと紅潮した頬を見つめ、直也は先ほどのことを思い出してふと頬を緩めた。

「そっかいやさつきはナイスだったな。お前に助けられるなんて思わなかった」

ライは目を細めて直也を見る。それから数秒記憶を辿るような仕草を見せてから、ああ、と得心のいった風な声をあげた。

「あれはさ、ハンマー投げみたいな感じで投げたら当たったんだ。このままじゃおっさんが死んじゃうって思ったらさ、勝手に体が動いてたんだよ。あれが火事場の馬鹿力って奴なのかも」

「馬鹿力か…… お前らしいよ。何にせよここまで逃げてくれたのはお前のおかげだ。助かった」

今、口にするのできる精一杯の褒め言葉をかけると、ライはへへへ、と照れくさそうに笑って、自分の両膝を抱きかかえるような姿勢をとった。

直也もまた口元を緩め、それから息を深く吐き出した。汗が止まらず、一向に呼吸が楽にならない。人間は1週間床に伏しているだけで、これほどまでに体力が落ちるのかと痛感した。体力には自信があっただけに、たった数十メートル走っただけで息を切らしている自分が、ひどく惨めに思えた。

直也とライは錆びたフェンスに寄りかかるようにして、青々と茂った灌木を挟み、公園側を向くようにして腰を下ろしている。背後で自転車が通り過ぎた。車の走る音も絶えず聞こえてくる。ここならば怪人もあまり大っぴらには襲ってこられないだろう。怪人は人の目を恐れているような節がある。日中、人通りの多い場所にいる限りは、おそらく安全だろうというのが直也の見立てだった。

「でもあいつ、一体なんなんだろうな。私と似たような顔しやがって。あんなのパクリじゃん。言ってることも、わけわからないし」

足に止まった蚊を叩きながら、ライは口を尖らせる。直也はそんなライのつまらなそうな表情を――あの怪人とまったく同じその顔を、現実感の欠いた思いのままに見つめた。

「でも似てるのは顔だけだったな。あとは全然違う」

「当たり前だろ！ 私は私だよ。人の顔の真似しやがって。許せないよ」

ライは本気で憤慨しているようだった。怒ってはいるものの自分の写し身が現れ、怪人に変貌したことに対し、恐怖や不安を抱えてはいないようだ。そのことは直也の心を少しだけ安堵させた。ライは自分自身をちゃんと持っている、その強さは、直也も見習いたいところだった。

直也は全身の感覚を研ぎ澄ましながら、フェンス越しに歩道を見

つめた。やはり迫ってくる気配はない。樂觀こそできないが、もうこの周辺にはいないのかもしれないと思い始めた。だが、敵の動きが全く予測できないだけに迂闊な行動をとるわけにもいかない。直也は頭上で喚き始めた蝉の音にわずかに顔をしかめつつ、フェンスに視線を這わせる。

「おっさん」

声をかけられ、直也は警戒を解かぬよう自分に言い聞かせるようにしながら、ライの方に顔を向けた。

するとライは顔を俯かせ、思い詰めたような表情をしていた。先ほどとは一変した顔色に直也は当惑し、眉根を寄せる。

「おい、どうした」

慌てて声を投げかけると、彼女は地面に視線を落としたまま、ぼつりと呟いた。

「……あの人たち、死んだんだよな」

直也は言葉を詰まらせた。ライの横顔はいかにも悲しげで、深い影が頬のあたりに射し込んでいた。

「あの化け物に、殺されたんだよな」

状況を再度確認するかのようにライは唱え、それから膝の間に顔をうずめた。直也は少し考えてから、フェンスの方に顔を戻した。

「ああ、そうだな。殺された。柳川さんも、マスターも、他の客も」

「人が死ぬって、怖いんだな。あそこで死んでいた人たちのこと、私は知らないけど。それでも残念だな、って思う。悲しいな、って思う。許せないなって……そう思う」

ぼつりぼつりと喋るライの声音に涙が滲む。その頬に透明の滴が滑り落ちていった。

柳川と親交の深い直也ならともかく、ライは柳川の名前すら今日初めて耳にしたはずだ。あの店のマスターや床に倒れていたカップルらしき男女のことも、もちろん知己ではないだろう。それなのにライは、声を震わせ、目に涙さえ浮かべて、彼らの死を心から悲しんでいる。彼らの無念を悼んでいる。目を赤くし、下唇を噛む、そ

んなライの姿を見つめているうち、直也は自分の中に優しい気持ち
が溢れ出してくるのを感じた。温かいものが臓腑を柔らかく満たす。
それは心地のいい響きを直也の胸に与えてくれた。

「お前、優しいな」

ありのままの気持ちを伝えたと、ライはちらと直也を見て、膝の
間に顔をうずめた。

「普通だよ。なんで人の命を奪って平気でいられるのか、私にはわ
かんない。分かりたくもない。私と同じ顔をしてるくせに、わけわ
かんないよ」

「ああ、それは俺も同感だ」

手垢のついた表現ではあるが、命の価値は重い。かけがえのない
程に。代替えができず、釣り合うものさえ見当たらない程に。

命は個の証明であり、それぞれの個は唯一無比の存在である。いか
なる命であろうとも、他の命で埋め合わせるなどできない。同
一の容貌をもつライとあの怪人が、しかし、まったくの別物である
ように。同じ直也と恋人同士という関係を築きながらも、咲のいな
くなった空白を、あきらで埋めることなどできないように。

だから命を奪うという行為は許されない。死はこの世に2つとして
ない個の、完全なる消滅を意味するからだ。それが無差別と無秩序
を纏ったものであれば尚更だ。だから直也は人を殺め、自らの私欲
を満たそうとするあの白衣の男を、それを忠実にこなす怪人を憎む
咲や太田を殺したフェンリルに怒りを覚える。そんな奴らを野放し
にしておくことが許せなかった。

「柳川さん……」

あの大らかで世話好きな警察官は、もうこの世にいない。柳川と
は3年たらずの付き合いではあったが、S I N エージェンシーの事
件では言葉では語りつくせないほど世話になった。彼の存在がなけ
れば直也はいつまでも咲の死を引きずっていただろうし、事件の解
明も今よりも進展していなかったに違いない。

悲しみに暮れるライを見ているうち、もう柳川と話すことはでき

ないという実感が徐々に込み上げてきて、直也の胸を衝いた。全身に怖気のようなものが走り、途端に喉元まで熱いものがこみあがる。だが直也は鼻を伝い、目にまで及んでいこうとするその感覚をすんでのところで呑み込んだ。咲の娘が隣にいる手前、悲観に暮れることは躊躇われた。

「なんで、あの怪人はみんなを殺したのかな」

ライは曲げていた足をずるずると伸ばし、つま先でフェンスに触れる。その指先を細かく動かし、フェンスの網目を揺らしている。

「断言はできないけど、多分、あの封筒の中身だろうな」

柳川から送られてきたリーフレットを頭に思い浮かべながら直也が返答すると、ライは弾かれるようにして直也の方を向き、目を丸くした。

「中身って……あの、わけのわからない広告？」

「ああ。あの広告と怪人が何らかの関係で結ばれていたのは間違いない。あの広告の意味までは、さすがに俺もわからないけどな」

黒い鳥のマークから旧鉤橋邸で出会ったあの男との関わりがあることは確かだったが、“リリー・ボーン”という単語が意味するところまでは、直也は行き着けていなかった。

「あのおまわりは、あの広告の意味を知っちゃったから殺されたって、そういうこと？」

「マスターや客は巻き添えだろうな、多分。柳川さんは何かを知って、それは怪人たちにとって知られたくない何かで……だから、殺されたんだ」

柳川はおそらく刑事独特の嗅覚で、己に迫る危機を嗅ぎ取っていたのだろう。あまりにも危ない境地に、自分が足を踏み込んでしまったことにも感じていたに違いない。

「柳川さんは一体、どこであの広告を手に入れたんだ」

その時、直也はふと思いつき、尻をわずかに浮かせてポケットからくしゃくしゃの紙を取り出した。興味をそそられたのか、ライが横から直也の手元を覗きこんでくる。

「なにそれ？」

「柳川さんの手にこいつが握られていたんだ。たまたま持っていた感じじゃなくて、ポケットから慌ててこいつを握ったみたいだった。もしかしたら、柳川さんはこいつで俺たちに何かを伝えようとしたのかもしれない」

直也は指先でその小さな紙を広げ、皺を伸ばした。それはレシートだった。上部に全国チェーンのコンビニの名前が記されており、その下に支店の名前と電話番号、そのさらに下にはガムと煙草を買った明細が記されていた。日付は今日の7時になっている。

ざっと見た限り、その紙に特に不審な点は見つからなかった。ひっくり返し、裏面に目を走らせるが、何かが書かれているわけでもない。太陽に透かしてみるが、何か文字が浮かび上がるというようなこともなさそうだ。

だが、直也は自分の閃きを信じた。レシートに刻まれた皺の跡が、柳川の苦痛の程を物語っているようだ。ところどころ印刷された文字が白い線で消されているのは、柳川が爪で引つ掻いた跡なのだろう。紙面の至る所に残されたそれらの痕跡を眺めていると、彼が死の瞬間まで感じていた痛みと、直也に何かを伝えようとする気持ちの否応なしに伝わってきて、胸が絞めつけられるようだった。

「じゃあ、ここに行ってみようよ」

ライがあっさりと言いだすので、直也は耳を疑った。よいしょ、と声をあげながら彼女は立ちあがる。尻に付いた泥をはたく姿を見上げ、そこでようやく直也は慌てた。

「おい、お前待てよ。……本当に、いいのか？」

「いいだろ。こんなところでじっとしてたって仕方ないじゃん。どうせ私たち、怪人に目を付けられたんだし」

自分を見下ろすライの何の迷いもない目に、直也は二の句を継げなくなる。躊躇う直也を前に、ライは眉を曲げ、少し悲しそうな表情を作った。

「あのおまわりは、おっさんに命がけで何かを託そうとしたんじゃない

ないか。だったらそれを受け取ってやらなきゃ、報われないよ」

「……そんなこと、分かっている」

直也も立ち上がった。視界が一瞬暗転し、足元がふらついたが、大きくバランスを崩すことはなかった。フェンスに指を引っかけ、姿勢を保ちながら、ライと向き合う。

「だけど、さつきも言っただろ。柳川さんは何かを知って殺されたんだぞ。これ以上深入りすれば、お前も危ないんだ」

「でも、おっさんは行くんだろ？」

直也の忠告に、ライはあっさりと言葉を返した。彼女の言う通り、直也は当然のことながら柳川の残したこのレシートを辿り、“リリイ・ボーン”の正体について探るつもりだった。1人ならば今頃、とっくにコンビニに向かっているだろう。

しかし動き出すことができないのは、これ以上ライを巻き込むことに躊躇いがあるからだ。彼女を危険に晒すわけにはいかないという感情が邪魔をしている。単独で動いている時よりも直也は自分が臆病に、そして慎重になっていることを明確に感じ取っていた。

「おっさんがこんなところで引き下がる人じゃないの、ちゃんと分かっているよ。私もそうだよ。私も無関係じゃないんだ」

ライの表情は真剣そのもので、面白半分に首を突っ込もうとしているわけではけないことは明らかだった。彼女は立ち向かおうとしているのだ。自分と同じ顔の怪人が引き起こした、このあまりにも許し難い事件に。自分が関わってしまった、このとんでもない事態に。真正面から、向き合おうとしている。彼女の強い気持ちは、その眼差しは、直也の心を決定づけるには十分だった。

「だから、頼むよおっさん。足手まといになるかも知れないけど、だけど、私も連れてってよ。頼むよ」

ライは頭を下げて、直也に懇願する。確かに怪人に顔を見られている以上、ここでライと別れ、彼女を1人にするのは少々リスクが高かった。こんな時に拓也がいてくれれば、と思うが彼の居場所も連絡先も分からない以上、どうにもならない。黒城のもとに帰すの

にも抵抗があつた。黒城は頼りがいがあり、この状況を打破してくれそうではあるが、さすがにあの男といえども怪人相手では分が悪いだろう。

結局、自分の側に置くのが一番安全なのか、と直也はこちらを上目遣いで窺うライを見つめながら思う。あまりに頼りない力ではあるが、一応、怪人と戦うための力を直也は持っている。

直也はため息を浮かべると彼女の肩を軽く叩いた。顔をあげるライを見つめ、そして直也はその瞳に、咲の面影を重ねる。この少女は絶対に自分を守るのだと改めて心に誓う。

直也はライと向き合いながら、ジーンズのポケットからメイルプレートを取り出した。不思議そうに直也の行動を見つめるライに、それを差し出す。

「こいつは咲さんがいなくなる直前、俺に託したものだ」

救急車の中のストレッチャーに横たわる咲の白い顔が思い出される。その首筋に刻まれた鳥の形をした痣が目の前に浮かぶ。このプレートは直也に託してくれた時の、あの細い指が脳裏にこびりついて離れない。

「俺は咲さんにお前を任されたんだ。だから俺は、必ずお前を守る。絶対にだ」

ライは彼女らしくないおずおずとした動作で直也の手からプレートを受け取ると、その傷だらけの金属を眺め、「母さんが」と呟いた。

「ライ、お前には俺と咲さんがついてる。だから、心配するな」

ライは直也にプレートを返すと、こちらを見上げ、それから強く頷いた。その目がわずかに赤みを帯びているのを認めて、直也は胸にわずかな痛みを覚える。

空にはまだ太陽が高く昇っている。怪人が積極的に動きをみせるであろう夜になるまで、まだ時間は残されていた。

4話「黒い鳥が死んだ日」

魔物の話 44

15分ほど室内を検めてから、レイと佑は家を出た。でき得る限り探索をしたつもりではあったが、結局、式原の居場所を特定できるものは見つけることができなかった。

ここに式原がいたということは確からしいが、一時のアジトに過ぎなかったのではないか、というのがレイの考えだった。おそらくあの家に元々住んでいたのは、あの絵本の持ち主である『なたはしそら』の家族だったのだろう。その家族がいまどうしているのかと考えると、それだけで暗澹とした気持ちになる。おそらく生きてはいないだろう、というのがレイの見立てだった。

早くあの男の居場所を突き止めなければ、さらに被害者は増えていく。自分たちが止めなければならぬのだ、と覚悟を新たにした。

とりあえず唯一の収穫である黒い鳥の羽を佑と2人で拾って、駅に戻った。改札口をくぐり、電光掲示板を見上げ、次の電車の到着時刻を確認する。到着までには4、5分程時間があつた。

「レイちゃん、ちよつと寄り道したいんだけど、いい？」

レイは隣の佑に顔を向けた。今の佑からは、怪人を殺した時にみせた、冷たく暗い影を背負ったような印象は感じ取れない。いつも通りの、悠と一緒にいる時の彼にすっかり戻っていた。

「いいですけど……今度は、どこにいくんですか？」

「うん。まあ、そんなに遠くはないよ。時間には間に合うようにするから。ね？」

佑は行き先を曖昧に答えると、眉を上げて笑んだ。レイは不審に思いつつも、彼の申し出に了承する。いまだ彼に対する恐怖は心にこびりついており、佑から逃げ出したい、という気持ちもなくはなかったが、断るための口実も見つからなかった。それに、ここで彼に背を向けてしまえばもう一生、目を合わせて会話をすることがで

きなくなるのではないか、という不安がレイの心にじわじわと焦りをもたらしていた。

自分は佑に嘘を付いている、騙しているという事実がレイの胸を否応なしに絞めつける。私は怪人です。あなたが憎むそれと、まったく同位の存在です。

そうはつきりと言えたら、どれほど楽だろうと思う。だが、真実を告白する勇氣は持てなかった。怪人の肉塊に容赦なく剣を突き立てるフェンリルの姿、そして怪人の向けたレイを恨むような眼差しが頭から離れない。もし正体が彼にばれてしまえば、自分は一体どうなるのか想像することすら恐ろしかった。

ホームに降り、行きとは別の電車に乗った。車窓を眺め、しばらく乗ること数十分。レイは佑に連れられるがままに今まで降りたことのない駅に降り立った。彼が言うには目的地までは、ここから少し歩くらしい。

高いビルの少ない、都内でも比較的閑静な場所らしかった。歩道と車道とが色の薄い白線だけで区切られた幅の広い道を歩く、両側には弁当屋や薬局など、老舗らしき個人商店が軒を連ねていた。都心のスクランブル交差点に比べるとはるかに歩きやすい。

金属バットがボールを叩く、軽やかな音色が空に爆ぜる。前方に高いネットによって区切られた学校のグラウンドが見えた。どうやら野球部の練習中のような。快活な声が夏の空気に響くのは、なんだか聞いていてひどく心地よかった。

「でもさ」

グラウンドに沿った道を歩いていると、数歩前を行く佑が歩みを緩め、そう口を開いた。レイに歩幅を合わせてくれたのだろう。佑が隣に並んだ事で、レイは身を強張らせた。彼と少し距離を取って歩いていたのは、意識的にとった行動だった。心を疎ませながら、恐る恐る、彼の方を見やる。

「まさかマスカレイダーズがレイちゃんを殺そうとするなんて、思いもしなかったよ」

佑は前を向いたまま言った。レイは佑を一瞥し、それから目を伏せる。マスカレイダーズの罠にはめられ、危うく死にかけたということは、1週間ほど前にすでに佑に話してあった。レイはまだ腕輪の感触の残る手首を指で撫でながら、眉をひそめた。

「私もです。なんだかんだいって、あの組織のこと、信じてましたから……シヨックですね」

「みんな今、どこにいるんだろう」

「さあ……船見の家はもぬけの殻で、ケータイも繋がりませんからどこかに隠しアジトでもあるんですかね。まあ、私はそんなもの知らされた覚えさえないんですけど」

「そつか……でもさ、いきなり捨てられるなんて、思いもしなかったよ。俺なんてまだメンバーの皆さんにも挨拶してなかったのに」

「それはいいですよ、別に。私を除けば他はみんな変態ですから。」

3割が変態で、4割が変人で、残りの3割が変質者で構成されている組織ですから。挨拶なんかしたら、毒されます」

「なんだそれ、恐ろしすぎる」

「驚いているところ悪いですけど、そこにはお兄さんも含まれてますよ」

「え、どこが？」

「それは自分の心に聞いてください……そういえばフェンリル、お兄さんに預けたままですよ。ゴンザレスさんは取りにこないんですかね。あんなに執着しているみたいだったのに」

やはり佑とはまだ向き合うことはできず、喋りかけてもどこかよそよそしい態度になってしまふ。佑はそれに気付いているのか気付かないのか、ああ、とレイの顔を見て頷いたあとで、困惑顔を作った。「それは俺も気になってた。まあ、これがマスカレイダーズとの最後の繋がりでだし、そのうち回収しに来ると思うけど……ま、絶対渡さないけどな」

佑はポケットからフェンリルのプレートを取り出し。その目には微かな怒りが帯びている。しかし先ほど怪人に向けた時のような憎

悪に取りつかれたものではなく、純粹な義憤からくるものであることとはつきりと分かって、レイは思わず佑の顔を見つめた。

「来たら言い返してやるんだ。なんでこんなことをしたんだって。レイちゃんを殺そうとするなんて、酷過ぎるよ。絶対に許せない。こんなこと……絶対に」

フェンリルを握る手を佑は震わせる。彼の怒りに間近で触れ、レイは思わず顔をあげた。佑がマスカレイダーズに酷い仕打ちを受けたという話は聞かない。そればかりか佑にとってあの組織は、悠を守るための力を差し出してくれた、いわば救世主のような存在だったはずだ。

それなのになぜ佑は額に青筋を立ててこれ程までに憤慨しているのか、とレイは不思議に思った。だが、すぐにその意味に気付く。彼はレイのために心を燃やし、身を震わせ、怒ってくれている。

思えばマスカレイダーズに殺されかけたという話は佑にしてみれば証拠すること、それは自分を助けてくれた組織に対する侮辱であり、信じ難い話であり、妄言として言い捨てられたとしてもおかしくはなかったはずだった。だが、彼は怒ることもなく、疑うこともなく、すんなりとレイの話を信じてくれた。

彼の氣遣いに、ようやくレイは気付く。思わず頬が綻ぶのを感じた。

「……ありがとうございます」

暗く翳った心に、ふわりと胸に舞いこんだ温かな感触を告げると、佑は怒りを収め、不思議そうに目を丸くした。

「え、なにが？」

自分のために怒ってくれていることが、自分を信じてくれていることが、レイにはたまらなく嬉しかった。だがそれを言葉にするのも何だか気恥かしく、レイは佑から視線を逸らすと、空に目を細めた。

「別に。なんでもないですよ」

知らず知らずのうちに頬が緩む。佑は隣でまだ釈然としないよう

な顔をしていたが、「ま、いつか」と呟くと、彼も唇の端から息を吐きだすようにして笑った。

久しぶりに佑との穏やかな時間が帰ってきたような気がした。佑を騙している事に対する罪悪感も、彼に対する恐怖も、絶えずレイの胸を突き刺している。こんな和やかな時間が長く続かないことは分かっている。しかしそれでも、今だけは佑と過ごす時間を大切にしたい。レイは心からそう思った。

次第に周囲を構築する景色は、下町のような風情からやがて、自然の多い並木道へと移り変わった。虫や鳥の鳴き声が耳元を心地よく撫でていく。木でまわりを囲まれているためか、蒸し暑さも若干ではあるが収まっている。穏やかでまるで時間の概念を忘れてしまふかのような雰囲気、この場所には漂っている。そしてレイは自分がここに至るまで、いまだに佑から目的地を聞いていない事に気付いた。

林を切り開くようにして伸びる1本の道を2人で並んで歩く。自転車に乗った老人や、犬の散歩をする女性などがすぐ横を通り過ぎていく。

風がそよぎ、頭上の葉がかさかさと言をたてて揺れる。地面を滑るその風の匂いに、レイは突然、記憶を喚起された。木漏れ日が2人を照らす。少し離れた場所から車の駆動音が聞こえてくる。夏の気温が体をじわりと湿らせる。

——しかし静かな場所だよなあ。マイナスイオン出まくりってどうかさ。こんなところに怪人の手がかりなんかあるのかよ。

突然頭の奥の方から声が聞こえてきて、レイは思わず立ち止りかけた。実際には少し躓いただけで歩みに滞りはなかったのだが、それでもひどく動揺したのは確かだった。

この林の中に入ったあたりから、レイは自分が前もここに訪れたような気がしていた。だが思い出せず、気のせいだと納得しかけたところで、何の前触れもなく閃いた。

頭にバンダナを巻いた、横柄だが嫌味のない喋り方をするあの男

の顔が想起される。前に来た時は、彼の走らせるバイクの後ろに乗っていたから歩くのとはまた感覚が違っていたために気付かなかった。

「もしかして、ここは……」

完全に記憶に火が灯り、レイが呟いたその時、その店は視界に現れた。道に寄り添うようにして得られた、下生えの短く刈り取られたそのスペース。その少しだけ奥まったところに、一軒の喫茶店が見えた。

『喫茶店 しろうま』

ゴンザレスに命じられ、悪魔の娘——華永あきらを観察するために、レイと秋護が訪れた店。その中にいた華永あきらと、彼女の友達の花楓という少女と、なぜそうなったのかの経緯はあまりよく覚えていないが、黒ひげ危機一髪で遊んだ事は記憶に新しかった。

この店の前で立ち止まった佑は、レイの呟きを耳に捉えるなり、目を見開いた。

「この店、知ってるの？」

「ええ、まあ……」

驚いたのはレイも同様だった。まさか佑にこの店に連れてこられるとは思いなかった。

以前、マスカレイダースの任務でここに訪れたことを説明すると、佑は険しい表情で「やっぱり」と低い声で頷いた。レイは佑のその反応に、純粹な疑問を感じた。

「やっぱり？」

「俺さ……ちょっと前まで、ここに住んでたんだよ」

「えっ」

レイは改めてその店名通りの白い外観をもった、瀟洒な喫茶店を見上げる。よく見ればドアや窓ガラスのあたりの壁だけが妙に新しい。どうやらつい最近改修されたようだ。この店のドアを藍沢秋護が蹴破ったことを思い出し、なぜか忸怩たる気持ちになる。

「俺、悠が入院している間、親父の知り合いのところに下宿してた

って前に言っただろ？　それが、ここだったんだよ」

佑は店を指差し、小さく笑んだ。そういえば以前、悠が入院している間、佑は今住んでいる家ではなく、父親の知り合いのところで世話になっていたと言っていた覚えがある。

「ははあ」

しかし、それにしてもまさかその下宿先がこの店だったとは思ってもよらなかった。三角の屋根を仰ぎながら案外、世界も狭いものだな、と感慨深く思う。しかしふと佑に視線を転じ、店を見つめる彼の目に悲しみの陰が射しているのを見つけると、そんな気持ちは一瞬で吹き飛んだ。

レイの自分を見る視線の意味に気が付いたのだろう、佑はレイの方を向き、それから表情を強張らせた。

「実はさ、オウガと戦ったあと、俺はここに連れてこられたんだ。」

……この家は、すでに怪人に乗っ取られてる。そう、言われてさ」

レイは目を剥いた。改めて『しろうま』に目をやった。長閑な風景を背負い、純朴なまでに佇立するその建物は、怪人などという不穏な単語とは無関係であるような気がした。

「俺も最初は半信半疑だったんだ。だけど、実際行ってみたら、それは本当だった」

佑の声がひび割れていく。いつ砕けて破片をばら撒き、あらゆるものを傷つけてもおかしくないほど、そしてそれが許されるほど、彼の声音は後悔に歪みきっていた。

佑はため息をついた。熱の孕んだ大気に重圧を加えるような、淀んだ呼気だった。

「怪人はいた。この家の人が……襲われてた。だから俺はフェンリルになって、戦った。それで」

言葉の終わりのほうは消え入るようだった。彼は宙に浮いた言葉の先を委ねるように、包帯の巻かれた自らの左手を一瞥する。レイもつられるように彼の傷ついた箇所視線を移し——慌てて目を逸らした。

「その人たちは、どうなったんですか」

この家の人たち、というのだから、おそらくそこに該当するのはこの喫茶店の主人なのだろう。任務で行った時は、偶然出払っていたようで会うことはできなかったから、その人物の顔も名前もレイは知らなかった。そしてもう1人。華永あきらと一緒にいた少女、楓葉花もそこに含まれるかもしれない。あきらは葉花のことをこの家の人、と紹介していた。彼女と佑が同じ屋根の下で暮らしていたという事実にはレイは少しだけ、動揺する。

「分からない」

佑は短く言った。そしてドアの脇、佑が輪の壁に布テープで貼られている1枚の紙に目線移す。そこには臨時休業の四文字がはつきりと記されていた。ワープロ打ちの、やけに機械的な字体だった。この木漏れ日を宿した温かみのある風情の喫茶店に、その掲示物はひどく不釣り合いな気がした。

「でも、ここにいないことは事実だよ」

佑はドアノブに手をかけ、力をこめてそれを動かそうとした。だが無骨な音が返ってくるだけで、そのノブが回ることはなかった。

佑はここに来てから何度目かのため息をつき、そしてドアから離れた。

「鍵とか、持っていないんですか？　もしかしたら帰ってきてるかも」

「それは多分、ないよ。鍵は持つてるけど、いいんだ。ただここに来て、もう1度確かめたかっただけだから」

「でも……」

「多分、連れて行かれたんだ。みんな。マスカライダーズか、それか……怪人、に。分かったんだ。多分そういうことなんじゃないかって。この家にもう誰も帰ってこないことくらい、分かっていた、はずなんだ」

寂寥感を言葉に滲ませる佑を前にして、レイは彼がなぜマスカライダーズことを先ほどから気にかけていたのか、ようやくその本当の意味を理解した。

マスカレイダーズが佑のもう1つの家族を、大切な人々の身柄を確保している、そんな一縷の望みに彼は賭けたいのだと思った。それがもしただの虚しい期待に終わっても、それでも、手掛かりにはなる。何も分からず、暗中模索を余儀なくされている現状に比べれば、たとえ望まぬ結果が届く事になろうともはるかに救われるだろう。

しかし今の状況ではレイたちに彼らの安否も、そして居場所さえも確かめる術はない。佑もそれは承知しており、それゆえに、無力を痛感しているに違いなかった。

そして怪人が悠のみならず、佑から彼にとってかけがえのない人々たちを奪い去ったという事実は、レイをさらに暗澹たる気分にした。

「俺が戦ったせいで、この店、かなり壊しちゃったんだけど。いまは大分直ってる。マスカレイダーズがやってくれたのかな」

「多分、そうだと思いますけど……」

「だったら、ちょっとは希望が持てるかな。マスカレイダーズのことろにいるなら、まあ怪人よりはマシかなって思うんだけど」

「……そうですね」

ゴンザレスの本音を知ってしまったレイにとっては、いまやマスカレイダーズも式原たちと同様にまったく信頼の置けぬ組織へと成り下がっているのだが、確かに式原たちと比べればまだ信用には足りる気がした。

マスカレイダーズは自分たちと怪人の存在が衆目に晒されるのを何よりも嫌った。秋護らを使って、戦いの爪跡の隠ぺいに力を注いでいたくらいだ。だから、店をわざわざ元の通り補修したのも、おそらくここで起きた異変を人々に悟らせないようにするための配慮なのだろう。

だが、佑と怪人との戦いは規模が大きかったのか彼らにしては珍しく、破壊の跡を完全には隠しきれなかったようだ。

レイは背後を振り返った。道を挟んで向かい側、店とちょうどあ

い向かいの位置にある木々は根こそぎ倒され、その地面は広範囲に渡ってめくれ上がり、まるでその周囲だけ大災害に見舞われたかのような様相が露呈されていた。

レイの視線の先を佑もまた窺い、そして目を細める。再び店に向き直った時も、その表情は変わらなかった。

「なんでこの場所が怪人に狙われたのか、ずっと不思議だったんだけど、レイちゃんの話聞いて、やっと分かった。ここは最初から奴らに狙われてたんだな。ここは、そういう場所だったんだな」

佑の瞳が険しい色を帯びる。訂正するならば、ゴンザレスたちマスカレイダーズが狙いを定めていた華永あきらは佑の恨む怪人とは別の存在なのだが、そこを注釈したところで何が変わるとも思えなかった。レイもあきらか、大きな括りでは異形の存在である事に違いはなく、そして佑がそこに差異を見出すことは想像できなかった。佑にとって肝要であり、許容できないのは、この世界に異形が跳梁しているという事実なのだから。

「もうあいつらのせいで、滅茶苦茶だよ、全部。本当に、返して欲しいよ、みんな」

そう嘆く佑の声は切実で、その痛みが伝わるようで、レイの胸もぐつと絞めつけられるようになる。

「やっぱり……店、入って見たらどうですか？」

レイが言くと、佑は少し目の周りを赤くしながら、こちらに首を振った。レイは自分の胸に手を置きながら、努めて微笑みを口元に宿す。

「せっかく来たんだし。何か、新しいことが分かるかも。それに、そんなに大切な場所なんだから、やっぱりもう1度、ちゃんと見ておいた方がいいですよ。なんかうまく言葉にできなくて、すみません」

佑は唇を結んだまま黙った。レイは上目づかいに、そつと彼のそんな表情を窺う。鳥が木の上から飛び立ち、空気が震えるような音が周囲に鳴り響く。背後を通りかかる自転車をやり過ごしてから、

佑は店に目をやった。

「……そうだな。せっかくだし、ちょっと、入ってみようかな」

「はい。それが、いいと思います。私はここで待ってますから」

ポケットを探り、小さな銀色の鍵を取り出す佑を見つめ、レイは今度は心から微笑んだ。佑がかつて住んでいたこの思い出の場所で、何か希望を見つけることができたらいと願う。佑がレイのために胸を痛めてくれたのと同じように、レイも佑がちょっとしたでも笑えるように祈ってあげたい、そう思った。

彼に対する恐れはあるけれど、彼を騙している痛みも感じているけれど、彼のことを想っていたい気持ちもまた、レイの中では真実だった。

佑が店の中に消えると、広場にはレイ1人だけになった。振り返り、あたりを見回す。そこでふと気配を感じた。左前方のあたりだ。そこには木々に紛れるようにして植え込みが並んでいる。

誰かに見られているような、許可のない観察を受けているかのような、何とも嫌な視線が肌の上を這う。そちらに目線だけを送ると、店のすぐ隣にわだかまる植え込みがわずかに揺れたように感じた。

誰かがいる、と直感的に思った。それは怪人の反応ではなく、鋭い視線に射抜かれるような違和感だった。

「誰……？」

尋ねても、もちろん反応はない。レイは今度は目線だけでなく顔ごとそちらに向けた。茂みは沈黙している。だが、そこに誰かが潜んでいるという確信だけは変わらずにあった。

「誰なの？」

レイは影を鳥の形に変えると、怪人としての本能を揺り起こしながら、植え込みに足を進めようとした。そして一步、距離を縮めようとしたその時、茂みが大きく揺れた。

風はなかった。ただがさがさと大きな音をたてて葉が擦れあい、それから植え込みが根元ごと左に大きく傾いた。

その時、レイは植え込みの上に過る白い影を見た。それは小動物

のような形を成していた。その影が木々の暗がりを貫き、通り過ぎたあとに鮮血が舞った。どさりと、質量のある何かが地面に落ちる音がする。レイは数秒黙りこみ、今日の前で起きたことを頭の中ですばやく整理してから、植え込みに近づいた。

恐る恐る、しかし躊躇する間も惜しんで、植え込みを上から覗きこむ。そしてレイは小さく目を見開いた。

「なにこれ……」

思わず声が漏れ出る。吐き気がこみあげ、思わず両手で口を塞いだ。

覗きこんだ植え込みの向こうに、首のない人間の体が2つ転がっていた。

どれもまた千切りとられた切断面から生々しく、おびただしい量の血液が流れ出している。どの体も高価そうなスーツを着込んでいた。2つの死体は頭部を失っているにも関わらず、まるで生にしがみつくなかのように、胴体をびくりびくりと痙攣させている。

体型などから予測するに、2人とも性別は男らしかった。逆にいえば、首から上を略奪された彼らから性別を知る方法はそれ以外になかった。寸断されたすぐ真下に残された彼らの首筋には、人間の目を象ったタトゥーが彫り込まれている。その目は真紅の液体で染まり上がっていた。

レイはこの凄惨たる光景を前に、ただただ、絶句する。

彼らの首は一瞬で擦じり切られている。およそ人間業ではなかった。レイは先ほど見た、この植え込みの真上を横切っていた白い影を思い出す。おそらくこの惨状は、あの影の仕業だろう。そしてレイはその影の形に、自分の知己するあるものを連想していた。

あれは、まさか。

その時、レイの思考を遮るかのようにまた白い影が左の方から過った。その小柄な、獣の形をした何かはその両腕で素早く男2人の足を掴むと、ずるずると林の奥に引きずり始めた。凄まじいスピードだ。レイは身を凍らされたような思いで、思考も意識も追いつか

ず、その光景をじつと眺めているしかない。

その小柄な獣は両腕に男を抱えたまま一度だけレイを振り返った。日陰だったのでその相貌は薄ぼんやりとしていたが、確かにそれはレイを見つめ、そして——笑いかけてきた。

レイが呪縛から解かれたのは、その白い獣も、2人の男の死体もすでにどこかへ行つてしまつた後だった。レイはふらふらと後ずさり、『しろつま』の壁に背を預けた。

そんなわけではない、と心の中の自分が懸命に否定している。だがそれを上手く呑み込む事ができない。あの白い影。2人の男を殺し、その死体を持ち去つた、あの小動物然とした輪郭。大きな耳、前に突き出した鼻。そして、そのつぶらな瞳に、レイは確かに見覚えがあつた。

そんなわけではない。しかし、あれは。

「まさか、ディッキーなの……？」

声に出すと、さらにその確信はレイの中で強まつた。だがディッキーはレイを庇つて死んだはずだ。そして、たとえ生きていたとしても、人間の首をねじ切るような、そんな残酷な事をするはずがない。それを分かつていても、それでもレイはあの白晳の影に自分の愛する、今は亡き息子の姿を重ねずにはいられなかった。

鎧の話 35

柳川の遺したレシートが発行されたであろうコンビニには、歩いて10分足らずで到着した。駐車場のない、国道に面した店だった。雑踏の中に気配を探るが、怪人の気配はない。これほど人通りが激しく、賑やかな場所では怪人もそう簡単に姿を見せられないだろう。日中、人ごみの中にいる限りは、怪人に狙われる心配はなさそうだった。

店に向かう途中で靴屋に寄り、サンダルを購入して、片方だけの

靴はゴミ箱に捨てた。ついでに帽子も買っておいた。その場しのぎにしかないかもしれないが、怪人に顔が割れている以上、素性を隠すに越したことはない判断したからだ。だから直也はキヤップを、ライは麦わら帽子を選んで、被っている。日除けにもなり、一石二鳥だ。

コンビニの中はよく冷えていた。それほど広くはないスペースの中に、2、3 人の客の姿が見受けられる。本の品出しをしている、この店のアルバイトであろう少女がこちらを見て、いらっしやいませ、と笑顔を振りまく。続けてレジの内側に立つ中年の男も、同様に朗らかな挨拶をしてくれる。直也はおそらく店長であろうその男に会釈を返した。

「おい、なんか好きなもん買ってやるから。選んでこいよ」

自動ドアの前で棒立ちになり、きよろきよろと店内を見回すライに、直也は声をかけた。要領の得ないような表情を浮かべるライに直也は眉を上げた。

「聞くだけ聞いて、何も買わないで出るわけにもいかないだろ。俺は生憎、それほど欲しいもんはないから。菓子の一個や二個くらいなら、買ってやるよ」

直也がそう提案すると、ライは目を輝かせた。その表情からはまったく緊張感を窺うことができず、直也は肩を落とす。

「いいの？　じゃあちよつと探してくるけど」

「ああ、そのうちに俺は聞きこみしとくよ。その代わり千円以内に抑えろよ。いいか？」

分かったよ、とぞんざいな口調で言い、ライは店の奥へと大股で進んでいく。彼女の後姿を見送り、直也はレジに客が立っていることを確認すると、雑誌コーナーの方に足を向けた。

「なあ、ちよつといいかな？」

直也は雑誌コーナーにいる女性アルバイトに声をかけた。あきらと同じ年くらいの少女の顔がこちらを振り返る。鼻が大きく、目が細い。美人とはいえないが、その笑顔は明るく、気だてのよさそう

な雰囲気を纏っていた。

「はい、どういたしましたか？」

屈めていた腰を起こし、少女は頬にえくぼを作る。直也は尻のポケットに手を入れ、中のレシートを握りしめながら尋ねた。

「今日の朝なんだけど、君はこの店にいたかな？」

少女は直也の質問に不思議そうな表情を浮かべた。それから店の時計に目をやり、申し訳なさそうに眉を曲げる。

「すみません。私はさっき来たばかりなので……あの、なにか店の者にご用事でしょうか？」

「いや。ちよつとその時間帯にこの店に来た人を探してて。柳川健悟さんっていうんだけど、知ってる？」

柳川の名前を出すと、不審げな色を纏っていた彼女の顔がパツと明るくなった。

「あ、柳川さんのお知り合いですか」と声を高くする。どうやら知り合いらしい。直也は勘が的中したことに心の中で快哉を叫んだ。

「警察の、ですよ。いつもうちの店に来てくれるんですよ」

店長、と少女がレジの向こうで揚げ物を調理している男に呼びかけた。その男がこのコンビニの店長らしい。店長はこちらを見て目を丸くすると、レジ台を迂回し、こちらにやってきた。かしこまった態度で直也と少女を見比べる店長に、少女はいきさつを簡単に説明する。

「ああ、柳川さんですか」

瘦身の男は眼鏡を指で押しあげながら、直也の方に向き直る。胸には少女が呼んだ名の通り、『店長』と書かれたネームプレートが提げてあった。

「確かに今日の朝はいらっしゃいましたよ。仕事のある日は毎日です。家が近所なんですよ、柳川さん」

なるほどな、と直也は納得した。だからこそ、柳川はこの店のレシートをポケットから探り出したのだらう。ここが彼にとって行きずりの店ではなく、馴染みの深い場所であるという事実が、やはり

柳川は直也に何かを託したくてレシートを残したのだということを確信させた。

直也は尻のポケットから財布を取り出すと、そこから名刺を抜いた。店長に手渡す。少女がその脇から、名刺を覗きこむようにした。そして2人とも目を瞠り、それから直也を見た。

「なるほど、興信所の方ですか」

「俗にいうところの探偵つてやつです。まあ、漫画の世界みたいに恰好よくはいかないですけど」

直也は簡潔な自己紹介を告げると、それからいきなり本題を切りだした。

「柳川さんには仕事で色々お世話になっていまして、今回もその馴染みでちょっとした相談事をされたんです。でもそれから柳川さん、忙しくなっちゃったみたいで、なかなかまとまった時間をとれなくて」

フィクションの世界ならまだしも、探偵と警察が関係を密にし、1つの事件の解決を図るといっているのはあまり現実的ではないが、一般の人々に説明をするのにはそのくらいオーバーなほうが逆に信憑性を生むような気がした。探偵という言葉の響きに、ほとんどの人が持っているイメージが、フィクションのそれだろうからだ。

直也は淀みなく2人に事情を説明しながら、頭をフル回転させ、次の言葉を捻りだす。柳川が死んでいて、自分はその死体をも発見しているという事実を、今ここでは伏せなければならぬ。あまり事態を混乱させたくはなかった。事実の一部を隠蔽しながら、いかに不自然のない説明をするか。嘘の吐き方に細心の注意を払う。

「それで今日少したけ話をしたら、このあたりのコンビニの店長に少し打ち明けておいたから、概要だけでも知っているかもしれない。みたいなこと言われたんです。まあ、正直眉つばものですし、もつとちゃんと時間がとれたら、柳川さんに聞きなおそうと思っているんですけど」

「ははあ」

すみません、とレジの方から男性の声が聞こえた。Ｔシャツ姿の若者が、レジ台の上に籠を置き、こちらを振り返っている。アルバイトの少女は直也の話に興味があるような態度をみせながらも、明るく返事をし、レジの方に駆けだしていった。

「でもひよつとしたら何か話してなかったかな、って思いまして。どんな小さなことでも構わないんですけど」

いかがでしょう、と直也は男に尋ねた。いかがでしょう、と言われても、とても言いたげな顔をして男は鼻白む。名刺と直也とを交互に見比べるようにしている。

「確かにこの時間、レジを打ちながら一言二言会話はしましたけどね。世間話でしたよ。当たり触りのない」

「別に今日じゃなくてもいいんです。ここ一週間くらいの……こんなような事件を追ってる、とか、こんなようなことに関わって、とか」

「そう言われてもね……」

男は腕を組み、首を傾げる。悩んでいる様子だ。この調子だと本当に記憶にない可能性が高かった。まさかここで行き止まりか、と直也は暗澹たる気分になる。結局、柳川が死に際に何を伝えたかったのか分からなかった。それとも初めから、直也の解き間違いだっただろうか。ダイニングメッセルジなどではなく、レシートを握っていた意味は他にあったのではないだろうか。

思い悩む男の前で、直也もまた考えを募らせる。その時、直也は背中に固いものがあたる感触を覚え、振り返った。

「おい、おっさん。これでいい？」

視線の先に買い物籠の角を直也の腰あたりにぶつける、ライの姿があった。プラスチック製の籠の中には、アニメの絵が描かれたウェハースチョコらしきお菓子が大量に積まれている。文字通り、山のようだった。

「おい、それで千円か？」

「がつてん！ 半額セールやってたから、買い占めた」

「マジかよ」

疑いをこめてライの得意げな顔を見やり、それから確認の意をこめて男に視線を転じる。男は腕組を解き、苦笑を浮かべながら「本当ですよ。在庫処分セールの対象です」と言った。

「ほらな、これでギリギリ1800円なんだぜ！　どうだおっさん、参ったか！」

「待て、全然ギリギリじゃねえ！　軽く予算オーバーじゃねえか！　お前の頭は何進法だ！」

直也はその山盛りのお菓子を見下ろし、ただただ脱力感に襲われる。

しかし寝込んでいる間、ライに身の回りの世話をしてもらった以上、あまり彼女の要求を無下にすることは憚られた。直也はしばし立ちつくしたあとで観念し、がつくりと肩を落とした。直也が抵抗できないことを分かっているなら、彼女はとんだ策士だ。直也はため息をつく、財布を取り出し、そこからなけなしの金を取り出した。千円札が2枚、ちょうどあった。

「ありがと。あ、お菓子はおっさんにあげるよ。私はシール担当だから」

「別にシールに興味はないけど、なんかすごく不公平なものを感じる」

直也の手から金を受け取り、レジに向かうライとほとんど入れ違いに、アルバイトの少女がこちらに近づいてくるのが見えた。レジ台の上に乱暴に籠を置くライを背後に気にしながらも、少女はいまだ頭を捻っている店長の脇に立った。

「店長。そういえば最近、柳川さん、田辺さんのことを凄く気にしてましたよね。私もちょっと怪しいなあって思ってたんですけど」

男は少女を肩越しに振りかえり、戸惑いを形相に宿した。直也はそれを見逃さなかった。少女はまだ何か言いたげではあったが、レジのほうで「ヘイ、カモン！　ヘイカモンレジ！」と騒ぎ立てるライに辟易して、レジの方に再び引き返していった。気づけば、直也

たち以外に客の姿はなくなっていた。

「田辺さんっていうのは？」

少女が口にした人名を、直也は男に素早く尋ねる。男はちらと店の外を見るようにし、それから観念したように頷いた。

「この辺りに住んでる独居老人です。今年で81になるんだっけかな。去年傘寿を迎えたって言ってたから。柳川さんはね、結構面倒見がいいんで、地域の人たちにうけがいいんですよ。田辺さんもその1人で、新米時代から付き合いがあるそうですよ」

そうなのか、と柳川の人柄を思い出し、納得をすると同時に、多くの人々から熱い信頼を受けていたその警官はもうこの世にいないのだという事実が改めて心に沁みた。ライの言葉を借りる形にはなるが、本当に心の底から残念だと思う。

「その田辺さんはね、結構厳格な人で、私も店のことでしょっちゅう怒られてるんですけど、柳川さんには心を許していてね。柳川さんもそれを分かってるから、結構ちよくちよく家に行くようなんですよ。老人の1人暮らしは何があってもおかしくないですから。警察として地域住民を守る使命、みたいなのも感じていたんですよ」

「まあ、確かに悪い事じゃないし、別にそういう関係ならちよくちよく家に窺う事に不自然さはないですけど。でも、そのどこが変な話だっていうんです？ 俺には単なる美談に聞こえますけど」

レジ台を介してライと向きあい、やり取りをしているアルバイトの少女は田辺老人への柳川の気遣いに対し、怪しい、という言葉を使っていた。男の話を聞くに、どうも彼女の発したその言葉は似合わないような気がする。

男は一瞬、迷うような拳動をみせたあとで、胸に抱えていたわだかまりを吐き出すように、直也の顔を見て言った。

「一昨日だったかな。久々にその田辺さんが店にいらっしゃったんですけど、何というかね。非常に、明るかったんですよ」

「明るかった？」

「ただ明るいただけならいいんですけど、気分が昂揚してる、といいましょうか。田辺さんっていうのはさっきも言ったようにとにかく厳格な人でしたから、少しでも何かが気に入らないと怒鳴り散らすような、そんな人だったんですけど。この前見たあの人は、とにかく人が変わったように浮足立っててね。お客さんにこんなことというのは失礼ですけど、少し、気味が悪いくらいだったんですよ。私やアルバイトの彼女も、どうしたんだろう、って心配をするくらいに」

直也は顎を撫でつけた。堅物なことでは有名な老人の突然の豹変。それは確かに異変、と言うべきことかもしれないし、不審に値するものなのかもしれない。だが、直也にはそれらと黒い鳥の痣との関係性がまったく見出せなかった。

「柳川さんも、それを気にかけてた？」

「はい。今日もちらっとだけ、その話をしましたねそういえば。田辺さんはどうしちゃったのかねえ、って訊くと、気の迷いだからすぐに戻るだろう。あんたもしばらくは叱られずに済みそうで良かったじゃないか、って笑いながら言ったりしてましたしね。最近はその人のことを、それまでより余計に気にしているみたいでしたよ。しかも田辺さん、妙なことも言っていましたしね」

「妙なこと？」

直也は男の言葉の切れ端を掴み、眉根を寄せた。店長はええ、と頷く。

「人は生き返る。また俺はあいつらと会える。一緒に旅行に行くんだ——そんなことをおっしゃってたんです。すごく陽気な感じで」

人は生き返る。

その言葉に直也は、不思議な感触を覚えた。何か踏み入ってはならない領域に忍び込んでしまったかのような、怖気を伴う違和感。真っ先に頭に浮かんだのは、死体を怪人に変える白衣の男の姿。そして鉤橋そらと同じ顔をした、あのペンギンの怪人の姿だった。

「……あいつら、っていうのは？」

その不穏な感覚を顔に出さぬよう努めながら、直也はさらに尋ね

た。店長は沈鬱な表情を浮かべると、周囲を気にしてから、直也の耳に口を寄せた。

「実はね、1週間くらい前に田辺さんは身内を亡くしているんですよ。私も少ししてから知ったんですけどね。田辺さんはさっき言ったような性格ですから、家族にも結構厳しくあたっていたらしくて、それでみんな田辺さんを置いて、田舎にひっこんでたんですよ。息子の嫁のほうの実家って言うてたかな。奥さんも4、5年前に亡くしてね。それでもって息子夫婦とも折り合いが悪いもんだから、田辺さんは一人ぼっちだったんです。まあ、嫌っていたのは息子夫婦の側だけで、田辺さん自身はそれほど目の敵にしていたわけではないんですけどね。正月とかに息子たちが挨拶に来た時なんかは、なんだかんだ言いながらも嬉しそうだったし、孫も可愛がってましたから」

「その状況で、さらに身内を失ったってわけですか。亡くなったのは、息子ですか？ それとも孫？」

どちらにしても悲劇には違いない。齢80超えた自らよりも、ずっと年下の家族に先立たれてしまった孤独な老人の事を思うと、それだけで胸が痛んだ。そしてその事象を加味したうえで、先ほど聞いた最近の田辺老人の様子や言動を思い出してみると、確かにそれは異常と呼ぶにふさわしかった。

“人は生き返る”

だが、男から返ってきた言葉は、さらに直也の不審を膨張させた。

「いえ」 男はかぶりを振った。それから暗澹としたものを含んだ眼差しで直也を捉え、指で4の数字を表した。「全員です」

直也は目を瞠った。男は苦痛なものを喉奥から捻りだすようにして、顔を歪めた。その表情は、今にも泣き出しそうだった。

「息子夫婦の家が火事で燃えて。原因は煙草らしいんですけど、孫2人も巻き込まれちゃって。だから全員です。田辺さんの家族は、一晩で、全員亡くなってしまわれたんですよ」

『しろつま』から歩いて駅に戻り、電車に乗って、しばらく沈黙の時間を過ごした。佑と2人で車両に揺られている時間がひたすらに長く感じた。佑からいくつか話しかけられ、レイもその度応じたものの、正直、自分がどんな返答をしたのか、まるで記憶にない。彼が白い紙袋を片手に持っていたことが、なぜか鮮明に脳裏を過る。先ほどの一件については、佑に話していない。話題に出したとしても死体も小動物の影もすでない以上、どうにもならないだろうと判断した。それに、あの白い影のことを話せばまた佑が興奮し、憎しみの顔に戻るのには目に見えていた。

あの殺された男たちは何者だったのだろうと考えを巡らす。レイを見張っていた以上、ただの通りすがりとは思えなかった。だが、なぜ彼らが殺されたのかもレイには見当もつかない。

レイはあの小動物の影を、自分でも分からぬうちにディッキーと重ねていた。ディッキーはすでにこの世にいないのだということは当然承知している。しかしそれでも、あのシルエットは自分の愛する息子にしか思えなかった。確信もなく口で説明できる要素を持ち合わせてはいないが、言うなれば、レイの心にある母親としての誇りがそれを告げていた。

だが、あらゆる意味でそれはあり得ないことも、レイの冷静な頭は理解している。しかしそれを分かっているからこそ、レイは尚更に悩んでいた。事実でないのであれば、この頭に浮かぶ確証はどこからやってくるものなのか、どうにも判断がつかない。それは希望的観測だとか、予感だとか、そういった生易しいものではなく、もつと捉える形のある、絶対的なものとしてレイの心中に君臨していた。なぜそこまで、自分があの影をディッキーだと確信できるのか、それが分からない。

愛する息子の面影を持つあの影が、佑の討伐対象に加えられてし

まうことをレイは恐れた。あの白い家での怪人のように、佑によってディッキーが腕を切断され、両足をちぎられることを想像すると、それだけで身を切られるような思いになる。

そんなことをずっと電車の中にいる間も考えていたので、佑の言葉への返答も全ておざなりになっていた。茫然と、まるで現実感を欠いた空間の中を漂っていた気分だ。

だから電車から降りて駅のホームに足を着け、階段を昇り、改札をくぐろうとした時も、佑の声にまるで気がつかなかった。

改札を抜ける寸前でハツとなり、立ち止まり、振り返ると、紙袋を肩に担ぐようにしながら、柱に寄りかかってこちらを見ている佑の姿があった。物思いにふけていたせいで周囲を気にする余裕もなく、1人、先走ってしまったことを今更ながらに気付いた。彼のところまで慌てて駆け戻る。軽く謝罪をしてから、雑踏の中で向き合った。佑は少しの間だけレイから視線を外し、口をもごもごとさせてから、視線を戻して、ようやく言った。

「もしかしてレイちゃん、怒ってる？」

彼の口から発せられたあまりに意外な言葉に、レイは瞠目し、その後で首を傾げた。

「だってさつきから怖い顔、してるからさ。ずっと目を合わせてくれないし。なんかいつもより、よそよそしいし。無理やり引っ張っていったのに結局、あの家で有益なことはそんなになかったから、怒ってるんじゃないかって」

佑は憂鬱を滲ませ、俯く。レイは小さく縮こまった彼の体を見つめ、何度か瞬いた。

「別にそういうわけじゃないです。あの場所教えてくれたことも感謝してます。ただ……」

怪人を八つ裂きにし、乾いた笑みを浮かべていたあの姿。何度も怪人に執拗に剣を突き立て、飛び散った肉を被っていたあの後姿を、レイは忘れられない。恐怖として心に深く刻み込まれてしまっている。いつか自分も佑に刃を向けられるのではということが、それが

いつか現実になるだろうということが、恐ろしくてしかたがない。

怪人を倒さなければ、という彼の言い分は理解できる。怪人たちによって悠を狙われ、彼の大切な場所も破壊された。佑にとっては絶対に許すことなどできない、斟酌の余地もない存在であることは承知している。現に怪人たちは式原に命じられるがままに人間を襲い、多くの命を打ち捨てている。その行いは間違いなく悪で、この世から淘汰されるべきものだろう。怪人は間違いなく、人類にとっては敵に値する存在だ。

しかしそれでも、レイはあのフェンリルによって屠られた怪人の悲しげな眼差しが忘れられない。一瞬でも佑の行いを非道だと思っってしまったのはおそらくレイ自身もまた怪人だからだ。人間とは違う。レイは怪人を憎みきれずにいる。“最高の怪人”という称号をこの身に刻まれている限り、レイにはその感情が付き纏い続ける。

どれほど一緒にいても、どんなに彼のことを想っても、レイが怪人で、佑が人間であるという種族の壁が間に立ちただかる以上、互いの心を通わすことなどできるはずがない。レイが怪人であることを知れば、佑のレイを見る目も一変するに違いない。

だが、レイはほんの少しだけ佑との間に見える、小さな光に思いを託したかった。悠の病室で約束を交わしたこと、白い家の前でレイを気遣ってくれたこと、レイのために本気でマスカレイダースに憤慨してくれたこと。彼からもらったたくさんの優しい気持ちを、レイは信じたい。価値観も考え方も種族も違うけれど、その壁を乗り越える奇跡が、起こって欲しい。それを願う。

「お兄さん」

雑踏の中で佑と向き合いながら、レイは彼の名を呼んだ。佑はレイをその大きな目で見つめてくる。レイはほんの少しだけ迷ったあと、結局、その問いを口に出した。

「もし、もしもですけど。私がお兄さんに大きな嘘をついていて、それがお兄さんを苦しめることになっていたとしても、それでもその時、許してくれますか？」

レイは言い終えると同時に、目を逸らした。彼の顔を、その答えが紡がれる口を恐ろしくて見ていられなかった。言葉を口に出したその瞬間から、レイはなぜ、こんなことを訊いてしまったのだろうと後悔を始めていた。

「許すよ」

だが、予想に反して、佑はそう短く言った。それは柔らかく、透明感を抱いて、レイの心にしんと沁み渡った。レイは弾かれるように顔をあげる。そこには殊勝な顔でこちらを見つめる、佑の力強い瞳があった。

「だってその嘘は、多分、俺のことを考えて、俺のためを思っついてくれた嘘だと思うから。レイちゃんは、人の事を傷つける嘘はつかないよ。悠のことほどじゃないけど、俺だって、そのくらいはレイちゃんのことを知ってるから」

そう、真剣に言葉を辿る佑に、レイは見惚れた。彼の言った一字一句が胸に沈み、泡を浮かばせながら心に浸透していくようだった。佑は照れたように笑ってレイから目を逸らし、背を向けた。「とにかく、じゃあ、ちゃっちゃつといこうぜ！」と、気恥かしい気持ちを吹き飛ばすような大声で宣言し、改札に足を向ける。

彼の声を聞いても、レイはまだしばらく、ぼうとしていた。聴覚は意味をなくし、またこの喧噪にも関わらず、レイの目は佑以外のものを捉えようとしなかった。意味もなく胸がカツと熱くなる。佑に抱いていた恐怖が、少しだけ遠ざかっていった。成り代わるようにして、空いた心のすき間に安堵が流れ込む。

レイちゃん、と佑が名前を呼ぶ声がようやく耳に届いたのは、それから30秒ほど経過した後のことだった。レイは身を震わすと、改札口の横に避けてこちらに苦笑を向けている佑のもとに慌てて駆けた。

やはり尋ねて良かった、と彼の背後にぴたりとくっつき、切符を改札に通しながらレイは思う。彼がはつきりと口にくれたその言葉で、どれほどの安堵を得る事ができたのか分からないくらいだった。

た。

もちろん、それは何も知らないからこそ言い放つことのできたセリフだったのかもしれないし、レイが怪人と知った瞬間、その主張は泡になって消え去ってしまうくらいに確証のないものなのかもしれない。実際、彼がどんな行動に出るのかは、その時になってみなければ分かるものではない。

しかし、今はそれでも嬉しかった。少なくとも佑はレイを見てくれている。信じてくれている。それが分かっただけで、希望を持っている気がした。

まだ不安は尽きず、未来が恐ろしくて仕方ないけれど、胸の重みが少しでも消え去ってくれたような、そんな爽快な気分をレイは徐々に手に入れることができた。

駅から出て、バイオリン教室のあるビルの前に行くと、すでに悠は待っていた。レイと佑の姿を見つけ、大きく手を振ってくる。やはり悠は可愛いな、とレイは浮かれた気分引きずられるようにして思った。

悠の背後には、背の高い女性が立っていた。ひどく痩せていて、まるでつまようじのようだ。髪の色は茶というよりも赤に近く、それはレイの頭にテレビで見たロックバンドのメンバーを思い出させた。その手首には小さな白い花の着いたアクセサリをくぐらせていた。その体から漂うのは、戸惑うほど強く、しかし柔らかな桃の香り。どうやら香水を撒いているようだ。悠からも同じ匂いがするのは、気のせいだろうか。

その女性に佑は恭しく頭を下げる。どうやらこの女性こそが、バイオリン教室の先生らしい。ふつくらとした頬を弛ませるその表情は何とも優しげで、レイは安心した。

「すみませんねえ、遅くなっちゃって。悠ちゃんがどうしても練習をしたかったというもんですから」

「いえいえ。悠は、どうですか？　ちゃんと、やれてます？」

佑が怖々といった風に尋ねると、女性は掌を叩き合わせ、よく通

る声を空に吐き出した。

「それはもう！ 上達が早くて、こちらが参っちゃうくらいですよ。お兄さんと同じで、才能があるのかしらねえ」

一緒に照れる悠と佑を遠目に見つめながら、その微笑ましさにレイもまた気分が弾む。悠も楽しくやっているようで、何よりだ。いい先生に巡り合えて本当に良かったとレイは自分のように思った。レイは悠の手に透明のビニール袋が握られていることに気付いた。その視線に気づいたのか、悠はビニール袋を持ち上げるようにして、恥ずかしそうに笑った。

「これ、先生が作ったやつなの。ちょっと、練習中に食べすぎちゃって……いま、お腹いっぱいなの」

鎧の話 36

直也は大きなコンビニのビニール袋を腕に提げたライを従え、田辺老人の家に向かった。

老人の家は店長の話していた通り、コンビニからそう離れてはいなかった。傘寿を迎えた人間でも徒歩で行き着く事ができる距離だ。直也はブロック塀に組み込まれた表札を確認し、それから開け放したままの門をくぐって敷地内に足を進めた。

門の向こうにあったのは鬱蒼と植物の生い茂る、どこか薄暗い空間だった。松を初めとして、直也が名前の知らないような木までもが左右にぎっしりと敷き詰められ、アプローチは人が2人並んで通るのがやっととなくらいに狭い。

等間隔に敷かれた飛び石の上を歩き、玄関の前に立った。傍らには寂れた犬小屋が置かれていたが、中を覗きこんでもそこに犬の姿は見受けられなかった。地面に垂れた鎖が、まるで干からびた毛虫のようにくしゃくしゃになって丸まっている。餌皿には砂が被り、蟻が這いまわっていた。

田辺家は見るからに古びた、木造の二階建てだった。何百年も前からこの地に鎮座し続けているかのような、落ち着いた蔵かさがある。その分、壁や柱も脆く、いつ倒壊してもおかしくはなさそうだった。

直也は隣に立つライに視線を向けてからチャイムを押した。だが、指先に返ってきたのが、何とも頼りない触感だったので直也は眉間に皺を寄せた。

手ごたえがないとでも言うべきか。試しにもう一度押してみるが、かすつ、と空気の抜けるような音がするだけで、何の反応もなかった。家の中に音が鳴り響いた様子もなく、このチャイムは外装だけを保ち、その実は壊れたまま放置されているらしかった。

何度か押してみるが、結果は同じだった。舌打ちをし、眉を顰める直也を見て、ライは頭の後ろで手を組みながら悪態をつく。

「古臭い家だなー。チャイムくらい直せよな。みんなが困るじゃないか」

「人の家の文句垂れるなよ。ここの爺さん、相当怖いらしいぜ。叱られないようにちゃんとしろよ。お前、ただでさえ礼儀をしらねえんだから」

「バカいうなよ。うちの父さんより恐ろしい人が、この世にいるわけないだろ」

「それは言えてるけど、ただお前の親父は、ここの爺さんとは別の意味で恐ろしいだけだ」

直也は玄関扉に向き直ると、その戸を手の中で叩いた。曇りガラスで覆われた扉の表面が揺すられ、けたたましい音をたてて震える。

「すみません、いらっしやいますか」

さらに大声で呼びかける。静かな夏の午後である。直也の声は町の中にしんと沁み渡った。声が反響を止めると、また静寂に取り残される。蝉の声が遠い。頭上で旅客機のエンジン音が膨らんだ。

しかし何度声を張り上げようと、家の中に気配が灯ることはなかった。直也はわずかに赤みを帯び拳を爪で掻き、それからドアに

手をかけた。まさか、と半信半疑でそのドアを引いてみると、呆気なく横に動いたので拍子抜けする。

「開いた……」

直也は人が1人入るくらいまでドアを開けると、家の中を覗きこんだ。古めかしい外見とは裏腹に玄関は綺麗に掃除されていた。たたきにはスニーカーとサンダルが一足ずつ置かれている。「こんにちは」と声を張り上げながら、直也は家の中に足を踏み入れた。「随分、不用心だな。泥棒が怖くないのかな」

心なしか、後続くライは声を顰めている。直也は背後の彼女を一瞥すると、それからもう1度「すみません」と声をかけた。

自分の声が室内に白々しく反響していくのを耳にしながら、直也はふと靴箱の方に目をやった。靴箱の上にはレース調のマットが敷かれ、そこに黄色い花の生けられた花瓶と3体のこけしが並んでいる。

その隣にA4サイズの封筒があった。色は青で、封が切れている。その隙間からカラー印刷のされた紙が覗いている。

直也は少しだけ躊躇を覚えたあとで、その封筒に手を伸ばした。目を丸くするライを傍目に、封筒の中に指を突き入れ、中を覗き見る。

そして直也は息を呑んだ。コンビニの店長の言葉が脳裏に蘇る。

——人は生き返る。また俺はあいつらと会える。一緒に旅行に行くんだ。そんなことをおっしゃっていたんです。すぐ陽気な感じで封筒の中に入っていたのは、旅行会社のパンフレットだった。さらに中には白く横に長い封筒も同封されており、そこにはチケットが5枚入っていた。今から1週間後の出発になっている。

——息子夫婦の家が火事で燃えて。原因は煙草らしいんですけど、孫2人も巻き込まれちゃって。だから全員です。田辺さんの家族は、一晩で、全員亡くなってしまわれたんですよ。

店長の話はおそらく確かだろう。この家に住まう老人の家族は少し前に亡くなっている。それなのに老人は旅行の計画を立てている。

すでに旅行会社にも連絡をし、チケットさえ入手している。しかもその枚数は、死んだ4人と老人自身を含めた人数と合致していた。「これ、旅行？ 爺さん、誰と行くつもりなんだよ。家族、いないのに」

ライが不安げに尋ねてくる。コンビニで得た話はライにも掻い摘んで話してあった。問いを直也に投げるまでもなく、彼女自身、その答えに気付いているに違いない。

ちりんと、どこかで風鈴が鳴った。直也は背筋に寒気を覚えて、その青い封筒を下駄箱の上に戻した。

「誰だ？ こんな昼間に騒々しい」

廊下をひたひたと歩く音が聞こえ、家の奥から人影が現れた。直也は一步後ろに下がり、玄関に現れたその人物と正面から対峙した。「見ない顔だが、何かの勧誘かな？ うちに来るとは、いい根性してるじゃないか。ああ？」

そう低い声で直也を睨んだのは、頭の禿げあがった老人だった。間違いないこの男が、コンビニの店長が言っていた田辺だろうと一目で分かった。

額に刻まれた太い皺。ごつい顔つき。目はぎらつき、鼻の下に生やした白い髭は不遜な印象を与える。見るからに短気そうな顔つきをしていた。若い頃はさぞかしい男だったに違いない。田辺は年に合わずポロシャツにだぶだぶのスウェットを履いているというスタイルだったが、それがまた柄の悪そうな風貌によく似合っていた。

田辺は来客者を見渡すようにすると、不審げに目を眇めた。ライは体をびくりと引き攣らせ、そそくさと直也の背中に隠れた。

「子連れとは、最近は業者も色々な手を使うようになってきたな」びくりとも顔を動かすことなく、田辺は廊下に唾を吐く。慄き、直也の背中を掴むライに瞥をくれてから、直也は帽子を頭から取り去り、男の迫力に吞まれないように緊張しつつ足を一步、前に踏み出した。

「突然すみません。でも俺たちは勧誘じゃないです」

コンビニの時と同じように、財布から出した名刺を田辺にも渡す。田辺は名刺をちらりとだけ見ただけで、直也に突き返してきた。胸を軽く押され、直也は戸惑いながらもそれを受け取るほかない。

「興信所の奴が一体何の用だ。俺には何も話すことなどないがね」

田辺はふん、といかにも不機嫌そうに鼻を鳴らす。

おい、全然明るくないじゃないか！ と耳元で囁く声がある。ライだ。確かに柳川やあのコンビニの店員が危惧していたような陽気さは田辺にはない。むしろ厳格な印象の方が、今の彼には色濃いうに思えた。油断すれば怒鳴り散らされそうだ。

だが、店員たちがいつも通りと評する田辺の調子も、直也の目には違和感として映った。田辺の様子からは家族や親しい者を失ったことに対する悲観的なものが、欠片もみられなかった。田辺は初体面の直也にもそう思わせるほど、あまりにも平静すぎた。言葉を変えれば、状況にふさわしい感情が伴っていないような気がしてならなかった。そしてそれを直也はとても不気味に感じる。

彼の表情から時折かいま見ることのできる影は、子どもを巻き込んでの自殺を図った息子夫婦への怒りや、そうまでさせるまでなぜ自分が気付けなかったのだろうという後悔、自分に断りもなく死んでいた憎しみ、そして全てを失った悲しみ——そういった、有体な種類のものでは、けしてなかった。

直也は田辺を注意深く観察する。柳川は彼のその影に違和感を嗅ぎ取ったのかもしれない。ならば直也もまた、正体を見定める必要があった。

「柳川さんって方、ご存知ですね？ 柳川健悟さんです」

柳川の名前を出すと、田辺はじとりと直也を睨みつけるようにした。

「知ってるよ。柳川の坊主とは、長年の付き合いだ。一昨日あたりにもうちに来たっけな」

「その柳川さんが、俺にある相談事をしてきまして。……これ、知ってますか？」

直也はポケットに折り畳んであったリーフレットを開き、田辺に差し出した。黒い鳥が中央に描かれ、『LILY BONE』という英単語の添えられたあの紙だ。

その紙を提示した次の瞬間、直也の手からそれは消えた。2度3度瞬きをし、それから慌てて顔をあげると、リーフレットを片手に握りしめ、口元を固く結んだ田辺の姿があった。

「おい、ちよつとそれ」

「なるほど。柳川の坊主が持っていたのか」

ぐしゃり、と田辺はその老人らしからぬ岩のような拳でリーフレットを握りつぶした。その目が完全に据わっているのを見て、直也はぞくりと、爬虫類に首筋を舐められたような気分を味わう。先ほどとは色の異なる威圧感が、直也を重苦しく取り囲む。

「好奇心か、それとも警察としての勘か……どちらにせよ、本当に馬鹿なことをしてくれた」

田辺は独りごち、それから直也とライの方にぎょろりと目を向けるといきなり前に飛び出し、裸足でたたきに降りてきた。ぎゅっとした直也が身を退ける間もなく、田辺は直也の体を後ろに押しやった。直也の背後にいたライも一緒になって、力づくで玄関のドアから外へと弾きだされる。

「届けてくれたことには感謝をする。だが、もう関わらないことだ」
ドアを片手で掴みながら、田辺は間近で直也を睨む。直也は蒸し暑い空気の中で怯んだ。

「うちにきた、あの男はこう言った。『盗人は許されない』」
にいつ、と田辺の口元が可笑しげに歪む。その表情は明らかに正気を欠いていた。ライが殊更強く、ぎゅっと直也の背中を掴む。シヤツ越しに彼女の手の汗の感触が伝わってくる。

「全ての人間にはそれぞれ役割がある。盗人を捌くのは妹の役目だと。デベスクリームの役目だ」と

デベスクリーム。その言葉は、直也の耳には何らかの複雑な用語のように聞こえた。リリイ・ボーンと同じく全く聞き覚えのない単

語に、直也は困惑する。田辺は表情から急に笑みを消し、真顔になつて言つた。

「せいぜい気を付けるんだな。俺が言えるのは、それだけだ。柳川の坊主にも忠告しておけ」

「……その紙は、あんたのものなのか？ あんたはどこでそれを手に入れた？ リリイ・ボーンとは一体、なんなんだ！ あの男とは一体誰だ！」

慌てる心に誘われるがまま、畳みかけるように直也は問いを重ねる。田辺はしばらくじつと直也の顔を見つめ、それから真顔で言つた。

「人は生き返る。あの男は、確かにそう言つた。今お前がいる、その場所だな」

指をさされ、直也は誘われたように自分の足元を見た。薄汚れた石のタイルがそこには敷かれている。直也が顔をあげると、田辺は緩やかに口元を緩め、ひどく不気味な笑みを浮かべた。

「俺の家族ももうすぐ蘇る。みんな旅行に行くんだ。これから始まる俺の新しい生活を、邪魔するな！」

田辺は一方的に怒鳴り散らすと、力強くドアを閉めた。内側で鍵の閉まる音がする。焦りを感じてドアを揺するものの、びくともしなかった。またドアを叩き、声を張り上げようかとも一瞬思うが、結局止める。家の前に取り残された直也は茫然と、田辺の言葉を頭の中で反芻させていた。

「生き返る、人が、蘇る」

少し考えれば、それはあり得ないことだ。あまりに荒唐無稽。明らかにファンタジーの世界に片足を突っ込んだ考えだ。良識のある大人なら、特に田辺のようないかにも厳格な人物ならば、そんなことは百も承知のはずだ。

しかし、田辺はそれを信じ込んでいる。疑うことすらしていない。それは明らかに異常だった。まるで田辺自身の意思とは別の、外部からの意識がそこに介在しているかのようだった。

その時、直也の頭に少し昔の映像が突然に蘇った。“人が生き返る”という言葉の響きが、記憶の中のあるスイッチを入れたらしい。それは1週間前、旧鉦橋邸のこと。気を失ったライと、麦わら帽子を被った女性を背後にその男は直也に向けてこんなことを言った——そしてバラバラにしたあと、死体を切り取って怪人にした。右足だっただろうか。とにかく、そうやって彼女は蘇った。このグリフィンという怪人として。

「怪人、蘇る……」

呟き、直也は目を見開いた。頭の中に一点の光明が射した。黒く濁った脳内が晴れ渡っていく。

「まさか、奴の目的は……」

自分の頭にふと浮かびあがった答えに、直也は怖気を感じる。それはあまりにもおぞましく、人の所為では到底ない。だがあの男ならそれくらいのことは、容易くやるだろうという確信が直也にはあった。あの男は、悪意の権化だ。直也が立ち向かい、そして絶対にその企みを阻止しなければならない、最大の敵だった。

おそらく、柳川はこの企みに触れてしまったがために殺されたのだろう。そしていま、直也は彼と同じ立場に並んだ。もう引き返すことなどできない。ライのそっくりの少女のことを思い出す。あの胸の前で揺れていた百合の造花が脳裏に浮かぶ。そういえば、LIYとは百合の英訳であることに今更気付いた。

「おっさん、何か分かったの？」

ライが心配そうな顔で直也を見上げる。直也は田辺家を見つめ、目を細めた。

「ああ……あいつらが、何をしようとしているのか、ちょっと分かりかけてきた気がする」

直也は下唇を強く噛む。下駄箱の上に乗っていた青い封筒のことを頭に浮かべ、そしてはぐれ雲の散る空の果てを見つめた。

「こんなこと……許しておけるか」

蝉が微かな声をあげる。排気ガスの臭いが鼻をくすぐる。直也は

柳川の遺したレシートをポケットから取り出すと、その紙面を見つめ、柳川の魂に深く哀悼した。

魔物の話 46

しばらく悠の家でくつろいだ後、レイは泊っていけばいいのに、と不満げな表情を作る悠を宥めて再び駅に戻り、券売機の前に立った。

レイはもう1度、あの白い家に行き、式原の居場所に繋がる証拠を洗い直すつもりでいた。佑と一緒にいるときは人間的な感覚だけを頼りに搜索したが、単独ならば“最高の怪人”としての力を惜しみなく発揮することができる。そうすればまた新しい何かが見えてくるのではないかと期待を膨らませていた。

急にそう思い立ったのは、やはりあのディッキーらしき影に出会ったことが大きかった。あの影の正体についても、あの家を探れば何か分かるのではないかという不思議な直感が働いていた。ディッキーの生死にかかわらず、やはりあの小動物の影についていち早く正体を見極めたい気持ちがあるレイの背をあの家を押しやっていた。

電車に乗り、目的地で降りて、昼間佑とたどったルートを1人で歩き、大きなコウモリの絵が描かれた古いアパートの前を通過して、あの白い家の前に到着する。

数時間前にここに立ったとき、佑がそつとレイの手を優しく包み込んでくれたことを思い出す。それと同時に、フェンリルが憎悪の化身となって怪人を八つ裂きにした光景も脳裏に過る。希望と絶望。安らぎと恐怖とが混ぜこぜとなった奇妙な感覚を抱えたまま、レイは深く息を吐きだすと、意を決して足を踏み出した。レイを信じてくれる、と駅で言ってくれた佑の声だけがレイの心の中で仄かな光を放ち、支えとなっている。

レイは玄関ではなく、庭を大きく回って、叩き割られたガラス戸

から家の中に侵入を果たした。家財が軒並み倒され、いまだに怪人の肉片があちこちにこびり付いた、乱雑なリビングに立った。

部屋の中央に横たわる怪人の無惨な死骸も、当然のことながらまだそこにあつた。

手足を切断され、肉を悉く削がれたその死体を見つめていると、全身に寒気が走った。レイはそのままはや生物としての外観をほとんど失ったそれに一步近づくと、しばらく眺めたあとで瞼を閉じ、手を合わせた。

「……ごめんね」

謝って済むような問題でないことは分かっている。しかし謝罪をしないではいられなかった。レイに救いを求め、妬みを向けていたあの怪人の視線が瞼の裏に焼きついて離れない。結局自分は、己が助かりたいだけのエゴイストなのだと自覚すると、重たいものが再び背に覆い被さるようだった。

確かにこの怪人はレイに襲いかかってきた。殺意を振りまき、その腕を振り回し、殴りかかってきた。佑に倒して欲しくなかったとも思わないし、佑がやられればよかったなどとも当然、思わない。それでもこの朽ちた亡骸を前にすると、無念の思いが胸を衝いた。レイが救われたように、この怪人にも救いの手を差し伸べることができなかったのかと、後悔が心中に渦巻く。

レイは怪人に深く頭を下げると恐る恐る怪人の体をまたぎ、奥の部屋へと向かった。レイが今最優先にすべきことといえば、式原の居場所を突き止め、その陰謀を止め、悠や佑や多くの人々のもとに元のような平穏を取り戻すことだ。いつまでも心を痛めているわけにはいかなかった。

その畳の敷かれた和室には、悪臭が相変わらず漂っていた。レイは目を眇め、その壮観としか思えぬ黒い羽で彩られた床の前で佇む。傾き初めた日の光に照らされ、夜の色を孕んだその羽たちは、さらに不気味な光を周囲に散らしている。

畳の上、部屋の隅に積まれた、分厚い書物にレイは目を止めた。

背表紙には日本語では文字でタイトルらしき文が記されていた。だが、何となく、これは医学書なのではないか、とレイは思った。身を屈め、埃だらけのそれを払いながら手に取り、ページを捲る。やはりその内容もタイトルと同じく、日本語では書かれてはいなかったが、それでもレイはページの至る所に挿入されたイラストから、自分の予想が正しいことを知った。

医者、という言葉の響きからレイは真っ先に橘看護師を想像した。あの気丈で、ぶっきらぼうだが心の優しい、悠とも仲の良かったあの女性が、まさか怪人を創造して殺戮の限りを働いているような男の仲間だったとはあの時、夢にも思わなかった。

そして次に思い浮かぶのは罪深き殺人者の名前。己の欲求を満たすために多くの人間を傷つけ、蹴り、壊し、屠った、人の皮を被った化け物のような男。

「式原、明……」

今、あの男は一体どこにいたのだろうか。日中、限られた時間内で家探しをした時はその手掛かりを見つけることはできなかった。

ここにはまた幾度となく足を運ばなくてはならないな、とレイは静かに覚悟を決める。佑の発見してくれたこの場所を起点にして、捜査の手を進めていく以外に、組織から追い出されたレイたちには方法がなかった。

とりあえず今日はもう日が暮れる。最近では特に日没が早まってきたような気がする。夏が終焉に近づき、秋の到来が近づいている証だ。そこに物寂しさのようなものを感じながら、部屋から立ち去ろうとしたその時、あまりに突然にそれは起こった。

初めは幻でも見ているのではないかと自分の目を疑った。がさり、と衣擦れのような音が和室に沁み渡ったかと思うと、急激な速度で視界一面に広がる黒色が萎み始めた。

萎む。そうとしか表現のしようがない、あまりに奇異な光景だった。鳥の羽1枚1枚が縮み、その輪郭が危うげになり、そして最終的には真っ白に成り果てて、散り散りと化した。まるで青々と茂る

植物が時に侵され、枯れ、腐り果てていく過程を早回しで見ているかのような、そんな光景が、レイの目の前で繰り広げられていた。

何の前触れもなく始まった不思議な現象にうろたえながらも、ただ突っ立っていることなどできず、レイは腰をかがめて、その白く変色した羽を拾い上げようとした。

だが、レイの指先が触れる先からまるで炭化した紙のように、それはレイの掌に捕まることなくボロボロと床に崩れ落ちていく。

レイはポケットに慌てて手を突っ込む。昼間訪れた際に、証拠を確保するため、ワンピースのゆったりしたポケットの中に、鳥の羽を何枚か入れておいたのだ。だが、その指が羽の形を捉えることはなかった。その口を広げ、中を覗きこむと、そこにはやはり鳥の羽だったものが原形を失い、灰となってポケットいっぱいに詰め込まれていた。

「これって、まさか……」

レイは体を震わせ、慄きながら、後ずさった。足の裏で踏みつけた羽が、くしゃくしゃと壊れる音を発して潰れ、塵と化していく。

信じ難い思いで事態を見つめ、そしてそのうちレイは、この現象の正体に思い至った。

自分の体中の皮膚に鳥肌が沸く。胸の裡に宿るのは、深い闇に投げられたかのような果てのない空虚だった。何か自分の中を流れていた大切なものが、瞬く間に奪い去られたような、そんな感覚が胸中に殺到し、そしてその感覚は他の何よりも真実を雄弁に語ってくれた。

口元に手を当て、目を丸くし、身を固くしながら、レイはものの数秒で白く染まった和室を見渡す。

そして——その現状から導き出した答えを、やはり自分でも信じられぬ思いで口にした。

「黒い鳥が……死んだ」

その言葉は絶望的な響きをもって、室内に沁み渡った。レイの頭の中に弔いの花が咲いた。萎れ、塵になって果てた羽たちは、すで

に死骸と呼ぶほかに名称を持たなかった。

あまりに呆気なく。あまりに静かに。そしてあまりに突然に。

こうして黒い鳥という存在は、跡形もなく、この世より姿を消したのだった。

5話「怪人のいない世界」

鎧の話 37

田辺家を出た直也はまず馴染みのあるバイク専門店に寄り、マニュアル車を1台レンタルした。シルバーを基調とした渋いデザインのものだ。欲をいえばレッドカラーのものが良かったのだが、そう贅沢も言っていられなかった。運転ができればそれでいい。

これからいかなる行動を起こすにしても、まず足がなければ始まらない。直也は自分のバイクを喫茶店に放置したままだった。敵に顔を見られ、しかもその思惑にまで行き着いてしまった以上、迂闊な行動をとるわけにもいかなかった。あのバイクは大学時代から乗っているものであり、共に過ごした年月の分だけ思い出もたくさん積んでいたのだが、事態が事態だけに諦めるしかなかった。過去に執着するがあまり、今や未来を切り捨てるような真似だけはしたくない。

店を出た時、まだ空は明るかったのだが、直也はこれ以上の散策は危険だと判断し、自宅に引き返すことにした。この時期は突然の夕立もあり得る。太陽が陰り、道に人影が減った瞬間、そこからは怪人たちの時間が幕を開ける。逸る気持ちもあったが、とりあえず今日は家で過ごし、明日の朝から活動を再開するのが得策に思えた。「犯人、ってあの殺人事件の？」

直也の部屋で扇風機が、カタカタと微かな音を立てながら首を振っている。その前にライは胡坐をかいていた。風呂上がりの彼女は頭からバスタオルを被り、水玉模様の青いパジャマを着ている。それは元々、あきらが直也のもとに置いていったものなのでライの体形には明らかに合っており、襟口や袖がぶかぶかなのであるが、本人はあまり気にしている様子はなかった。風に煽られ、ライの髪からふわりとシャンプーの匂いが舞う。ベッドの上に座り、壁に寄りかかった姿勢の直也は意識して目を瞬いた。左手には手帳を広げ、

右手にはボールペンを握っている。

「ああ。あの犯人に俺は1週間前、あの埼玉の家で会った。お前が気を失っている間にな」

あの爬虫類じみた男の目を思い出し、直也はたまらず顔を歪める。あの男の顔や声を思い出そうとするだけで、体に拒否反応が生じるようだ。

12人目の被害者――氷漬けの死体が並ぶ洋館から直也が助け出したあの女性は、あの男によって殺され、そして直也の目の前で怪人に変えられてしまった。その怪人もすでにフェンリルによって惨殺されている。

彼女が最後に残した手紙は、まだバッグの中にしまったままだ。彼女を救えなかったことを、直也はいまでも悔んでいる。しかしその後悔は、もうこれ以上、誰かを見殺しにはすまいという決意を直也に与えていた。

あの男がどこの誰なのか、直也には分からない。もう少し旧鉤橋邸を調べれば明らかになるかもしれないが、それをするだけの時間はどう勘定してもなかった。状況は想像する以上に逼迫している。

「怪人を生み出して操っているのも、あの男だ。奴が自分でそう言っただ。そして、多分、今回のことも……」

人が蘇る。家族とまた会える。田辺老人は至極真剣な表情で、そんなことを言っていた。田辺は数日前に、家を訪問してきたある男によって黒い鳥の描かれたリーフレットを渡されたらしい。

あの紙面にはでかかどリリイ・ボーンという文字が記されていた。リリイとは百合の意だ。あのライとそっくりの少女は、首に百合の造花をぶら下げていた。それらを単なる偶然として処理することはできない。

直也は手帳の開いていたページを破ってベッドの上に差し出した。ライがそれを手に取る。破ったページには黒い鳥のマークを即興で描いておいた。

「そのマークが、奴らのシンボルだ。黒い鳥。だから最初に見た時、これはなにか臭うとは思った。でもまさか、柳川さんが殺されているとは思わなかったけどな」

ライはそのマークを食い入るように見つめている。その表情が徐々に強ばっていくのは見て明らかだった。

「一体、奴らが何をしようとしているのか、正直推測の域を出ない。だけど人を殺して喜んでいる連中が、慈善事業で人間を蘇らせてあげます、なんていっても信用できるわけがないよな」

直也は深く息を吸い込んだ。体調不良のせいかどうかどうにも呼吸が浅く、時々こうして意識して酸素を体内に取り入れなくては息苦しくなってしまう。直也は呼吸を少しの間整えてから、唾を呑みこんだ。「お前、怪人がどうやって生まれるのか知ってるか？」

直也の発した突然に問いかけに、ライはきよんとした。やがてかぶりを降る。彼女の頭の両端からぶら下がる束ねた髪の毛が、ふわりと宙を浮いた。

「いや、私が知るわけないじゃん」

「そっか。じゃあ教えてやるよ。怪人はな、人間の死体から生まれるんだ」

直也の示した解答に、ライは目を丸くし、え、と声をあげた。直也が頷くと、ライは前のめりになって、ベッドの上の直也に詰め寄った。

「なんだよそれ。そんなの、嘘だろ」

「嘘じゃない。残念なことにな。俺はそれを見せられたんだ。人間の生首が、怪人になるところを……あの男にな」

直也の緊迫した様子が伝わったのか、それ以上、ライは真偽を問いかけてくることはしなかった。姿勢を元のように直すと俯き、それから決まり悪そうに扇風機の方に視線を移した。

「ここからは俺の推測だけど」

ボールペンを親指でノックし、先端を出したりひっこめたりしながら、直也は目を細める。口にしようと思うだけで、舌に苦い味が

広がった。

「奴らの目的は、田辺さんの死んだ家族を怪人に変えることだと思う。なんでいきなりそんな手段を取りにきたかは分からないけど……今の俺にはそこまでの推理しかできない。いかんせん材料が足りなすぎる」

「怪人を……」

「ああ。リリイ・ボーンってのは、おそらくその儀式かなんかの名前だ。奴らは、姿は人間でも中身は別人ってタイプの怪人も作り出せるらしいからな。多分、それを利用する気だ」

グリフィン、という麦わら帽子を被った女性としての姿も持つ怪人のことを思い出す。あの男は、グリフィンが人間体を持つ理由をこう語っていた。

——この怪人は生前の記憶を色濃くもち、その容姿も引き継いでいる。

それを活用すれば、文字通り額面通りの意味で、“死んだ人間を生き返らせる”ことは可能となる。ただしその中身はまったくの別人で、人間ですらないのだが。

「私、頭悪いからあんまりよく分からないけど」

ライは顔をあげ、陰鬱そうな表情で直也を見上げた。理解は十分でなくとも、あの男が田辺に対してしようとしていることの残酷さには把握できているようだった。

「じゃあ、あの爺さんは騙されてるってこと？」

眉を吊り上げ、憤怒を瞳に宿す。その声にも険呑なものが宿る。

「家族のみんなが蘇って、今までの生活が戻ってくるなんて嘘っぱち。そういうこと？」

直也は彼女の怒りに同調して頷いた。

直也も先ほどから、胸がむかついてしかたがなかった。田辺に迫る悪意は人間の所業とは思えぬ、人の心を侮り、踏みにじる行為だ。しかしいかにも1週間前、旧鉤橋邸で出会ったあの男が好みそうな手口ではあった。自分の推理は、それほど大きく的外れてはいな

いだろうという自負が直也にはあった。

「そんなの、酷過ぎるじゃないか」

「酷いんだよ、奴らは。少なくとも俺が出会ったあの殺人鬼に目的や理由なんかない。ただ人を傷つけて、怯えさせることに喜んでい
る。……そんな感じだった」

ぎりっ、とライが奥歯を噛みしめる音が直也のところまで聞こえてくる。直也もまた拳を固く握り、体内を駆け巡る感情をシーツから外に逃がそうとした。

「本来なら、リリイ・ボーンは人目に触れず勧められる予定だったんだろ。ばれないように、表ざたにならないようにこっそりと、水面下で怪人を増やしていくつもりだったんだ。だけど、誤算ができた。それを知ってしまった人間がいた」

「それがあのおまわり……それから私たち、ってわけか」

おそらく柳川は知りすぎたのだろう。あと1日早ければ、自分が熱で寝込んでさえいなければ、彼の相談を聞くことができれば柳川を救うことができたかもしれないと思うと、直也は責任を感じずにはいられなかった。

レイは舌を打ち、それから何かを考えるように視線を宙に踊らせたあとで、直也に焦点を合わせた。その瞳は先ほどの怒りを孕んだものから転じて、深い悲しみに揺らいでいた。

「私さ。正直、あの爺さんの気持ち、分かるんだ」

彼女の言葉に、直也は目を丸くした。ライは皮肉っぽい笑みを口元に宿す。

「ほら、私、単純だからさ。ディッキーを生き返らせてくれるとか言われたら、あの爺さんみたいに喜んで話に食いついちゃうと思うし。好きな人とか、物とか、そういうのがある人ならさ、やっぱりなんだかんだ言っても、死んだ人を生き返らせてくれるなんて言われたら、心は揺らいじゃうよ。おっさんも、そうだろ？」

ライのその純粹さに満ちた、陽光を映して輝く湖面のような瞳で問い質されると、直也の心はざわめいた。まるで心の内を見透かさ

れるような気分に陥り、思わず目をそらした。

ライの言う通りだった。もし何の事情も知らず、しかも咲の死に直面したばかりの直也であつたならば、死者を蘇生させてくれるという話に何の疑いもなく飛びついていたかもしれない。

事実、もし奇跡でも起きて、あるいは何かの間違いでもあつて、咲が蘇ってくれたらと考えたことは一度や二度ではなかった。3年経過した今でも咲への想いは募るばかりだ。彼女に再び会うことができるならば、どんな代償でも払ってしまえるかもしれない。ライの存在を知ってから、彼女と咲を会わせてやれたら、という希望も加わって、さらにその感情は膨らんでいる。

だが、色々なことを経験し、冷静になつた直也はそんなことはあり得ないことを知っている。死んだ人間が蘇ることなどない。そうやって世界は廻っている。人は誰もが死に、そして、生まれるのだ。悪魔は愛する者を喪い、悲しみに暮れ、弱つた人々の心につけこんでくる。あまりにおぞましいその畏に踊らされたそんな人々を救うことができるのは、今の直也のような、事情を知っている周りだけだ。

「ああ、そうだな」

直也は橙色に滲んでいく空に目をやった。その空に咲の姿を浮かべる。胸に鈍い痛みが走り、ふと去来した寂しさが喉を詰まらせた。「だから、許せないよ。そんな人の気持ちを利用するなんて、絶対に許せない」

ライもまた窓の外に目をやりながら、眉間の皺を深くする。夕日に照らされたライの横顔を見つめながら、直也はその怒った顔が咲にひどく似ていることに感慨を覚えた。ライは確実に咲の魂を受け継いでいる。死者の蘇生という言葉に踊らされることなく、心が迷うこともなく、正気を保っていられるのは、時間の経過以上にライの存在が大きいのではないかと直也は不意に思った。

ライを失いたくない。その気持ちは日を追うごとに、直也の胸の内で膨れ上がっていくようだった。

「なあ、おっさん。あの爺さん、助けられないかな」

こちらに顔を向けたライと、直也は視線を交わした。どうやら考えていることは一緒のようだ。ライは咲にも似ているが、直也自身ともまた少なからず似ている部分があった。

「今の俺たちじゃ無理だな。お前もみただろ？ 田辺さんに俺たちの声は届かない。あの人を助けるには、リリイ・ボーンを阻止するしかない」

「そっか……」

「多分、誘われているのは田辺さんだけじゃないだろうしな。他にも家族や恋人や友達を亡くした人間のもとに奴らは出向いているはずだ。元を断たなきゃ、被害者はどんどん増えていく。それだけは絶対に阻止したい」

ライは下唇を噛み、表情に悔しさを滲ませる。直也は正面の壁に掛っているカレンダーに目をやった。数字を目で追っていき、21の上で止める。8/21——それがあのリーフレットに記されていたリリイ・ボーンの開催日だった。

「リリイ・ボーンまであと5日だ」

直也は指を1本1本折りながら、生ぬるい空気に言葉を浮かべる。体調は相変わらず全快には程遠い状態だったが、直也の心はすでに最初から決まっていた。

「それまでに俺たちは、俺たちのできる方法で戦おう。ライ、お前も一緒に着いてきてくれるか？」

ライは怒気を帯びた目で、力強く頷いた。頼もしく思えるほど、それは実に精悍な顔立ちだった。その表情には迷いなど少しも窺えず、やはりその雰囲気は、どんな困難な仕事にも臆せず立ち向かう咲の姿を直也に彷彿とさせた。

「それで、これからどうするの？ あの爺さんの家でも見張る？」

「それもいいけどな。でも、時間はできるだけ有効に使いたい。まず相手の規模も把握できてない。そんなもんに立ち向かうには、俺たち2人だけじゃ心許ないだろ」

「じゃあ……」

「ああ」

窓の外で茫洋と広がる空を視界に捉え、直也は目を眇めた。

「俺は仲間を集めようと思う。残る5日でできるだけ。大きな力に立ち向かうには、こちらもそれなりに戦力を用意しないと。そんな人間といち早く接触したい。それが今の俺たちにできることだと思う」

仲間、という響きに目を丸くするライを前に、直也は頭の中に2つの組織を思い浮かべる。怪人と戦う術を持った集団を、直也はその2つ以外に知らない。

直也は自分がこれから何をすべきか、家に戻る道中ですでに決めていた。華永あきら率いる黄金の鳥の集団か、あるいはゴンザレス率いるマスカレイダーズか。どちらかに接触を果たし、その力を借りること。それが現時点で直也の思いつく、この状況を打破するための最良の方法だった。

サクリファイス 2

2010年。8月17日。18時39分——18秒。夕暮れ。公園。ブランコの脇。サッカーボールが塀を叩く音。カラスの声。湿りを帯びた空気。

橙色の空が地上を同じ色に染める。明りの遠くなった地面には、まるで版画のように陰影が深く彫りこまれていた。人から、物から伸びた長い影は、切り刻まれた傷口のようだ。夜が迫る夏の空気には独特の寂しさが漂っている。

寂寥感に満ちた空の下。都内に存在するある公園に1人の少年の姿があった。彼はブランコの脇にあるスペースを用い、隣家を隔てる灰色の塀に向けて黙々とサッカーボールを蹴り込んでいた。

頭を丸刈りにした、おそらく小学校低学年くらいの、男の子だ。

彼は塀に向けてボールを放ち、跳ね返ってきたものを追いかけて、また必死に塀に蹴り込む、ということを繰り返していた。汗まみれ、泥まみれになった少年の体には疲労が見えたが、動くことを止める気配はない。橙の斜陽に照らされ、濃い影を帯びた少年からも、その空気と同じくらいの寂寥感が滲んでいる。しかしその横顔があまりに寂しそうにみえるのは、夕暮れのせいだけではない。少年の背負う影は空の色で片付けるには重く、黒く、深すぎた。

少年は顔を歪ませ、遮二無二、必死の形相でボールを蹴り続ける。対面する壁は彼の打ち込んだボールを無感情に跳ね返していく。少し前まで、少年の前には壁ではなく、父親の姿があった。彼の父親は少年の放ったボールを軽々と受け止めると、彼の蹴りやすい位置にパスを送ってくれた。

休みの日に父親とこの公園でサッカーをするのが、少年にとって何よりの楽しみだった。父親は小中高と部活を続け、社会人になってからも友人たちと汗を流すほどに、大のサッカー好きだった。だから少年にとってサッカーというスポーツは、幼い頃から非常に馴染みの深いものだった。

少年の夢はサッカー少年になり、プロとしてピッチに立つことだった。父親もそれを望み、彼の夢を大いに応援してくれていた。

だがその父親の命は3日前、唐突に途絶えた。肺癌だった。半年前に自宅で倒れ、それから息絶えるまで病院のベッドで寝たきりになった。倒れる前日、この公園でいつものようにサッカーをしたことが、少年が父親と築いた最後の思い出となってしまった。

少年は待ち続けた。父親の代わりにこの塀を相手取って、ひたすらにボールを蹴り続けた。全ては父親に喜んでもらうため、自分の夢を現実にするため。

だが、結局その願いは叶わず、少年の放ったボールは二度と父親に届く事はなかった。少年がプロのサッカー選手になり、広大なフィールドを駆けまわって観客を沸かせる。そんな未来を見る事のないまま、父親はこの世から消えた。

少年がひときわ強く蹴りだしたボールはコントロールを失い、軌道を大きく逸れた。地面を跳ねたボールは少年の横を突っ切り、背後に抜けていく。少年はへとへと足でそのボールを慌てて追った。彼の足もとに必ず返してくれた父親とは異なり、表情のない壁はそんな配慮を少しも持ち合わせていない。

日の沈んだ空の下をてんとボールは転がっていく。少年の追うボールの行く先を突然、通りがかりの足が遮った。少年は立ち止まる。一瞬、その長い足が父親のものに見えたのだろう。目を丸くした少年が顔を上げれば、そこにはもちろん父親ではなく、父親よりも少し年の若い、白髪の男が立っていた。

男はつま先でボールを蹴りあげると、膝でバウンドさせ、二度三度リフティングを披露してから、少年に蹴り返した。力加減、コントロールともそれは絶妙で、少年の足元にボールはうまく転がっていく。そのボールを足の裏で受け止め、この男は何者なのかと不思議そうな顔をする少年に、男は人のよさそうな笑みを返した。

「君、サッカー上手いな。さっきから見えていたけど、外したのはこの一回だけ。この年で、大したものだ」

仕立てのいいスーツ姿。胸元には百合の造花を携えている。能面のように貼りつけられたその笑みに、少年は幼いながらに、幼いからこそ、不穏なものを嗅ぎ取ったに違いない。少年は軽く頭を下げると、ボールを両手で抱え、すぐさま踵を返そうとした。だがその少年の背中を、男の声が引きとめた。

「君。お父さんに、会いたくないかい？」

少年は足を止め、訝しそくに振り返った。早くこの場から立ち去りたい。しかし男の言葉も気にかかる。不安と好奇心の狭間で揺れながら、それでも耳を傾けることに決めた——そんな逡巡が窺い知れる拳動だった。

だが少年が振り返ったその瞬間、笑みを浮かべたままの男の掌から漆黒の光が発せられた。強烈な光を浴びた少年は、目を見開くと、それからぐつたりと両膝を地面に付いた。彼の目は虚ろで、まるで

この世にある以外の物を見つめているかのようだった。

虚脱した少年を前に、白髪の男はその表情から笑みを消す。そして先ほど光を浮かべた手で少年の腕を掴むと、不機嫌そうに鼻を鳴らした。

鎧の話 38

午後10時過ぎ。

外の景色はすっかり暗転を果たした。網戸から入ってくる夜風が心地よい。町は寝静まり、室内で稼働を続ける扇風機の音がやけに明瞭に聞こえる。

直也は床に直接座り込み、ベッドに寄りかかって、炬燵用テーブルの上でノートパソコンを開いていた。すでに室内の電気は消しているので、パソコンの周囲だけぼんやりとした光が浮かび上がっている。

藍色の闇の中に、床に横たわるライの寝息が鳴り響いている。静かな時はいいのだが、時々、彼女は壊れたラジオのような雑音を吐きだす。初めはやかましく、その度に舌打ちを禁じ得なかったが、1時間もすると次第に慣れてきて、あまり気にならなくなってきた。直也は自分の額に貼った冷却シートを指先で押しやり、肌に冷たい感触を伝わせる。発熱のためか体はまだ怠かった。全身の骨が軋んでいるような気さえする。直也は濁ったため息を吐くと、軽く伸びをしてから再びノートパソコンの画面に目を戻した。肩をもみほぐしながら、もう少しだと自分を励ます。

直也が見ているのは4年前の事件・事故を紹介したニュースサイトだった。鉦橋そらが亡くなったというバスの転落事故について改めて調べてみたくなったのだ。

記事によるとこの事件で鉦橋そらが死んでいるのは確からしい。そして彼女だけではなく、この事故で死亡した人々は皆、体のどこか

一部を欠損しているという共通点があった。

「やっぱりこの事故にも、あいつが関与していたと考えるのが普通だよな……」

町外れの洋館の地下で眠っていた11の氷漬けの死体を思い出し、直也は背筋を凍えさせた。あの死体たちもそれぞれ、体のどこかしらを失っていた。そしてあそこに置かれていた死体の内の1人、滋野アヤメは“ナイン”と名乗る怪人と化し、生前の姿を携えたまま直也に襲いかかってきた。

今回も理屈としては同じだろう、と直也はコップに注がれていた麦茶で口の中を湿らせながら思う。あのライとひどく酷似した容貌をもつ怪人のことを思い出すと、胸にざわめきが走る。あの怪人はライの前で腰を屈め、こんなことを口にしていた。

——その顔は、鉈橋そらのものであるはずです。他の人間が持つてていいはずはないですー

そのセリフは、鉈橋そらは他でもない、自分なのだと怪人が主張をしているように直也には聞こえた。そしておそらくその通りなのだろう。あの男は鉈橋そらの遺体の一部をどうにかして入手したに違いない。そして黒い鳥の力を使い、あのペンギン型の怪人を生み出したのだろう。その結論に矛盾はないように感じた。

直也は画面右上のバツ印のボタンをクリックし、インターネットの画面を閉じると、立ち膝の姿勢になり、仕事机の引き出しを開けて中から1枚の写真を取り出した。

それは鉈橋一家の記念写真だった。1週間前、旧鉈橋邸に家に住んでいた女性——今思えば、あの女性も殺人鬼の仲間だったのだろうか——から手渡されたものだ。その写真の中で鉈橋そらはライと全く同じ顔で笑っていた。髪の色が金ならば、ライと見分けはおそらくつかないだろう。

その隣に立っているのが、彼女の姉である鉈橋きよかだった。鉈橋きよかは妹が事故で死んだ一か月後、失踪している。失踪する前には咲とよく会っていたという。彼女が咲の死に何らかの関わりが

あることは明白だったが、彼女自身もまた行方不明になっている以上、追及できないのが痛いところだった。

そらが死に、きよかが蒸発したあと父親もまた行方をくらまし、母親は心を病んで一家は完全に離散したと柳川から聞かされていた。その発端を作り出したのは間違いなく、あの男だ。直也は頭にカツと血が昇り、心が昂ぶるのを感じた。この一家の無念を思うと、悔しくてたまらなくなった。1人の男のあまりに身勝手な振る舞いによって、幸せな一家は一瞬で崩壊させられてしまった。

あの男を止めなければ、鉦橋家のような家族はこれからも増え続けることだろう。あの男の陰謀は必ず止めなければならない。

「鉦橋そらの死体が怪人になったのはそれでいい。じゃあ、ライは……」

独り、夜闇に呟く。タオルケット1枚だけをかけて熟睡しているライに目をやった。この金髪の少女が怪人であり、咲が彼女を生み出したことは直也の中で揺るぎのない事実であるが、そこに至るまでの経緯にはいまだ謎が多い、

咲はなぜライを作り出したのか。黒い鳥とどこで出会ったのか。その元となった死体は誰のものなのか。そしてなぜ、鉦橋そらとそつくりの外見を選んだのか。さらに不可解な点は尽きない。

「それに鉦橋きよかはどこへ消えたんだ。咲さんが死ぬ数日前、2人の身に一体何が起きたんだ？　なぜ咲さんはフェンリルに殺されたんだ？」

たまらず疑問を口に出すが、闇は何も答えてはくれない。直也のしている側で、ライは大きく寝がえりを打ち、力強く炬燵用テーブルを蹴飛ばした。衝撃でノートパソコンが数ミリ飛び上がったため、直也は慌てた。床に落下しなかったことにまず深く胸を撫でおろし、それから、腹をぼりぼりと音をたてて掻くライの寝姿を、改めて見つめた。

ライは旧鉦橋邸で隠れた場所に転がっていたゴムボールを見事に発見し、さらにあの家の間取りも完全に把握しているようだった。

一体ライは何者なのだろう、と直也は想像を働かせる。腕組をし、唸りながらも、その一点だけは何となく直也に見当が付いている部分もあった。ただその答えが正しい場合、また新たな疑問が浮上する。

「だけど、鉦橋そらという言葉にこいつは、何の関心も示さなかった……」

あの怪人が発した、鉦橋そらという人名をライも聞いたはずだ。だが彼女はそのことについて何も言及してこなかった。怪人の言うことを間に受けても仕方がないと彼女の中で割り切っているのだろうが、それにしても何だか奇妙だった。

鉦橋きよか。鉦橋そら。離れ離れになった姉妹。生と死の境界線によって隔てられた絆。

写真の中でピースサインをする鉦橋きよかの顔を眺め、ライと見比べる。それからため息をつき、写真をメッセンジャーバッグの中にした。体調は決して良くない。こんなコンディションでいくら考えこもうとも、納得のいく答えは出ないだろう。

「ちゃんとかけないと、風邪ひくぞ」

先ほどの寝返りで乱れたタオルケットをライにかけなおしてやると、直也はパソコンの電源を落とした。謎はまだ多いが、まずは目先のことから1つ1つ攻略をしていくしかないということは分かきつていた。

直也は腰をあげると窓に近づき、カーテンの隙間から外を窺った。あのペンギンの怪人は今も、直也とライのことを探しているのだろうか。田辺が言っていたデブスクリームというのは、ひょっとしたらあの怪人の名前なのかもしれない。

「俺は、ライを守るのか？」

直也の脳裏に、和室に安置された女性の生首の映像が瞬く。直也は彼女を救ってやるができなかった。

自問自答をしながら、テーブルの上に置かれたメールプレートに目をやる。傷に塗れたそれは夜の静けさの中ではあまりに心許なく

映る。実際、オウガの力ではあの怪人に歯が立たなかった。ライの助太刀がなければ、自分は確実に殺されていただろうと思う。

直也には明らかに力が不足していた。オウガは咲の魂を背負い、共に戦ってきた相棒であったが、そろそろ限界が近いのかもしれない。7年という月日は兵器を錆びつかせるには、十分すぎる時間だった。そもそも対人用に作られたこの装甲服では、怪人に対抗するには無謀すぎる。これまで戦い、生き残ってこられたのが奇跡だと思えるくらいだった。

しかし結局、他に打つ手がない以上、無力さを嘆きながらもこのオンボロな装甲服とともに戦っていくしかないだろう。直也は腕を伸ばしてプレートを手にとると、相棒の姿を夜闇に透かすようにする。

プレートを見つめる直也の脳裏には、1週間前、フェンリルを撃退したあの不思議な力のことが過っていた。装甲服に電撃が走り、一瞬だけではあったが、爆発的なパワーを生み出すことができた。

あれさえあれば何とかなるかもしれない、と思いつつ、発動条件ばかりかあの力の正体すら分からないことに気付き、直也は自分の能天気さに苦笑する。ライの手からその力が注がれたような覚えがあるが、先ほど喫茶店で戦った際に、ライに触れたにも関わらず装甲服は変化の片鱗すら見せることはなかった。

きつと、あの強大な力を発動させるためには、何らかの条件を満たす必要があるのだろう。だがその引き金に全く見当が及ばぬ以上、そんな頼りない希望に縋るよりも、やはりライに表明した通り、仲間を探すことに尽力する方がずっと現実的だった。

「なんとかするしかないか……」

夜空に眩き、直也はプレートを元置いてあった場所に戻すと、カーテンをしっかりと閉め、それから明日に備えてベッドにもぐりこんだ。ライの地響きのようないびきが、部屋の空気を震わせる。しかし熱感と疲労のせいで朦朧としていた直也の意識は、すぐに夢の中へと吸い込まれていった。

“リリイ・ボーン”まであと5日。

2010年 8月18日

魔物の話 47

いつも通りベルゼバビーと一緒に朝ごはんを食べ、ライの残していたカブトムシに餌をやり、その後で顔を洗って歯磨きをしていると、携帯電話に着信があった。うがいをし、ベルゼバビーにトイレを促してから出てみると受話口の向こうにいたのは佑で、彼は挨拶も程ほどにいきなり用件を切り出してきた。

「レイちゃん。今日、うちに泊りにきてくれない？」

レイは携帯電話を耳にあてたまま数秒間、彼の発した言葉を頭の中で繰り返し、それから首を傾げた。

「今日は家に両親がいないから、とか続かないんですか」

「俺はそんな、朝っぱらからいきなり乙女チックなこと言い出すキヤラじゃないよ」

まあ、両親どころか俺もいないんだけどさ、と佑は苦笑しながら付け加える。レイは洗面台の鏡の前に立ち、手で寝癖のある箇所を強く押し込んだ。

「あれ。どっか出かけるんですか？」

「うん。ちょっとバンドの集まりにどうしても行かなきゃならなくなつてさ。悠を連れていくわけにもいかないし、うちでやるわけにもいかないんだ。夜遅くなるかも分からないから、ちょっと今日、1日、悠の側にいてやって欲しいんだよ」

「バイオリンは今日、ないんですか？ 昨日楽しかったからこのまま続けたいって言ってましたけど」

「ところが今日は休みなんだよ。レッスンは火、金、日だけなんだとさ。先生から昨日レイちゃんが帰ったあとに、確認の電話がきた

んだ。親切だよな本当に」

レイは「なるほど」と返事をした。鏡の中に映るレイも得心の意を示す。いくら手櫛を使っても、寝癖は直ってくれず、レイは少しむっとする。

佑は4人組のロックバンドに所属している。佑の役割はギターで、レイはタイミングが悪く、未だに聴かせてもらったことはないが、悠から聞いた話によると腕はなかなかのものらしい。

レイは彼の左腕——包帯が巻かれ、複雑な指の動きを行うためにはしばらく時間がかかると医師から宣告されたあの腕を、頭に思い浮かべる。彼の陰の射した表情が脳裏に蘇る。

ギターを演奏することができず、愛する妹を怪人に狙われ、信じていた組織には裏切られ、下宿先の人たちは消息を絶ち、彼の心はとつくに擦り切れ、荒んでいるはずだった。

一時でもそれらの煩悶から解放され、友達と楽しい時間を過ごすことができたのなら、佑の表情も少しは明るくなるかもしれない。それはレイの望んでいることだった。

「……分かりました。楽しんで来てください。悠のことは、私に任せて羽を伸ばしてくるといいですよ」

「ありがとう、レイちゃん。頼りになるよ」

佑の声が柔らかくなる。レイは心にスツと光が射しこんでくるのを感じながら、「いえいえ」と口元を綻ばせた。大事な妹を佑は自分に預けてくれた。佑に信頼されていることが、彼が自分を信じてくれていることがレイにはたまらなく嬉しい。くすぐったいものが胸を過り、レイは鏡から背を向けた。

「お兄さんは何時頃出るんですか？」

トイレのドアを一瞥し、それから廊下を歩いて浴室の電気を点けながらレイは尋ねた。

「俺？ 11時前には出ようかって思ってるけど」

腰を振り、壁にかかった時計を確認する。シャワーを浴び、ゆっくり身支度を整えてからでも、時間は十分にあった。

「じゃあお父さんのところに行ってから、そっちに向かいます。ちよつとお兄さんと話したいことがあつて」

佑の緊張が電話越しにでも伝わってきた。どうやらレイの発したその一言だけで、話題を察したらしい。楽しい仲間との会合を前に、怪人関連のことを口に出すのは気が引けたが、昨日、あの白い家で体験した出来事はなるべく早く佑に話しておきたかった。

「……分かった、待つてるよ。そういえばお父さんの具合はどう？」
佑が声を顰める。レイは病院の薬臭いベッドに収まった傲岸な父の姿を思い出し、その瞬間、胸にちくりと痛みを覚えた。

「まあ、そこそこです。普段がうるさいから、今くらいがちょうどいいですよ。表に出てこない方が世のため人のためです」

吐いたその言葉が自分を保つためのつよがりであることに、レイ自身、気が付いている。一日中天井をじつと見つめ、看護師に身の回りの世話を委ねている父親の姿を見ると、今目の前にいる男は本当に自分の父親、黒城和哉なのかと不思議な気持ちになる。怪人を相手に激しい戦いを演じ、全く敵を寄せ付けず、無双を展開していた頃が夢のようだ。

今の父親の姿を見ると、そのたび泣きたくなった。病室に入るとたまらない気持ちに胸に込み上げ、その度、涙を堪えるのに苦労しなければならぬ程だった。どれほど傍若無人でも、どれだけ無遠慮でも、どれだけうるさくても、やはり父親は厳しく、強く、堂々としていて欲しかった。

会話に少しだけ間が空いた。己の虚勢が佑に通用したとはレイには到底思えなかった。おそろくつよがりも見透かされていることだろう。そして洗面所に引き返し、暗い自分の表情を鏡に映して見つめるレイの耳に、佑の声がようやく届いた。

「そう。そのうち、俺もお見舞いにいくよ」

佑の言い放ったただそれだけの言葉に、レイは一瞬、虚を衝かれる。それからすぐに「ありがとうございます」と応じる。「お父さんも、きつと喜びます」

佑の軽やかな笑い声が、受話口の向こうから聞こえる。その快活な声がレイの心の外側を優しく撫でていく。レイは耳に携帯電話を尚更強く押し当て、それからゆったりと壁に寄りかかった。

それから一言二言言葉を交わしてから、レイは通話を切った。そこでちょうど、廊下を走るたどしい足音が聞こえてきた。目を向けると、ベレー帽を被った小さな女の子、ベルゼバビーがこちらに駆け寄ってくるところだった。

「おかあちゃんー、絡まったー」

見ればベルゼバビーの体にはまるでミイラ男のようにトイレットペーパーが幾重にも巻き付いていた。彼女はその隙間から覗き見える顔にベそを搔き、レイに縋りついてくる。

「あらあら」

レイは彼女の前に屈みこむと、その体に纏わりついたペーパーを手で引きちぎり、床に適当にのけると、それから涙を指の腹で掬い、丸い頭を優しく撫でてやった。

「うん。これで大丈夫だよ。ちゃんと一人でできたんだ。偉いね」

ベルゼバビーはその涙の滲んだ丸い目でじっとレイの顔を見つめている。その顔があまりに真剣なので不思議に思い、レイは首を傾げた。

「どうしたの。私の顔になんか付いてる？」

するとベルゼバビーは「ううん」と頭を何度か横に振った。

「おかあちゃん、何か嬉しそうだなーって思っで。なんかいいことでもあったの？ ぶんぶーん」

レイは彼女の指摘にハツとし、自分の顔を両手で包み込んだ。わずかに熱を帯びた感触が掌を伝う。自分の心に広がっていく感情に気づくと、レイの頬は自然に緩んでいった。

「本当だね。私、嬉しいんだ」

声に出すと、沸き上がる感情が胸をくすぐった。レイはペーパーから完全に解き放たれたベルゼバビーをそっと抱き寄せると、驚く彼女を胸に軽く押しつけた。佑に会える。悠と一緒にいられる。胸

を満たすこの気持ちの名前を、幸せと呼ぶのかもしれない。柔らかく、温かい、幼女の感触を全身で抱きしめながら、レイはそんなことを思った。

それから3時間後、天村家にはほぼ定刻通りにたどり着くことができた。チャイムを押し、玄関のドアを開けるとすぐにリビングから悠が飛び出してきた。ひどく浮かれた様子で、「レイちゃん！」と叫び、廊下をこちらに向かって駆け、そして、躓いた。

踏み出す足を滑らせ、足掻くもう一方のつま先も床に引っ掛からず、そのまま悠は前のめりに倒れていこうとする。レイは靴を脱ぎ捨てると、肘にかけていたバッグと逆の手に持っていた透明のケージを置き、廊下に飛び乗り、たたらを踏みつつも、悠の体を間一髪、両腕で受け止めた。

「大丈夫？ まだ体が治りきってないんだから、無理しちゃダメだよ」

「うん。ちょっと、浮かれすぎちゃった。ありがとう、ごめんね」

悠は顔をあげ、少し頬を赤らめながら申し訳なさそうに笑う。レイは彼女の体を起こしとてあげると、元気づけるようにその肩を数度、軽く叩いた。その時、レイの鼻に香るものがあつた。甘たるくそれでいて嫌味な感じはしない、優しく、嗅ぐものを落ちつかせるような匂い。

「桃の匂い……」

それは悠から漂ってくる。その匂いは昨日、彼女の通うバイオリン教室の講師が撒いていた香水のものに違いなかった。

レイは悠の小さくたおやかな体を抱きすくめると、その首筋のあたりに鼻を寄せ、鼻をくんくんとさせた。レイの息が吹きかかつてくすぐったいのか、悠は体をびくりと震わせ、身をよじらせた。

「レ、レイちゃん、くすぐりたいよ……」

「悠、香水つけてるの？ これ、昨日の先生と同じやつじゃない？」

悠から離れ、レイは問いかける。悠は恥ずかしそうに俯くと、上目遣いでレイを見た。

「うん、先生がくれたの。私、あんまりこういうオシャレしたことがなかったから……やっぱり、変だよね？」

ため息を吐き、憂鬱を表情に顯す。そんな親友にレイは微笑みかけ、かぶりを降った。

「ううん、全然変じゃないよ。むしろそれが普通だよ。これからは部屋にこもりっきりの生活じゃないんだから、どんどんそういうこと、するべきだと思うけど」

病室に閉じ込められた状況の中では、オシャレをする意味も薄く、張り合いもなかったことだろう。だが、今は違う。

悠はこうして自分の家で毎日を過ごすことができ、自由に外出も可能になり、新しい趣味に心を向ける余裕さえできた。無理はできないものの、もはや悠を縛るものはほとんどないと言つてよかった。多くの女子中学生が経験していたのと同じ生活を悠は手に入れた。身だしなみに気を使うのは、15歳の少女として当然のことだろう。異性の目も気になり、恋愛にも熱心になる年頃だから尚更だ。15歳相当の肉体を持ちながら、4年しかこの世に生きておらず、同時に30代の魂を内に秘めているレイでさえ、服装や髪型に気をつかっているのだから、女性として当たり前、と言い換えたほうがいいぐらいだった。

レイが断言すると、悠はおずおずと顔をあげた。彼女から少し離れていても、桃のかすかな香りは漂ってきた。不快には思わないので適量だと思う。日に日に変化を遂げていく親友の姿を目の当たりにすることは、嬉しくもあり、反面、寂しくもあった。

「そうかな……」

「悠は元が可愛いからね。もっともつと磨きがかかるかもしれないね。半年後には彼氏とかできてたりして」

レイが言葉を言い終えるかどうかのタイミングで、頭上から物音が聞こえてきた。椅子から誰かが立ち上がり、勢いあまってその椅

子が床に倒れたような、けたたましい音だった。レイと悠は顔を見合わせると、ほとんど同時に天井を振り仰いだ。記憶が正しければ、その天井の向こうには佑の部屋があるはずだった。

「……そういえば、お兄さんってまだいる？」

「たあくんなら、お部屋にいるよ」

レイは天井を見上げ、目を眇めた。ようやく覚えてきた天村家の内部構造を頭の中で展開し、この真上が佑の部屋であることを思い出す。

「ちよつとお兄さんに用事があるから、2階にあがらせてもらうよ。そんなに時間はかからないと思うから、悠は1階で待ってて」

「あ、うん。じゃあお昼の準備の途中だから、私はキッチンに行ってるね」

「うん。用事が終わったらすぐに手伝いにいくね」

悠に言い置いて、レイは床に落としたままだったバッグを拾い上げる。ケージは悠に渡した。「なにそれ」と不審がる彼女に、「カブトムシ。死なない場所に置いといて」と言い置き、廊下を進んだ。数日前、怪我と疲労によって寝込んだ佑を、悠と共に看病した経験のおかげで天村家の間取りはおおよそ把握できるようになっていた。豪邸と呼んでもけして大袈裟ではなく、その名に応じるように部屋の数もひどく多いこの家では目標とする場所にたどり着くのも一苦労だが、今では佑の部屋だけはたとえ、目を瞑っていたとしても行き着くことができる。

階段を昇り、目的の部屋の前に立って、ノックをしてからドアノブを捻る。こんなにちは、と挨拶を口にしながらドアを押し開くと、そこに佑が立っていた。心なしか、その表情は固い。まるで信じがたい事実を聞かされた後のような、緊張感に満ちた顔をしていた。まさかドアを開けてすぐのところ待ち構えられているとは想像していなかった。レイはその存在感に圧倒され、声をあげて後ずさった。

「なんでこんなところに立ってるんですか？」

率直に尋ねると、佑は決まり悪そうに視線を逸らし、それからまるで何事もなかったかのような素振りで机の前に置かれたキヤスタ―付きの椅子を引き寄せ、そこに腰掛けた。

「ほら、今座ったよ。アイアムシットダウン」

「それは見れば分かります。バカにしてるんですか。英語変だし」

「まあまあ、そう怒らないで。とにかくレイちゃんも座りなよ」

煮え切らないものを覚えながらも、レイもまた壁際に置かれたキヤスター付きの丸椅子を掴み、それに座った。1週間前はこの椅子に座って、よく佑の額に濡れたタオルを置いていたので、その座り心地には妙な馴染みがあった。レイは椅子に腰を下ろしてからもどこか拳動不審な佑を前に、大きく嘆息した。

「……大丈夫ですよ、悠に彼氏はいませんから」

「そ、そうだよな！」

椅子を蹴り倒す勢いで佑は立ち上がると、それから目に見えて安堵した。

「新しい生活を送るとはいつてもさ、あ、あいつにはそんなことまだ早いよ。そうさ。まだ中3なんだし、15歳なんだし」

「なんでもいいですけど、とにかく座ってください。ユーアーシットダウン」

呆れながら佑の間違いだらけの英文法を真似ると、彼はまだ興奮冷めやらぬ様子ではあったが、とにかく納得し、椅子に座った。

こうして佑の部屋で椅子に腰かけ、2人で向かい合っているというのは何とも不思議なものだった。昨日のことや今朝の電話のこともあり、何だかそわそわとしてしまう。レイは落ち着かぬ心をこまかそうと、室内に視線を運んだ。

高価そうな音楽機器が壁に添うようにして並んでいる。レイのちょうど右手側にはケースに入ったギターが3本、立てかけられていた。そのケースにはどれも埃が被っていて、レイは胸に軋むような痛みを覚える。思わず、彼の包帯の巻かれた左手を見てしまう。その手は日常生活における不自由はないものの、弦を奏でる能力はまだ損

なわれたままだ。ギターを愛し、音を奏でることに生きがいを見出していた彼にとって、それはどれほどの地獄なのだろうと思った。レイはふと、彼のちょうど背後の壁に白い紙袋が立てかけてあるのを見つけた。有名なデパートのもので、レイも父に連れられ、何度か行ったことのある店のものだった。

「そういえばそれ、昨日も持ってきましたよね。何が入ってるんですか？」

今まですっかり尋ねるタイミングを失っていたが、『しろうま』から出てきた佑が確かその紙袋を持っていた覚えがある。佑はレイの指摘に振り返り、「ああ」と目を細めると、椅子から立ってその紙袋を掴んだ。

袋の中に手を突き入れ、中に入っていたものを佑は取り出した。レイはわずかに前屈みになって、彼の手の上に置かれたそれを見つめた。

それはブリキのおもちゃだった。ねじまき式のもので、塗装の剥げ具合からかなりの年代物であることが窺える。もともとはペンギンの形をしていたらしいが、目は削れ、片手は折れ、ネジは外れ、その全身は傷で塗れており、惨憺たる姿を晒していた。

「俺、あいつに頼まれたんだ。これを直してくれって」

懐かしむかのように声を震わせ、そのおもちゃを佑は見つめる。佑があいつ、と呼ぶ者の正体を、レイは何となく察していた。

「もしかして、楓葉花……」

レイが口にした少女の名前に、佑は一瞬目を見開いたが、すぐに頬を緩めて頷いた。

「俺にとってはなんていうか、2人目の妹みたいなもんです。やかましいし、むかつくし、喧嘩もよくしたけど、どうしても放っておけない奴だったんだよ。あいつはなんだかんだいいながら、俺を頼ってくれて、このおもちゃも俺だったらきつと直してくれるだろうって見こんだから、渡したと思うんだ」

おもちゃを手の中で包み込み、撫でまわす。まるで壊れ物を扱う

ような、そんな彼の仕草に、レイは彼の苦悩を察する。

「でも結局、何も手をつけないままあんなことになっちゃって……。だから、今のうちに直してやろうかなって思ってた。あいつがいつ帰ってきてもいいように。もう1回、あの生活が帰ってくるように」

佑の目には遠い羨望が宿っている。その表情からは絶望から何とか這いあがろうとする強い意思が感じられた。巨大な悪意によって奪われてしまったものを取り返したい。その願いが、憎悪が、彼の心に一点の光を射し込ませている。それはレイの目に、確固たる姿として映った。

「そういえばさ、レイちゃん」

「はい？」

その壊れたおもちゃを紙袋にしまいながら、佑は言った。

「前に言ってたよな。あの連続殺人事件。11人……いや、今は12人になったんだっけか。女の人誘拐されて、殺されて、氷漬けにされてどっかの家の地下にしまわれていた、あの事件の犯人が、式原だって」

佑の痛ましく歪んだ横顔を見つめながら、レイは小さく顎を引いた。町外れの巨大な洋館に、誘拐された11の女性の死体が氷漬けにされていたという事件だ。匿名の人物により通報があったため、その洋館の存在は周知のものとなったらしい。さらに生きて帰って来たという1人、俗に言うところの“12人目の被害者”も搬送先の病院で行方不明となり、その父親も死体で発見されたという話をレイは佑の看病をしながら聞いた。それら全てが式原の仕業であることをレイは知っており、佑にも伝えてある。事件に関することが耳に入る度、佑は悔しげに顔を歪ませていた。

そして今の佑も同じように顔を歪め、その声音を震わせていた。レイを見つめる眼差しが怖いくらいに暗く淀んでいる。レイは無言で顎を引いた。彼は自分の拳の震えを抑えようとするかのように手首を握み、下唇を噛みしめている。

「俺さ、怖いんだよ。もしあの時、あの病室で怪人を倒せなかった

ら、悠を救えなかったとしたら……悠もああやって殺されたんだろ
うなって。そうすると考えるだけで、怖くてたまらなくなるんだ。
死体になった悠が夢の中まで出てくるんだ」

彼のことを心配性だとは揶揄できない。実際、悠はこれまでに少
なくとも3回、式原によつて狙われている。1回目は3年前に二条
裕美から。2回目は橘看護師に連れ去られて。3回目はあの九官鳥
の怪人にだ。だから佑が神経質になるのも仕方がない、と思う。レ
イだって恐ろしい。悠が物言わぬ抜け殻と化し、青白い顔をして横
たわる姿を思い浮かべるだけで気が遠くなるようだった。

佑は勉強机のほうを一瞥した。レイもその視線を追い、そして心
を切りつけられるような感触を得た。机のうえに置かれていたのは、
フェンリルのメイルプレートだった。

「俺には、力がある」

包帯の巻かれた腕を撫でつけ、自分自身に言い聞かせるように、
呟く。レイは下唇を舌で湿らせ、彼を前に逃げ出そうとする臆病な
心をしつかりと抱きしめながら彼と対峙しなければならなかった。

「悠だけじゃない。俺は俺の周りの人たちを、救いたい、守りたい。
怪人のいない世界を、俺は作りたい」

佑の発した決意は、レイの心を揺らした。昨日の駅での会話以降、
彼に対して抱いていた淡い気持ち、栓を引き抜かれ排水溝に吸い
込まれていく風呂の水のように、消えていく。胸の内に再び浮き出
てきたのは、佑に対する恐怖、そして正体を隠していることへの罪
悪感だった。

——怪人のいない世界。彼の宣言したその世界に、レイはいない。
自分が怪人であるという事実が揺るぎない以上、いつまでも佑や悠
の側にいることはできないのだ。寂しくもある。悲しくもある。し
かし崩れそうなその心を支えているのもまた、佑が口にしてくれた
言葉の存在なのだった。

「フェンリルの力と、レイちゃんの力があれば、それができる。だ
から、一緒に作ろう。悠が安心して生きられる、そんな世界を」

新たな未来に向けて一步を踏み出した悠が、安心して生きられる環境。それはレイにとっても、実現させたい願いだった。レイはふう、と吐息を零し、気持ちを落ち着かせてから、彼と改めて向き合った。ともかく現状で一番大事なのは、式原を止め、悠の身を脅かす存在を断ち切ることだ。

「お兄さんに、伝えておきたいことがあるんです」

レイは昨日の夕方、天村家を出たあと、あの家に足を向けたことを話した。そこで巻き込まれたあまりに異様な光景——羽毛の山が一斉に白く枯れていく様——のことを伝えると、佑は眉間に皺を寄せた。

佑はレイの独断専行を軽くたしなめながらも、その無事を安堵し、それから声を低めた。

「やつぱり。俺も昨日レイちゃんが帰って、悠が寝た後にさ、あの羽根をちよつと調べてみようと思ったんだ。それでポケットから出そうとしたら、羽がさ、なくなってたんだよ。代わりに灰みたいなのがいっぱい入ってて」

レイはやはりか、と顎を指先で撫でつけた。レイが持ち帰った羽根もあの部屋にあったものと同様に全て灰化してしまった。もはや黒い鳥が存在していたという痕跡すら、塵ひとつなく消え失せてしまった。

「私の生まれつきの感覚が、知らせてるんです」

レイは1つ身震いをした。その言葉の続きを口にするのは躊躇いがあつた。それはおそらく、レイもまた、黒い鳥から生まれた怪人だからだろう。レイの体内にある怪人としての本能が、親の死に衝撃を受けている。血液が冷え、脈が激しく皮膚の裏側を叩く。

だがレイは意を決し、声を喉の奥から絞り出した。

「……黒い鳥が、死んだってことを」

「死んだ？」

佑は瞠目した。信じがたい単語を耳にしてしまい、驚く以外にどう反応していいのか分からない、といった様子だった。それも当然

だろうとレイは思う。レイもいまだに信じられない。だが、この感覚に直接訴えかけてくる情報の渦は何よりも雄弁に、それが真実であることを伝えていた。

「死んだって、え、まさか、そんな」

「一体どういふことなのかは私にも分らないです。私も信じられません。だけど、これは、多分事実です。鳥は多分もう……この世にはいません」

「だって」

佑の声は動揺のためか、少し裏返っていた。

「黒い鳥って、怪人を生み出す源なんだろ？　それが死んだってことはつまり……」

「樂觀はけしてできませんけどね」

突然舞い込んだ吉報に淡い期待を寄せている佑にレイはぴしゃりと言う。佑は我に返ったようにびくりと体を引きつらせ、それから眉をひそめた。

「そうだけどさ。でも、もう怪人は作られないって、そういうことだろ？」

「まあ。でもこれ以上作られなくなっただけで、今いる怪人がいなくなるわけではないですから。まだ怪人がいる事実にも何も変わりはないですよ」

そう——自分の存在がまだ許されているように。レイは心の中で自嘲気味に付け加える。自分ほど人の社会に溶け込み、周囲を欺き、まるで人間のような顔をしてのうのうと過ごしている怪人もいないだろう。昨日、佑に惨殺された怪人の悲鳴が、人に守られながら生きる、卑怯な怪人に対する恨みがましい眼差しが、レイの脳裏を過ぎる。思い出すだけで胸が締め付けられるようだ。

「それに黒い鳥が死んでも、人の悪意は消えませんが。だから、私たちの目的もなんら変わらないです」

「……式原、明」

怪人の創造主である男の名前を呟き、佑は奥歯を噛み締める。自

分の欲を満たすために、多くの人間の命や魂を弄び、怪人というあまりにも悲しい存在を、呼吸をするように生み出している悪の権化あの男の居場所を突き止め、追い詰めることが、レイがマスカレイダーズに望んでいた最終目的であり、そして今は佑と共に目指すべき到着点だった。

黒い鳥を失ったとしてもあの男なら、良くないことを仕掛けてくるに違いなかった。

むしろレイは、黒い鳥を殺したのは式原なのでは、と睨んでさえいる。黒い鳥は怪人を生産する憎むべき存在であるのと同時に、レイにとっては生みの親でもあった。娘としての感性が、あの鳥がそんな簡単に、こんななし崩し的に死ぬのだろうか、と疑問の声をあげている。

何かが始まろうとしている。それも、最悪の事態が足音を偲ばせて近づいてくる。怪人察知の技能ではなく、胸騒ぎとしてレイはその感覚を捉えていた。『しろうま』の側で起こったあの一連の出来事もまた、不安を喚起させている。レイたちを監視している風だった首のない男の死体。そしてその男たちを殺害し、連れ去った小動物の白い影。何かが狂い始めている。そんな予感があった。

「何か、嫌な予感がする」

そしてそれは佑も同様のようだ。包帯の巻かれた左手を握り締め、彼はぼつりと呟く。レイは身震いのようなものを感じながら、心の拠り所を探るようにして、気付けば佑を見つめていた。その頭に、再び白い影が過ぎる。ディッキーによく似た、しかしそんなはずはない、小動物の白い影。その小動物を惨殺する佑の後姿。レイは軽く頭を振り、そのイメージを振り払った。

「とりあえず用事が終わったら、俺もまたあの家に行ってみるよ。まだ見落としているところがあるかもしれないし」

彼に同行したい気持ちはあったが、レイには悠を守る務めがある。歯がゆさを抑えながら「無茶はしないで下さい」とだけ伝えると、「レイちゃんもね」と彼は軽く笑った。その笑顔が、言葉が、レイ

の心に優しく沁み渡る。まるで飴と鞭だ、と思った。佑とこうして対峙していると、恐怖と安心とがひっきりなしに入れ替わって、実に忙しく感じる。しかし二度と佑と会いたくない、とは考えたこともなかった。なんだかんだと言っても、やはり佑と一緒にいると心が安らぐのは事実だった。だからこそ心に射す後ろめたさが、レイの気持ちを重くさせる。

レイと佑の会話が途絶えた。鬱屈とした何かが2人の間に横たわって、そこに流れる空気を淀ませているかのようだ。

足の下で物音が途切れ途切れに聞こえてくる。悠が食事の準備をしている音だ。皿同士の擦れ合う音、椅子を引きずる音、食器をテーブルの上に置く音。それらの日常的な響きがなぜか、この空間の中では場違いのもののように浸透していく。

黒い鳥がいなくなっても、少しも安堵の気持ちは生まれなかった。まったく理由の分からず、現実感をひどく欠いたこの出来事はレイたちを絶望へと誘う悲劇の幕開けのように思えてならなかった。

鎧の話 39

早起きをしようと考えていたのに結局、直也が目覚めたのは昼前だった。頭が芯の方からずきりずきりと痛み、体もひどく重い。関節の動きもぎこちなく、まるで骨の継ぎ目に油粘土でも注がれたかのようだ。

体温計を使わずとも熱が上がっているのは明白で、直也はベッドから這いだすと同時に重苦しいため息を零した。こんな状態で本当に怪人たちと戦うことができるのか、不安が胸を曇らせる。だが休むわけにはいかなかった。“リレイ・ボーン”が始まる日は刻々と近づき、怪人の魔の手は着実に直也とライに迫っている。

テレビのニュース番組やインターネットの情報を確認したが、昨日の喫茶店での一件はどこにも報じられていなかった。どうやら怪

人が4人もの人間を殺害したことは、公になつてはいないらしい。あの客や柳川の存在が現在、社会的にどう取り扱われているかが気になったが、それを悠長に調べ上げることができるほどの余裕は直也にない。

ライの作つたむせ返るほど味の濃いチャーハンを麦茶で胃に流し込むと、12時近くになつて直也とライはようやく家を出た。直也はいつも持ち歩いているメッセンジャーバッグ。ライは家から持ち出してきたのであろうモスグリーンの小さなリュックサックを背負つて、バイクにまたがった。長年連れ添つてきたものとは違い、レンタル品は乗り心地としてはあまり良くはなかったが、足としての役目は十分に發揮してくれた。

空には薄い雲がかかり、昨日ほど気温は高くなかったが、それでも体調不良の身にこの蒸し暑さは響いた。何度も意識が遠くなり、その度に、背中に伝わるライの存在を思い出して、何とか持ち直すということを繰り返しながらバイクを走らせる。早く目的地にたどり着いて、ヘルメットを脱ぎ去り、新鮮な空気を体中に取り入れたかった。

華永あきら率いる黄金の鳥の集団と、ゴンザレス率いる鎧の集団、マスカレイダーズ。

直也はそのどちらとも明確な敵対関係になかったが、その一方でどちらとも良好な関係を築いているわけでもなかった。

ゴンザレスとは互いに互いを嫌悪している間柄であつたし、あきらとは別れを切り出したばかりで気まずい関係にある。正直、こんな窮地に置かれてさえないなければどちらの組織とも積極的に関わりたくなかったが、今はそんなことを言つてはいられないのは承知していた。怪人と戦おうという事態に直面している現状において、これほど頼りになる組織を直也は他に知らない。ライという守るべき対象がある以上、彼ら彼女らに協力を仰ぐことは直也にとって急務だった。

組織は果たして怪人の思惑について知っているのだろうか、と直

也は信号待ちをしながら想像する。どちらの可能性もあるような気がした。一個人である直也が気づいているのだから、ネットワークの確立したあのような組織らが把握していないはずはない。だがその一方で、ある程度の規模をもつ組織だからこそ、怪人たちの密行を見逃している可能性もある。考えてみれば柳川が情報入手したことも単なる偶然なのだ。

とりあえず先に摂食するのはどちらでも良かったが、まずは『ホテル クラーケン』よりも自宅から近い船見家に向かうことにした。船見家。それはマスカレイダーズのアジトだ。

確かに組織のリーダーであるゴンザレスとは険悪な関係にあるが、マスカレイダーズのトップであり、船見家の家主である船見トヨならば直也からの申し出に快く耳を傾けてくれるだろうと直也は算段をつけていた。少なくともあの老婆は直也に対し、敵意を向けている風ではなかった。直也に有益な情報を話してくれたこともある。力を貸してくれるだろうという根拠は十分にあった。

船見家は民家の連なった場所の少し奥まったところに建てられている。見掛けは古びた一軒家であるが、その正体こそ、怪人を討伐するための組織、マスカレイダーズの本拠地だった。

夏休みも終わりに近づく中、船見家の前に伸びる一方通行の道路は活気に満ちていた。日に焼けた小学生や、ベビーカーを連れた女性の姿など、実に平和な景色が広がっていた。その光景を前にすると、まるで自分たちの巻き込まれていることが遠い、別の世界の出来事のように感じられるのだった。

門の前にバイクを止め、座席から降りた。脱ぎ去ったヘルメットを胸の前で抱く。日の光を直接浴びると途端に目眩がやってきて、直也は塀に寄りかかった。髪は汗で濡れ、額から透明の滴が滝のように溢れだす

ライもまた直也の前でヘルメットを脱いだ。そして船見家を見上げるなり不満げに眉を寄せた。

「なんだアジトっていうから、もっとそれっぽいところかと思った

のに、普通の家じゃないか。つまんないの。盛り上がりには欠けるよなあ」

「無茶言うな。そんなに大々的に公表してたら、アジトとしての役割を果たせないだろうが」

「わかってないなあ。秘密基地つてのはロマンなんだよ。大事なのは外見だよ外見。役割とか常識とか、そんなものいらないんだよ」

ライは持論を一方的に振りかざすと、直也に自分のヘルメットを押しつけ、家に向かう。直也は肩をすくめ、受け取ったヘルメットを座席脇のフックに引っかけ、自分のものもハンドルに掛けると、それからライの後を追う。

開け放された門をくぐり、敷地内に足を踏み入れる。様々な植物が植えられ、大きな陰を落とした庭は先日訪ねた田辺家を彷彿とさせた。さすがにあの家と比べれば、船見家の外観はまだ新しい。少なくとも10年後もちゃんとここに建っているという確信は持てるだけいくらかまじだった。

「おい……おっさん」

ライが立ち止まり、困惑した顔で直也を振り返る。その言葉を聞かずとも、彼女が何を言いたいのかは理解できた。直也もまた茫然と立ち尽くす。胸の奥で淀みが広がり、泡を立てながら体の中で膨らんでいくのを感じた。

「こいつは……」

玄関の前には真っ赤な2つのコーンが、3メートルほど距離を取って置かれている。2本は黄色のロープで繋がれており、家に侵入しようとする人間をあからさまに阻んでいた。深く考えずとも、それが立ち入り禁止を示していることは、子どもでも分かる。

直也は踏み割られたタイルが足元に転がっているのを見つけ、そこでようやく、この家が怪人による襲撃を受けたことを思い出した。情報を提供した見返りにトヨから依頼され、数日前、直也はこの家の地下室で馬の怪人と戦った。しかし怪人の力は圧倒的でオウガでは全く歯が立たず、その部屋の中で治療を受けていた二条浩美

は連れ去られ、その怪人もまた天井を突き破って行方をくらませてしまった。その一連の出来事を、直也はすっかり忘れていた。

容赦なく立ちふさがった現実を前に、直也は危うく地面に膝を付きかけた。一瞬、視界が混濁し、周りの世界が遠ざかる。

この家が襲撃を受けた。それはすなわち、この民家がマスカレイダーズの隠れ家であることが、すでに怪人に知られていることを意味する。そんな場所をゴンザレスとトヨがいつまでもアジトにしているとは考えにくかった。そればかりでなく、ここにいれば直也たちも危険に晒される恐れがある。船見家がすでに怪人の手に落ちている可能性は限りなく高い。

「……マジかよ！」

直也は額の汗を拭う余裕すらなくコーンを迂回すると、玄関のドアの前に立ち、チャイムを何度か鳴らした。田辺家のものとは異なり、それは呼び出し音を家の中に響かせてくれたが、誰も応じることはなかった。念のためドアに手をかけて横に引いてみるが、施錠が成されているらしく、びくともしない。田辺家の時と同様にドアを叩き、数度叫んでみたがやはり反応はなかった。

ふと気配を感じ、背後に視線をやれば、自転車で門の前を通りがかった年配の女性が不審者でも見るような目でこちらを睨んでいる。その手に携帯電話が握られているのを認め、直也はゾツとした。

「あ、どうも」

直也は引きつった笑みを浮かべ、女性に軽く会釈した。「船見さん、留守なんですかね」と首だけで振り返った姿勢のままたどしく尋ねると、女性は表情を強張らせたまま、家を顎でしゃくり、

「船見さんなら、1週間前に引越したよ」と真相を告げた。

「引越した？」

「突然だったけど。奥さんが挨拶に回ってたよ」

「そんな……あの、行き先とか、ご存じですか？」

問いかけると女性は目を細め、額の皺をさらに深く刻んだ。明らかに直也を怪んでいる様子だ。面食らう直也の前で女性は鼻を鳴

らすと、「さあ、なにも言っていなかったよ」といかにも不機嫌そうに吐き捨てた。

「そうですか、ありがとうございます」

慎重に言葉を口にする直也に、女性は最後まで警戒を解くことはなく、だがやがて立ち去っていった。緊張から解放され、直也は胸を撫で下ろす。あまり派手なことはここでは避けたほうが良さそうだった。無用な騒ぎを起こして、怪人たちに場所を特定されでもしたら目も当てられない。

さてこれからどうするかと、打ちひしがれる思いで立ちつくしていると、庭の奥からライが戻ってきた。どこに行っていたのかと直也が問いかける前に、彼女は息を荒らげたまま直也を見上げ、言った。

「全然ダメだよおっさん。窓とかドアとか片っ端から調べてみたけど、どこも開いてない。誰がいるようでもないし。どうする？ おっさん、窓でも叩き割る？」

「物騒だなおい。あまり目立つことはここでは止めておこう。一応俺たちが、追われている身であることを忘れんな」

素早く周囲に視線を走らせ、すでに手ごろな石を持ち上げかけていたライは、直也からの忠告に唇を尖らせた。

「ここに仲間の手がかりがあるかもしれないんだろ？ 追われているのは分かっているよ。でもだからこそ、中に入らなきゃいけないんじゃないの？」

「さっき近所の人が言ってたんだよ、この家に住んでいる人たちは引越したってな。入っても多分もぬけの殻だろ。試してみるにはあまりにリスクが高すぎる」

「じゃあ、ここは何もしないですごくごと引き返すっていうのかよ。せつかくきたのに、それでいいの？」

ライが眉間に皺を寄せ、反論する。直也は言葉を詰まらせた。敵に見つかるといふ危険を犯してまでここに来たのだから、確かに何か収穫を得て帰りたいという気持ちは理解できる。しかし、これ以

上どうするのかと問われると、いい考えは浮かばなかった。庭を眺めてみるが、これといって目ばしいものはない。頭上に張り巡らされた電線を見つめながら唸っていると、突然、ライが手を叩き合わせた。

「そうだ！　こんなときのために」

「なんだよ」

「いいもの持ってきたんだ。私の秘密兵器」

戸惑う直也に視線をよそに、ライは背負っていたリュックを地べたに下ろすとファスナーを開け、中から1枚の画用紙を引っ張り出した。A4サイズで、片面いっぱい何か書かれている。ライはその紙面を返し、両端を持って、直也に見せ付けるようにした。

「じゃっじゃん！」

口でそんな効果音を付けられながら発表されたその文面に、直也は手で底を作り、降り注ぐ陽光を遮りながら目を走らせる。そこにはライのお世辞にも丁寧とはいえない、しかし必死さは伝わってくる字面で、こう書かれていた。

『SOS！　黒い鳥に狙われている！　ペンギンもやってくる！』

21日に何かが起こる。気付いた人は頑張れ！　みんなも頑張れ

！　——ニートのおっさんより』

「……なるほどな」

その内容を読み終えた直也は、気付けばにやりと笑みを浮かべていた。続けて「なるほど」と口にしている。それを聞いてライも嬉しそうに胸を張った。

「これならいいだろ？　たとえば私たちがいない間に、この家に人が帰ってきててもさ、大変なことが起きてるんだってことは伝わるじゃん。そうすれば、みんな気付いてくれるよ。きっと。いや、絶対！」

直也は顎を撫でながら、「そうだな」と心の底から感心した。この発想は直也の中にはなかったものだった。確かにこの程度なら、たとえ船見家の存在を怪人に知られていたとしても、リスクは少な

いし、何も知らない人々を危険に駆り立ててしまう恐れもない。一般人が見れば悪戯としか思えないこの文面も、マスカレイダーズが見ればその意味を察してくれるはずだ。

もとよりダメ元だった。今はライの用意した秘密兵器が誰かに届くことを祈るしかない。

直也は、力強い眼差しで見上げてくるライから画用紙を受け取ると、ポケットから手帳に挿してあったボールペンを取り出し、画用紙の一番下に、ある記号を書き足した。長方形を書き、その中に3と羽のマークを記す。書き終え、ボールペンをポケットに入れると同時にライが「なにこれ？」と瞬きをした。

「オウガのマークだろ。これも一般人ならただの落書きだけど、知る人からしてみりゃ分かる記号だ」

直也は家を振り返り、そして縁側の窓に目を留めた。

「あそこに貼っておくか。この中に入れば目立つだろ。剥がされたら、それはそれだ。やってみなきゃわからないもんな」

「あいよ！」

どんな逆境に置かれても、希望を抱き続ける気持ち。それをライから教わった気がした。また助けられたな、と直也は苦笑を浮かべ、画用紙を持って縁側に走っていくライの後姿を見つめる。しかしそこでふと思い出し、彼女の背に声を投げた。

「おい、ライ」

ライのセンスや行動について、今は文句をつけたくはないが、1つだけあの文章には訂正するべき点がある。縁側の上に片足で乗り上げ、ガラス窓に画用紙を押し付けた姿勢で首をよじるライに、直也は再びボールペンを取り出して指摘した。

「何度も言うけど、俺は二ートのおっさんじゃねえ。俺は、探偵だ」

悠と一緒に作ったオムライスとシーチキンサラダはとても美味しかった。

レイはいつも通りケチャップやドレッシングをその料理に使わなかったが、それでも元の味付けがかなりしつかりしていて、米粒1つ残さず完食することができた。悠に料理の才能があるのは驚きだったが、前から手先は器用なほうだったので、家事には秀でているのかもしれない。

一緒に洗い物をし、後片付けを終えて、会話を楽しみながらカーペットの上に座り込んで、洗濯物を畳んだ。それが終わったら、一緒にデパートまで買い物に出かける予定だった。学校に向けて色々買い揃えておきたいものがあるらしい。

悠は病み上がりだ。怪人の脅威もある。この家に留まっていることが最も安全であることは分かっていたが、それでも今は悠の気持ちを尊重してあげたいと思った。

悠にとつて、友達とショッピングを楽しむというのは実に数年ぶりのことらしい。うきうきと声を弾ませ、買いたいものや行きたい場所を列挙する彼女に、家で大人しくしていたほうがいいなどとはとてもじゃないが言えなかった。悠がもし体調を悪くして倒れたり、怪人に狙われたりしたら、その時は自分が必死に守ればいいだけのことだ。そう自分に言い聞かせながら、レイは浮かれた彼女の話に相槌を打った。

悠がトイレに立ったのを見計らい、レイは手に持っていた佑のトラックスを手際よく畳んだあとで、腰を上げた。庭に面したガラス戸のクレセント錠を開き、顔が1つ入るくらいのすき間を開ける。すると外にベレー帽を被った小さな女の子が立っていた。

彼女は丸い頬を膨らまし、不満げに口を尖らせている。

「やっと開けてくれたねー。ずっと待ってたのに、ちつとも出てきてくれないから、見捨てられたかと思ったよー。ぶんぶんー」

「ごめんね。ご苦勞様」

詫びながらレイは、ポケットからオムライスをおにぎりにしたも

のを3つ、スカートのポケットから取り出した。ベルゼバビーはそれを素早く掻つ攫うと、ラッピングを剥がし、大きな口を開けてそれを夢中で喰らった。

「それで。何か、気付いたこととかあった？」

レイは背後をちらちらと気にしながら、成果を尋ねる。彼女にはいつものパトロールに加え、黒い羽が散らばっていた白い家と、『しろうま』周辺の探索を任せていた。地上を進めばそれなりに距離はあり、手間もかかるが、飛行能力のあるベルゼバビーならばそれも関係ない。ベルゼバビーはケチャップで口の周りを真っ赤に染めながら、つまらなそうな顔を作った。

「ぶんぶん。特に何にもないみたいだよ。羽はないし、ネズミもないし、世界は平和だよ。またこれから行ってみるけど、あんまり期待しないほうがいいかもねー」

「そう……」

ベルゼバビーはそれだけを言っ、再び食事に戻った。余程腹が減っていたのか、無我夢中でおにぎりを口の中に放り込んでいる。ゆっくり食べようね、と声をかけるがまったく聞き入れる様子はなく、気づいた時には彼女は3つのおにぎりを完食してしまった。最後にげっぷをよこすのも忘れない。

「お腹いっぱい！　じゃあ続き行ってくるねー」

ベルゼバビーは食べるだけ食べると、レイに小さく手を振り、踵を返した。彼女のその浮ついた背姿を見ると、本当にちゃんと調査を行っているのか疑問が生まれるが、頼んでいる立場である以上、あまり厳しいことはいえなかった。辛い顔をして帰ってこられるよりも、多少遊んでいても笑顔を向けられるほうがずっと気持ちとしては楽だ。

「6時までにはちゃんと帰ってくるんだよ」

レイが言つと、ベルゼバビーは「あいあいさー」と軽い調子で返事をする。その瞳を金に輝かせ、体を蠅の怪人に変えて、背中小さな翅を振動させながら飛び去っていった。

レイは雲の多い空に消えていった娘の姿を見送ると、ガラス戸を閉め、膝にぎりぎり被るくらいのスカートの裾を内側に折り畳むようにしながら、先ほどまでいた位置に腰を下ろした。

座ると透明のケージに入ったカブトムシがちょうど目に入る。ライが残していき、そして彼女がいない間に死なせてしまったら決まりが悪いと思い、レイがこの家に持ってきたものだ。ライは元気だろうか、とふと不安に思う。電話は一向にかかってこないが、メールは昨日一言だけ「うるさい」と返事があったので無事であることは確かだが、それでも姉という身である以上、心配するのは当然だった。

「世界は平和だよ、か……」

ケージの中でかさかさと言をたてるカブトムシを見つめながら、ベルゼバビエの言葉を思い出す。

人は死に、死んだ人は戻らず、今もレイがいるのと同じ空の下で式原が悪行をもくろんでいるかもしれないというのに、窓の外は実に長閑な風景が広がっていた。確かに平和だな、と蟬の声や家の前を通り過ぎる自転車の音を耳にしながら思う。マスカレイダーズに殺されかけたことも、父親が腕を失ったことも、ライが出て行ったことも、佑が怪人を屠ったことも、この雲の多い空を見つめていると全てが嘘だったように感じられる。

ため息を零し、それから改めて洗濯物に臨んだ。もはやほとんど残っておらず、2人がかりならば5分とかからず終わる量だった。とりあえず、一番手近にある桃色のバスタオルに手をかける。驚づかみにして持ち上げると、その下から1冊の本が出てきた。どうやら洗濯物の山の中に埋もれていたらしい。

本のタイトルは『星座のなまえ』だった。表紙では手足の生えた星が夜空を泳いでいる絵が描かれている。いかにも対象年齢が低そうな本で、手に取り、開いてみると、予想通り大きな文字と平仮名の多い文章が目飛び込んできた。

佑のものではないだろうと思う。そうなると必然的にこの本の持

ち主は悠ということになるのだが、悠が星に興味があるとはこれまでに聞いたこともなかった。ただ、バイオリンの件もあるので、入院中に何かのきっかけで興味が引かれたという可能性はある。ベッドの上で小説や雑誌を読みふけていた親友の姿が、レイの頭に思い出された。

「悠、こんなの読むんだ……」

特に目的もなくページを捲っていると、本の隙間からはらりとしておりがこぼれ落ちた。

レイはそれが挿してあったページに指を挟み、もう一方の手でしおりを拾い上げた。もう1度、元通りに挟み直し、そのページを眺める。紙面の上部には、Mの両端を短くしたような、奇妙な記号が描かれていた。

そこに紹介されていた星座は牡羊座だった。レイは壁にかかったカレンダーに目をやり、悠の誕生日が4月であることを思い出した。

6話「もう1人の魔王」

鎧の話 40

直也とライが次に向かったのは、船見家の所有するはなれの家だった。

以前、直也が馬の怪人によってひどい怪我を負わされた際、船見トヨによって運び込まれた場所だ。

目的地には船見家から5分足らずで到着した。民家のひしめく住宅街から少し離れた位置に聳えるそれは、外見だけみれば町外れに建てられた小さな診療所のようなものである。

ここもどうせ施設が成されているだろうとはなから諦観を抱いていた。しかしその予想に反し、引き戸の取っ手に手をかけると、いとも簡単にドアが開いたので直也は戸惑った。畏かもしれないとも思うが、飛び込まなくてはどうにも立ち行かず、これは自分たちと与えられた数少ない恩恵なのだと同向きに解釈をして、直也はドアを完全に開け放った。

家の中に足を踏み入れると、いきなり真っ直ぐな廊下が直也たちを迎えた。30メートル程先に果てが見え、白塗りの壁で仕切られている。視界の限りに階段は見当たらない。左手側にはドアが3つ、等間隔に並んでいる。その構造はどこか、それほど大規模ではない田舎のカラオケボックスを彷彿とさせた。

室内は蒸し暑く、そして懇々とした静寂に満ちていた。外の喧噪も、この中にいるとどこか遠く聞こえる。長く換気がされていないようで、うだるような暑さが滲み、カビと薬品が混ざったような刺激臭が充満している。

そのあまりに濁った空気に、思わず直也は立ち竦んだ。ライも隣で鼻をつまみ、くぐもった声で「あっちいし、くさいし、酷い部屋だなおっさん」と顔をしかめている。

「こりゃあ、しばらく使ってなさそうだな……でもまあ、一応調べ

てみるか」

せっかく中に入れたのだから、という気持ちもあった。しばらく背後のドアを開け放したままにして、家の中に風を通わせる。そのまゝ1、2分もすると室内の熱気と悪臭はだいぶ薄まった。直也は額の汗を拭い、「行くぞ」とライを促すと、足下に落ちている蛾の死骸を避けながら進んだ。

一番手前のドアと奥のドアは鍵がかけられていたが、中央の少し古ぼけたドアだけはノブを捻ると、蝶番を軋ませながらゆっくりと開いた。

開け放たれたその部屋の中もまた熱気とかび臭さに満ちていたので、すぐに2人で窓に走り、素早く換気をする。外も非常に湿度が高く、汗が滲み出てくるような暑さであるはずなのに、室内にそそぐその外気はひどく心地よく感じられた。

空は気付けば灰色の雲を背負い、ひどく淀んだ色に彩られていた。これはひと雨きそうだ。直也は夏の風に潜む湿り気を嗅ぎ取りながら、顔をわずかにしかめた。見上げる視界の先に、電線に並んで止まったカラスの群れが映る。

「でもさ」

奥の壁に沿うようにして置かれたベッドに腰掛けながら、ライは周囲を見渡す。直也は彼女を振り返った。

「ここって、さっきの場所よりはなんだか秘密基地っぽいよな」

「そうか？」

ライの発言に首を傾げ、眉をひそめながら、直也もまた周囲に視線を運ぶ。ベッドとパイプ椅子、そして空のキャビネットを除けば、他にないもない部屋だった。床はリノリウムでできており、隅の部分がめくれ上がっていて、虫の死骸が墨痕のように点々と転がっていた。以前、ここで休ませてもらった時に感じたように、やはりこの部屋の内装はどうしても病室をイメージさせる。がらんと、どこかもの哀しい。空虚なイメージが滲んでいる。

ベッドのシーツは剥がされ、布団は几帳面に畳まれていた。直也

はパイプ椅子に腰掛けると、重苦しいため息を吐き出す。相変わらず体は鉄のように重く、座っただけで膝が小さく震えた。

「そうだよ。いかにも隠れ家！　って感じじゃん、ベッドもあるから泊れるし」

「お前の感覚はよくわかんねえよ。ま、確かに隠れ家ではあったのは事実だけだな」

椅子の背もたれに寄りかかりながら、直也は聴覚を研ぎ澄ます。しかし人の発する音がその耳朵を打つことはなかった。直也はもう1度深いため息を零すと腰をあげ、正面に置かれているキャビネットの扉に手をかけてみた。それを開き、中を確認してみたが、雪のようにこびりついた埃くらいしかそこにはなかった。

直也はベッドに放っておいた自分のバッグの中を探ると、黒のTシャツを引っ張り出した。不思議そうにこちらを見つめるライをよそに、直也はそれを黙々とベッドの上で畳みなおした。

「なにそれ？」

直也の手元を覗き込みながら、ライが尋ねてくる。直也は小さく畳んだTシャツを持ち上げ、キャビネットの上に置いた。

「マスカレイダーズの……この家を所有する組織の偉い人が前に貸してくれたもんだ。死んだ息子の遺品なんだってよ」

怪人と戦った際、汚れた衣類の代わりにトヨが直也に着せてくれたこのシャツは、老婆の一人息子、船見幸助のものだ。幸助はマスカレイダーズの前身である、“白馬”という組織のリーダーであり、そして7年前の戦乱の最中、命を落としたらしい。

彼の亡き後の組織を継いだのは、その妻である船見琴葉という人物らしいが、彼女もまた去年、あきらの手によって殺害されたという。当の本人であるあきらが認めていたのだから、それは紛れもない事実なのだろう。その事実を胸の中で認めようとするほど、口の中で噛み締めようとするほど、苦い汁が喉奥から競りあがってくるようだった。

もしトヨと顔を合わせることができたのなら直接手渡そうと考えて

いたが、不在ならばしかたない。しかし船見家の庭に置き去りにするのはさすがに憚られ、そうなればトヨからシャツに込められた思いを聞かされた、この部屋に返しておくのが妥当に思えた。

「へえ。そんなもん、よくおっさんに貸してくれたじゃん」

ベッドの端にちょこん、と腰掛けながらライはあっけらかんとした様子で言う。直也もその隣に腰を下ろした。2人分の体重を受けて、ベッドのスプリングが悲鳴をあげるように軋む。

「ああ。俺も驚いた。だけど、その時は本当にありがたかったよ。改めてお礼を言いたかったけど、いないならしょうがない」

トヨならば直也たちを、けして見捨てはしないだろうという根拠はそこにあつた。少なくともあの老婆は直也の敵ではない。船見家のリビングでみせたあの涙、そして息子を愛するあの気持ちが偽りだとは絶対に思えなかった。だから直也もトヨを信頼することができる。愛する人を尊び、命を大切に作る人間を、敵視するほど剣呑としていないつもりだった。

再び視線を部屋の至るところに向けながら、何かないだろうか、と探る。マスカレイダーズの行き先を窺い知ることができるものを見つければ一番良い。それ以外のものでも、何か些細なことでも発見できれば、と気持ちを急かす。

「何か、手がかりが……」

直也はベッドの上から降りると、隅のほうに積まれた布団をどけてみた。直也の行動に促され、ライも床に飛びのく。折り目正しく畳まれていたそれをベッドの上に広げながら、この部屋を最後に使っていたのはどのような人物なのだろうと想像する。マスカレイダーズの一員か、それとも直也のような部外者か。イメージの余地は大いにあつた。

指紋やDNAなどを感知する術があればよかったのだが、そんな装置を生憎直也は持ち合わせていなかった。使えるのは探偵としての仕事で鍛えた勘と、生まれ持った五感だけだ。そのくたびれた布団を指先で撫でながら、直也は窓の外に視線を移す。

この部屋のドアだけ鍵がかかっていなかったことが、ずっと頭に引っ掛かっていた。この部屋には何かがある。それだけは確信できる。だがいくら部屋中を探ろうとも、何の痕跡も現れてこなかった。一応廊下や家の周りもざっと調べてみたが、結果は同様だった。

元のように布団を畳みなおし、今日何度目かになるため息を直也は吐いた。背後でライも腰をさすりながら、眉間に皺を寄せる。

「あーあ。やつぱりここにはなあんにもないよ。どうする？ また画用紙置いとく？ 私5枚くらい作ってきたんだ」

「……ああ、残念だけどそうするか。これ以上、ここにいても時間を浪費するだけかもな」

自分の勘が外れたことを残念に思いながらも、直也はこの場を後にする判断を下した。

ここがダメでもあと1つ、心当たりならばある。1つの場所に執着するのはあまり効率的な手段ではなかった。時間をいくらでも使えるというわけでもない。あのペンギンの怪人はこうしている間にも、着々と直也たちの背後に忍び寄っているかもしれない。

ぞくりとふと背筋に寒気を感じ、背後を振り返ってそこに何もなかったことを確認してから、直也はライを見た。まだ諦められないのか、彼女は床に這うような姿勢で、ベッドの下を必死に覗き込んでいた。あまり褒められたものではない、そのはしたない格好に、直也は顔をしかめた。

「おい、あんまり女の子がそういう恰好するなよ。パンツ見えてるぞ。水玉が」

「そんなの気にしてる場合じゃないだろ。いいいいいよ、好きなだけ見て。目の保養に使ってくれよ」

「ならねえよ、うるせえよ。もうここから出るぞ。あんまりだらだらしてる時間はないんだ」

直也は頭を搔くと、ベッドの上のバッグを持ち上げた。

そこで直也は、指に何か細いものが絡まる感覚を得た。そのまま掬いあげ、目を近づけてみると、それが毛髪であることが分かった。

それは指の腹で、薄日に美しく瞬く金髪だった。布団の間に挟まっ
ていて、広げた時に出てきたものかもしれない。

「金色の毛髪……」

それは直也にとつて、実に馴染みの深い単語だ。3年ぶりに解放
されたオウガの指に貼りついていた毛髪は、ライが咲の娘であるこ
とを直也に気付かせてくれた重要なアイテムだった。さらにそれは、
咲のライに対する想いを雄弁に告げてくれる温かい贈り物でもあつ
た。

だが今、直也の手に掴まれたそれは昨日、風呂場で見つけたライ
のものよりも、いくらか長いように感じた。中央で折り、左右が均
等になるように手首に載せると片方だけで10センチあまりにもな
る。

直也は目を細めた。

それはこの部屋を使用した人物のものなのではないか、という予
感が直也の胸の内にじわじわと広がっていく。そして毛髪を眺めて
いた直也の耳に、ライのすっとんきょうな声が飛び込んできた。

「おっさん！」

ベッドの下から顔をあげ、ライが片手を掲げて叫ぶ。直也はその
毛髪を左手の中に封じると、彼女に近づいた。腰をあげたライは掲
げていた手を直也の前に差し出すと、その掌を開いた。その表情は
歓喜に満ち溢れていた。

「やったよ、見つけた！ ベッドの下にこれ、落ちてたんだ」

「これは……」

ライの掌に載せられていたそれは、1枚のプリクラだった。ベッ
ドの下に放置されていたためかひどく埃を被って汚れている。直也
は指で汚れを拭くと、そこに写っているものに目を凝らした。その
矩形に切り取られた小さな空間の中で、4人の少年が楽しそうな笑
顔を浮かべていた。

レイは悠を連れて、デパートに向かうバス停までの道を歩いていた。天村家からバス停までは徒歩で30分と案外遠い。それはあの家が大きな道路に面していない、移動するためにバスや電車を使うことなどしない人たちが多く住む、高級住宅地に建設されているためなのだが、車の運転をすることのできず、また頼れる大人も周囲にいないレイたちは徒歩で移動手段を求めてさまよわなければならなかった。

あけすけな話をしてしまえば、立場上、大企業の幹部の娘である悠ならばお金で雇ったお付きやお抱えの運転手がいてもおかしくはないのだが、悠自身がそういった人間を使うことを嫌っている節があった。佑もそれは同様で、レイは2人のそんな世間一般の学生でありたいという意地に常々好感を抱いていた。

そういった諸々の理由があつて、レイは悠と並んで、夏の上り坂をせっせと登っている。それほど陽射しが強くないのは幸いだ。今日の空は湿り気が強い。灰色の雲が頭上にはかかっている、まだ降り出してはいないものの、いつ天気が崩れてもおかしくはなかった。

汗を拭いながら周囲の気配を探るが、とりあえず今のところ、怪人の迫ってくるような感覚はない。平穏な空気が肌に心地よかった。車の駆動音もどこか安らかな響きとしてレイの耳には届いた。ガードレール越しに、すぐ隣を走り抜けていく大型トラックを横目で見る。

シオルダーバッグを肩に斜めにかけて悠は、薄いクリーム色のシヤツにスカートを履き、頭にはツバの広いガーデンハットを被っていた。それは中学3年の女子があまり被る類の帽子ではなかったが、悠から漂う微かな気品がそうさせるのか、やけに彼女には似合っていた。その姿は外国映画などで時折目にする、草原で踊る令嬢そのものだ。

病院に何年も籠りきりで、そこから出てきて間もない割に悠は元氣そうだったが、それでもまだ病弱の影は引きずっているレイは悠の頬を伝う汗を認め、彼女の呼吸が荒れ始めていることに気付き、一度休憩をとることを提案した。ちょうど、歩道側に公園の石造りの門が見えていた。

「うん、ありがとう。レイちゃん」

休憩を切り出した時こそ悠は気丈に振る舞い、「大丈夫だから早く行こう」と答えていたが、レイが粘り強く説得すると、悠は青白い顔をしながら「じゃあお言葉に甘えようかな」と弱弱しくほほ笑んだ。

「今日も暑いからね。無理は禁物だよ」

バス停に繋がる道から脇に逸れ、立ち入ったその場所は公園というよりも、広場に近かった。遊具はなく、タイルの道とそれに囲われるようにして広大な芝生が広がっている。人の姿はそれなりに見える。門をくぐったレイの脇を、アイスを手にはしゃぐ小さな女の子が通り抜けていった。

道の脇に自動販売機があり、その隣に真新しいベンチが置かれている。レイは缶ジュースを2本買くと、林檎ジュースを悠に手渡した。レイ自身はコーラを購入した。

「ありがとう」と悠はまるで壊れ物でも受け取るかのように、大事そうに缶を両手で包んだ。太陽の光と帽子の影を表情に宿した悠は、頬を膨らませるようにして笑う。その姿がたまらなく愛おしかった。「どういたしまして」とレイは言った。そして2人並んでベンチに座り、ジュースを飲んだ。遊歩道を挟んで向かい側に植えてあるひまわりは、その3分の1くらいがすでに枯れ、その花弁もひどく黒ずんでいた。

最近では日が落ちるのも早くなってきた。虫の音も蝉より、夜の鈴虫の鳴き声のほうがことなく強くなってきたような気がする。これまでと比べ、あまりに色々なことがありすぎた今年の夏も、徐々に終わりに近づいているのだ。

どこことなく感傷じみた思いに浸りながら、乾いた喉をコーラで湿らせる。隣ではまるで水を飲むハムスターじみた動作で、ちびちびと悠がジュースを飲んでいる。レイは前髪を手持ち無沙汰にいじりながら、自分でも驚くほどに、彼女のそんな姿に引き込まれている。「お父さん、心配だね」

缶から唇を離し、口の周りにその小さな舌を這わせて悠が尋ねてきた。レイもまた缶を持つ手を下ろし、ゲップを1つする。それから悠の口から出たお父さん、という単語が黒城和哉を指していたことに遅れて気付いた。

「うん。まあ」

病室に横たわる父の姿を脳裏に浮かばせながら、レイは空を見つめる。口の中がそれだけで渴き、缶を傾ける。

「でも静かになって、ちょうどいいよ。少しはまともになって帰ってきてくれることを私は望んでるんだけどね」

動揺を振り払うように、早口で何でもないように言う。それでもやはり父のことを考えると缶を持つ手が震えた。レイは両手で缶を包み込むようにすると、膝の上に置き、それから悠に顔を向けた。

「だから、大丈夫。心配しないで。あんなことで、うちのお父さんはやられるタマじゃないんだから。それよりも悠は、自分の体のこと、心配した方がいいよ。まだ治って間もないんだから」

「でも……何か困ったことがあったら、いつでも言ってね。私、ずっとレイちゃんに助けられて、だからここまで頑張ってたから、だから、今度は私がレイちゃんを助けたいの」

悠は真剣な顔で、憂いをわずかにその瞳に宿して、レイを正面から見つめてくる。その表情は力強くて、レイの身を案じる気持ちに溢れていた。本当に悠は強くなったな、と感じながら、レイは一言、「ありがとう」と微笑んだ。

「じゃあ本当に困った時は、悠のお世話になるよ。その時はよろしくね」

「うん。いつでも好きな時に、うちに泊っていいからね。そのほう

が、たあくんも喜ぶよ。私もレイちゃんと一緒にいられて嬉しいし」
「私も悠といられて、嬉しいし、楽しいよ。ありがとう」

悠は相好を崩し、それからジュースに口をつけた。レイもまた缶を口に近付ける。もう震えは収まっていたので、片手だけで飲み干し、もう一方の手でむずむずする膝頭を掻いた。缶から口を離すと、レイは悠のほうをみて尋ねた。

「悠、バイオリンは、楽しい？」

悠は一瞬驚いたように目を丸くしたあとで、小さく微笑んだ。彼女が一挙一動するたび、その体から甘い桃の香りが発散される。それがまたいい匂いで、悠の可憐さを際立てせるのに一役買っているのは間違いなかった。

「うん、楽しいよ。みんないい人だし。お友達もできたんだよ。今度、レイちゃんにも紹介するね」

「うん、楽しみにしてる。先生も、いい人そうじゃない」

レイは昨日の夕方、駅で悠と一緒にいた背の高い、赤髪の女性の姿を思い浮かべる。丸っこい顔は愛嬌があり、その笑顔は弾ませたタンバリンのようで、一緒にいて心地よさを覚えるような人だった。あの女性からも今の悠とまったく同じ、桃の香りが漂っていたことを思い出す。

「うん。なんか結構いっぱいコンクールとかにも入賞してて、凄い人なんだって」

「ふうん。そんな人に教われるなんて、なかなか運がいいじゃない。うまくなったら、私にも聴かせてよ、悠のバイオリン」

帽子のツバの陰で嬉しそうに話す悠を見つめながら、レイは本心から言った。悠は恥ずかしそうに手の中の缶をもじもじと撫で回したあとで、顔をあげ、快活に頷いた。

「うん！ ちょっと恥ずかしいけど、私もレイちゃんに一番に聴いてほしいなあ」

「今のセリフ聞いたら、きっとお兄さん、嫉妬するね」

「もちろん、たあくんにも聴いてもらうつもりだよ。みんなに、み

んなに聴いてもらいたいなあ。レイちゃんにも、たあくんにも、いっぱい迷惑かけたし、いっぱい面倒みてもらったから、せめて私にでもできる恩返しがあればって思ってたから」

「そんな気にしないでいいよ。私もお兄さんも、別に迷惑だなんて思っでない。悠のことが好きで好きでしようがないから、色々してあげたくなっちゃうんだよ」

「そ、そういうこと言われると、照れちゃうよ……」

「本当のことなんだから、しょうがない。可愛いし、優しいし。私、悠のこと大好き」

陽炎の立ち昇る前で立ち止まり、悠の瞳を覗きこむようにして、レイは言う。悠はしばらくぼくと見惚れるようにレイを見つめ返したあとで、顔をさらに赤く染めて視線を逸らした。

「……私も、レイちゃん、好きだよ」

「ありがとう。とっても嬉しい」

「わ、私も！」

「じゃあ私たちは、両想いだね」

レイが告げると、悠はきょとんとしてから、笑顔を咲かせた。レイも笑みを返す。そうしてしばらく笑い合い、それから色々な話をした。そのほとんどは学校に関することで、悠からそれらの話を聞くと、なんだかレイの過ごすこれからの日常も彩られるような気がした。9月から悠と一緒に通学路を歩けるのかと思うと、それだけで胸が踊る。

長閑に流れゆく時間の中に身を置きながら、レイはコーラを飲み干した。悠もまた缶を傾ける。少しだけ口に含んだところで、悠は慌てた様子で腕を下ろした。ベンチに缶を置き、それからバッグを探りだす。何かとレイが見つめていると、悠は中から水色の携帯電話を取り出し、それを丁寧に開いた。画面を見て表情を綻ばせ、目を輝かせる。

「メールがきたの。さっき言ったお友達から！」

「へえ。やったじゃん。なんだって？」

「明日のレッスンも頑張ろうね、だって。終わったらご飯食べようって書いてある。でもたあくん、許してくれるかな？」

気分を昂揚させながら、レイに尋ねる悠は今までのどの瞬間よりも興奮しているように見えた。ここまで悠を喜ばせる相手に、レイは小さな嫉妬を覚える。だがそれも悪くない感情だと自分自身を宥めた。悠はいつまでもレイの手の届く範囲にいてはいけない。悠にもレイの知らない友達がいって、生活がある。それが普通なのだから。「大丈夫、私が説得しておくよ。もし反対したら脛蹴っておくから大丈夫だよ」

「そ、そこまでしなくてもいいよ！ でもありがとう。楽しみだなー」

翌日のことを思っただ、悠は空を仰ぎ、ほお、と柔らかなため息を零す。それからレイに顔を向け、手の中の携帯電話を軽く顔の前で振った。

「ごめん、レイちゃん。メール、お返事してもいい？」

「どうぞどうぞ。私はどこにも行かないから大丈夫だよ。ゆっくり打ってるといいよ」

レイの返事に悠はとびっきりの笑顔をみせ、「ありがとう」と体を弾ませると、携帯電話の画面に目を戻した。レイは空き缶を握りつぶし、それからメールを打つ悠の姿を眺める。携帯電話を両手で抱えるようにする彼女が、なぜかレイには大人っぽく映った。

成長していく悠を、変わっていく親友をいつまでも見ていたい。そんな思いを抱く悠の頭に、何の前触れもなく、突然閃光が瞬いた。久々に来た、と身構える。それはレイの体内に存在するセンサーが、怪人の出現を捉えた印だった。瞠目し、レイはじつと地面の一点を見つめる。自然に手に力がこもり、缶に指が食い込んでいく。怪人の所在を突きとめるため、頭の中に割りこんでくる景色の判別に神経を研ぎ澄ませた。

怪人の気配が、凄まじい速度で移動しているのが分かる。その実像はまるでモザイクでもかけられているかのように、まったく窺い知

ることができず、そんなことはこれまでなかったので少し不審に思いはしたが、それは怪人の反応に違いなかった。10秒を待つことなく、怪人の出現場所を特定する。

「……悠、ごめん。ちよつとお兄さんに電話していい？」

「ん。いいけど、どうしたの？」

「ちよつと伝え忘れたことがあったの。すぐ終わるから、ごめんね」
あまり悠長に話している時間はなく、ほとんど一方的に言い遣つてレイは携帯電話を取り出した。だが、佑の連絡先を呼びだそうとして、指を止める。

怪人を惨殺していた佑の姿、そしてこちらを睨む扇風機怪人の眼差しが脳裏をよぎり、そのイメージが心を衝いた。しかし止まったのは一瞬で、レイの細い指は再び携帯電話のキーを叩き始めた。悠を守るという使命がある以上、怪人に対処するためには佑に頼るしかない。これ以上、式原の手にかけられる犠牲者を増やすわけにはいかなかった。

数回の呼び出し音のあと、佑の声が聞こえた。ここで自分にかけてくる電話の意味を察してか、「レイちゃん、どうした？」と告げる彼の声はすでに強張っていた。

「怪人です」

レイは悠に背を向け、口元を隠しながら短く伝えた。悠のほうをちらりと見てから、電話は失敗だったことに気が付き、「場所はメールを送ります」とだけ素早く言つて通話を切った。

「ごめん。ちよつとお兄さん、電話に出づらい場所みたいだから、メールにするね」

「たあくん、電車にでも乗ってるの？」

「うん、そんな感じ。男はいつでも、人生という名の電車に乗っているもんなんだよ」

適当に答えながら、携帯電話に視線を落とし、今度は新規メールの作成を開く。悠をやきもきさせてはならないと思い、素早く文字を打ち込んだ。怪人の出現場所を手短に伝え、さらにそれが移動し

ていることも伝える。そしてメールを終わりまで打ち終わってから、レイは目を見開いた。

怪人の気配越しに見た景色に、レイは見覚えがあった。それはおよそ1週間前、華永あきらたちと、マスカレイダーズとの激しい戦いが繰り広げられたホテルの跡地がある場所だった。

おそらく偶然だろう、と思いながらも何となく不審な気持ちが拭えない。それはおそらく、あの戦場で日常と著しく乖離した経験をしたためだろう。異の力を溜め込んだあの場所ならば同じ異の存在である怪人が寄せ集まってもおかしくはない。

そんなことを考えながら、メールを送信し、携帯電話を置んだ。

「レイちゃん」

悠が、震える声でレイの名を呼んだ。それだけで何か悪い予感を察し、レイは心臓を鷲掴みにされるような思いで悠の方に顔を向けた。

「どうしたの、ゆ……」

悠の手には開いたままの携帯電話が握られていた。しかし、その目は画面を捉えてはいなかった。

悠は怯えた表情で、自分の足元を見つめていた。その震えた指先はレイの肩先を摘んでいる。ただならぬものを感じ、レイは恐る恐る彼女の視線の先を追う。

そしてレイは息を止めた。現実感が消失する。一瞬、目の前が白く混濁し、それから暗転して、目の前のシルエットに焦点を合わせた。

そのシルエットは小動物の形をしていた。それはネズミだった。

いや、それはネズミの姿をした怪人に違いなかった。

3歳児くらいの大きさで、アニメ画のようにデフォルメされている。それだけでそのネズミがただの動物でないことは明らかだった。毛並みは抜けるような白で、鼻の先だけが赤い。耳はぎざぎざの形をしている。

それら常識的な範疇を超越した身体的特徴の中で、最も特筆すべ

きはその両の眼だった。

そのネズミに目というものは存在しなかった。目があるべき場所に、青い宝石が埋め込まれている。それは灰色の空の下で妖しく光り輝いていた。

鎧の話 41

次に頼るつては、黄金の鳥を崇めるあの組織だった。そのリーダーは直也の元恋人——青髪的女子高生、華永あきらであることを直也はすでに知っている。

直也はあきらと1週間前、組織のアジトである『ホテル クラークン』の中で会話を交わし、そして別れた。その瞬間からあきらとの関係は恋人ではなく、ただの他人と化した。

別れ際にあきらをこれからも助けたい、と宣言したにも関わらず、逆に彼女に救いを請わなければならぬ現状と化していることに情けなさを感じたが、くだらない見栄や矜持はこの際捨て去らなければならぬ。マスカレイダーズの居場所が見当もつかぬ今、もはや続けることができるのは彼女以外にいない。直也は最後にみたあきらの悲しげな眼差しを脳裏に引き連れながら、燦るような胸の痛みとともにバイクを駆った。

『ホテル クラークン』には船見家から20分近くかかった。信号待ちや、人気の少ない道を通らなければならない時は、いつ怪人が襲いかかってくるものと肝を冷やしたが、結局気配を感じることもなく目的地まで辿りつけたのは幸運だった。

国道から逸れ、細く入り組んだ道に入る。突き当たりにはラーメン屋があり、その脇に伸びた小道にバイクを進ませた。コンクリートの壁に挟まれた狭い道をしばらくぐぐっていくと、やがて開けた場所に行き着く。

その地に踏み入れた瞬間、直也は少し奇妙な感触を得た。空気が

一変し、ざらざらとした風が肌を撫でていくような感覚だった。つい数秒前まで立っていた世界とは、別次元に来てしまったかのような不安が胸を衝く。しかしその嫌な感覚も数秒もすると消え失せ、運転に集中できるようになる。今のはなんだったのだろうと思うが、そんな疑問はすぐに頭の中から失せた。そんな些細な感覚を吹き飛ばすほどの衝撃が、直也の胸を冷たく満たしていく。

乾いた土を後輪で掻き出し、背後にもうもうと砂煙を生み出しながら、直也は目を疑った。ブレーキを踏み、車体の動きを止める。急停止したせいで、慣性に流されるままにライが背中中に勢いよくぶつかってくる。ライの呻き声をどこか遠くに聞きながら、ヘルメットのバイザーを押し上げ、しかし目の前に現れたその景色が変わらぬことに、改めて身の芯が震えるほど驚愕した。

「なんだ、こいつは……」

以前、直也はマスカレイドーズの一員である藍沢秋護という男に連れられてこの場所に訪れたことがある。その際、この開けた地に建つ寂れたホテルの中にあきらがいることを知らされたのだった。

しかし今、そのホテルは影も形もなくなっていた。

直也はライと一緒にバイクから降りると、ヘルメットを脱ぎ去り、バッグをハンドルにかけて、ホテルが“あつたであろう”場所に駆け寄った。

位置も場所もそこで間違いないはずだ。それなのにあの威容だけが。廃れたシルエットだけが、目の前から消え失せていた。

ある意味で思い出深いその場所が、直也の立つ前で瓦礫の山と化していた。うず高く積まれたその中には、折れた槍のようなものや、切り刻まれた薄いプラスチック製のカードの残骸が混じっている。コンクリートの破片やガラスの欠片などが周囲に散らばっていた。瓦礫の頂にはどういう理由なのかは見当がつかぬものの、鳥の頭部が載せられていた。見るからに作り物だ。木でできており、日に焼けたためなのかその表面は少し赤らんでいた。見上げると、その光のない眼窩と目が合ってしまい、直也は素早く視線を逸らす。

直也は驚愕に心を揺すられたために呆然と、周囲を見渡した。

その茫洋と広がる灰色の地面は、ところどころがめくれ上がり、または陥没し、または巨大な穴が穿たれて、まるで大災害でも過ぎていったかのような無惨な傷跡が刻まれていた。木は根こそぎ倒され、以前訪れた時には存在していた草むらは姿を消し、視界の限りにはひたすらに焦土が広がっている。この地に立つ命は、直也とライ以外になかった。なにもかもが死に絶え、なにもかもが終わっていた。それは考えるまでもなく戦闘の跡だった。巨大な力を有する複数人が力を加減することもしないに争い合ったような、乱暴な痕跡がこの地にはあまりに深く刻まれている。

直也はしばしその凄惨な景色の中で茫然と立ち尽くすことしかできなかった。空気には霧の残滓のようなものが漂っている。それは赤色だったり、青色だったり、または白だったりして、まるでクリスマスのイミテーションのように視界をちらちらと瞬いている。それらが直也の鼻先を掠め、足元を掬っていく。

これはおそらく黄金の鳥の組織と、マスカレイダーズによる抗争の跡だろう、と直也の頭は判断していた。おそらくアジトがマスカレイダーズに見つかり、あきらめたちは必死に抵抗を試みたのだろう。そういう図式が、碎かれたホテルの残骸を見るだけで浮かんでくるようだった。双方とも、直也にはまったく歯が立たない怪人を瞬間に倒してしまえるほどの力を有している。それらの力同士が激突した結果がいかなる状況を導き出すかは、いま、目の前に広がる景色が何よりも雄弁に示していた。

野次馬がなく、報道された形跡もないのは、おそらくこの事実を隠ぺいしたからだ。ここに始めてきたとき、ホテルは厚い霧に閉ざされて直也が視認することは叶わなかった。あれを応用し、または範囲を広げて、一般人の目に戦いが触れぬよう考慮したに違いなかった。

「あきらちゃん……」

不安が胸を詰まらせ、たまらず1週間前まで恋人だった少女の名

前を咥く。直也が苦戦していた怪人を一撃で葬り去るほどの力をもつ彼女が、簡単に倒されるとは考えにくい。しかしそれでもこの崩落したホテルを目の当たりにすると嫌なイメージが脳裏を過ぎった。彼女の安否を確認することの叶わぬ現状を、今更ながらに呪う。今の直也には、彼女が無事であることを祈る以上のことはできない。それが何よりも歯がゆかった。

マスカレイダーズが不在であったことも、この状況をみれば納得だった。

2つの組織はかなり激しく争いあったのだろう。この情景から予想するに、どちらもひどく疲弊しているに違いなかった。メンバーに死者が出た可能性も大いにある。そうなれば、自分たちのことに必死で、直也の手助けなどしてられないだろう。怪人の行動を察知できているのかさえ、今となっては疑問だった。

はは、と思わず乾いた笑みがこぼれた。自分の不運さを嘆くしかなかった。目を細め、瓦礫の山を見つめる。あきらを裏切った罰かもしれない、と自虐的な感想が胸を過ぎる。

「もう、運にも見放されたってわけかよ……」

口に出すと、さらなる絶望感が押し寄せてきた。眩暈がし、たまらず額を抑える。目をぎゅっと瞑り、開いてから、顔をしかめた。この土地では、何もかもがすでに終結している。ここにすることに、もはや意義を見出すことはできなかった。

嘆息をしながら踵を返す。それだけでこめかみに疝痛が走った。だが、砂礫の上で片膝をつき、俯いているライを目にすると――その痛みも一気に消し飛んだ。

「ライ！」

直也はうずくまるライに素早く駆け寄った。見ている前で彼女は汗を滴らせ、肩で息をしている。直也が呼びかけると顔をあげるが、その瞳に光は薄く、表情もどこか虚ろだった。

「おい、ライ……どうしたんだよ、おい！」

いつも明朗活発なライが苦しげにしている様は、直也の心に大き

な焦りを生じさせた。胸の奥がざわめき、いてもたってもいられなくなる。両肩に手を置き、名前を呼びながら軽く揺すると、ようやく彼女はその目の焦点を直也に合わせた。しかし体は熱く、耳元は薄く紅潮していた。

「おっさん……」

「おい、大丈夫かよ。いきなりどうしたんだよ」

直也の問いに、ライはゆるゆるとかぶりを振った。ひどく気急そうだった

「わかんない。ここにきたらさ、なんかくらくらしちゃって。体も熱いんだよ……おっさんの風邪がうつったじゃないかな？」

「そんなわけ……」

直也は途中で言葉を切り、それから息を呑んだ。遮蔽物の排除されたこの地には、人から伸びる影が別の物の影に被さるということは基本的にない。陽光は薄いものの、それでもこの地にわずかながら光を注いでいた。

そうでなくても、ライの影は直也のものや瓦礫の山が生み出したものよりも、明瞭とした形を伴っていた。まるで己の存在を誇示するかのような。周囲に比べて、その影は零れたタールのように色濃い。

だから直也の目は余計に、ライの足元から伸びた彼女自身の影に釘付けとなった。思わず彼女の肩を掴む手に力が入る。

赤茶色の地面に貼りついたライの影は、人間の形を成していなかった。

それは――翼を広げた鳥の形をしていた。咲や式原の肌に刻まれていた痣、そしてリーフレットの中央にでかかどプリントされていた絵と全く同種、同形状のものだ。

瞠目する直也の前で、ライは顔を伏せ、くたびれた吐息を漏らす。どうやらライ自身は、自分の身に起きているこの変化に気付いていないらしい。

どうということなのだ、と頭を捻らせたその時、直也はさらなる事実

に気が付いた。

「これは……」

ライをそのままにして立ち上がり、大地を眺める。思わず感嘆の
声が漏れた。少しだけ後ずさり、その全体像を視界に収め、今度は
息を呑む。

視線の先に、黒い鳥がいた。

縦横1メートルくらいの大きさの、翼を広げた鳥の絵——ライ自
身の影とまったく同じ形をしたものが、今度は地面に描かれていた。
直也は絵の輪郭を形成している線を足の先で軽く拭ってみたが、
それは子どもが悪戯で引いたものでは断じてなく、特殊な道具を使
って地面に強く彫り込まれたものであることが分かった。数十セン
チの幅を持って彫られた溝に、黒炭のようなものが流し込まれてい
る。直也はペルーの高原にあるナスカの地上絵を想像した。

「なあ、おっさん」

顔をあげ、上目遣いでライは直也を見た。直也は動揺する気持ち
を抑えきれぬまま、彼女に視線を転じる。

「仲間、またいないの？ 私たちの味方、ここにいるんじゃないの
かよ」

ライの絞り出すような声に、直也は胸を衝かれる。無言のまま見
つめていると、それだけで状況を察したようで、ライは弱々しく笑
んだ。

「なんだよ、またいないのか。運がないよなあ、私たちも。じゃあ
また、秘密兵器、出さなくちゃ」

そう言って手を地面につけ、何とか立ち上がるうとする。直也は
咄嗟にライの肩を掴み、その小さな体を支えた。

「おい、無理すんな」

「無理してんのは、おっさんのほうじゃないか。熱、今もあるんだ
ろ？」

額に手を当て、よろめきながらも地に足を着けるライを、直也は
ハッとして見つめる。軽く頭を振って額に浮かんだ汗を吹き飛ばす

ようにしてから、ライはへへ、と口の端を緩めた。

「私は大丈夫。すぐに元気になるって、こんなの。バカは風邪を引かないって言うじゃないか」

「……どう見ても大丈夫には見えねえし、どう見てもただの風邪には見えねえよ」

「人のこと言える立場かよ。おっさんは自分の体のことだけ心配しろよ。顔色、悪いよ」

指摘され、直也は思わず自分の頬を触った。ライのそれよりも熱い感触が掌に伝う。直也は額に浮いた脂汗を拭くと、「とにかく」と取りなすように口を開いた。

「どのみち、ここはなんだか奇妙だ。ひとまずここから退散しよう。こんなところにいたんじゃ、奴らの格好の的だ」

直也はライの背後にある、地面に描かれた黒い鳥の絵を一瞥する。もしやライの異変はあの絵の影響かも知れない、と直也は薄い根拠の中で推測する。何にせよ、ライの体調不良はこの場所にたどり着いた時から始まったに違いない。それならばここから離れることが、今できる何よりの特效薬であるはずだ。

ライの手を取り、バイクの止めてある場所まで引き返そうとする。無人の車体は細かく震え、エンジン音をまき散らしている。それを目にして直也は、キーを抜き忘れていたことを思い出す。もうもうと吹き上がる排気ガスが風に溶けて消えていく。

その時、直也は背中突き立てられるような視線を感じた。

立ち止まり、振り返ると、そこにいつの間にも現れたのか、男が3人並び立っていた。身を固くし、いつからそこにいたのかと当惑する暇もなく、直也はまず彼らの外見に目を奪われる。

男たちは良質な生地のスーツに身を包んでいた。8月にも関わらず厚手の背広を着込んでいる。それだけですでに不自然であったが、彼らにはその違和感を払拭する要素がさらに存在していた。

まず、その顔はお面によって覆われていた。直也から見て左の人物から家鴨、鶏、椋鳥のお面をそれぞれ被っている。見る限り、そ

れらはかなり精巧な造りのようだった。幼稚さと気品をアンバランスに兼ね揃えた彼らの立ち姿に、直也は寒気を覚える。男たちと向き合っているだけで現実感が揺らぎ、どこか心許ない気持ちになる。さらに彼らは首筋にタトゥーを彫っていた。動脈の通っているだろうその部分に、人間の眼の形をした彫り物が施されている。その眼差しは深く、直也の心を抉り出すような迫力に満ちていた。

「なんだ、お前は」

ライを背後に庇うようにしながら、直也は男たちに尋ねる。男たちの纏う雰囲気は、明らかに一般人とは一線を画している。それ以前に人間であるという確証もなかった。お面に厚塗りされた鳥の鋭い眼窩が、直也の魂をもぎ取るうとするかのように怪しく光る。

直也は掌に汗を浮かばせながら、ジーンズの尻ポケットに手をやった。中にあるプレートを手で包む。相手がいかなる行動をとろうとも、ライだけは守ることができるように備える。プレートを半分ほど抜き取ったところで、鶏のお面を被った男が動いた。一步前に足を踏み出し、掌を直也のほうに突き出す。

「怖がらなくていい」

お面越しに聞こえてきた声は直也が想像していたよりも高かった。短く刈られた髪には白髪が見える。意外と年を食っているのかもしれない。男はさらに続けた。

「君は坂井直也だろう」

その思いがけぬ言葉に、直也は目を剥いた。唾を呑みこみ、それから男を睨みつける。

「なぜ、俺の名前を」

「当然だ。君が知らなくても、こちらは君のことをよく知っているからな」

家鴨のお面を被った男が鶏の男と並び立つ。この男の声は鶏とは対照的にひどく低く、どこか地鳴りを彷彿とさせた。

「あのお方と深い関係にあったと聞いたことがある。手に持っているのはオウガだろう？ 全てお見通しだ」

椋鳥の男もまた前に出る。3人の中では明らかに背が低く、声も一番若々しかった。

直也はプレートを掴んだ手を止めた。男たちのお面に塞がれた顔を見渡す。困惑に言葉を失う直也に、鶏の男は直也の背後に視線を向けた。直也は振り返った。そこには苦しそうに肩で息をし、うづくまるライの姿がある。

「どうやってここに入ってきたのか謎だったが、なるほど。どうやらそのお嬢さんが関係しているらしい」

鶏の男が抑揚のない語調で言う。男たち全員の視線が直也ではなく、ライに集中した。

「……悪いが、見世物じゃねえんだよ」

男たちの視線に嫌悪を覚え、直也はライに集中した彼らの視線を遮るように立った。直也のとった行動に対し、鶏の男は首をすくめた。椋鳥の男は整髪料で鶏冠のように固めた自分の髪をいじりながら、一歩前進する。

「巫女の関係者だ。手荒な真似ができるはずもない。さっき言ったじゃないか。怖がらなくていい、と」

「アイラブ・バード、アイラブ・リビング、アイラブ・ホープ、アイラブ・オールザシング」

「鳥は欲するものを救う。逃げぬものに光を注ぐ。その運命を決定付けるのは他でもない、あなた自身なのだ」

鶏の男が突然、呪文のように唱える。続けて家鴨の男も意味深な言葉を述べる。警戒していいのか安堵していいのか分からず、直也はライを庇う姿勢をとりながらも混乱する。一体この男たちが何者なのか、窺い知ることのできないことが直也を戦慄させた。

だが、男の発した“巫女”という単語が直也の胸に光を灯した。直也は男の被っている鳥のお面に――否応なく目に入るそれに――改めて注目した。

“鳥”という特徴から直也に連想できるのは、黒い鳥と黄金の鳥だった。彼らが怪人ではないということと、この場所に元々あきら

たちのアジトがあつたという前提をそこに照らし合わせると、それほど考えこむこともなく、答えは見えてくる。

3人の男たちは直也たちに敵意を向けることなく、むしろ迎合するかのような姿勢をみせている。

もしや、と思った。直也の予想が正しければ、暗澹としたこの道の先に希望の光が生まれたことになる。自然と心臓が高鳴った。期待が胸で膨らみ、堪え切れない。

「もしかしてお前たちは、黄金の鳥の……」

しかし、直也の発した問いは相手に届くことなく、宙で碎けた。

「やれやれ、ようやく見つけたですー」

聞こえてきた、この場に似合わぬ軽妙な声に、直也は背筋を凍らせた。背後でライがびくりと体を震わせたのが分かる。お面の男たちは視線を彷徨わせ、声の主の姿を探る。

ぼつりぼつりと降り出した生温い雨が、地面に染みを作っていく。その痕跡を踏み潰す足音が直也の耳朶を叩いた。荒れ果て、退廃的なこの地の中を、こちらに向かって歩いてくるのは、黒のパーカーを身に纏い、フードで顔を隠した少女だった。

少女はお面の男たちではなく、そして直也でもなく、さらにその向こうにいるライをまず一瞥した。「なるほど、そういうことかですー」と得心している。それから頭からフードを取り去り、唇を舐め、この場に立つ一同を見渡した。フードの下から現れたその相貌は、やはり髪の色以外に差異はなく、ライと同一のものであった。

「しかし先客ですかー。どうにも奇妙な取り合わせですねえ」

躊躇いもなく近づいてくる少女とライとを、鶏の男は一瞬見比べた。それから少女の方を向き、顎を引く。残りの2人の男も少女の方を向いた。その挙動に警戒が滲む。

「何者だ。そこで止まれ」

男の発した険呑な語調に、少女は足を止めた。可愛らしく小首を傾げ、前髪を指に巻きつける。

「なんですかー。私はお前らに用事はないですー。そこをどくです

「質問に答える。何者だと聞いている」

鶏の男は緊張したまま背広の内側に手を入れた。そこを探り、何かを取り出そうとする。そんな男の様子に、少女はため息をついた。その目が暗澹とした色を帯びるのが、直也には分かった。

そして、わずかな風のどよめきを残して、少女の姿は一同の目の前より消失した。直也は目を見開いた。ライは呆然としている。鶏の男の口から、「なっ」と驚嘆の声があがる。

棕鳥の男が視線を素早く周囲に巡らせ、家鴨の男が身構える。

「……まったく、本当に面倒臭え奴らですー」

怒気を含んだ声が宙を舞う。ハツとなり目を向けると、わずか数メートルという場所でペンギンの怪人の爪に体を貫かれている家鴨の男の姿を見つけた。その怪人はあの喫茶店でも確認した通り、先ほどまで数十メートル前方を歩いていた少女が変化したものに違いなかった。

「どの道、私の姿を見た奴らは生きて帰さねえですー。全滅ですー」

怪人は逆の手の爪を振るい、男の首を切り飛ばすと、血の滴るその体を投げ飛ばした。頭部を失った体は地面を跳ね、あたりを血で真っ赤に染めた。まるで汚れたスイカのように見える頭部に怪人は右手をかざし、青白い電撃を浴びせかけた。電流はその皮膚や毛髪を焼き、それから生首はたちまち炎に包まれた。

棕鳥の男が何事かを叫びながら、背広の内ポケットに手を突き入れる。取り出したのは小型の拳銃だった。男は照準を合わせようとせず、無我夢中で引き金を振り絞る。空を裂く破裂音とともに、その銃口から硝煙が立ち昇った。

怪人はその弾丸を胸で受け止めた。一瞬、立ち止まりはしたものの、撃たれた後を手で軽く拭うその姿にはその一撃が通じているような様子は全くなかった。家鴨の男も拳銃を取り出し、2人で発砲するが結果は変わらない。

怪人は鼻を鳴らすと両腕を広げ、右手を棕鳥の男に、左手を家鴨の

男にかざすようにした。男たちが身をかわす隙さえ与えず、怪人はそれぞれの手から電撃を、冷気を、同時に放射した。青白い光と白い気体が間隙を埋め、空に散る。

椋鳥の男は先ほどの生首と同じように火に包まれた。もがき、のたうちまわるその体に怪人は爪を突き立て、黙らせる。家鴨の男は身に着けているスーツや髪の毛を真っ白に凍らせ、まるで魂が抜けてしまったかのように後ろ向きに倒れた。

ここまで一瞬の出来事だった。直也が判断し、動き出す前に全ては終わった。出来上がった3つの死体を前に怪人は満足げに息を鳴らす。家鴨の男の頭を軽々と足裏で踏み砕き、それから直也たちに体を向けた。

「さて、これで邪魔者は消えたですー」

怪人の体がしゅるしゅると縮まり、そのシルエツトが少女のものへと戻る。少女は胸の前で百合の造花を揺らしながら、一步半、前方に歩を刻んだ。直也は思わず後ずさった。

もう少しで掴めると思った希望を寸前で碎かれてしまったことで、直也の心は大きく揺さぶられていた。胸のざわめきが止まらず、頭から引いた血の気が戻ってこない。

愉しげに笑みを浮かべる少女を前に、直也は身を凝らせる。何も得ることができないままに、直也はタイムリミットを迎えてしまった。荒廃の地に横たわる3人の死体に視線を運ぶ。自分やライもあるんな死を迎えるのかと考えると、骨の芯まで震えが走った。

下唇を血が滲むほどに噛む。体の内側から積みかける震えを無理やり胸中に押し込める。脅えてばかりもいられないのだ、と己を鼓舞させた。覚悟を決めなければならない。今を乗り越えられなければ、自分にも、ライにも、明日はない。

柳川の黒く淀んだ瞳が、田辺の病的な眼差しが、脳裏に過る。洋館で出会った11の死体が、旧鉤橋邸に置かれていた女性の生首が、胸を掻き毟る。

俺たちだけではない。直也は敵を睨む。ここで倒れれば、多くの人

の命が危機に晒されることになる。それだけは絶対に阻止しなければならぬ。だから、こんなところで死ぬことはできない。直也は決心を宿し、大きく息を吸い込んだ。

「デベスクリームってのは、お前のことか」

田辺が口にした奇妙な単語を思い出しながら、問いかける。少女は驚いた風に目を見開いたあとで、眉間に皺を寄せた。

「一体それをどこで知ったんですかー。恐ろしいですー。気持ち悪いですー。プライバシーの侵害ですー。ストーカー野郎ですー」

わざとらしく脅えるような拳動を少女はとる。直也はそれに取り合わず、さらに言葉が続けた。

「人を蘇らせてくれる。そう誰かに吹き込まれ、それを信じていた爺さんに会った。“リリイ・ボーン”の真の目的とは、なんだ」

「……へえ、こいつは驚いたですー。そこまで知られているとは思わなかったですー」

少女は口角を上げる。その瞳がぎらついた光を帯びる。直也は粟立つ体を掌でそつとさすった。

「それなら、もう逃がすわけにはいきませんねえ。まあ、もとよりここで終わらせるつもりでしたけどー。私に狙われたのが、運の尽きですー」

「おっさん」

肩を叩かれ、そちらに視線をやると、そこには直也の体を支えにして立ちあがるライの姿があった。彼女はまだ具合悪そうに、体をふらつかせていた。

「お前……」

「こいつを、使って」

そう表情を歪めながら言って、彼女は蓋の開いた携帯電話を差し出してくる。直也はその意図を瞬間的に理解した。

「……ああ。サンキュ。ちょっと借りるぜ。お前はそこでじっとしてろ」

直也の返答にライは力なく頷き、再び地面に屈みこんだ。直也は携

携帯電話を受け取ると、顔をあげた。右手にプレート、左手に携帯電話を握りしめ、少女と相対する格好となる。

毅然とした直也の姿勢に、少女は不快そうに小鼻をひくりと動かした。その輪郭は空気の中に溶け込んでいく。少女の全身が煙のように失せ、入れ替わるようにして全く同じ位置から、ペンギンの絵を胸に構えた、刺々しいシルエットをもつ怪人が再び姿を現した。「まったく、悪あがきもほどにしてほしいですー。私も多忙ですー。ちゃっちゃつと終わらせたいですー」

両手のかぎ爪を擦り合わせ、ため息をつく怪人を視線の先に捉えながら、直也はプレートの角で携帯電話のディスプレイを小突く。数秒と待つことなく、接触を果たした箇所が淡い光を帯びる。

怪人の右手に青白い閃光が灯る。続けてその指先から電撃が迸り、宙を滑った。

その攻撃に応じるかのように、無数の装甲片がディスプレイの中から現実世界へと顕現を果たす。飛翔する銀色の装甲は怪人の放った電撃を、直也に届く前にことごとく打ち落とした。

中空で途絶え、破裂した電撃の余波を浴びながら、直也はその中心で装甲服を纏う。『3』の数字を掲げるイミシャド——オウガを装着した直也は腰だめから刀を引き抜くと、再びこちらに掌をかざす怪人目がけ、雄たけびをあげながら飛びかかった。

魔物の話 50

そのネズミの相貌は、喻えるなら悪夢のようだった。

現れた怪人に驚く間もなく、悠の体が突然、前のめりに倒れた。まるで悠の体をずっと支えていた何かが、急にその手を離れたかのように、彼女は急激にバランスを崩した。

「悠！」

レイは身を乗り出すと、悠の体を地面と激突する寸前で受け止め

た。

その体を片手で支え、ベンチにそつと横たえる。そうしながら彼女に僅かだが呼吸があり、これといった外傷もないことが分かった、その場に膝から崩れ落ちそうになるほど安心した。どうやら悠は気を失っているだけのようだ。

親友の頬に軽く触れ、それからレイは腰を上げて、自分の足元に立つネズミを睨んだ。

その全体のシルエットはレイの愛しき息子、ディッキーのまったくの写し身だった。ネズミにしては大きすぎるその身体や、あまりにデフォルメしすぎた、漫画にでも登場しそうな外見もディッキーを彷彿とさせる。黒い短パンを下半身に着けているところも、レイに息子の姿を連想させた。

ただ、その顔の造形は大きく異なっている。レイを見上げてくるその眼窩には青色の宝石が埋め込まれ、その口元もどこか厭らしく歪んでいる。その佇まいはひどくおぞましい。悪夢を具現したかのような相貌だと、レイは鳥肌の立った腕を撫でながら顔を歪めた。

「悠に何をしたの」

呼吸を震わせながらレイは尋ねる。影の輪郭を人のものから外し、鳥の姿へと変化させる。最高の怪人としての力を体の奥底から呼び覚ます。このネズミが敵であることは、状況から明白だった。

ネズミは鼻を鳴らすだけで、レイの問いに何の答えも返さなかった。脅えている様子もない。ただその感情の読みとりにくい、宝石の瞳でレイを嘲るように見つめていた。レイは息を吸い、血流に酸素を乗せて、冷静さを取り戻そうとする。そしてこのあまりに奇妙なネズミについて、頭を働かせた。

「あなたは……」

咄嗟に思い出すのは昨日、『しろうま』で目撃した小動物の後姿だ。人間の首を狩り、その死体を引きずりながら雑木林の中に消えていった、あのシルエットが脳裏に蘇る。あれを見てからというもの、レイの心にはこれまでよりも一層色濃く、ディッキーの姿が

浮かぶようになった。

「はじめまして。じゃあねーよな、これで会うのは2回目か」

突然、今まで黙りこくっていたネズミが流暢な、しかし乱暴な日本語をげっ歯類の口で突然紡ぎ出した。

レイは目を丸くし、心底驚嘆した。声をあげそうになるのを寸前で呑み込む。そんなレイの様子に、ネズミは舌打ちをした。

「おい、まさか忘れたなんていわねえだろうな？ 昨日助けてやっただろ？ あんたにとって俺は命の恩人ってやつなんだぜ？」

「昨日？ それって、やつぱり、あなたが……」

レイは昨日の出来事を頭に思い浮かべながら、愕然とする。自分の予想が的中したことへの喜びは一切なかった。ただ、ひどい衝撃が体の芯を痺れさせるようだった。

「まったく、あんな奴らに気がつかねえとは。最高の怪人の名折れだぜ？ 俺がいなければ、あんたは今頃地獄いきだ。感謝してもらいてえもんだな」

「……死んでた？」

困惑した頭で、レイは首を傾げる。当然のことながらその怪人の言動や声はデッキリとは明らかに異なっていた。デッキリはこんなに粗暴な物言いはしないし、毒々しいセリフも吐かない。レイはこの怪人に重ねて抱いていた微かな幻想のようなものが、胸の奥でことごとく打ち砕かれていくのを感じ、正直、そのことに大きなショックを受けた。

「奴らは黄金の鳥を崇めているところの雑魚連中さ。あんたも知ってるだろ？ あんたと連れの男はそいつらに監視を受けたのさ。そこをこの俺がずばっと救ってやったんだけどな。どうだ、全然気がつかなかっただろ？」

ネズミの勝ち誇るような表情に、レイは唇を噛んだ。凶星であることを察したのか、ネズミは小馬鹿にするに声をたてて笑う。レイは静かにネズミを睨みつけた。

黄金の鳥という単語に導かれるようにして、レイは華永あきらの

ことを思い出す。『しろつま』で楓葉花と共にいた、青髪の少女。その後、『ホテル クラーケン』の中で彼女と再会を果たした。しかしその後のあきらの消息はまったく掴めていない。彼女が今どこで何をしているのか気にはなっていたが、一度殺されかけている以上、迂闊に調べるのは危険であることも承知していた。

「もしかして、あの人たちは……マスカレイダーズを探している？」探り探りレイが自分の考えを述べると、ネズミは片耳をピンと立て、それからやりと相好を崩した。

「あたぼうよ。奴ら、血眼になってあんたらを探してるぜ。色々なところで見張つてやがる。面倒なことに巻き込まれなくなきゃ、あんまりうるちよろしないほうがいいぜ。悪いが、俺はもう助けてやらねーからな」

ネズミの発言に、レイは今更ながらハツとなった。

このネズミも——すなわち式原率いる怪人軍団も、そして黄金の鳥を崇める彼らも、レイと佑がマスカレイダーズから見捨てられたことを知らないのだ。今更ながらその重大性に気付いた。どうにも厄介なことになったな、とレイは暗澹たる気持ちになる。これからもいらぬ敵意を向けられる可能性は大いにある。そしてその矛先はレイのみならず、佑にも向けられている。

「……あなたは悠を狙ってきたの？」

相変わらず瞼を上げる様子すらみせぬ悠を一瞥し、レイは尋ねる。しかしネズミは心外とでも言いたそうに、眉間に皺を寄せた。

「バーカ。誰がそんなこと言ったんだよ。俺に用件があるのはあんなだ。最高の怪人さんよ？」

「私？」

レイは自分を指差す。ネズミはうんざりとした表情で、何度か首を縦に振った。

「そう、あんただよ、あんた。他に誰がいるってんだ。ちょっとあまり聞かれたくない、秘密の用件があるんでね。こいつには、少しの間黙ってもらっただけさ。あんたも、そのほうが都合がいいだろ

？」

ううん、と呻き声をあげ、悠は体を震わせる。徐々に眠りが浅くなってきたようだ。あと数分もしないうちに目覚めるような予兆がある。確かにこのネズミの目的は、悠を殺しにきたこととは別のところにあるようだった。

「あなたは、誰？」

遠い空から地鳴りに似た音が轟く。明らかに天気は悪化の道をたどっていた。温い風が髪を撫でる。蝉の声が嵐の訪れを伝えるようにひと際大きく響き渡った。

「俺の名前はマアズ」

ネズミは自分の鼻先を指差し、その大きな耳をひくつかせた。その毛並みをわずかに風にそよがせながら、さらに言葉を続ける。

「世にも珍しい“最高の怪人”から生み出された怪人だ」

「最高の、怪人？」

レイはわずかに首を傾げ、自分を指差した。しかし今度は素早く「いや、ちげえよ」と返事がくる。ですよね、と同意したくなる気持ちでレイは寸前で抑え込んだ。こんな不躰で不気味な怪人を、レイ自身、生み出した記憶がなかった。

「わっからねえーかなあ」

マアズはやれやれ、といわんばかりに演技っぽく肩をすくめると、その鋭い歯を見せた。その形相は明らかに不穏で、レイはゾッと背筋が凍るような感触を味わった。

「俺が言いたいのはな」

マアズは細い髭を指先で撫でつけ、それから言った。

「あんたとは違う、もう1人の最高の怪人が生まれたってことだよ」

「もう1人の……」レイは呆然とマアズの言葉を口の中で繰り返す、それからその事実の大きさに遅れて気付いて語調を強めた。「最高の、怪人」

「ああ、その通りだ。ようやく分かったかよ」

「どうということ？」

“最高”とは自分に与えられた唯一無比の称号だと考えていただけに、もう1人、同等の位に座する怪人が存在するという事実、レイは動揺を隠せない。レイの質問に、マアズはこれまでで一番、不快な表情を浮かべた。

「あ？　どうということも、こういうこともねえよ。全てはあんたが不甲斐ないからだろうが！　“最高の怪人”って称号はな。飾りじやねーんだ。その気になればこの宇宙に存在する法則さえ擦じ曲げることだってできるんだぜ？」

マアズに非難の言葉を浴びせられ、レイは声を詰まらせる。数週間前に戦った貝型の怪人、イストのことを思い出す。あの怪人もまたレイを成長させ、怪人としての力を覚醒させたがっていた。レイはその場では反抗したものの、結果的にその数日後、自ら自身の体に羽根を突き刺し、怪人としての進化を遂げてしまったのだから、彼の目論見にうまくはまってしまったことになる。

「だが、お前はどうか？」

記憶を探るレイに、マアズの辛辣な言葉は続く。彼は悠をちらりと見た。彼女は指先をぴくりぴくりと時折動かしているものの、まだ意識は戻っていないようだった。マアズは悠を顎でしゃくるようにすると、それからレイを見て、唾を吐きかけた。

「そんなことも忘れて、人間の中でぬくぬくと生きて、仲良しこよしだ。もったいねえと思わないのか。お前とこいつらとは、生きている場所が違うんだぜ？　こんな生活がいつまでも続くと思っただのかよ」

「……そんなの、私の勝手じゃない」

足元に落ちた唾に眉を寄せ、畳みかけるようなマアズの難詰にやと答えながらも、その声はどうしても弱弱しく、芯の不確かなものになってしまう。昨日の光景が瞳に瞬いた。怪人の怨みがましい目。肉片の中に立つ佑の後姿。途端に恐怖が内臓に沁みってくる。

「あんたはそんな姿をしているが、人間じゃない。怪人なんだ。それをもっと理解してほしいもんだね。第一、あんたが怪人であるこ

とを知れば、こいつもあの男も、あんたを拒絶する。あんたもそれくらい、承知してるはずだろ？」

まるで、胸に楔を打ち込まれたかのような激痛が走った。

マアズの放った一言はレイの心を容赦なく抉り、魘った。意識が揺らぎ、目眩で倒れそうになる。すんでのところで踏みとどまり、胸の奥から声を絞り出した。その声音は裏返し、今にも崩れ、宙で散り散りになってしまいそうだった。

「そんなことないよ」

レイは自分の言葉に縋りつくように、または、暗示をかけるように、声を紡ぐ。指先は微かな震えを帯び、頬を冷たい汗が伝った。

「そんなこと、あるわけない」

「ま、なんでもいいけどな」

呼吸を乱すレイを、マアズは耳を指でほじくりながら横目で見つめる。耳から取り出した指にふつと息を吹きかけると、改めてレイと向き合った。

「まあとにかく、最高の怪人は俺たちの支えであると同時に、大きな脅威なんだ。そんな奴が人間の中で生きてたんじゃ、示してもんがつかねえんだよ。だから式原は生み出したのさ。俺のマザー……お前とは違う、もう1人の最高の怪人をな」

そこでマアズは一旦言葉を切った。偶然だろうが、木々の葉が擦れる音が、車の駆動音が、その瞬間、周囲に存在していた音が全て消失した。レイはまるで世界から取り残されたかのような孤独感に支配される。自分と、マアズと、そして足の先から詰め寄ってくる大きな恐怖だけが、レイの世界に存在する全てだった。

「リリー・ボーン」

不意にマアズが奇妙な単語を呟く。それはレイにとって聞き覚えのない、不思議な発音だった。

「マザーはそこで真の力に目覚める。その時は、マザーはあんたをはるかに凌駕する存在となるだろうな」

真の力。目覚める。

一方的にマアズの口から吐き出されていく言葉の連打に、レイは全く付いていけずにいる。だが、その話の内容がレイに利をもたらずものでないことだけは確かだった。

「最高が2人いるつても、奇妙な話だろ、決着の日はすぐにくるだろうな。リリイ・ボーンが過ぎ去りしとき、あんたと俺のマザー、この地に立つていられるのはどっちだろうな？」

それがレイの耳にした、マアズの最後の言葉だった。気付けば、その不遜な態度をみせるネズミはレイの前より消え失せていた。まるで幻であつたかのように、影も形もどこにもない。全ての感覚は元に戻り、長閑な公園の風景と、いまだ気を失ったままの悠の姿が、レイの五感をゆっくりと目覚めさせていく。

正常な働きを取り戻していく世界の中心で、レイは身動きもとれず呆然と立ち尽くした。

その頭には、いつか佑と悠はレイを拒絶するというマアズのセリフが、重厚に響く鐘の音のように響き渡っていた。

鎧の話 42

空から零れ落ちてきた小雨が、ぱらぱらと装甲服の上を跳ねる。オウガは片足で踏みきり、刀を振りかざすと、ペンギンの怪人——デベスクリーム目がけて一閃を繰り出した。

しかし大振りの一撃は容易く避けられ、逆に拳を胸に撃たれ、手痛い反撃を受けてしまう。両足で着地し、後ずさりながら、直也は仮面の下で大きく咳き込んだ。

「……お前たちは、一体何をしようとしているんだ！ 目的はなんだ！ なぜあんな方法を！」

「馬鹿ですかー。そんなことお前に話す義理は、1ミクロもないですー」

デベスクリームは両の爪を擦り合わせ、直也を鼻で笑う。その体に

黄金色の瘴気が纏われていく。

次の瞬間、直也が反応するよりもはるかに早く——その体は背後にかなぐり倒されていた。

自分の身に起きたことを理解できぬまま顔をあげ、体を起こす。だが立ち上がろうとしたところで膝が崩れ、再び地面に倒れ込んでしまった。

「な……！」

まるで体の支柱を揺さぶられたかのように方向感覚が歪んでいて、まともに動くことすらままならない。もがくオウガの前にデベスクリームの輪郭をなぞった影が射し、顔面を蹴りあげられる。今度は仰向けに突き倒された。

「なんだかとても気分が良いですー。体の底からどんどん力が沸いてくるようですー」

天を仰ぎ、快感に満ちた声をあげるデベスクリームの声を、濁りきった聴覚で捉えながら、オウガは、直也は立ち上がった。息が詰まり、呼吸がひどく苦しい。先ほどの攻撃によって仮面にヒビが入り、そのため視界にも亀裂が映り込んでいた。

衝撃に負けて手放してしまった刀を見つけ、拾う余裕は残されておらず、触角をもがれた蟻のような気分ではよめきながら立ち上がる。気を奮わせ、全身の骨が軋むような痛みに耐えながら直也は駆けだ。息を切らし、叫びながら拳を怪人に叩きこむが、全く効いていない様子はない。反対に平手打ちを耳元に受け、オウガの装甲服はいつも簡単に弾き飛ばされた。すぐに姿勢を立て直し、再び殴りかかるが、今度は怪人の体を掠めることさえ許されず、寸前で蹴りの力ウンターを入れられる。地面に叩きつけられたオウガは、地の上を激しく転がった。

「こりゃあいいですー。元気百倍。殺気も百倍ですー」

今にも歌でも歌いだしそうな、怪人の明朗快活な声が直也の耳朶を疎ましく打つ。

怪人の攻撃がオウガを穿つ度、その体からは装甲の破片が埃のよ

うに舞っていった。肩のパーツは根元から折れ、胸の装甲がぱつくりと割れ、わき腹のあたりでねじれてぶら下がっている。

ひどく痛ましい姿をオウガは晒しているが、それを纏う直也はさらに輪をかけて満身創痍だった。元々の体調不良にも加わって、怪人の力は喫茶店で戦った時と比べものにならないほど強化されており、その一撃一撃を身に浴びるたび、骨の髄まで苦痛が差し込まれてくる。もはや呼吸をするのも辛く、立ち上がるのがやっとの状態だった。回避することすらままならず、反撃などできるはずもなかった。

そんな直也にデブスクリームは左の掌を向ける。ハッと顔をあげた直也の顔面目がけて、白く濁った霧のような冷気が掌の中心より吐き出された。

当然、反射的に避ける余力など直也にはなく、後ずさろうと片足を後ろに引いたところで冷気に捕えられてしまった。装甲に霜が降り、さらに瞬く間もないスピードで凍結されていく。足から胸を伝い、首を抜けた冷気はオウガの仮面を素早く凍らせ、直也の視界を白く塗り潰した。

「なっ……」

まずい、と冷や汗をかいたときにはすでに怪人の気配を間近に感じている。腹部にずしりと重みを覚えた。怪人の掌の感触が、装甲越しに伝わってくる。対抗しようとするが関節を凍結されているせいで、まったく身動きがとれなかった。

「私はリリイ・ボーンの暗殺者」

耳元で死神の声が囁く。体のどこかで油の切れた車輪のような鈍い音が聞こえた。

「私の姿を見て、生きて帰れた者はいないですー」

アルミ板を力強く殴りつけたような大音量が鳴り響いた。遅れて、至近距離から電撃の槍を打ち込まれたのだと悟った。神経が痺れるような感触と、腹部を打つ激痛とが直也の神経を切り裂く。

直也は装甲服の内側で、絶叫をあげた。

吹き飛ばされ、地面に背中から落ち、もんどり打つ直也の体から装甲片が散り散りになって離れていく。直也の姿が装甲の内より暴かれ、そうしてオウガは解除された。刀だけは少しだけ戸惑った風に地面に残っていたが、数秒もするとようやく他のパーツと同じようにどこかへ消えていった。頬に落ちる雨の感触に、直也は自分が生身に戻ったことを知る。顔をあげるが、すでに装甲は周囲から姿を消していた。

纏う度に装甲の構築、再構築を繰り返すマスカレイダー・システムとは異なり、イミシャドはダメージが超過したとしても勝手に装甲が体から離れることは通常ない。それが直也の意思にかかわらず解除されたということは、怪人が放った先ほどの一撃で、プレートに内蔵されたシステムそのものに障害が発生した可能性が高かった。プレートは直也の体から放り出され、数メートル先に転がっている。その表面には今まではなかった深い傷が刻み込まれ、そこから黒い煙がゆらゆらと立ち昇っていた。直也は唇を引き攣らせながら、自分の恋人が残した、そして数多くの戦いを共にしてきた、相棒とも呼べるその金属板に向けて腕を伸ばす。

しかし、その手がプレートに触れることは叶わなかった。両足がびくりと痙攣し、そのまままるで全身が石と化してしまったかのようになり硬直した。腹部に激痛が走り、呼吸を詰まらせる。その口から鮮血が零れ落ち、顎を伝って地面に染みを浮かべた。

どうやらデベスクリートの雷撃は装甲をやすやすと超え、その向こうにある直也の肉体をも損傷させたらしい。頭が白く混濁し、正常な意識と感覚を鈍らせる。直也の伸ばした手を、デベスクリートの足が踏みにじる。直也は掠れた悲鳴をあげた。

「ここが年貢の納め時のようですねえ。さっさと死ぬですー」

トドメの一撃を食らわせようと、デベスクリートはその爪を振り上げる。だがその腕が振り下ろされることはなかった。見れば、デベスクリートは直也ではなく、地にうずくまるライの方をじっと見つめていた。

ライの顔は青白く、また相変わらず肩で息をしている。直也を見つめてはいるものの、その口からいつもの勝気な言葉が出ることはなかった。その顔つきはまるで亡霊のようだ。

デベスクリームがライに対してみせた、そのあまりに冷たい視線に、直也は全身から血の気が引くのを感じた。それと同時に怪人の後ろ姿が直也から遠のいていく。その爪の矛先にはもはや、直也はいなかった。

「お前はもういつでも殺せるですー。……先に、厄介な方を始末しておくですー」

デベスクリームの言い捨てた言葉に、直也の心臓は早鐘を打った。あの怪人は、直也よりも先にライを手に掛けるつもりなのだ。もはや装甲服を失い、傷に塗れた直也に興味はないのだろう。怪人の本能は直也よりもライを脅威として認識したらしかった。

「私とそっくりな顔。お前に触れた時、感じたひどい胸の痛み。一体お前がなんなのか、さっぱり分からねえですが……ここにきて1つだけ分かったことがあるですー」

デベスクリームが嬉しそうに言う。顔をあげ、脂汗で頬を光らせたライは、脅えた目で異形を見上げている。

「……やめろ」

やつのことで血に濡れた唇を動かしながら、直也は救いを請う。しかしその囁くような声は怪人に届かず、その足は着実にライとの距離を詰めていく。直也は両手に力をこめ、固く目を閉じて、神経をもぎ取られるような痛みに耐える。何とか膝を地面から引き剥がし、片足を踏み込むことに成功する。

「何日か前、お前と出会った私の妹は、私と瓜二つの人間がいることに疑問を感じ、確かめる意味をこめて、鳥の羽根を刺したと言っていたですー」

「やめろ」

口の中がぬめり、生温かい。全身を伝うあまりに強い痛みを意識が怪しい。直也の目に映るのは、ライの脅えた表情と、彼女に迫る

デベスクリームの悪魔のような背姿だけだった。それ以外の景色は、全て暗幕によって切り取られているように感じた。

「そしてついさっき、この場所で奇妙な反応を察知したとの連絡があったです！。期待しながら来てみれば、何とこの通り。まさしくビンゴだったです！。お前のおかげで私は逃した獲物を見つけるに至ったです！。大感謝です！」

「……わけのわからないこと、ばっかり、言うなよ」

強気に切り返すライであったが、その語調には恐怖が滲んでいる。汗と雨に塗れ、立ち上がるライは直也ほどではないにしても、それでもひどく辛そうだった。

「人をいっぱい殺しやがって、ふざけるな！ お前なんか、私のパクリのくせに！」

「何を偉そうに。本物なんかここにはいません！。どっちかといえば、お前のほうがわけのわからない、みょうちくりんな偽物です！」

「やめろ！」

「消えるのはお前のほうです！。お前の存在自体が、私にとって不快極まりないです！」

直也の悲鳴も、制止を請う叫びもまったく意味を成さず、デベスクリームはかざした掌からライに向けて、冷気を放出した。周囲の気温が急激に低下し、雨が凍りつく際に発せられるものなのか、あちこちで何かがひび割れるような音が反響している。

ライの姿は怪人から吐き出された白い靄の中に消えた。直也は膝を落とし、愕然とした気持ちでその光景を見つめる。オウガの装甲を一瞬で凍りつかせるほどの冷気だ。生身で受けて無事であるはずはなかった。

絶望と諦めが直也の心を閉ざそうとしていたその時、冷気の内側から漆黒の光が突如として膨らんだ。その光は瞬く間に冷気を舐め尽くすと、地面の上を滑るようにして広がり、それからつつすらと空に残像を映しながら消えていった。

一体今の現象はなんだったのか、はつきりとせぬまま、光が失せた先に現れたものを認め、直也は「え」と思わず声を漏らした。なにしろ意識が覚束ないのでそれが目の錯覚ではないと自信は持てなかったが、それでもそこにあったのは、揺るぎない、現実だった。

「嘘、だろ……」

思わず呟く。その声は大きく震えた。目の前の光景が、信じられなかった。

直也が目の当たりにしたものの。それは凍結した大地の上で、何の傷もなく、冷気を浴びる前とまったく同じ状態で立つ、ライの姿だった。

足元に置かれた携帯電話は冷凍室に入れた秋刀魚のように凍結されているにも関わらず、彼女は冷気の影響を全く受けてはいなかった。着ている服や背負っているリュックサックも同様だ。彼女自身と、彼女を取り巻く世界とに生まれた落差に、非現実な気配が漂っていた。

その体は、今のデベスクリームと同じように薄く金色の光を帯びていた。ライも自分自身に起きているその異変に気が付いたようで、薄く光る掌を茫然と見つめている。やがてその表情に少しずつ、戦慄の色が浮かんでいった。

「まさかこいつを受け切るとは、凄まじい力ですねえ。やはりこの場所は怪人の力を増幅させる何かがあるらしいです。だけどこれで、ようやくお前の正体が赤裸々になったです」

私とお揃いです。デベスクリームは黄金の色に包まれた自分の腕を撫でながら、嬉々として呟く。それから続けて言った。お前も私と同じ、怪人です。その言葉にライは虚を衝かれたような表情を浮かべ、その後で瞳を潤ませた。

ライは直也を見た。直也はその救いを請うような視線に耐えきれず、黙って顔を俯かせた。

分かっていた。ライが怪人であることを。しかし黙っていた。人を苦しめる怪人に怒り、人としての生活をずっと歩んできたライに、

お前は怪人なのだななどは、とてもじゃないが言えなかった。自分に言い聞かせてきたはずなのに。納得をしてきたはずなのに。それでも直也の胸は、罪悪感で大きく軋んだ音をたてる。

直也の反応に全てを悟ったのか、ライはゆるゆるとかぶりを振り、「嘘だ」と叫んだ。それから告げられた事実を拭い去ろうとするかのように、発光する自分の腕を無我夢中で服に擦りつけた。

「嘘だよ、こんなの、嫌だよ……」

唇を曲げ、目に涙を浮かべて、必死になって自分が怪人であるという証拠を消し去ろうとしている。だがその肌に赤みが帯びるだけで、その金色の輝きは少しも失せることはなかった。それが分かったら、イはその場に崩れ落ち、呻き声を漏らしながら頭を抱えた。彼女の発する苦悶の声は、直也の胸をどうしようもなく掻きむしった。

「こんなの、嘘だよ……私、だって、母さんの……」

「謎が1つ解けて良かったですねえ。これですっきりとした気分でお別れできますー。その手助けができて光栄ですー」

デベスクリームは霜の降りた地面をざくざくと踏み鳴らしながら、ライに近づいていく。ライは顔をあげ、目を丸くして自分に迫る怪人の異形を見上げた。デベスクリームはそんな彼女の表情を視線に捉え、ふふ、と笑みを漏らす。

「鉈橋その顔をもつ者は、私以外にいませんー」

デベスクリームは大きく腕を振り下ろした。その指の先には鋭い爪が伸びており、それぞれの指先から伸びた5本の刃がライの体を一閃する。

ライは僅かに体を横に傾けるが、完全にはかわせなかった。刃は肩先を削ぎ、破れた皮膚の内側から血飛沫が舞った。リュックサックのベルトが裂かれ、ライの背中宙ぶらりん垂れさがる。横になぎ倒されたライは悲鳴を吐きだし、地の上をもがく。

ライの体から零れる血と苦悶を浮かべるその表情を認めた瞬間、直也は視界が白く淀むのを感じた。痺れを帯びた体が軽く感じられ、直也はその隙を突いて一息に身を起す。行かなければ、と思う。

全身があげる悲痛の叫びに蓋をする。プレートを拾いあげ、焦りに突き動かされるように、よるめきながら歩みを進める。

ライの服に滲んだ血を見つめ、デベスクリームは舌を打った。その右の掌を彼女に向けてかざす。

「私たち怪人は、死体から生まれた存在。ましてや場所が場所です。この程度じゃ、死ぬわけもねえですー」

だから、とデベスクリームはその鋭い爪を自分の顔の前にかざした。その先端が曇り空の下で不気味に光る。ライはぜえぜえと掠れた息を吐きだしながら、脅えた目で怪人の姿を見上げている。

「今度は確実に、こいつで仕留めてやるですー」

デベスクリームの語調が僅かに陰を帯びた。右腕を大きく引き、ライの喉元に爪の狙いを定める。直也の頭には命を請う暇さえ与えられず、首を飛ばされた男の死にざまが浮かんだ。踏み砕かれたその頭部を思い出すと、吐き気がこみあげてくる。首のないライの死体がふと脳裏を過り、頭の中が真っ白になった。

「ゾンビが首を飛ばさない限り死なねえのは、いまや常識的なことですー」

走る力などなく、直也は早歩きでデベスクリームの背中に迫る。焦燥した心が足をもつれさせる。腕を伸ばすが、到底届くはずもない。

「それじゃあ、ばいばーいですー」

恐怖に歪んだライの顔と、反面、楽しげに弾むデベスクリームの体躯。それらを前にしながら、直也は胸に抱えた大切なものが零れ落ちていくような、そんな感触に捉われていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2409w/>

DEVIL HEART ruined 第3幕

2011年11月9日03時12分発行